

第166図 96・97号竪穴住居跡・竈実測図

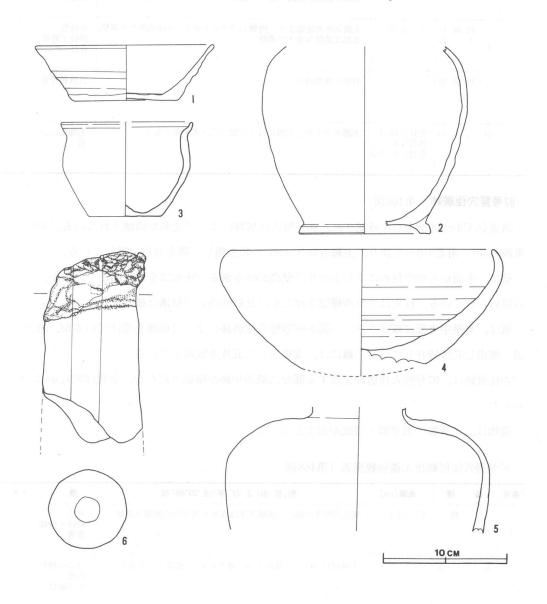
96号竪穴住居跡 (第166図)

調査区 $C3b_3$ 区を中心に確認され、97号竪穴住居跡と重複している。規模は東西5.0m・南北3.6mを測り、主軸方向N-23°- Eを指し、隅丸方形を呈している。

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高35cmを測る。床面は平坦で、良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、深さは15~25cmを測る。壁溝は確認されない。

竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口・火床からなだらかに立ち上がり、煙 道・煙出し孔を作っている。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・羽口・漆紙が出土している。



第167図 96号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号		器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.1 B 4.5 C 8.2	底部は上げ底で、口縁部は外反する。 体部に水挽き痕が顕著に残る。底部は切り離し後ナデ調整。	灰黄色 砂粒・砂礫 不良
2	S	台 付 壺	D (10.0)	胴部と底部片。底部はナデ調整。	黄灰色 細砂・砂礫 良好 自然釉付着
3	Н	甕	A 10.6	胴部はわずかにふくらむ。頸部は「く」の字に外反し,口縁 部上端が直立する。口縁部内・外面横ナデ調整。 胴部外面は,箆削り後ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫・雲母 普通
4	S	鉄 鉢 形土 器	A (21.0)	丸底気味の底部より,内彎して立ち上がる。口縁部横ナデ調整, 底部は箆削り後ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
5	S	短 頸 壺		肩部と頸部破片。	自然釉付着
6	KK	П	全長(16.0) 外径7.0 孔径2.0~2.5	基部を欠くが、先端に行くに従って、若干細くなる。	先端部には鉄分が付 着

97号竪穴住居跡 (第166図)

調査区 C3c3 区を中心に確認され、96号竪穴住居跡によって北側が破壊されている。規模は、 東西5.3m・南北5.0mを測り、主軸方向N-96°-Eを指し、隅丸方形を呈している。

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高20cmを測る。床面は全体に凹凸であるが、良く踏み固められている。柱穴は3か所確認されたが、比較的浅い。壁溝は確認されない。

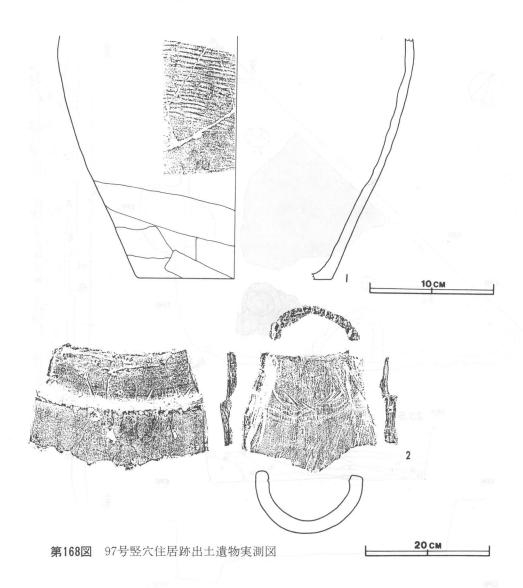
竈は、東壁中央部に確認され、一部が96号竪穴住居跡によって破壊を受けているが、袖部・煙道・煙出し孔は残存している。竈には、支脚として瓦片を使用している。

本住居跡は、97号竪穴住居跡と接する部分に鍛冶炉跡が確認されたが、全貌は明らかにできなかった。

遺物は、土師器・須恵器・漆紙が出土している。

97号竪穴住居跡出土遺物観察表(第168図)

番号	Ę	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	甕	C (15.4)	横位の叩きの後に、体部下半は左から右方向の箆削り調整。	灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通
2	丸	瓦		玉縁径11.8cm, 玉縁長 7 cm, 厚さ1.8cm, 弧深 7 cmを測る。	にぶい橙色 砂礫 やや硬質



98号竪穴住居跡 (第169図)

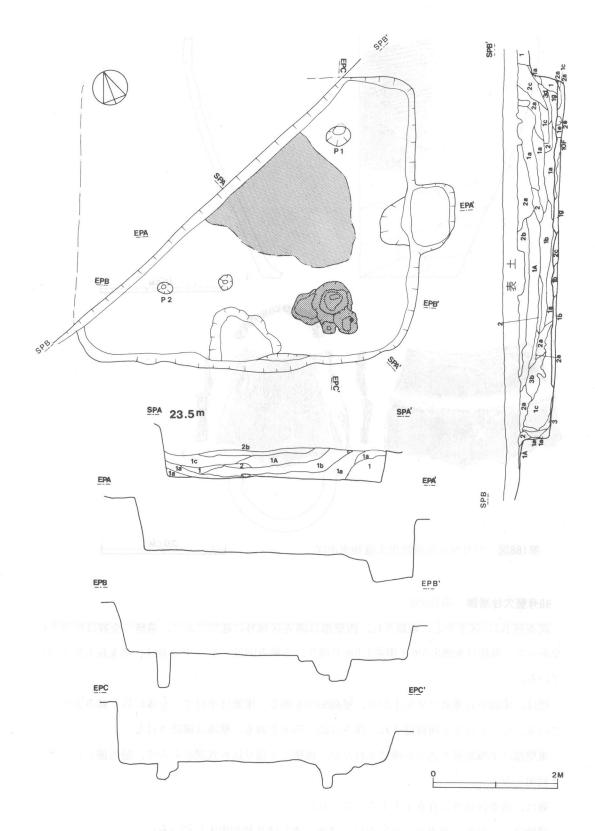
調査区B3i2区を中心に確認され、西壁部は調査区域外に延びており、遺構の全容は把握されなかった。規模は東西5.5m・南北4.5mを測り、主軸方向N-4°-Eを指す、隅丸長方形を呈している。

壁は、床面から垂直に立ち上がり、壁高80cmを測る。床面は平坦で、全体に良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、深さは25~55cmを測る。壁溝は確認されない。

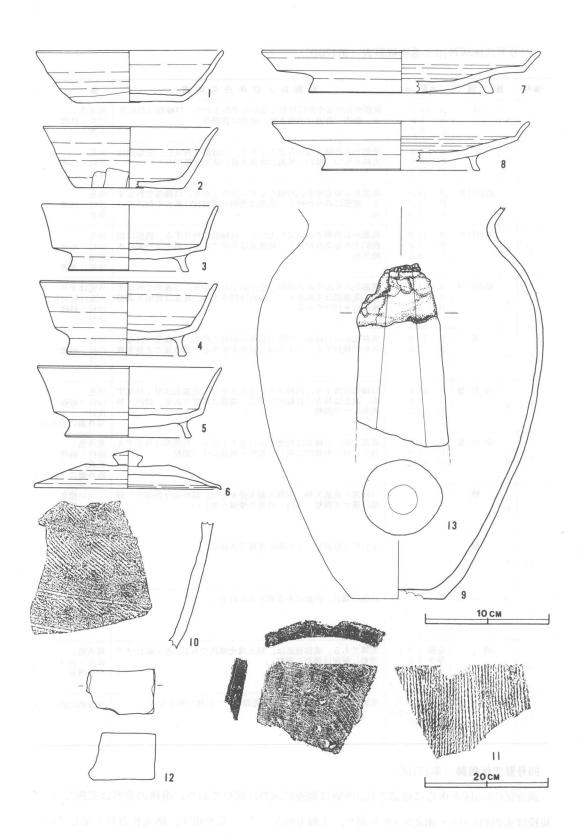
東壁部に土壙状掘り込みが確認されたが、堆積土・掘り込み状況からみて、最近掘られたもの と判明した。

竈は、調査区域外に存在するものとみられる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・漆紙・漆しぼり料が出土している。



第169図 98号竪穴住居跡実測図



第170図 98号竪穴住居跡出土遺物実測図

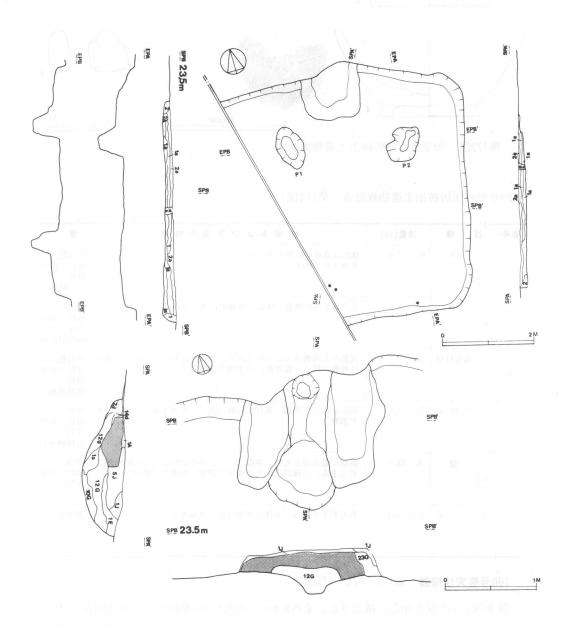
番号	7	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.7 B 4.2 C 8.3	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。器内・外面に水挽き痕。底部は箆削り。	黄灰色 砂粒・砂礫 不良
2	S	坏	A 13.8 B 4.9 C 8.4	底部から外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反し、先端部は 丸味をもつ。器内・外面に水挽き痕。底部は箆削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	s	高台付坏	A 13.9 B 5.3 D 9.5	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。底部に高台が付く。底部は箆削り調整後に高台を付けている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	S	高台付坏	A 14.0 B 5.9 D 9.5	底部から内彎ぎみに立ち上がり、口縁部で外反する。底部に比較的大きな高台が付く。接地面は平坦である。器内・外面に水挽き痕。	灰色 砂粒・砂礫 普通 底部に墨書
5	S	高台付坏	A 14.6 B 5.7 D 9.9	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。先端部は丸味をもつ。高台は開きぎみ。底部は箆削り調整 後高台を付けている。	外面はオリーブ灰色 内面は灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	S	蓋	A 14.9 B 3.0	天井部から口縁部への移行は強い屈曲を持ち、口縁部へはなだらかに移行する。つまみは宝珠状を呈する。器外面に水挽き痕。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	S	台 付 盤	A 22.3 B 3.4 D (14.7)	口縁部は外上方に内彎ぎみに立ち上がり, 先端部は厚く外反する。高台は外方に直線的に開く。端部は肥厚である。器内・外面共にナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器外面に自然釉付着
8	S	台付盤	A 20.5 B 3.9 D (12.7)	底部欠損。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、先端部は外反する。 高台は外に直線的に開く。器内・外面はナデ調整。	黄灰色 砂粒・砂礫 普通 器外面に二次焼成
9	Н	甕		口縁部・底部欠損。胴部に最大径をもち、器外面は箆削り。頸 部は横ナデ調整。器内・外面の摩滅が激しい。	にぶい橙色 砂粒・砂礫 普通 底部外面に木葉痕
10	s	甕		平行叩き目調整。その間を沈線で区切る。	灰色
11	平	瓦		凸面に縄目。凹面に布目痕がみられる。	褐灰色 砂礫・長石 やや硬質
12		塼	全長 (9.1) 厚さ 7.5	方塼である。成作技法は、粘土塊充塡法である。表・裏は、ナデ調整。側面は箆削り調整。	褐灰色 長石・スコリア やや硬質
13	KE	П	全長(14.7) 外径3.0~7.5 孔径2.0	先端で3cm,末端で7.5cmと先端に行くに従い細くなる。	先端部に鉄が付着

99号竪穴住居跡 (第171図)

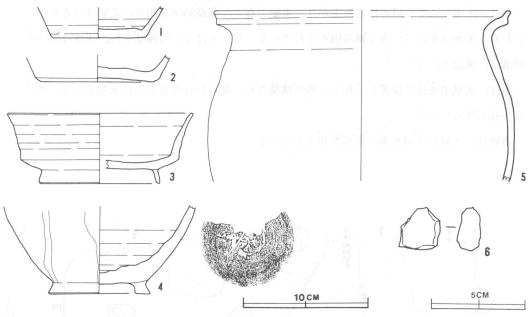
調査区 $C3e_3$ 区を中心に確認され、西側は調査区域外に延びており、遺構の全容は把握できない。 規模は東西約5.0m・南北5.4mを測り、主軸方向N-7°-Eを指す、隅丸長方形を呈していると みられる。 壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、東側で高く、壁高35cmを測り、北側はゆるやかに立ち上がる。床面は平坦で、良く踏み固められている。ピットは2か所確認され、深さは60cmを測る。壁溝は、確認されない。

竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口からゆるやかに立ち上がり、煙道・煙 出し孔を作っている。

遺物は、土師器・須恵器・漆紙が出土している。



第171図 99号竪穴住居跡・竈実測図



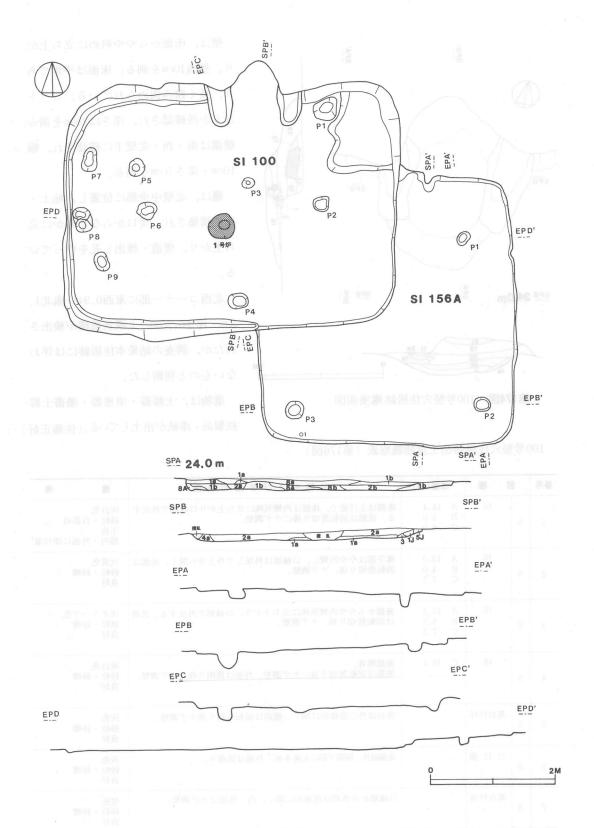
第172図 99号竪穴住居跡出土遺物実測図

99号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第172図)

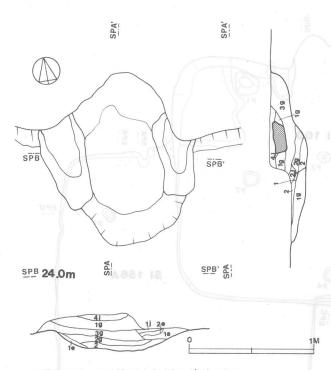
番号	- F	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	C 7.4	体部は直線的に外上方へ開く。 水挽き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 二次焼成
2	S	坏	C 8.8	上げ底ぎみの底部で体部は直線的に外上方へ開く。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
3	S	高台付坏	B 5.7	底部から内彎ぎみに立ち上がり、口縁部は外反して開く。高台は外側に開く。器外面には水挽き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部外面に箆記号
4	S	台 付 壺	D 8.1	胴部下半および底部。高台は外側に開く。水挽き成形。底部はナ デ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 自然釉が付着
5	Н	甕	A 23.6	胴部に最大径をもち、頸部で「く」の字に外反し、口縁部先端で直立する。口縁部内・外面横ナデ調整。胴部ナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫 良好
6	砥	石	2.2×2.1	長方形を呈する。全体に使用され、丸味をもつ。 md.8See	凝灰岩

100号竪穴住居跡 (第173・174・175図)

調査区 C3 i 7 区を中心に確認され、東西5.6m・南北4.0mを測り、主軸方向 N - 9°- Eを指し、隅丸長方形を呈している。



第173図 100·156-A号竪穴住居跡実測図



第174図 100号竪穴住居跡竈実測図

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高10cmを測る。床面は平坦であり、良く踏み固められている。ピットは9か所確認され、深さは20cmを測る。壁溝は南・西・北壁下に確認され、幅10cm・深さ5cmを測る。

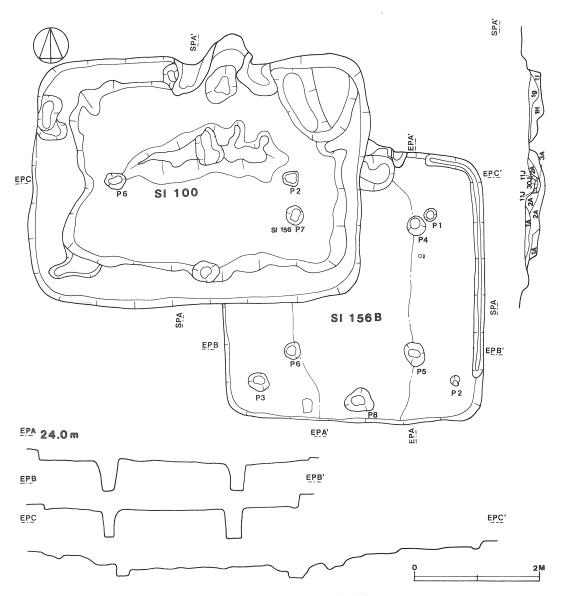
竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口からなだらかに立ち上がり、煙道・煙出し孔を作っている。

北西コーナー部に東西0.9m・南北1. 3m・深さ0.25mの土壙状遺構が検出されたが、調査の結果本住居跡には伴わないものと判断した。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・ 鉄製品・漆紙が出土している。(佐藤正好)

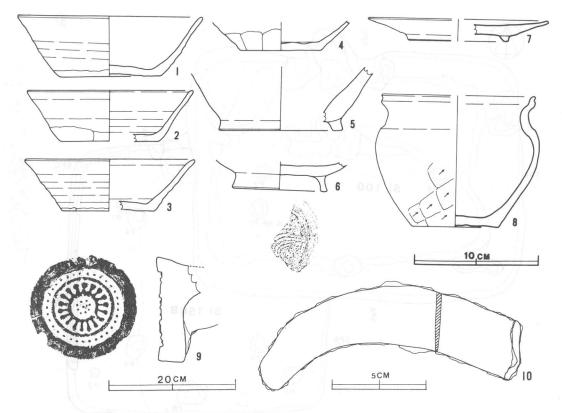
100号竪穴住居跡出土遺物観察表(第176図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏 99	A 14.4 B 5.0 C 8.0	底部は上げ底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。底部は回転篦切り後にナデ調整。	灰白色 砂粒・白雲母 不良 器内・外面に	漆付着
2	S	坏	A 13.0 B 4.0 C 7.7	体下部はやや内彎し、口縁部は外反して外上方へ開く。底部は 回転箆切り後、ナデ調整。	灰黄色 砂粒・砂礫 良好	
3	S	坏	A 13.3 B 4.2 C 7.3	底部からやや内彎気味に立ち上がり、口縁部で外反する。底部は回転箆切り後、ナデ調整。	灰オリーブ色 砂粒・砂礫 良好	
4	S	坏	C 16.4	底部残存。 底部は回転箆切り後にナデ調整。外面は箆削り後、ナデ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好	n o
5	S	高台付坏		高台は外に直線的に開く。底部は回転糸切り後ナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好	G93
6	S	台 付 壺	0	底部破片。胴部下部に水挽き痕。外周は箆削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好	
7	S	高台付皿	e 3	口縁部から体部は直線的に開く。内・外面はナデ調整。	橙色 砂粒・砂礫 良好	



第175図 100号竪穴住居掘方·156-B号竪穴住居跡実測図

番号	뮒	暴 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考	Š
8	Н	甕	A 12.1 B 10.6 C 7.0	胴部上端に最大径をもち、頸部から口縁部にかけて、「く」の字に外反する。口縁部に一条の沈線状の段がつく。口縁部横ナデ調整。胴部ナデ調整。底部は箆削り調整。	赤褐色 砂粒・長石・雲母 良好 二次焼成によりぬ 付着	
9	軒	丸 瓦		中房に1+8の蓮子を配し、弁区に単弁18葉蓮華文、外区には 33個の珠文をめぐらしている。	灰色 細砂・長石粒 良好	
10		鎌	長さ13.7 身幅 3.0	先端は丸味を呈する。棟は平棟で断面三角形で棟と刃がほぼ同様なカーブで彎曲する。 茎部を折り曲げている。		



第176図 100号竪穴住居跡出土遺物実測図

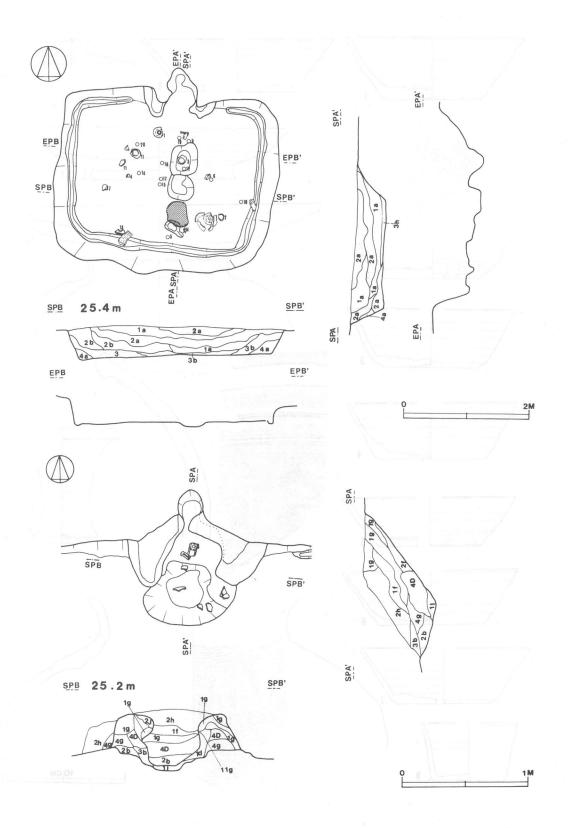
102号竪穴住居跡 (第177図)

調査区 E2co 区を中心に確認され、南北2.9m・東西3.53mを測り、主軸方向 N-5°-E を指す隅丸長方形を呈している。

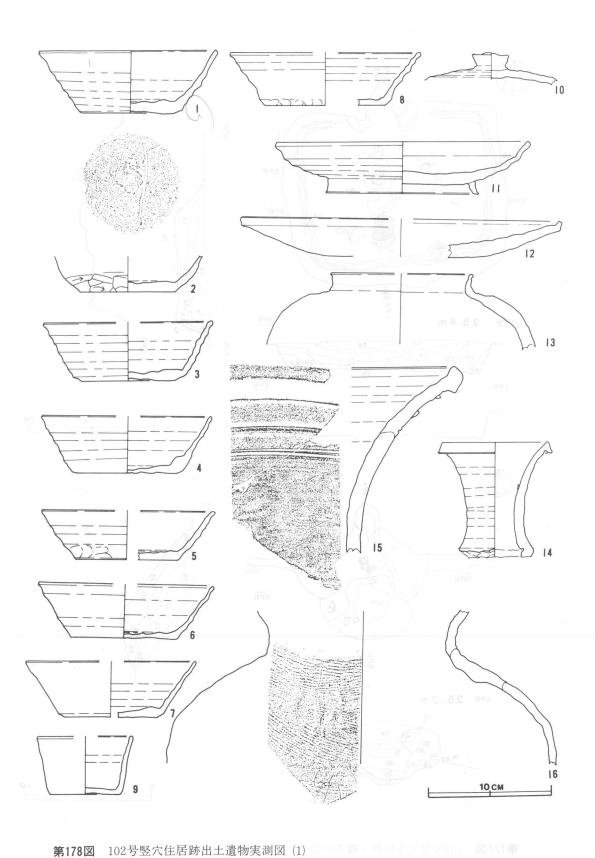
覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積を示している。壁は75度内外で立ち上がり、壁高は40~54cmで、壁下には竈部を除いて幅10cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面は東側がやや低くなるほかは平坦で、全体的に良く踏み固められている。ピットは浅く、北東隅に1か所認められるるだけである。ほぼ中央部に炉跡が確認されている。

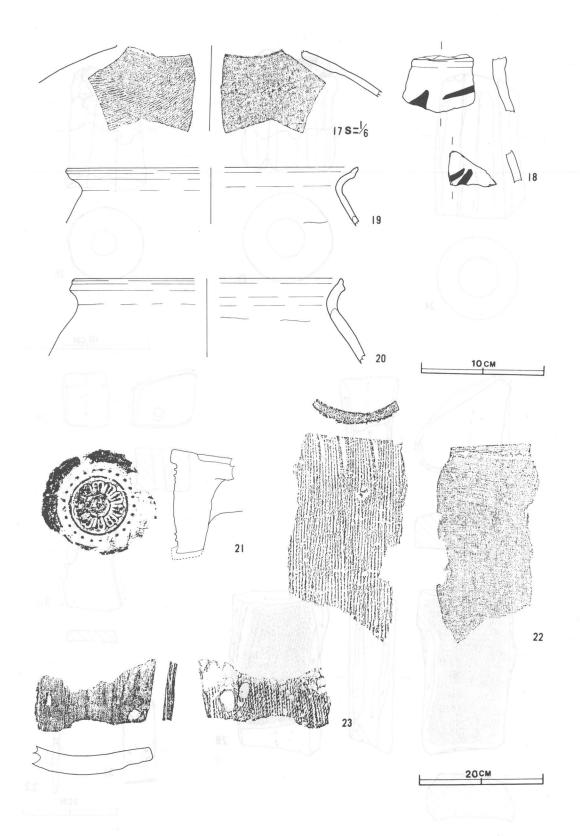
竈は、北壁中央部にあり、壁外へ41cmほど掘り込まれている。焚口は床面より10cmほど低く、 火床からなだらかに立ち上がる。袖部は砂と粘土によって構築され、焚口部幅45cmを測る。焼成 部中央に、支脚として利用されたものと考えられる鞴羽口が立った状態で出土したほか、若干の 土器片を出土している。炉跡はほぼ中央にあり、砂を主体として皿状に構築されている。なお、 南側にピットを有している。

遺物は、土師器・須恵器・人面墨書土器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が出土 しているが、床面出土のものは少なく、覆土中・下層から多く出土している。

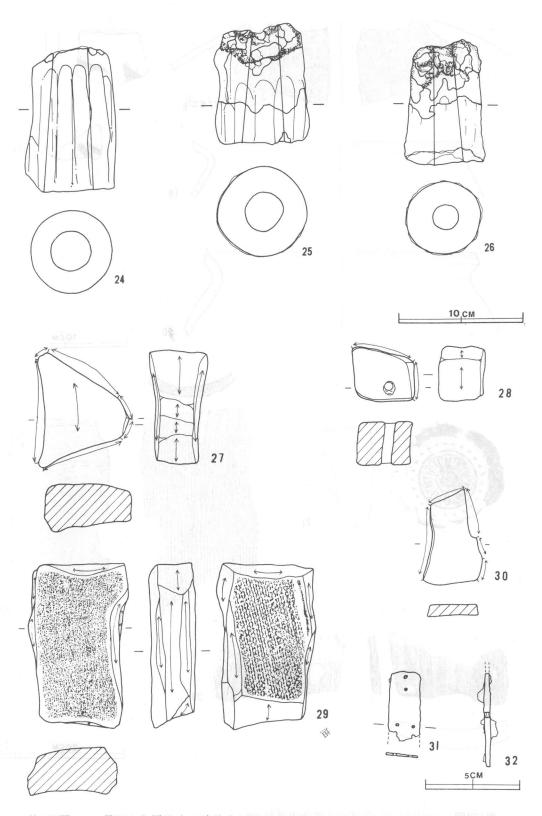


第177図 102号竪穴住居跡・竈実測図





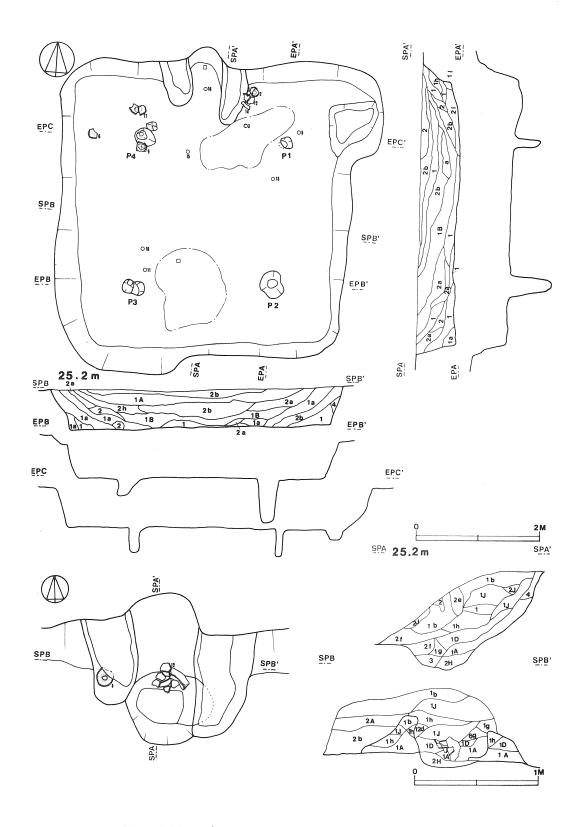
第179回 102号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第180図 102号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

番号	2	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 14.3 B 5.2 C 8.2	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り。一部ナデ調整。	浅黄橙色 砂粒・長石粒・スコリア 不良 内面全体に漆付着 底部に箆記号
2	S	坏	C 7.6	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内彎 気味に外上方にのびる。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆 切り。体部下端部手持箆削り調整。	
3	S	坏	A (13.6) B 4.7 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部 はやや外反気味に外上方にのび、口縁部は外反し端部はやや尖る。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切りで無調整。	明オリーブ灰色 細砂・砂礫・長石粒 普通
4	S	坏	A (13.6) B 4.6 C (8.9)	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はや や内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水 挽き成形で底部は回転箆切り後、多方向の箆ナテ及びナデ調整。 体部下端部手持箆削り。胎土中に空気が混入し、底部に膨みをもつ。	灰色 細砂・長石粒多 良好部に黄白色の自 然釉、鉄分吹出 重ね焼き痕
5	S	坏	A (13.9) B 3.9 C (8.5)	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ、ほぼ直線的に外上方にのび、口縁部は外反し、端部はやや尖る。水挽き成形で、底部は多方向の静止箆削り。体部下端部手持箆削り。体部内面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・雲母 普通 口縁部内面から外面 にかけ煤付着
6	S	坏	A (14.0) B 4.4 C 8.6	底部は平底で、体部と底部は篦削りによる明瞭な角度で分かれ、 内彎気味に外上方にのび、口縁端部付近で強く内彎し、端部を 丸くおさめている。全体に薄手作り。右ロクロ水挽き成形で、底部は回 転篦切り後、静止箆ナデ調整。体部下端部手持箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 堅緻 口縁部内・外面に黄 白色の自然釉
7	S	坏	A (13.6) B 4.5 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部は直線 的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。口縁部付近は 薄手作り。水挽き成形で底部は回転箆削り。底部内面から体部 内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒 良好 堅緻
8	S	坏	A (15.2) B 4.3 C 9.6	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部 は一旦外傾し、途中から外反気味に外上方にのび、口縁端部を 丸くおさめている。水挽き成形で、底部は箆ナテ調整か。体部 下端部手持ち箆削り調整。	灰色 砂粒・長石粒 良好
9	S	坏 (小形コ ップ形)	A (7.6) B 4.7 C 5.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。全体に端正な作り。	灰白色 砂粒・長石粒・鉄分多 量に含み黒斑をみる。 良好 酸化焼成と思われる。 体部外面全体にビー ドロ状の自然釉。
10	S	蓋		天井部中央に扁平なボタン状のつまみがつく。天井部はやや丸 みを帯びる。水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り。方向は不 明。つまみと天井頂部内面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒·長石微粒·鉄分 良好
11	S	台 付 盤	A 20.1 B 4.3 D 12.2	底部と体部の境界は、丸みを帯びる。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部で大きく外反し、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、外端部に稜をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆削り。口縁部内・外面と高台内・外面は横ナテ調整。	明オリーブ灰色 砂粒・長石微粒・石英・ 雲母 普通
12	S	高 盤	A (25.0)	受け部のみ。口縁部と体部の境界に稜を持ち、口縁部はほぼ垂直に立つ。端部をやや尖り気味におさめている。水挽き成形で全体に横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分 良好・逆さ焼き 体部外面全体に黄白 色の自然釉
13	S	短頸壺	A (11.3)	はぼ球形をなす体部から、やや外反気味に短く立ち上がる口縁 部を持ち、端部を尖り気味におさめる。胴部は厚手、頸部から 口部にかけ、薄手作り。内・外面とも横ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・鉄分 良好 体部内面全体に黄白 色の自然釉
14	S	長 頸 壺	A (8.6)	頸部は上位ほど外反度が大きく、口縁部にいたり、さらに下方へ開き、平坦面を形成、端部をやや尖り気味におさめている。 胴部との接合痕を明瞭に残す。	灰黄色 砂粒・長石 粒・鉄分 良好 内・外面全体に黄白 色の自然釉

番号	ş	器	種		法量(cm)		形態	およ	び手法	の特徴		備	考	
15	S		甕			口縁部外面に	:つまみ出 +, その間	∃しに。 引に櫛キ	よる稜をも 大工具によ	たせ二条の	こおさめている。 の貼り付けによ を二段に施して	灰白色 精良,砂粒 普通	·長石微粒	
16	S		甕			がつく。粘土	大きく張った胴部に頸部は丸く屈曲し、外上方にのびる口縁部がつく。粘土紐積み上げ成形で体部内面は指頭押圧調整。頸部内・外面は横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。							
17	S		Œ			体部は強く弱 心円文が残る		B外面(は平行叩き	· 目調整。6	本部内面には同	灰色 細砂・長 ² 良好	石粒	
18	Н	小	形甕			頸部から体部	の一部。	内・外	面は横ナ	デ調整。		にぶい橙色 細砂・長石 普通 体部外面に	粒・雲母	
19	Н		甕	А	(23.5)	やや胴の張っ 端部を外上方					る口縁部がつき, 黄ナデ調整。	にぶい赤褐 砂粒・長石 良好 内面煤付着	粒・雲母	
20	Н		甕	А	(21.5)	直に立ち上か	^い り,端部 口縁部内	『をつま 『・外正	ξみ出す。 fiは横ナテ	体部内・タ	コ縁部はほぼ垂 ト面は箆ナデ調 水外面に箆によ	明赤褐色 砂粒・長石 良好	粒・雲母	
21	軒	丸	. 瓦		長(10.0) 径(15.6)	瓦当面は内区 蓮子は欠損, 僅かな布目を	丸瓦部と			浅黄色 砂粒・長る やや軟質	石粒・礫			
22	平		瓦		長(31.4) 端(12.8) さ 1.8	両側面と片側 は布目を残す				左の繩目叩き	きを施し、凹面	褐灰色 砂粒・長石粒・雲田 礫 堅緻		
23	平		瓦	厚	き 3.0	す。凹面は布	目を残す 痕を残す	が端音	Bに荒い箕	延削りを施し	旨頭押圧痕を残 、一部ナデ調 思われ上・下端	灰黄色 砂粒・長る やや軟質	石粒・雲母	
番号	種	類	法量(cm)	形態	の 特 徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	特徴	備考	
24	羽	П	全長 (11. 外径6 孔径2	. 1	先端部は夕 方向の箆削 基部に箆像		少量の 鉄付着	29	砥 石(転用砥)	8.5×5.0 2.2	長方形を呈す。 いて全側面に付 められる。		瓦 製	
25	KK	П	全長 (8.1 外径6 孔径2	.6	損。	先端部は½欠向の箆削り調	・先端は 溶解し 鉄付着	30	砥 石(転用砥)	4.8×2.6 0.6	三側面のみに何められる。	使用痕が認	須恵器 坏底部 利 用	
26	KK	П	全長 (9.4 外径5 孔径1	.5	先端は細く一方向の箆	外面に細かな 間り調整。		31	小 札	全長 (3.7) 幅1.8 厚さ0.1	小孔が四か所記 下部欠損。	忍められる。		
27	砥	石	6.2× 2.5	4.4	三角形を呈用痕が認め	とし、全面に使られる。	流紋岩 75 g	32	不 明 鉄製品	全長 (5.0) 幅0.3 厚さ0.3	断面が方形で, を呈している。 上部欠損。			
28	砥 (提	石 砥)	3.3× 2.3	2.8	の孔があけ	, 一端に 4mm られている。 痕がみられ稜 ている。	凝灰岩 2.2g							



第181図 103号竪穴住居跡・竈実測図

103号竪穴住居跡(第181図)

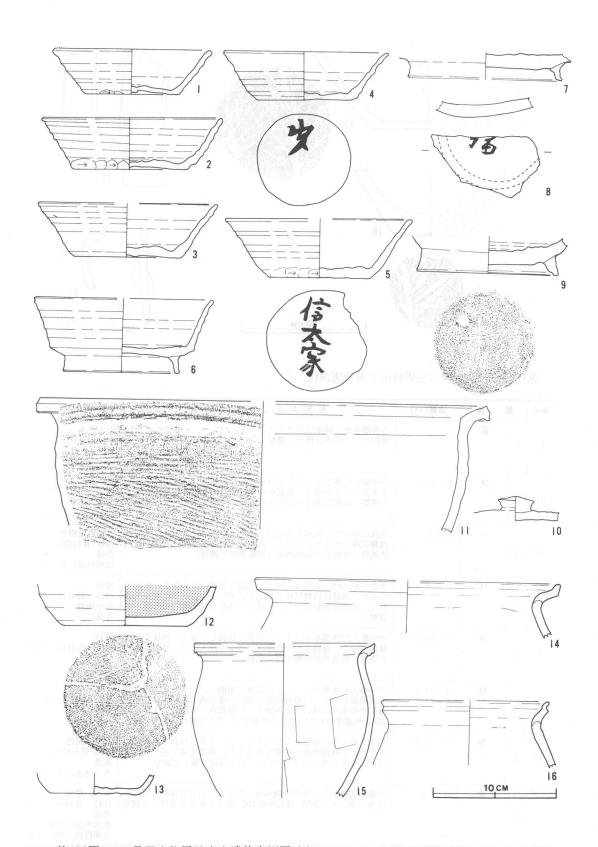
調査区 E3 c2 区を中心に確認され、102号竪穴住居跡の東側に位置する。東西・南北とも4.67 mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形をしている。東壁北側にコの字形の張り出しを有する。 覆土は、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積層である。壁は外傾して直線的に立ち上がり、 壁高は65cm内外である。床面は、南壁中央付近と竈前面が特に踏み固められているほかはやや軟弱で、ほぼ平坦である。主柱穴は4本確認され、深さは28~70cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.23m・幅1.3m・焚口部幅45cmで、壁外へ29cm程掘り込まれている。袖部は、ロームブロック・粘土・砂で構築されている。焚口は、床面より20cm程掘り下げられ、中央部に割石を立て支脚としている。

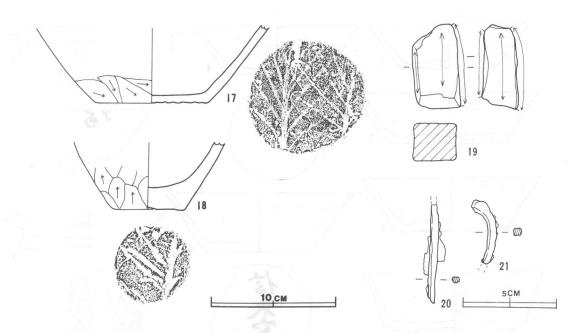
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・砥石・鉄製品・鉄滓が、主に北半部床 面付近から出土している。

103号竪穴住居跡出土遺物観察表(第182·183図)

番号		器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 12.4 B 3.6 C 7.2	やや盛り上がった底部から、体部はあまい角度で分かれ、やや内 彎気味に外上方にのび口縁端部を丸くおさめている。水挽き成 形で底部は回転箆切り。体部下端部に一部手持ち箆削りが見ら れる。内面は横ナデ調整。全体にやや摩滅。	灰白色 細砂・長石粒・雲母・ 石英粒 不良
2	S	坏	A 14.6 B 5.0 C 9.1	やや盛り上がった底部から、体部は明瞭な角度で分かれ、内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切り。外周部は箆ナデ調整。体部中位から下端部にかけ回転箆削り。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰白色 砂粒・長石粒・石英 粒・雲母 普通 内・外面に墨付着
3	S	坏	A (14.3) B 4.3 C 8.5	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれる。体部は直線 的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水 挽き成形で、底部は回転箆切り後、部分的なナデ調整。内面全 体は横ナデ調整と思われる。全体に摩滅が進行。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 不良 体部内面から底部外 面に煤付着
4	S	坏	A 13.1 B 4.0 C 7.5	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、やや内彎気 味にのび、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめている。	青灰色 細砂・長石粒・雲母・ 長石微粒 良好 体部内面から底部に 该付着 底部外面に墨書
5	S	坏	A (14.9) B 4.8 C 8.0	底部は平底で体部と底部は明瞭な角度で分かれほぼ直線的に外上方にのび、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り。体部下端部手持ち 篦削り調整。口縁部内面から体部外面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・礫・長石粒・ 雲母 普通 底部外面に墨書
6	S	高台付坏	A (14.5) B 6.0 D 9.4	底部と体部の境界は明瞭な稜をもち、体部は外傾気味にのび、口縁部でやや外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り高台は貼り付けで、内外面は横ナデ調整。内面全体に摩滅が見られる。	青灰色 砂粒・礫・長石粒・ 鉄分 良好
7	S	高台付坏	D (12.5)	高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのび、端部は 尖り気味におさめている。底部の器壁は厚い。右ロクロ水挽き 成形で底部は回転箆削り。高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒多 良好 底部内面に黄白色の 自然釉
8	S	高台付坏		水挽き成形で底部は回転箆削り。高台は欠損するが貼り付け高 台。底部内面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通 底部外面に墨書
9	S	高台付坏	D (11.3)	高台は貼り付けで「ハ」の字状に外方に下降し、内端面にあまい 溝が回る。底部の器壁は厚い。右ロクロ水挽き成形で、底部は 回転箆削り。一部に指頭押圧痕を見る。高台内・外面は横ナデ調 整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒(砂目が 荒い) 良好 底部外面に箆記号



第182図 103号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第183図 103号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	1	居 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
10	S	蓋		天井部中央に扁平なボタン状のつまみがつく。天井頂部は回転 箆削り。つまみは横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好
11	S	雅	A (35.8)	やや膨んだ体部から大きく外反する口縁部がつき、端部をかる く下方へつまみ出す。頸部から口縁部外面及び内面全体は横ナ デ調整。体部外面は平行叩き目調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好 体部内面に若干墨付着
12	Н	坏	C 10.0	底部は平底で、底部と体部はややあまい角度で分かれ、体部は 内彎気味に外上方にのびる。内面は箆磨き調整後、不完全な黒 色処理。体部及び底部外面は回転箆削り調整。	にぶい黄橙色 細砂・長石微粒・雲母 普通 底部外面に箆記号
13	Н	坏	C 7.4	やや小形の坏。底部は平底で、底部と体部はややあまい角度で 分かれ、体部は内鬢気味に外上方にのびる。右ロクロ水挽き成 形で、底部は回転箆切り、体部内・外面及び底部内面は横ナデ 調整。	橙色 細砂・長石粒 やや精良 普通
14	Н	甕	A (24.4)	やや膨んだ体部から「く」の字状に屈曲し、大きく外反する口縁部がつく。端部をやや外上方につまみ出す。内・外面は横ナデ調整。頸部外面に粘土紐の痕跡。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 ・礫 良好
15	Н	獲	A (14.6) F 14.6	やや膨んだ体部から「く」の字状に屈曲し、大きく外反する短い口縁部がつく。口縁部外面に浅い一条の溝をもつ。口縁部先端をやや尖り気味につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ。体部内・外面中位から下位にかけ箆ナデ。下位は横位の箆削り調整。	赤色 砂粒・礫・長石粒・ 雲母 良好
16	Н	甕	A (13.3)	あまり張らない体部からかるく「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁部外面に明瞭な稜をもち、端部を強く外方へつまみ出しながら丸くおさめている。内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 内・外面に煤付着
17	Н	甕	C 9.0	平底の底部から、やや内彎気味に外上方にのびる体部をもつ。 内面全体にナデ調整。体部外面は縦・横位の箆削り及びナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕 底部内面に鉄分付着

番号		뭄	種	污	法量(cm)				形!	態 お	ょしひ	・手	法	の特徴				備		=	
18	Н		甕	С	5.8				な平底の底部からやや内彎気味に外上方にのびる体部をもつ。 は厚みをもつ。内面ナデ調整。体部外面は箆削り調整。 描述・長石 普通 底部外面に										-			
番号	種	類	法量(cm)	形	態	Ø	特	徽	備	考	番号	種	類	法量(cm)	形	態	の	特	徽	備	考
19	砥	石	4.1× 2.0	2.9		が認め	りられ		面に使	流和 26.		21	不鉄	明製品	全長 (3.4) 幅0.4 厚さ0.4		に彎					
20	不鉄勢	明製品	全長 (5.2 幅0.4 厚さ(Ĺ	断面がしていた。上部が	いる。		7棒	伏を呈													

104号竪穴住居跡(第184図)

調査区E3e2区を中心に確認され、103号竪穴住居跡の南側に位置している。南北3.38m・東西3.6mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形を呈している。

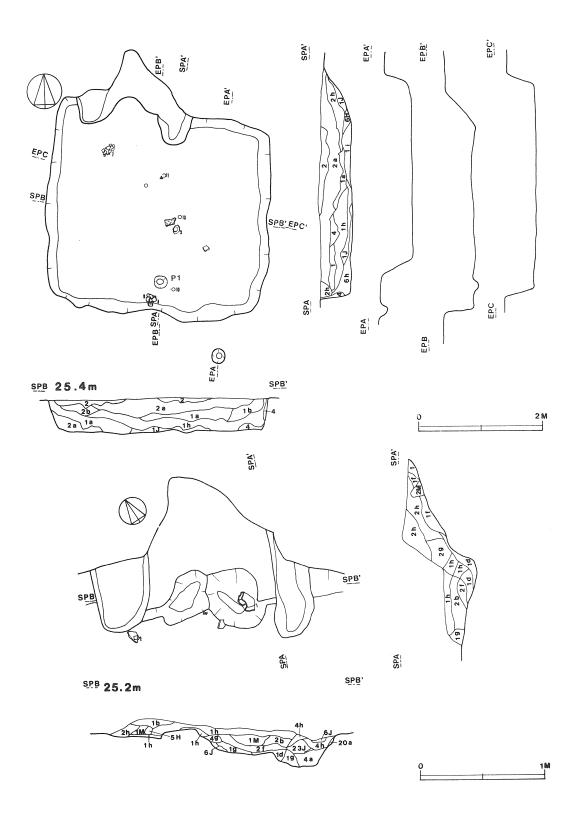
覆土は、上・中層が褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積層を示すが、下層はロームブロックや砂などを含む褐色土で、人為的な堆積と考えられる。壁は、80度内外の傾斜をもってほぼ直線的に立ち上がり、高さ約50cmである。床面は全体的に堅く締まっているが、南壁下から竈前面にかけては特に踏み固められている。ピットは、南壁下のほぼ中央部に深さ10cmの小ピットが1か所認められるだけである。

竈は、北壁やや西側寄りにあり、長さ1.65m・幅1.8m・焚口部幅0.9mで、壁外へ0.98m掘り込んで構築されている。袖部は砂を主体として構築されているが、保存状態は悪い。焚口部は床から10cmほど低く、煙道部へゆるやかな傾斜をもって立ち上がっている。

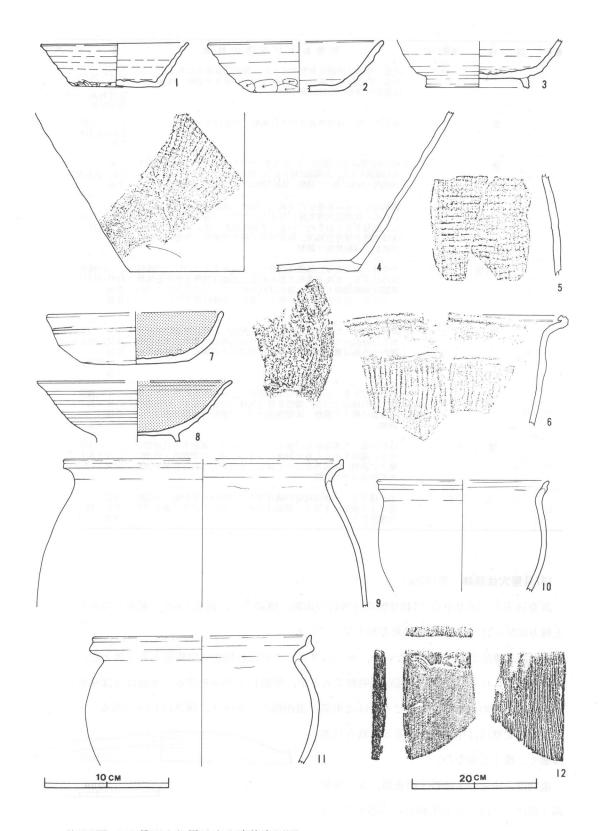
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・鉄滓が、ほぼ中央部の床面付近と竈から出土している。

104号竪穴住居跡出土遺物観察表(第185図)

番号		器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 11.8 B 3.8 C 7.0	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部 は直線的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽 き成形で、底部は回転箆切り。外周部は箆ナデ調整。体部下端 部は手持箆削り調整。全体にやや薄手作り。	灰白色 細砂・長 普通 ほぼ全体	石粒・雲母に漆付着
2	S	坏	A (14.0) B 4.1 C (7.0)	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部 を丸くおさめている。水挽き成形で底部はナデ調整。体部下端 部は手持ち箆削り調整。体部内面は横ナデ調整。	不良	万粒·雲母多 に一部煤付着
3	S	高台付坏	D 8.3	底部と体部の境界は、回転篦削りによる明瞭な稜をもち、体部は外傾気味に外上方にのびる。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転篦削り。高台は貼り付けで、ややふんばり気味で内端部に稜をもつ。体部内・外面及び高台内・外面は横ナデ調整。	不良	石粒·雲母多 体部内面に



第184図 104号竪穴住居跡・竈実測図



第185図 104号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	-	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S	甕	C (18.5)	底部と体部は明瞭な角度で分かれ、体部は直線的に外上方にの びる。内面はナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。体部下位 は箆削り調整。全体に薄手作り。	暗灰色 細砂・長石粒・雲母 普通 底部外面に多数の籾 殻状圧痕
5	s	甕		体部の一部。体部外面は叩き目調整。内面はナデ調整。	オリーブ黒色 細砂・長石粒・雲母多 不良
6	S	쭃		殆ど胴の張らない体部から一旦大きく外反し、次に強く内面に屈曲する口縁部をもち、内端部に稜をもつ。体部外面は平行叩き目調整。ロ 頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面はナデ及び箆ナデ調整。	灰色 砂粒・長石微粒・雲母 普通
7	Н	坏	A (14.0) B 4.2 C 8.5	底部はやや丸みを帯びた平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部で僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水挽き成形と思われる。内面全体は箆磨き後黒色処理。体部外面は横ナデ調整、体部下端部及び底部は回転篦削り調整。	橙色 細砂・長石微粒 やや精良 普通
8	Н	高台付埦	A (15.6) B 5.0	やや浅い境である。体部は内彎しながら外上方にのび、口縁部 は外反する。水挽き成形と思われる。内面は箆磨き後黒色処理。 底部は回転箆削り調整。高台は貼り付けで「ハ」の字状に下方向 にのびる。高台内・外面は横ナデ調整。全体に薄手作り。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・石英・ 雲母 普通
9	Н	甕	A (22.4)	やや胴の張った体部から頸部は丸く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部がつき、端部をかるく外反気味につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面は箆ナデ調整。体部外面はナデ調整。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 良好 口縁部内面に一部煤 付着
10	Н	甕	A (13.8)	小形甕である。かるく張った体部から、ゆるやかに外上方に屈曲する口縁部がつき、端部を外反気味につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面は箆ナデ調整。体部外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通 内・外面に煤付着
11	Н	甕	A (17.4)	球形に張った体部から、強く「く」の字状に屈曲する口縁部が つき、端部をかるく外反気味につまみ出す。口頸部内・外面は 横ナデ調整。体部外面はナデ調整、中位から下方は箆削り調整。 体部内面はナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
12	平	瓦	全長 (17.8)	やや扁平で、凸面は縦位の繩目叩きで凹面は布目を残し、端部は 箆による面取りを施す。側面は斜めに分割し、箆ナデ調整。や や薄手作り。	灰色 砂粒・礫 硬質

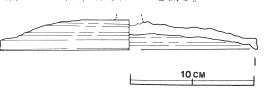
107号竪穴住居跡 (第187図)

調査区 E3c7区を中心に142号竪穴住居跡の南側に確認され、南北3.6m・東西3.75mを測り、主軸方向N-11°-Eを指す隅丸方形を呈している。

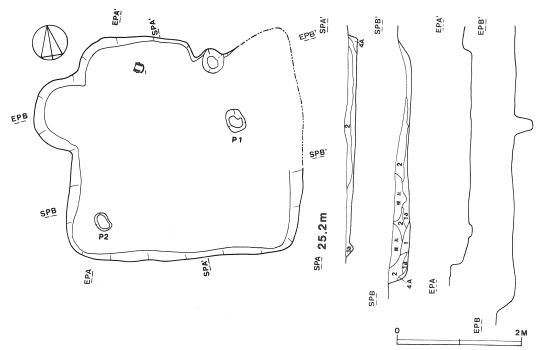
覆土は、攪乱があり良好でないが、ロームブロックを含む褐色・暗褐色土を主体とし、人為的 堆積と考えられる。壁は北東部が不明瞭であるが、壁高15~30cmを測る。床面はほぼ平坦で、竈 前面は踏み固められている。ピットは北東部と南西部の3か所で、深さは10cmを測る。

竈は、北壁ほぼ中央部にあるが、残存状態 は悪く、焼土も少ない。

遺物は、少量の土師器・須恵器・瓦・鉄製品・鉄滓で、ほとんど床面からの出土である。



第186図 107号竪穴住居跡出土遺物実測図



第187図 107号竪穴住居跡実測図

107号竪穴住居跡出土遺物観察表(第186図)

番号	ng ng	暑 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	蓋	A (20.6)	天井頂部はやや扁平で、口縁端部は下方に屈曲し、稜をなす。 内端面は内傾する面をなす。水挽き成形で、天井部外面は,回 転箆削り後横ナデ調整。内面全体はナデ及び横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 内面に漆付着	

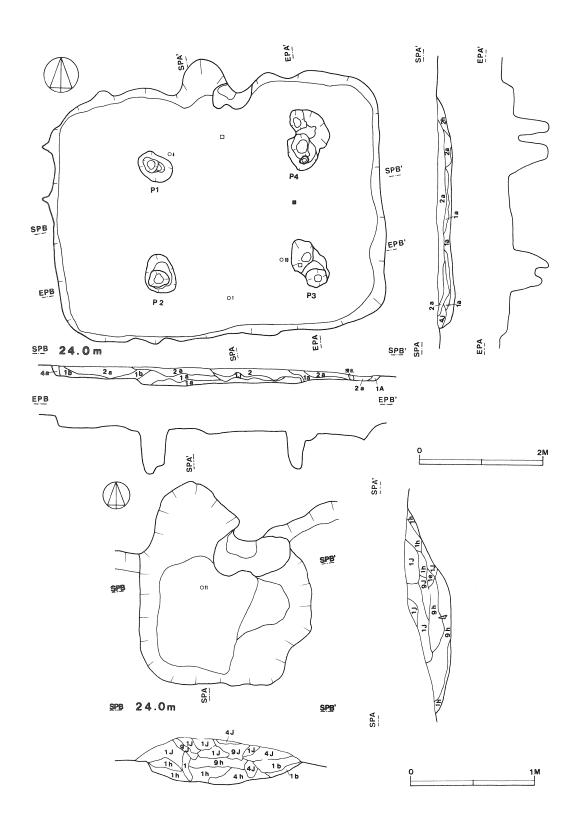
108号竪穴住居跡 (第188図)

調査区 C2h9区を中心に109号竪穴住居跡の東側に確認され、南北4.2m・東西5.34mを測り、 主軸方向 $N-4^{\circ}-W$ を指す隅丸長方形を呈している。

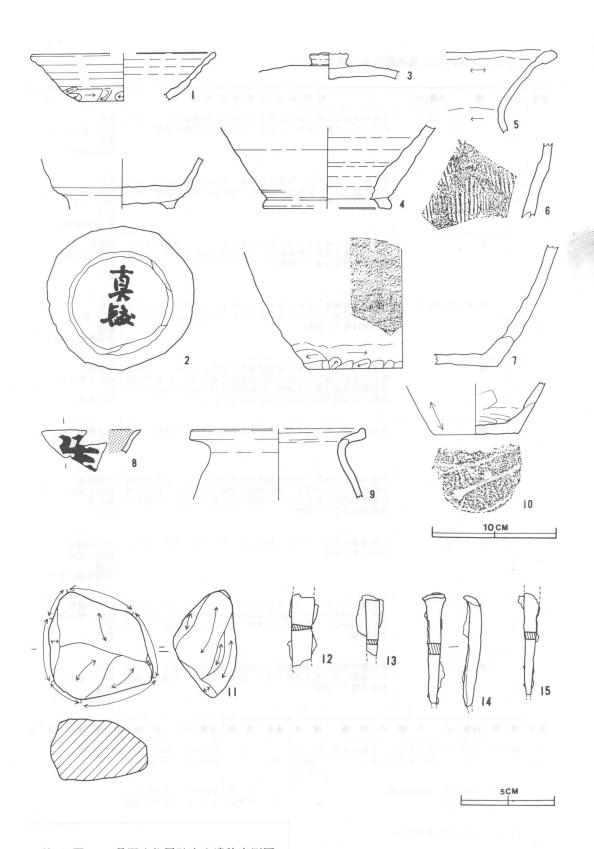
覆土は、褐色・暗褐色土が主体で、部分的にロームブロックを若干含み、人為的な堆積が認められる。壁は60度内外でゆるやかに立ち上がり、高さ8~25cmである。床面は、東側中央部が若干高くなるほかはほぼ平坦で、比較的硬い。ピットは4か所で、整然と配されているが、いずれも2本ずつ重複し、建て替えが考えられる。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.64mで、壁外へ55cm程掘り込んで構築されているが、残存状態は不良。袖部は山砂で構築され、焚口部は床面より12cm程低く、ゆるやかに煙道に至っている。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が少量出土しているが、大部分覆土中からのもので投棄されたものと考えられる。

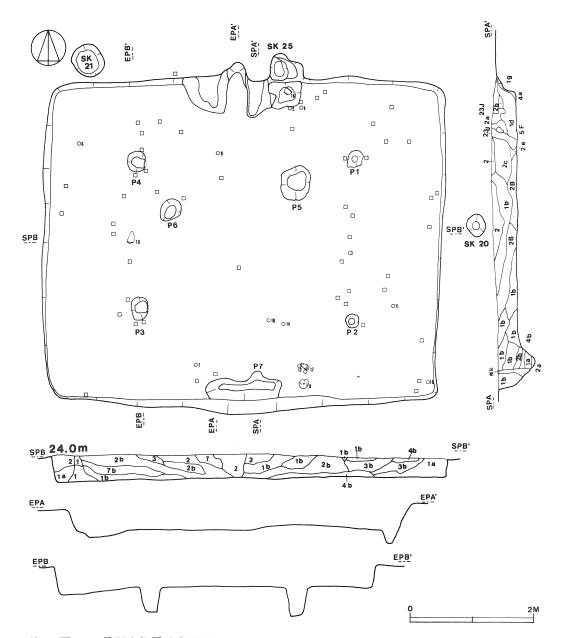


第188図 108号竪穴住居跡・竈実測図



第189図 108号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号		器	種		法量(em)				形	態	およ	び	手 法	の #	寺 徴				Ű	i		考
1	S		坏	A B	(14.5		平屋めて	医の庭	ま部に か	大投き	員。付於成形	本部は が で 、 イ	水上: 本部	 方にℓ 下端音	のび, I B手持・	コ縁端ち箆削	岩部 る	と丸く	おさ	普通	・長る		雲母
2	S	高	台付坏				クロ	水換	った <u>庭</u> た き けけて	形,	底剖	体部に は回転 し。	まや。	や薄く 削り後	外傾急	元味 に い横ナ	のた	ドる。 閉整。	右口高台	微料普通	レ・長ィ エ・雲も	‡	
3	S		蓋				欠損	[。水	く挽き	成形	彡と思	、タンキ 、われる 、調整。	3。5	つま <i>み</i> 天井頂	がつ。 〔部は <u>〕</u>	(が, 回転箆	頂音	『は僅	かにまみ	青砂粒良好	· 長7	万粒・	石英
4	S	台	付 壺	D	(10.1)	ふん	ばり	や特殊	にの	び,	ら外上 端部に	と方に	このひ	る。高、体部	哥台は 内・外	厚く面及	外下	方に 台内	普通	・長石		
5	S		甕				思わ	れる	が, 外面	僅かは箆	に欠けた	口縁音 損。頸 調整。 土おさ	類部内 口線	勺面は	箆削り 及び口	調整 1縁部	。 Г	縁部	内面	母	色 ・長石 焼け	「微粒	• 雲
6	S		甕		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は箆ナデ調整。							外面黒色, 内面灰色 細砂・長石粒多 良好											
7	S		甕	С	(15.2)	気味は箆	に外 削り	上方	にの 。体	びる 部内	部は明 。体部 面及ひ	3外面	面には	叩き目	を残	す。	体部	下位			粒・	長石
8	Н		坏				口縁内面	端部は黒	は外.	反し理。	やや	尖り気	味に	きなさ	めてい	る。:	水挽	き成	形で	細砂 普通	い橙色 ・雲母 外面に	:	WENT AND
9	Н		甕	A	(13.6)	曲す	る口: ら口縁	縁部: 誘部内	がつ	à. ا	く張っ 端部を 横ナデ	1111	(垂直	に丸く	おさと	めて	いる。	型 百		い橙色・長石		•雲
10	Н		甕	С	6.8		小形 る。 外面	体部	内面に	こ粘:	土紐法	底部か 良を残	 ら体 す。	部は 体部	外傾気 内面は	味に	外上デ調	 方に <i>a</i> 整。 f	かび本部	普通	・長石 外面に		
番号	種	類	法量(cm)	形	態	の ⁴	持 1	数	備	考	番号	種	類	法量	(cm)		形態	集 の) 特	徴	備	考
11	砥	石	5.5×: 3.2	5.4			,全に		使用		岩 (粒) (5.5 g	14		釘	全長(太さの			部はお端部の]げて!	いる。		
12	刀子	か	全長(3 刃幅		両端部		0					15		明 製品	全長(太さ(部片カ 帯部ク					PPP STOPHAR Andreas
13	刀	子	全長(2	2.9)	茎部片								-d								ottomore de la constantina de la const	-lananananananananananananananananananan	euthaniamorpus



第190図 109号竪穴住居跡実測図

109号竪穴住居跡 (第190・191図)

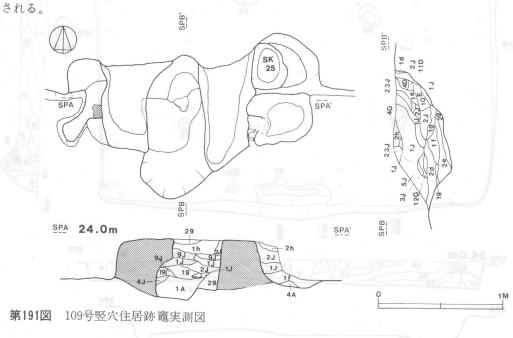
調査区 $C2h_7$ 区を中心に、108号竪穴住居跡の西に確認され、南北5.3m・東西6.45mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、ロームブロック・炭化粒子を含有する層が多く人為的堆積と考えられる層が認められる。壁は75度内外の傾斜で立ち上がり、高さ30~40cmである。床面は平坦で、全体的に硬いが、特に竈前面から南壁下にかけては良く踏み固められている。ピット

は 7 か所確認されたが、主柱穴は各コーナー部の 4 本で、南壁下の P_7 は、入口に伴う施設と考えられ、 P_5 ・ P_6 は、本跡に伴わないものである。柱穴の深さは $40\sim60$ cm を 測る。

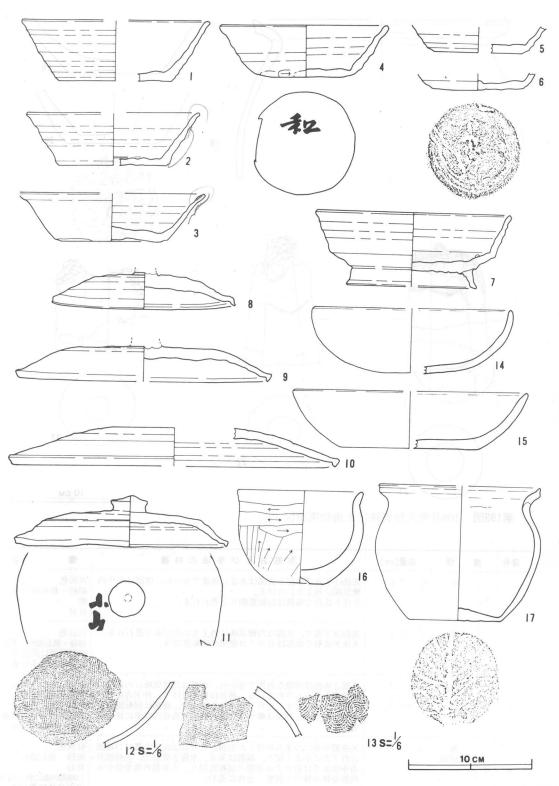
竈は、北壁中央部にあり、長さ1.15m・幅1.3m、焚口部幅0.5mで、壁外へ25cm掘り込まれている。袖部は砂によって構築され、焼成部は床面より18cm低く、50度内外の傾斜をもって煙道に至っている。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、おおむね4本の柱穴を結んだ線の外側の床面付近から出土している。この中で、鉄製品が大部分を占めていることは注目される

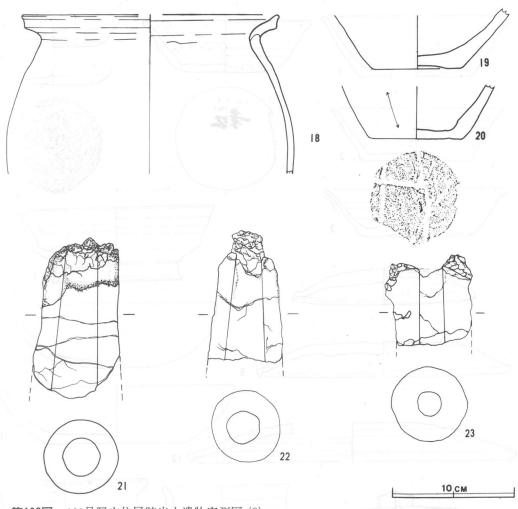


109号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第192・193・194・195図)

番号	뮒	種 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (15.0) B 5.0 C (9.1)	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は箆ナデ調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 不良
2	S	坏	A (13.9) B 4.3 C (8.7)	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部はほぼ直線的に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 不良
3	S	坏	A (14.9) B 3.9 C 8.0	やや盛り上がった厚手の底部から体部は薄く,やや内彎気味に 外上方にのび、口縁部は肥厚、外反し、端部を丸くおさめている。 水挽き成形で、底部は回転箆切り後、静止箆削り調整。体部下端 部は一部手持ち箆削り調整。	青灰色 細砂・長石微粒 普通 口縁部内面と底部内 面に漆付着 底部外面に墨痕
4	S	坏	A 13.4 B 4.2 C 8.3	やや丸みを帯びた底部から、体部はあまい角度で分かれ、外傾 気味に外上方にのび、口繰端部を丸くおさめている。底部内面 と体部内面の境界に僅かなくびれを見る。右ロクロ水挽き成形で 底部は多方向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石微粒・雲玉 やや不良 底部内面に鉄分付着 底部外面に墨書

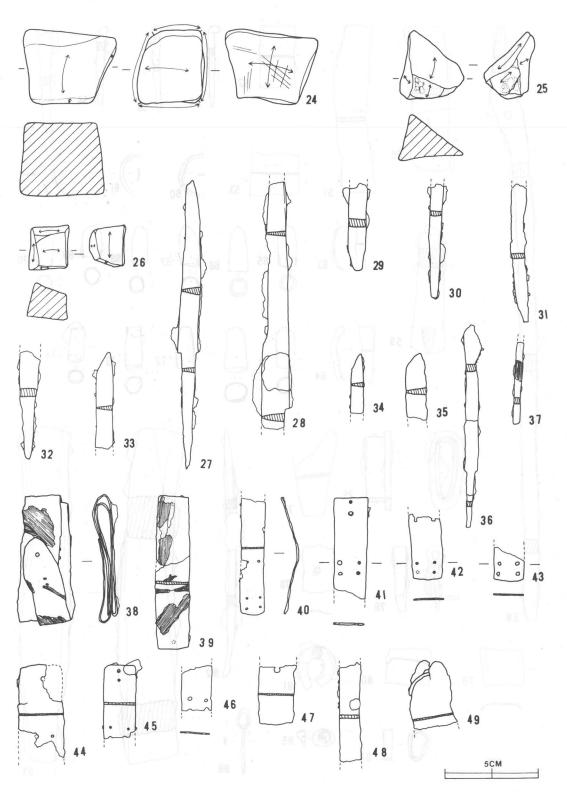


第192図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)

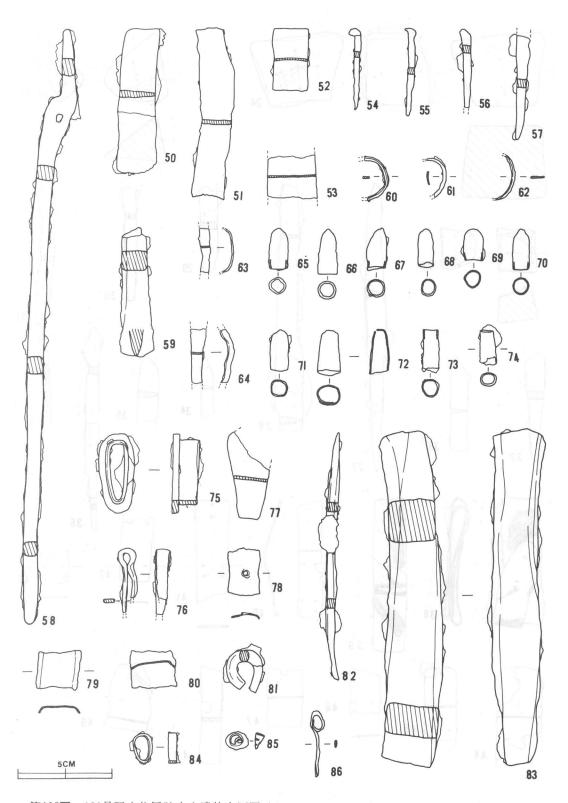


第193図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	4	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S	坏	C 7.1	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれ、体部はやや内 鬱気味に外上方にのびる。 水挽き成形で底部は回転箆削りと思われる。	青灰色 細砂・長石微粒多・ 礫 良好
6	S	坏	C 7.4	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのびると思われる。 水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆切り。	灰白色 細砂・長石微粒 不良 底部外面に箆記号 底部内面に漆付着
7	S	高台付坏	A 15.7 B 6.0 C (10.3)	底部と体部は明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味にのびて口 緑端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのび 内端部に稜をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り 調整。高台内・外面は横ナデ調整。底部と高台の境界に接合痕 を残す。	灰色 細砂・長石 微粒 良好 底部内面に鉄付着 口縁部内面に煤付着 底部外面に墨付着
8	S	蓋(転用硯)	A 14.8	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸味を帯び口縁部は外下方にかるく反り、端部は尖る。水挽き成形で、天井部外面中位までは右ロクロ使用の回転箆削り。天井部外面中位から内面全体は横ナデ調整。全体に歪む。	緑灰色 細砂・長石微粒 良好 口縁部内面に鉄分付着 内面全体に墨付着



第194図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)



第195回 109号竪穴住居跡出土遺物実測図 (4)

番号	-	器	種		法量(cm)		形態	およ	び手	法	の #	寺 徴		備	考
9	S		蓋	A	(20.1)	天井部中央に 部は僅かに内 クロ使用の回 は横ナデ調整	傾し,端音 転箆削り	『は尖る	。水	挽き	成形'	で,天	井頂部は右口	和砂・礫・ 可不良	長石粒 外面に煤付ラ
10	s		蓋	A	(24.6)	壺の蓋か。天 は明瞭な稜を 外面中位まで 縁部にかけ横	もち口縁 は回転箆	部はや 削り調	や内	傾す	る。ラ	火挽き	成形で天井部	石粒 良	面全体に灰
11	S		蓋	A B	17.0 4.1	天井部中央に 反り気味に口 もつ。右ロク まみと口縁部	縁部に至 ロ水挽き	る。天 成形で	井部 天井	と口 部外	縁部の	り境界	に明瞭な稜を	細砂・長	
12	S		甕			体部の一部。	外面は平	行叩き	目調	整。	内面に	はナデ	調整。		石粒 良好 9と同 一 個体
13	S		甕			体部の一部。	外面は平	行叩き	目調	整。	内面に	こは同	心円文が残る	。灰色 細砂 普通	
14	Н		坏	В	(15.8) 5.2 (9.0)	底部と体部は 口縁端部を丸 外面は横ナデ	くおさめ	ている	。内	面全	体は質	包磨き	調整。口縁部	にぶい橙1 細砂・長 ⁷ ・・ ・・ ・・ ・ ・ ・ 通	ら粒・雲母 日粒・雲母
15	Н		坏	В	(18.9) 4.6 (11.1)	底部は平底で体 方にのび,口縁 縁部外面は横ナ	対端部を丸・	くおさめ	りてい	る。	内面全	体は貧	を磨き調整。口		5粒・石英
16	Н	小	形鉢	В	10.0 7.6 (4.3)	小さな平底で, 立ち上り, 口縁 面は横ナデ調整 は箆ナデ及び横	網はかる。 と。内部と	く外反し 食部内面	ノ,端 記は箆	部を) 〔ナテ	丸くお ′及びオ	さめて -テ調整	「いる。口頸部内 隆。 口頸部外面	長石粒・雲 ア 普通	色 砂粒・ :母・スコリ 全体に二次
17	Н		甕	A B C	(12.9) 9.8 7.4	小形甕。底部は 縁部を持つ。口 体部は薄く作る ・外面全体に箆	縁端部を 。口縁部	まぼ垂直 内・外面	iにつ iは僅	まみ かに	出す。 横ナテ	底部中 痕が見	中心は厚く作り 見られるが,内	砂粒・長石	「粒・雲母
18	Н		甕		(20.5) (23.1)	やや胴の張った 端部を外反気味 口縁部内・外面 頸部外面に粘土	につまみと iは横ナデ記	出す。体 問整。体	部は	薄く	,口頸	部はや	や厚く作る。	にぶい橙色 砂粒・長石 普通	色 石粒・雲母
19	Н		甕	С	7.2	甕の底部。平月 体部と底部外 デ調整。									「粒・雲母
20	Н		甕	С	7.4	甕の底部。や*がつく。体部タ									鉄付着
番号	種	類	法量(cm)	形態	の 特 徴	備考	番号	種	類	法量	t(cm)	形態	の特徴	備考
21	XX	П	全長 (10: 外径5 孔径2	.8		えが欠損,外面 の箆削り調整。	先端部 に少量 の鉄付 着。	24	砥	石	5.0 3.8	×4.0		,全面に使り れる。一部/	
22	KK	П	全長(* 外径5 孔径1	. 2	先端部の列面に箆傷を	台どは欠損,外 と残す。	先端部 は溶解 し鉄付 着。	25	砥	石		×2.4 ~2.4	用痕が認め 自然面が認 凹が激しく係	し、全面に係られる。一部 られる。一部 められるがは 使用しても平ら ったと思われる	形 20.7 g 占
23	KK		全長(外径6 孔径2	.0	先端部。		先端部 は溶解 し鉄付 着。	26	砥	石	2.2	×1.9		,全面に使用れる。小形。	用 凝灰岩 11.5 g

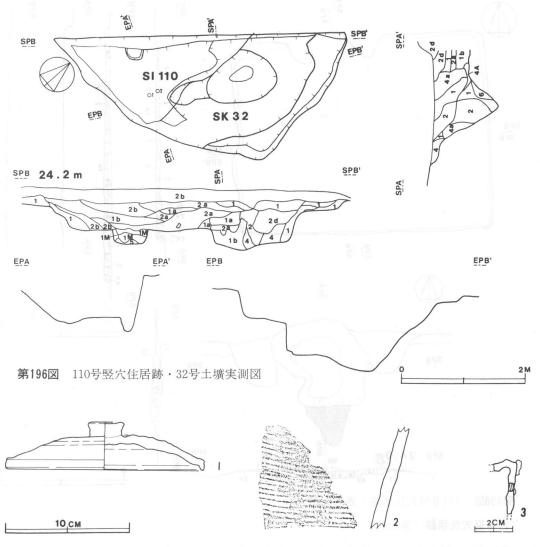
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
27 \$ 35	刀子		27は完形品で全長15.4cm, 刃幅1.0cm, 刃長9.1cm。 28・33~35は切先部。29 ~32は茎部。		73 • 74	管 状鉄製品		73は完形品で、全長2.0 cm, 幅0.8 cm。	
36 • 37	鏃		36は完形品で全長10.8cm, 刃幅0.9cm, 茎径0.3cm。 37は茎部と思われる。	37は木 質残存	75	縁金具	外法 4.3×1.9 櫃穴 2.9×0.7	完形品。	
39 { 46	小札		39はほぼ完形品。 全長8 _. 1cm,幅1.8cm。す べてに小孔がみられる。	39は木 質残存	76	壺 金	全長(3.4) 太さ0.2	厚さ0.2mmの鉄を折り曲 げ,内径0.4mmの孔を作 っている。	
38 47 5 49	小札状鉄製品		38は, 長さ29cmの鉄板を 五つに折り曲げている。 47は径3 mmの小孔を有す る。48は両端部欠損。49 は一方の端が丸い。	38は残 質 49は状のが 付 者	77 \$ 80	不 明 鉄製品		77は燧鎌か。78は中央に 小孔有り。79・80は1.9× 2.2cmで両側を若干折り 曲げている。	
50 \$ 53	短冊形 鉄製品		50・51・52は完形品。50 は全長7.7cm, 幅1.9cmで, 小札を穿孔する以前のも のか。		81	環状鉄製品	2.3×1.9 太さ0.6	一方が開く耳環状を呈し ている。	
54 \$ 57	釖		54・55は完形品。55は全 長4.6cm, 太さ0.35cm。 56・57は釘か。		82	棒状鉄製品	長さ12.1 太さ0.5	断面が方形の棒状を呈し、 両端部は尖る。	
58	鉗	全長31.5 太さ 0.9	片方だけのものである。		83	棒 状 鉄製品	長さ17.8 太さ 2.5×2.3	鉄槌あるいは半製品か。	,
59	鏨	全長(6.9) 太さ1.4	頭部欠損。 刃部は断面V字形である。		84	鎺	1.6×1.0	刀子の鎺か。部分的に金 または銀が認められる。	
60 \$ 64	リング		60~62は残存部が半円形 を呈す。60は外径(2.3cm), 厚さ0.1cm。		85	不明 鉄製品		幅2~5mmの紐状の鉄が 螺旋状に巻いている。 裁断時の鉄片か。	
65 \$ 72	弓弭形 鉄製品		すべて完形品である。 69は全長1.6cm, 径1.1cm。 72は全長2.4cm, 径1.1cm。	69面でがにみる 装鉄る面がれ	86	不 明 鉄製品		幅4㎜の紐状を呈し,一 方の端が丸められている。	

110号竪穴住居跡 (第196図)

調査区C2f₇区を中心に確認され、大部分が調査区域外に存在する。確認部は南北2.3m・東西 1.9mで、32号土壙と重複し、重複状況からみて32号土壙は当跡より古い。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積である。壁は80度傾斜で立ち上がり、高さ60cm を測る。床面は、それほど締まりが無い。ピットは1か所で、深さ23cmである。

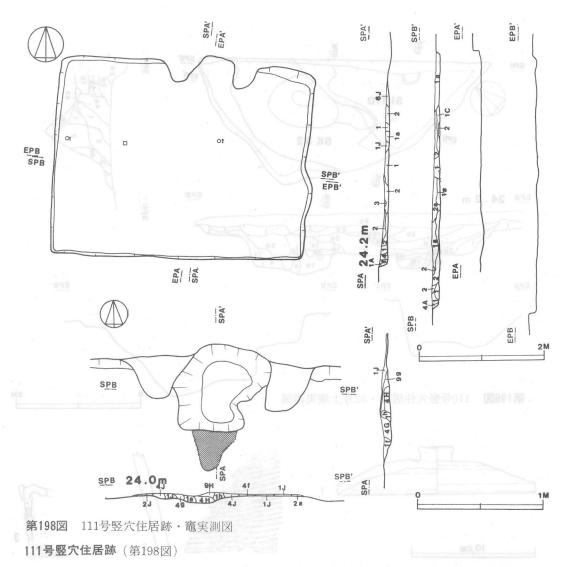
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓で、いずれも覆土中からの出土である。



第197回 110号竪穴住居跡出土遺物実測図

110号竪穴住居跡出土遺物観察表(第197図)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	蓋	A15.6 B 3.9	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井頂部はやや凹み、口縁部は下方向に屈曲する。右ロクロ水挽き成形で、天井部外面中位は回転箆削り調整。他は横ナデ調整。	灰褐色 細砂・長石粒多・長 石微粒 良好
2	S	獲	× 0	体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面は箆ナデ及びナ デ調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 不良
			節	法羅(cm) 形態および手法の時	图 图 伊维
3	釖	か		両端部欠損。	



調査区 $C2j_7$ 区を中心に109号竪穴住居跡の南東に確認され、南北3.15m・東西4.05mを測り、主軸方向N-2°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。壁は北側で確認できないが、南側では高さ12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干西側に傾斜するが、ほぼ平坦で、竈前面にやや硬い部分が認められる。柱穴は認められない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・鉄製品・鉄滓が少量、覆土中から出土している。

111号竪穴住居跡出土遺物観察表(第199図)

番	号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
	1	S	坏	C (8.4)	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれ、体部はやや内 彎気味に外上方にのびる。水挽き成形で体部内面は横ナデ調整。 底部内・外面はナデ調整と思われる。全体に摩滅が進行。		・長石微粒多

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	蓋	学出版权。(1) 第一种模目(1) 第一种原则(2)	つまみのみ。天井部との境界付近に浅い溝をもつ。全体に横ナ デ調整。	灰オリーブ色 砂粒・長石微粒・石 英・雲母 不良
3	S	雍	新。[4][[4]]	体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒多 普通
4	短鉄	冊 形製品	全長3.0 幅 1.6 厚さ0.3	長方形を呈する。	
=			7		
			? 2	10,cm	

第199図 111号竪穴住居跡出土遺物実測図

112号竪穴住居跡 (第200図)

調査区C2js区を中心に確認され、西側で113号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は当跡が新しい。南北3.35m・東西3.61を測り、主軸方向N-8°-Wを指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は、高さ10cmで外上方へ立ち上がる。 床面は外周部が比較的軟弱で、中央部は踏み固められやや低くなる。ピットは南西部を除く各コーナーと、南壁中央部壁下の4か所あり、深さは8~39cmを測る。

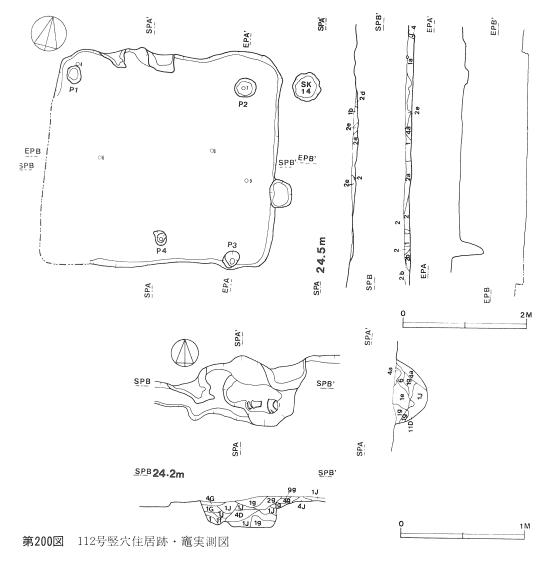
竈は、北壁やや西側寄りにあるが、遺存状態は悪く、構造は明らかでない。

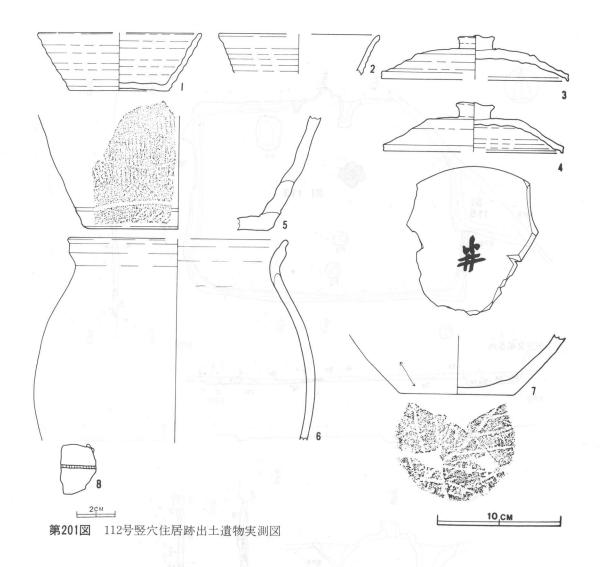
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・鉄滓で、極少量が床面付近から出土している。

112号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第201図)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A (12.8) B 4.6 C 7.8	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽 き成形で、底部は回転節切り後、静止節ナデ調整。全体にやや 摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒 粒・雲母 不良	・石英
2	S	坏	A (12.9)	底部は平底と思われるが欠損。体部はほぼ直線的に外上方にの びると思われる。口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめて いる。水挽き成形で体部内面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石微* 良好	V
3	S	蓋	A (14.8) B 3.5	天井部中央にやや扁平で中心が僅かに高いつまみが付く。天井頂部は 回転箆削りでやや平坦に仕上がる。天井部と口縁部の境界は明瞭で、 口縁部は僅かに下方向に屈曲し、端部は尖る。右ロクロ水挽き成形で、 つまみと口縁部内・外面は横ナデ調整。天井部内面はかるい横ナデ調整。	灰色 砂粒·長石粒多 良好	•雲母
4	S	蓋	A (14.3) B 3.9	天井部中央にやや扁平で中心が僅かに高いつまみが付く。天井 頂部は平坦に作られ、口縁部に向かって強く下降する。天井部と 口縁部は明瞭に分かれ、口縁部は下方向に屈曲し端部は失る。 水挽き成形で、天井頂部から中位は回転箆削り。	灰白色 砂粒・長石粒・ 雲母 普通 天井部内面に墨	

番号	P.	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
5	S	甕	C (15.1)	底部は平底で体部と底部はほぼ明瞭な角度で分かれ、体部はや や内彎気味に外上方にのびる。体部外面は平行叩き目調整。体 部内面と底部内・外面はナデ調整。体部下端部に一条の浅い溝 が巡る。やや摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石微粒 石粒多 良好	長
6	Н	甕	A (17.3) F 22.4	やや胴の張った体部から、丸く屈曲する口縁部がつき、端部は強く外方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ及びナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・ 普通	雲母
7	Н	裚	C 9.2	婆の底部。平底の底部から、体部と底部はほぼ明瞭な角度で分かれ体部は内骨しつつ外上方にのびる。体部外面は箆ナデ調整。 体部と底部内面はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲 普通 底部外面に木葉	
8	不正	明鉄製品	全長 2.6 幅 1.9 厚さ 0.1	台形状の板状鉄製品。		





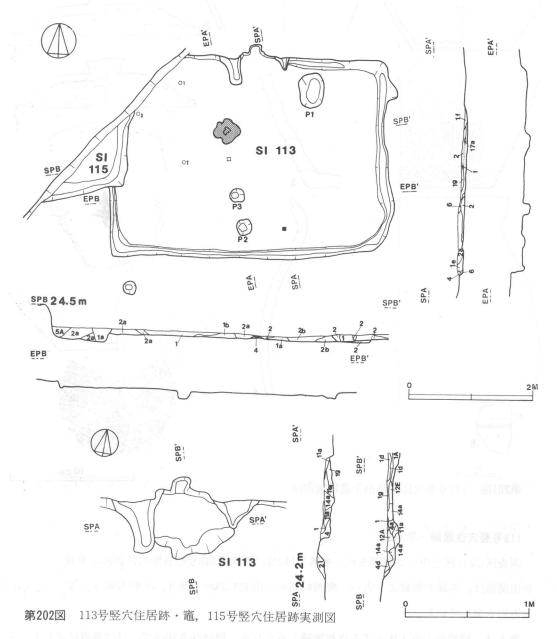
113号竪穴住居跡 (第202図)

調査区 $C2j_4$ 区を中心に確認され、東側で112号、西側で115号の各竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が両跡より古い。東西4.55m・南北3.25mを測り、主軸方向N-3°-Wを指す、長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅10cm・深さ8cmの壁溝がほぼ全周している。床面は小さな起伏を有し、壁下付近まで良く踏み固められている。ピットは3か所認められ、深さは10~15cmを測る。

竈は、北壁ほぼ中央部にあるが、遺存状態は悪い。袖部は山砂を主体として構築され、火床は5cm程の焼土が堆積している。竈前面のやや西壁寄りに、山砂をもって築かれた、炉跡とみられるものが確認されている。

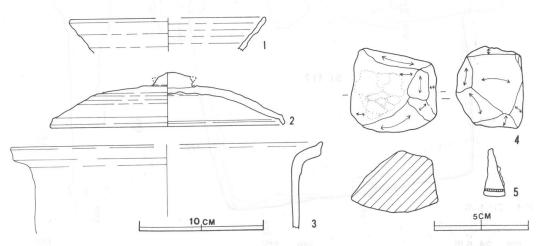
遺物は、土師器・須恵器・砥石・鉄製品・鉄滓が少量、全体に散在して出土している。



113号竪穴住居跡出土遺物観察表(第203図)

番号	뒴	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (15 5)	底部は平底と思われるが欠損。体部は外上方にのび、端部を丸 くおさめている。水挽き成形で口縁部内・外面と体部外面は横 ナデ調整。全体に薄手作り。	灰色 細砂・雲母 やや精良 普通
2	S	蓝	A 18.8 B 4.3	天井部の中央を僅かにはずれてボタン状のつまみが付く。天井 部はやや丸く、口縁部と天井部の境界は鋭く尖り、口縁部は外 下方に屈曲する。右ロクロ水挽き成形で天井頂部は回転箆削り 調整。天井部内面中央を除き他は横ナデ調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・長 微粒・雲母

番号	뭄	뭄	種	7	去量(cm)	36			形	態は	およて	ド 手	法	の特徴				備			考
3	Н		甕	A	(24.8)	0	き,	端	部を外			まみ出				る口縁部がつ は横ナデ調整		整石			粒・	雲母
番号	種	類	法量(cm)	形	態	n	特	徴	備	考	番号	種	類	法量(cm)	形	態	O	特	徴	備	考
4	砥	石	4.6× 3.3	4.2	が激し分的にが、	こした	ため か 認 也 の i	使用犯 められ	は 直はな 全れ はな なる	92.	岩 .7g	5		明製品	2.5×1.1 0.1	三角	形状			いる。		15-2



第203図 113号竪穴住居跡出土遺物実測図

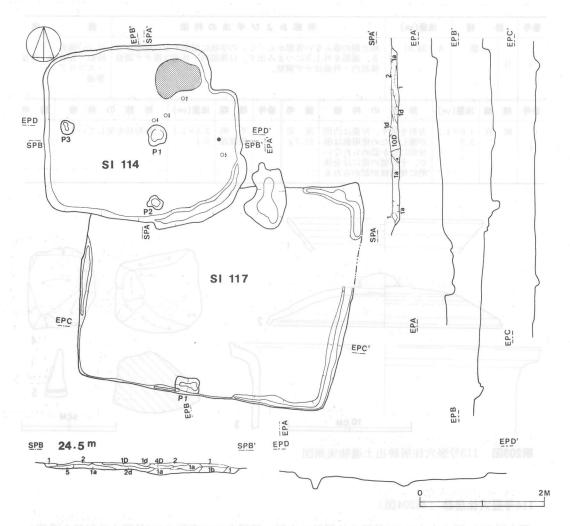
114号竪穴住居跡 (第204図)

調査区 $C2h_9$ 区を中心に108号竪穴住居跡の南側に確認され、南側で117号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は明らかでないが、当跡が新しいと考えられる。南北2.82m・東西3.15mを測り、主軸方向N-6°-Wを指す隅丸方形を呈し、東壁南半部に張り出しを有する。

覆主は、褐色・暗褐色土を主体とするが、多量の焼土や少量のロームブロックを含み、人為的な堆積とみられる。壁は高さ10cm程で、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央部に向かって低くなり、全面踏み固められている。ピットは3か所確認され、深さは10cmを測る。

竈は認められなかったが、北東隅に70×60cmの楕円形を呈する焼土が存在した。焼土はレンズ 状に堆積し、炉跡とみられる。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・漆紙様遺物・鉄滓が、中央部と東壁付近にかたまって出土している。なお、中央部床面から25×15cmほどの割石が1点出土している。

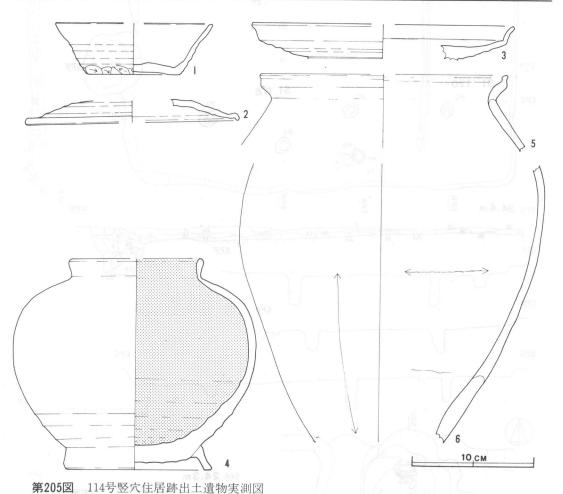


第204回 114·117号竪穴住居跡実測図 114·117号 114/11号 114/11号 114/11号 114/11号 114/11号 114/11号 1

114号堅穴住居跡出土遺物観察表(第205図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	· 坏.	A (12.6) B 4.2 C 2.4	やや盛り上がった平底の底部から体部は一旦内彎気味に外上方にのび、体部中位から外傾気味に口縁部に至る。口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り。体部下端部は手持ち箆削り調整。内面全体と口縁部外面は横ナテ調整。	良好	聞砂・長石粒多 面から体部内 付着
2	S	蓋	A (17.0)	天井頂部はやや扁平で、口縁部は僅かに段をなし、端部は下方に短く屈曲する。つまみは欠損。水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナテ調整。	青灰色 細砂・ 微粒 良好	長石粒・長石
3	S	10 CO 12 CO 10 CO	A (21.1)	体部は大きく開き、体部と口縁部は明瞭な角度で分かれ、外反気味に 外上方にのびる口縁部がつく。口縁端部を丸くおさめている。貼り付け高台を持つが欠損。水挽き成形で、内面全体と口縁部外面は横ナデ 調整。	青灰色 細砂・ 微粒多 良好	長石粒・長石
4	Н	台 付短頭壺	A (10.4) B 17.0 D 11.7	厚手の底部から体部は内彎しつつ立ち上がり口縁部は垂直に立ち上が る。体部から頸部にかけ器厚は薄くなり口縁端部は肥厚する。高台は 貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。体部外面中位から下位は 回転篦削り、内面全体は篦磨き後黒色処理。	にぶいれ 細砂・砂コリア 普通	登色 樂・雲母・ス

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
5	Н	甕	A (19.9)	強く胴の張った体部から「く」の字状の口縁部が付く。口縁端部は、内面に僅かな段をなし外反気味につまみ出す。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通	· 雲母
6	Н	獲	F 24.4	ゆるやかに内彎しつつ外上方にのびる体部で、底部と口縁部は 欠損。体部外面は縦位の篦ナデ調整。体部内面は横位の篦ナデ 調整。	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・ ・礫 普通	雲母

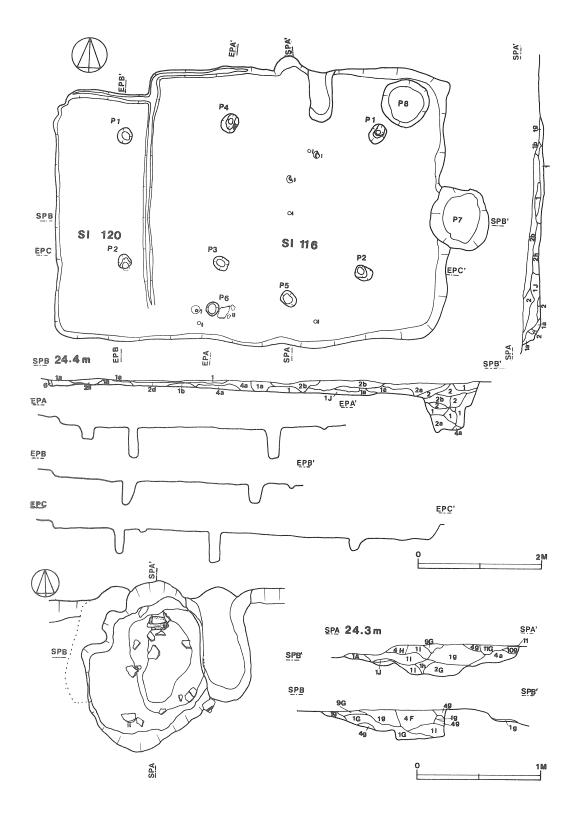


115号竪穴住居跡(第202図)

調査区C2j4区を中心に確認されたが、南東コーナー部だけの確認で、他は調査区域外に存在する。東側で113号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。

覆土は、ロームブロックを含む人為的堆積とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ20cm を測る。床面は、比較的よく踏み固められている。

遺物は、土師器・須恵器が極少量出土している。



第206図 116号竪穴住居跡·竈, 120号竪穴住居跡実測図

116号竪穴住居跡 (第206図)

調査区 $D2a_0$ 区を中心に確認され、117号竪穴住居跡の南に位置している。西側で120号 竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は南北4.42m・東西4.84mで、主軸方向N-5°-Wを指すやや隅の丸い長方形を呈している。

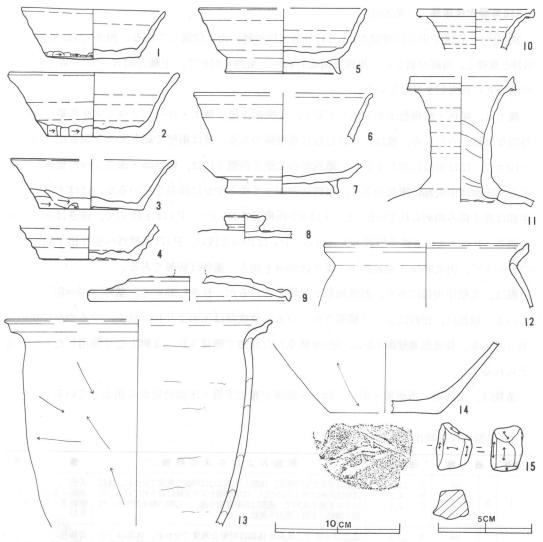
覆土は、褐色・暗褐色土を主体とするが、中央部下層に焼土・ロームブロックを多量に含む人為的な堆積がみられる。他は、おおむね自然堆積である。壁は南壁で高さ30cmを測るが、他は5~10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。竈西側の北壁と西壁下には、幅16cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は中央部に攪乱があり、東側に向かってゆるやかに傾斜しているが、ほぼ平坦で、南半部は良く踏み固められている。ピットは8か所確認され、 $P_1 \sim P_4$ は主柱穴で、深さは20~50cmを測る。 P_5 は入口に伴う施設とみられる。 P_8 は19cmと浅い。 P_7 は東壁外へ張り出す隅丸方形のピットで、南北96cm・東西95cm・深さは55cmを測る。遺物は皆無である。

竈は、北壁中央部にあり、西側袖部が崩壊しているが、長さ1.35mで、壁外へ20cm掘り込まれている。袖部は、山砂によって構築されている。焼成部は床面より10cm低く、ゆるやかに煙道に至っている。焼成部奥壁寄りから、礫が2個重ねた状態で確認され、支脚として使用したものと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄滓が覆土下層・床面付近から出土している。

116号竪穴住居跡出土遺物(第207図)

番号	-	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.4 B 4.2 C 7.4	底部は平底だか不安定。体部と底部はほぼ明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味におさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後、一方向の静止箆削り。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多・鉄分多 良好
2	s	坏	A 13.4 B 5.2 C 7.7	底部は平底で、底部と体部は明瞭な角度で分かれ、体部は一旦 内彎するが中位からは外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸 くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切り後、静 止箆削り及び箆ナデ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	青灰色 細砂・長石大粒多・ 長石微粒多 良好
3	S	坏	A (13.0) B 4.0 C 8.3	底部は平底で底部と体部はほぼ明瞭な角度で分かれ、体部はやや外反 気味に外上方にのび口縁端部を尖り気味におさめている。右ロクロ水 挽き成形で、底部は回転箆切り後、静止箆削り調整。体部下端部は手 持ち箆削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・礫 不良
4	S	坏	C 8.0	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方にのびる。水挽き成形で、底部は回転篦切りで無調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 内面全体に漆付着
5	S	高台付坏	A (13.2) B 5.2 D 9.0	底部と体部の境界は、あまい稜を持つ。 体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 高台は貼り付けでややふんばり気味に外下方にのび、外端部に稜を持つ。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。	外面一緑灰色 内面―にぶい褐色 細砂・長石粒多・雲 母多・スコリア なま焼け
6	S	高台付坏	A (14.3)	高台付坏と思われるが底部以下は欠損。体部は直線的に外上方 にのび、口縁部は外反する。水挽き成形で、体部内面、口縁部内 ・外面は横ナデ調整。	青灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒 良好



第207図 116号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	4	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S	高台付坏(転用硯)	D 9.2	底部と体部の境界はあまい稜を持つ。体部は直線的に外上方にのびる と思われる。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのび内 ・外端部に稜を持つ。水挽き成形で底部は回転箆削り調整。高台内・ 外面は横ナテ調整。	灰白色 細砂・長石微粒・雲 不良 底部内面に墨付着
8	S	蓋	- An To leady	つまみは皿状に近いが中心に尖りを見せる。つまみの接合部付近は回転箆削りにより、明瞭な稜を持つ。水挽き成形で天井頂部は回転箆削り後横ナデ調整と思われる。つまみは横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒多 良好
9	S	蓋	A (15.9)	天井頂部はやや扁平で口縁部は僅かに段をなし、端部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転箆削 り調整。口縁部内・外面と天井部内面は横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒・長 微粒多 普通
10	S	長頸壺	A (8.4)	口縁部は外反して大きく開き、端部はほぼ垂直につまみ出す。 口縁部外端面に稜をもつ。水挽き成形と思われ口縁部内・外面 は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石微粒・針 分 普通

番号	Ē	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	S	長頸壺	A (8.3)	肩の張った体部から頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外 反し、口縁外端部に面をなす。頸部内面に粘土紐巻き上げ痕を残す。頸 部と体部の境界内面に明瞭な接合痕を残す。口頸部内・外面は横ナデ 調整と思われる。体部内面はナテ調整。	青黒色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 ほぼ全体に自然釉
12	Н	甕	A (16.1)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき端部 をほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部 内・外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
13	Н	甕	A (21.1) F 18.4	殆ど胴の張らない体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき、端部は強く外上方につまみ出す。粘土紐積み上げ成形で、体部内面に痕跡を残す。	橙色 砂粒・長石粒 普通
14	Н	甕	C 8.9	底部は平底で体部はやや内彎気味に外上方にのびる。体部外面 は箆ナデ調整と思われる。体部内面はナデ調整。底部内面に指 頭押圧痕を残す。	黄橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
15	砥	石	2.4×1.8 1.5	台形を呈し、全面に使用痕が認められる。一部欠損。小形。	凝灰岩8g

117号竪穴住居跡 (第204図)

調査区 $C2i_0$ 区を中心に確認され、114号竪穴住居跡の南側にあり、重複している。新旧関係は明らかでないが、114号竪穴住居跡が新しいものとみられる。南北3.54m・東西4.36mで、主軸方向N-7°-Eを指す、やや隅の丸い長方形を呈している。

覆土はほとんどみられず、壁も南側で6 cmほど認められるだけである。壁溝は、幅17cm・深さ8 cmで、北壁の竈東側から南壁東半部にかけてと、西壁の一部に認められる。床面は、南壁下から竈に向かって若干傾斜を有し、全体的にやや軟弱である。ピットは南壁中央部直下に1か所認められ、入口の施設に伴うピットとみられる。

竈は、北壁東側寄りにあるが、上部を削平され、焼成部の掘り込みが確認されただけである。壁外へは、37cm程掘り込まれている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦がそれぞれ1片と鉄製品が南東隅から出土している。いずれも床面出土である。

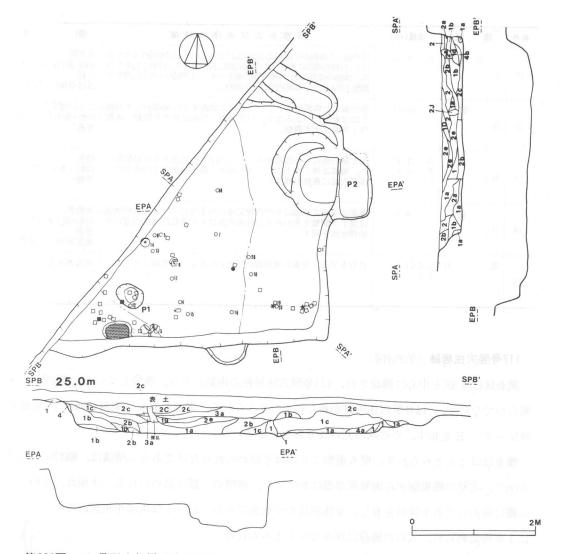
2¢ M

第208図

117号竪穴住居跡出土遺物実測図

117号竪穴住居跡出土遺物観察表(第208図)

番号	種	類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	不明鉄	製品	全長(3.1) 太さ 0.25	断面は円形を呈する。両端部欠損。		



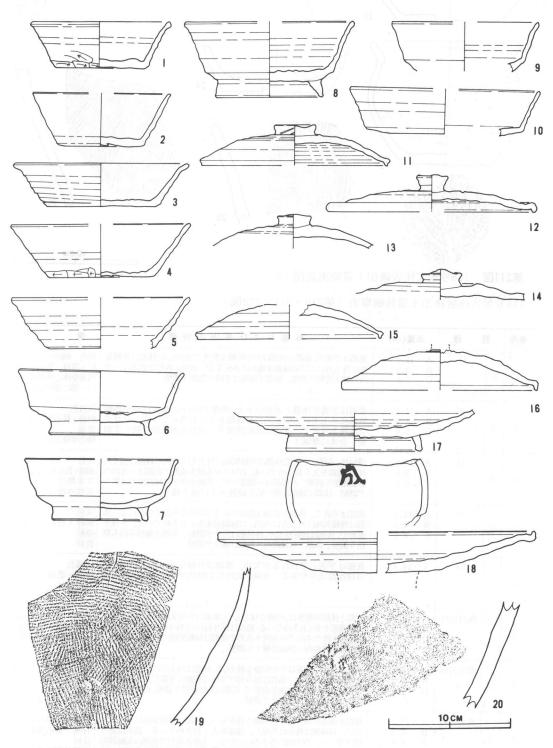
第209回 118号竪穴住居跡実測図

118号竪穴住居跡 (第209図)

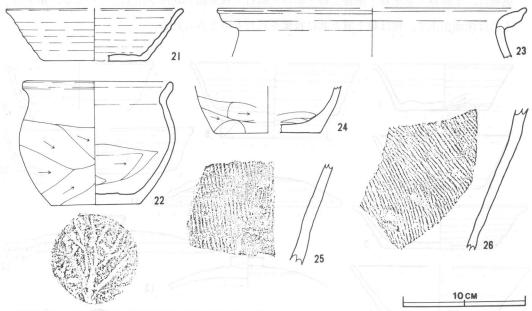
調査区D2b2区を中心に確認され、122号工房跡の西側に位置し、西半分は調査区域外に存在する。南北3.95m・東西4.5m(確認長)で、推定主軸方向N-5°-Wを指す長方形を呈するものとみられる。

覆土は、焼土・炭化粒子・ロームブロックを含む褐色土で、人為的堆積である。特に、北西側に多量の焼土が投棄されている。壁は70度内外の傾斜で立ち上がり、高さ30~40cmである。床面はほぼ平坦で、南壁下から北側にかけての幅約2 mは、十分踏み固められている。南壁下やや西寄りに、 45×30 cmの範囲でロームを盛り、白色粘土を5 cm程貼ったものがある。入口のステップとして使用したものと考えられる。ピットは2 か所で、 P_2 は東壁やや北寄りに、壁外へ張り出し、 92×70 cmの長方形で、深さ40cmを測る。竈は確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が出土しているが、南壁寄りのものは床面出土で、他は焼土層と共に投棄されたものとみられる。



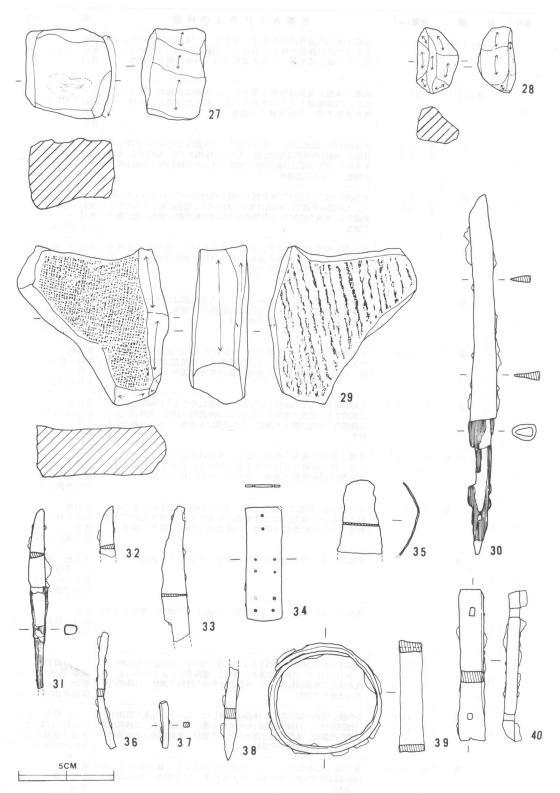
第210図 118号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第211図 118号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

118号竪穴住居跡出土遺物観察表(第210・211・212図)

番号	1	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.0 B 3.9 C 7.2	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気 味に外上方にのび口縁部は僅かに外反する。水挽き成形で底部は一方 向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石微 粒・雲母 普通 内面全体と体部外面 の一部に漆付着
2	S	坏	A (11.1) B 4.4 C 5.8	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれ、体部はやや外傾 気味に外上方にのびる。口縁端部を丸くおさめている。左ロク ロ水挽き成形で、底部は回転箆切り。底部外面を除き横ナデ調 整。全体に摩滅する。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分多 普通 酸化焼成と思われる
3	S	坏	A 13.9 B 3.6 C 8.7	浅い坏。底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は一方向の静止節削り調整。 外周部は一部節ナデ。 内面全体と口縁部外面は横ナテ調整。 体部下端部に深い粘土紐挽き上げ痕を残す。	灰色 細砂・長石粒・雲母多 なま焼け 底部外面に箆記号
4	S	坏	A (14.5) B 4.3 C 8.7	底部は平底で、体部と底部は箆削りにより明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転箆切り。外周部は箆ナテ調整。体部下端部手持ち箆削り調整。体部と口縁部内・外面は横ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
5	S	81坏	A (14.3)	底部は平底と思われるが欠損。体部は外傾気味に外上方にのび口縁端部はやや尖る。水挽き成形で、口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰褐色 細砂・雲母多 なま焼け
6	S	高台付坏	A 13.2 B 5.3 D 8.3	底部と体部の境界は、明瞭な稜をもつ。体部は外反気味に外上方にのび、 口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのび、内・外端 部に稜を持つ。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆削り調整。 口縁部と 体部及び高台内・外面は横ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒 ・長石微粒 普通 ロ縁部と体部内面に 煤付着
7	S	高台付坏	A (12.2) B 5.0 D 7.6	底部と体部の境界はやや明瞭な稜をもち、体部は外上方にのび口縁端部 は僅かに外反する。高台は貼り付けではば垂直に下降し、外端部に稜 をもつ。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転節削り調整。口縁部と体部 及び高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 ・長石微粒 普通 全体に漆付着
8	S	高台付坏	A (13.3) B 6.2 D 8.8	底部と体部の境界はやや明瞭な稜をもち、体部は外傾気味に外上方に のび、口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り 付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。水挽き成形で底部は回転箆削 り調整。口縁部内・外面、体部外面、高台内・外面は横ナテ調整。	灰色 砂粒・長石粒 石英・長石微粒多 良好 底部外面に漆付着



第212図 118号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	S	高台付坏	A 11.9	底部と体部の境界はややあまい稜をもつ。体部は外傾気味に外上方にのび口縁部で僅かに外反し、口縁端部を丸くおさめている。 貼り付け高台は欠損。水挽き成形で内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・鉄分 普通
10	S	高台付坏	A (15.4)	底部と体部の境界は明瞭な稜を持つ。体部は直線的に外上方に のび、口縁端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水 挽き成形で内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
11	S	蓋	A (15.2) B 3.3	天井部中央に皿状に近いつまみが付く。天井部はなだらかに下降し天 井部と口縁部の境界は明瞭な稜をもち、口縁部は下方に屈曲する。水挽 き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。つまみと口縁部内・外面は横ナ デ調整。つまみに箆傷痕。	灰色 細砂・長石微粒 良好
12	S	蓋	A (16.7) B 3.0	天井部中央にやや扁平で天井部との接合部付近がくびれるつまみが付く。天井部は平坦で、口縁部は僅かに段をなし、端部は丸く下方に短く屈曲する。水挽き成形で、天井部外面中位は回転篦削り調整。他は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 普通 天井部内面に煤付着
13	S.	蓋		天井部にやや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯びる。右ロクロ水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調整。つまみと天井部内面は横ナデ調整。	褐灰色 細砂・長石 粒 普通 つまみと天井部外面 に煤付着
14	S	蓋		天井部にボタン状のつまみが付く。天井頂部は凹ませる。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。つまみは横ナ デ調整。天井部外面に指頭痕を残す。	灰白色 砂粒・長石 粒・長石微粒 不良 つまみと天井部内・ 外面に煤付着
15	S	蓋	A (14.8)	天井部はなだらかに下降し、口縁部は下方向に屈曲し、端部はや や尖る。つまみは欠損。水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調 整。口縁部内・外面と天井部内面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒 不良 天井部内面に煤か
16	S	蓋	A (15.8)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや丸く口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調整。天井部内面と口縁部内・外面は横ナテ調整。天井頂部に左渦巻のつまみの接合痕を残す。	灰白色 細砂·長石微粒·雲母 不良
17	S	台付盤	D 10.9	底部と体部の境界は明瞭でなく、体部はゆるやかに外上方にの びる。高台は貼り付けで外下方にのびる。右ロクロ水挽き成形 で底部は回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・石英 粒・雲母 不良 底部外面に墨書
18	S	高 盤	A (25.7)	受け部のみ。体部は外上方に大きく開き、口縁部は僅かに下方向に 段をなし、口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。水挽き成形で体部 外面に一部回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分 普通 酸化焼成と思われる
19	S	粪		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。	灰褐色 細砂・長石 粒 良好 SI109-12と同一 個体, 内面に漆付着
20	S	甕		体部の一部。外面は叩き目調整。内面はナデ調整。摩滅が進行。	灰色 細砂・長石粒・雲母 不良
21	Н	坏	A (14.2) B 4.2 C (8.3)	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。 水挽き成形で底部回転箆切り。 外周部は手持ち箆削り調整。 口縁部内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 細砂・長石粒・雲母多 普通 体部外面に煤付着
22	Н	甕	A 11.6 B 10.2 C 7.2	小形装。平底の底部から、体部は内彎しつつ立ち上がり丸く屈曲する口縁部が付く。口縁外端部にやや丸味を帯びた面をなす。口縁部外面は箆削り調整。体部内面は箆ナデとナデ調整。底部内面はナテ調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・ 長石粒・石英・雲母 普通 底部外面に木 葉痕,体部外面に煤付着
23	Н	甕	A (24.8)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口 縁端部は外反気味に外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナ だ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口頸部外面に煤付着

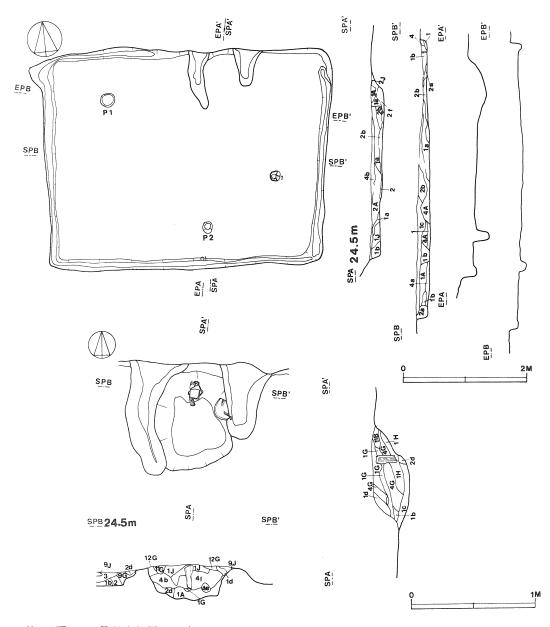
番号	ş	器	種	;	去量(cm)				形	態	およて	び 手 法	の特徴		備	考
24	Ĥ		甕	С	(8.5)			平底で1 面全体に				つ立ち上	がる。体部门	下位は箆削り調	灰褐色 砂粒・長石 ・雲母 底部外面に	普通
25	Н		甕			体部		一部。	外面に	ま平名	行叩き	目調整。	内面は箆ナ	デ及びナデ ·	橙色 細砂・長石 普通	粒・雲母
26	Н		獲			体部	部の-	一部。夕	外面!	は平1	行叩き	目調整。	内面はナデ	調整。	にぶい橙色 細砂・長石 普通	粒・雲母
番号	種	類	法量(cm)	形態	Ø	特	徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	形態	の特徴	備考
27	砥	石	4.6× 3.4	4.5	方形を呈す 一面のみん られる。		用痕か	が認め		文岩 .5g	35	短冊形鉄製品	全長(4.2)幅 1.9		折れ曲ってい 部を欠損。	
28	砥	石	3.5× 1.75	2.2	全面に使用る。	月痕が	が認め	りられ	砂 15.	岩 5 g	36 5 38	釘 か		36は全長6.3 太さ0.4cm。	3cm,	
29		石 月砥)		6.6	一側面のみめられる。	みに何	吏用痕	夏が認	瓦	製	39	環状銅製品	外法5.9 内法4.9		錆がみられる ごある。 合わせ る。	
30 \$ 33	刀	子			30は完形品 刃幅1.3cm 32は切先音 33は刀子だ	,刃長 ß。					40	不 明 鉄製品	全長7.9 幅 1.3 厚さ0.6	上下二か所にをもつ。	に長方形の孔	
34	小	札	全長6幅 1		完形品。 上部に二個 に四個づつ									200000000000000000000000000000000000000		

119号竪穴住居跡 (第213図)

調査区D2 a8区を中心に確認され、111号竪穴住居跡の南側に位置している。南北3.54m・東西 4.53mを測り、主軸方向N-6°-Eを指すやや隅の丸い長方形を呈している。

覆土は、東半部が褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積で、西半部がロームブロックを含む黒褐色土を呈し、人為的な堆積とみられる。壁は全体的に低く14cm前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁東側を除く壁下には、幅15cm・深さ6cmの壁溝が回る。床面は中央部がやや凹み、北側へ向かってやや低くなるが、全体的に良く踏み固められている。ピットは北東隅と、南壁近くのほぼ中央部の2か所検出され、深さは11~25cmを測る。

竈は、北壁やや東側寄りにあり、長さ1.7m・幅2.1m・焚口幅0.5mで、壁外へは掘り込まれていない。袖部は、山砂によって構築されている。焼成部は床面より約10cm低く、35度の傾斜で煙道へ続く。奥壁寄りに長さ17cm・幅7cmの割石を立て、上部に土器片を数片重ね、支脚としている。遺物は、土師器・須恵器・瓦・鉄製品が若干床面から出土している。

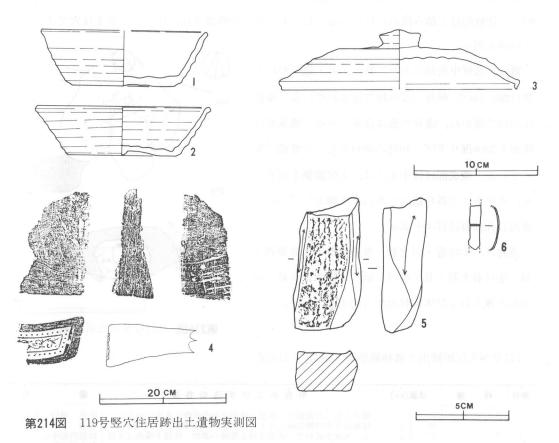


第213図 119号竪穴住居跡・竈実測図

119号竪穴住居跡出土遺物観察表(第214図)

番号	8	* 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.8 B 4.0 C 8.5	底部はやや盛り上がった平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切りで無調整。 口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒多・雲 母多 良好
2	S	坏	A (13.1) B 4.4 C 8.1	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのびる。口縁端部を丸くおさめている。左ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切りで無調整。底部内面と体部内面及び口縁内・外面は横ナデ調整。全体に摩滅が進行。	灰色 細砂・長石大粒多・ 鉄分多 普通

番号	器	種	7	去量(cm)		形態は	3 よて	が 手 法	の特徴		備	考
3	S	蓋	A B	(18.9) 4.8	天井部中央に,原 天井部の境界は 転箆削り後かる な作り。	明瞭な稜をい横ナデ、	をもつ。 天井音	右ロクロ	水挽き成形で 転箆削り調整	",天井頂部は回	灰色 細砂 粒・鉄分 普通 天井部内面 付着	・長石微に一部漆
4	軒	平 瓦	全長厚さ		顎は無段式で、 凸・凹面と側i				文,外区はヨ		灰色 砂粒・長石 竪緻	
番号	種 数	法量(cm)	形態	の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態(の特徴	備考
5	砥 石(転用砥	(5) 2.0		められる。	みに使用痕が認	瓦 製	6	リング	外径2.3 厚さ0.05	ほぼ%のみす		(# 8) v H



120号竪穴住居跡 (第206図)

調査区D2a6区を中心に確認され、116号竪穴住居跡によって東半部が失われている。南北4.0m で、東西は1.4m だけ確認できる。推定主軸方向はN-5°-Wを指す。

覆土は褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ12cmでやや外上方へ向けて立ち上がる。北壁下のみ幅18cm・深さ6cmの壁溝が存在する。床面はほぼ平坦で、やや軟弱である。ピットは北西

隅の2か所で,深さは30cm内外である。

遺物は皆無に近く, 西壁下から鉄滓1点を出土したのみである。

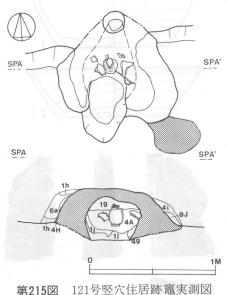
121号竪穴住居跡 (第215・216図)

調査区D2b5区を中心に確認され、112号竪穴住居跡の南に位置している。南北4.29m・東西4.79 mを測り、主軸方向 N-6°-Wを指す隅丸方形を呈している。南西部で122号工房跡と重複し、 同跡より新しい。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、おおむね自然堆積であるが、北西部にロームブロックを 多量に含む層が認められ、人為的堆積とみられる。壁は、70度内外の傾斜をもって外上方へ立ち トがり、南壁で42~50cm・北壁で30cmの高さを測る。東壁南半部の壁下に、幅14cm・深さ5cmの 壁溝が存在する。床面は、南壁下から竈前面にかけて5度前後の傾斜で低くなるほかは、ほぼ平 坦で、比較的良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、P1~P4が主柱穴で深さは25 ~54cmを測る。

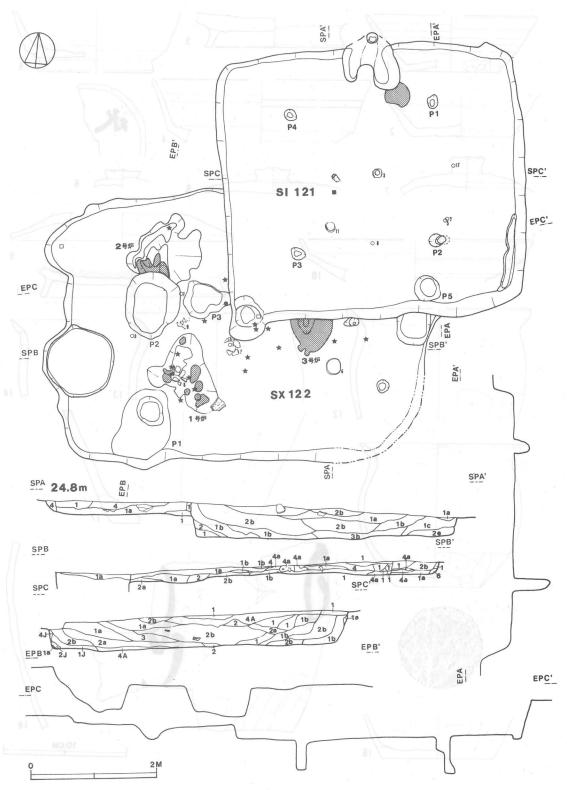
竈は、北壁中央部にあり、長さ1 m・幅0.93 m・ 焚口幅0.3mで、壁外へ27cm掘り込まれている。袖部 は山砂で築かれ、遺存状態は良好である。 焼成部は 床面を20cm掘り下げ、40度の傾斜をもって煙道に至 っている。焼成部ほぼ中央には、土師器甕を倒立さ せ、その上に土器片数片を重ね、支脚としている。 煙出し孔は直径17cmを測る。

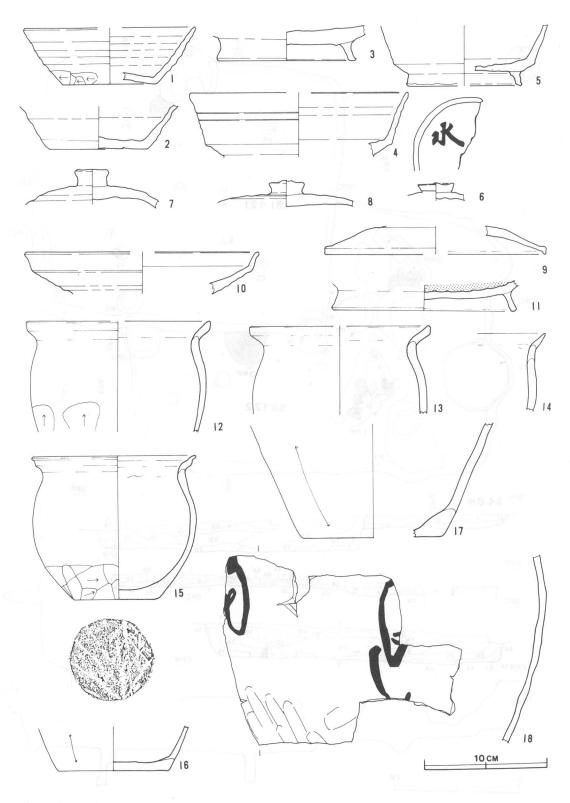
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・人面墨書土 器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄滓が少量、中 央部の覆土および床面付近から出土している。



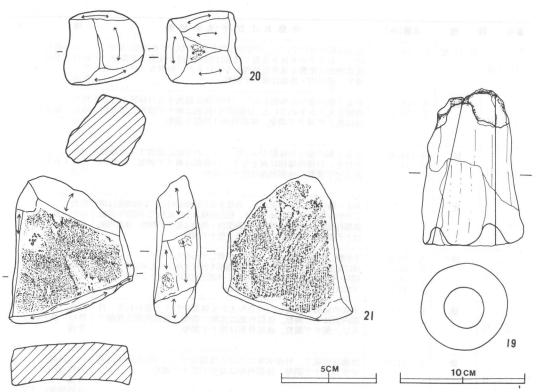
121号竪穴住居跡出土遺物観察表(第217·218図)

番号	II.	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (13.7) B 4.6 C (7.5)	盛り上がった底部で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、 体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめてい る。水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。体部下端部は手持 ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 普通 体部内面中位から底 部内面に漆付着
0 434	S	坏	C 7.8	底部は平底で、体部と底部は箆削りによる明瞭な角度で分かれ、 体部はやや内彎気味に外上方にのびる。水挽き成形で、底部は回 転箆切り後一方向の静止箆削り調整。底部内面と体部内・外面は 横ナデ調整。	灰色 細砂·長石微粒·雲母 普通
3	S	高台付坏	D 11.3	底部は厚く作る。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にの び、外端部にややあまい稜を作る。右ロクロ水挽き成形で底部 は回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部内面全体に漆付着





第217図 121号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第218図 121号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

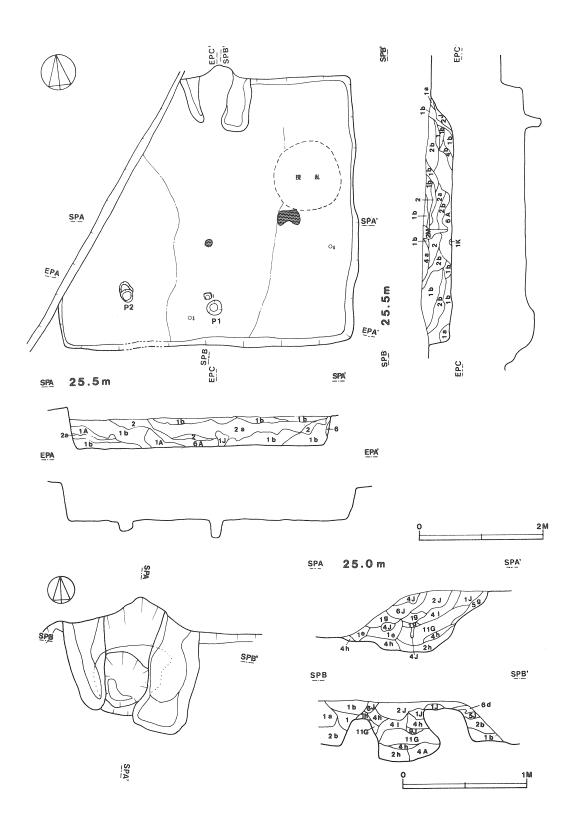
番号	4	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
4	S	高台付坏	A (17.5)	大形坏と思われる。底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部をやや尖り気味におさめている。 貼り付け高台は欠損。水挽き成形で、口縁部内・外面は横ナデ調整。体 部外面に二条の浅い沈線を見る。	暗青灰色 砂粒·長石粒多 石微粒多 良好	5 · 長
5	S	高台付坏	D 9.3	底部と体部の境界はやや明瞭で体部はやや内彎気味に外上方にのびる。 高台は貼り付けで外下方にのび、外端部に不整形な稜を持つ。水挽き 成形で底部は回転箆切り。体部内・外面と高台内・外面及び底部外面 の一部は横ナデ調整。	暗オリーブ灰色 砂粒・長石粒・ 微粒多 普通 底部外面に墨書	長石
6	S	蓋		やや低いつまみが天井部中央に付く。右ロクロ水挽き成形で、つまみは横ナデ調整、天井部は回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石微粒 良好	Ĺ
7	S	蓋		天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を 帯びる。右ロクロ水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調整。つ まみは横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・礫・長石 普通 天井部内面に漆	1
8	S	蓋		天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部はやや平坦。水 挽き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。天井部内面は横ナデ調 整か。	灰色 細砂・長石粒 良好	
9	S	蓋	A (17.8)	天井頂部は扁平で天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、 口縁部は下方に屈曲する。つまみが付くと思われるが欠損。水 挽き成形で,天井頂部は回転箆削り調整。天井部内・外面と口縁 部内・外面は横ナデ調整。	灰褐色 細砂・ 粒 なま焼け 天井部内・外面 付着	
10	S	高 坏	A (18.8)	体部は大きく開く。体部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持ち、 口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめてい る。脚部は欠損。水挽き成形で体部内面と口縁部内・外面横ナ デ調整。	青灰色 細砂・長石粒・ 微粒・石英 良好	長石

番号	ş	E E	種	ž	去量(ci	n)		形態	5 2 7	が手 法	の特徴	entropy to Author to the control to	備	考
11	Н	台	付 盤	D	14.9		高台は貼り付 持つ。右ロク 底部内面は箆 残す。高台内	ロ水挽き 磨き後黒	成形で 色処理:	底部は回! がなされ	転箆削り後	黄ナデ調整。	にぶい橙色 細砂・雲母 ア 普通	
12	Н		甕		(14.6 14.1)	かるく胴の張 端部を丸くお 面は箆ナデ後	さめてい	る。口頸	部内・外	面は横ナデ		橙色 砂粒・長石 普通	拉多
13	Н		甕		(14.4 14.1)	かるく胴の張 が付き,口縁 面はナデ調整	外端部に	面をなっ	す。口頸	部は横ナデ		橙色 砂粒・長石 普通	拉多
14	Н		甕				あまり胴の張り くやや尖り気服 体部外面に粘っ はナデ調整。な	*におさめ [*] 上紐痕を残 [*]	ている。 す。口頸	粘土紐積 部内・外	み上げ成形で 面は横ナデ調	", 頸部内·外面,	橙色 砂粒・長石 普通	粒・雲母
15	Н		甕	A B C F	13.0 11.7 6.2 13.1		小形甕。平底の 状に屈曲する「 部内・外面は, 木 下位は箆削り言	1縁部が付き 貴ナデ調整。	き, 口縁 体部内	端部を外.]・外面と	反気味につま	み出す。口頸	明赤褐色 砂粒・長石 良好 底部外面に	
16	Н		甕	С	9.0		平底の底部で 部内面はナデ 及び一部ナデ	調整。体	部外面に	は箆削り	調整。底部區		橙色 砂粒・長石 普通	粒多
17	Н		甕	С	(11.2))	底部は平底で ナデ及びナデ						にぶい橙色 砂粒・長石 普通 底部外面に	拉多·雲母
18	Н		甕				体部の一部。 調整。	体部内面	は箆ナ	デ調整。化	本部外面は糸	従位の箆ナデ	にぶい褐色 粒・長石微粒 通 体部外面 体部内面に炭	・雲母 普 に人面墨書
番号	種	類	法量(cm)	形	態	の 特 徽	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	の特徴	備考
19	KK		全長(9 外径6 孔径2	.2		外面	先端部は細く 面は多方向の箆	先端部 は少 し の 鉄付 着	21	砥 石 (転用砥)	7.7×6.3 1.8	瓦面を除き全が認められる		瓦 製
20	砥	石	4.1×3.5	3.8	二側i認め		ないて使用痕が う。	砂 岩 85 g						material and an age of the Application of the Appli

124号竪穴住居跡 (第219図)

調査区D2e1区を中心に確認され、131号竪穴住居跡の西側に位置し、北西部は調査区域外に存在する。南北4.35m・東西4.25mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す方形を呈している。

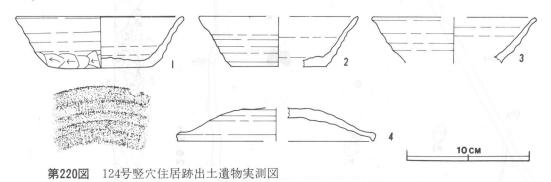
覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、ほとんどの層に炭化粒子を含む。また、中・下層にはロームブロックを含む層があり、人為的堆積とみられる層が多い。壁は18~30cmの高さを測り、ほば垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、南壁下から竈前面にかけての幅1.6mが良く踏み固められており、その他はやや軟弱である。床面ほぼ中央部には、粘土塊が2か所認められる。ピットは南壁寄りの2か所で、深さは20cmを測る。



第219図 124号竪穴住居跡・竈実測図

竈は、北壁ほぼ中央部にあり、長さ0.96m・幅1.07m・焚口部幅0.3mで、壁外へ25cm程掘り込まれている。袖部は山砂で構築され、遺存状態は良好である。焚口部は床面より13cm低く、45度の傾斜で煙道部へ続く。火床には、10数cmの焼土が堆積している。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・鉄滓が極少量出土しただけで、ほとんど床面から出土している。



124号竪穴住居跡出土遺物観察表(第220図)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.5 B 4.3 C 8.5	底部は平底で体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部はやや内彎 気味に外上方にのび、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は多方向の静止箆削り調整。体部下端部 は手持ち箆削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母多 不良 体部外面に線刻
2 .	S	坏	A (12.9) B 4.1 C (7.8)	底部は平底で体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は丁寧な回転箆削り調整。体部下端部は回転箆削り調整と思われる。口縁部内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石微粒 やや精良 良好
3	S	坏	A (13.2)	底部は平底と思われるが欠損。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・礫・長石粒多 普通
4	S	蓋	A (15.9)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸味を帯び、天井部と口 縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽 き成形で天井頂部から天井部中位にかけて右ロクロ使用の回転箆削り 調整。口縁部内・外面は横ナテ調整。	オリーブ灰色 細砂・礫・長石粒 普通 天井部外面にベンガ ラ付着

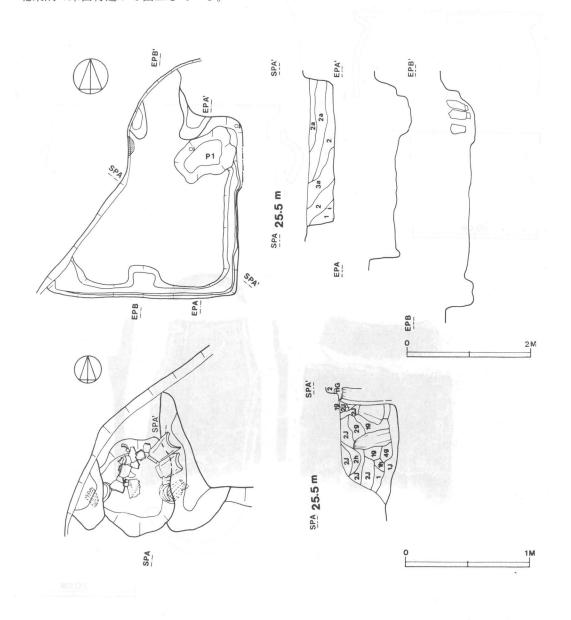
125号竪穴住居跡 (第221図)

調査区D1 f6区を中心に確認され、西半部は調査区域外に存在する。南側には、4 号溝が東西に走っている。南北2.92m・東西3.88mを測り、主軸方向N-2°-Eを指す方形を呈している。

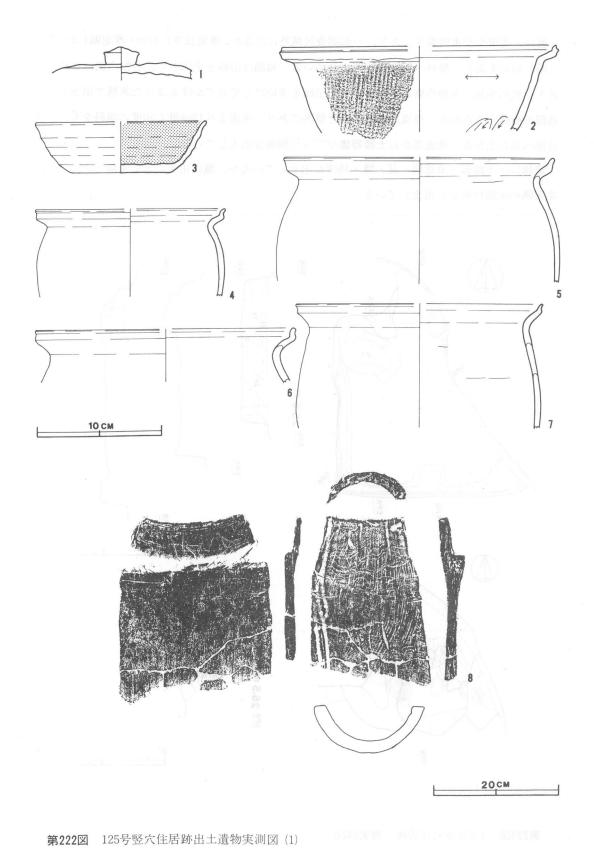
覆土は、暗褐色土の自然堆積で、北西方から流入している。壁は高さ42cmを測り、垂直に立ち上がる。壁下には幅21cm・深さ7cm、断面U字形の壁溝が回っている。南壁中央部では幅47cmと広がり、ピット状を呈している。床面は南壁下から北側に向かって低く傾斜するが、全体的に良く踏み固められている。ピットは、北東隅に96×65cm・深さ23cmの楕円形のものが存在するほかは認められない。

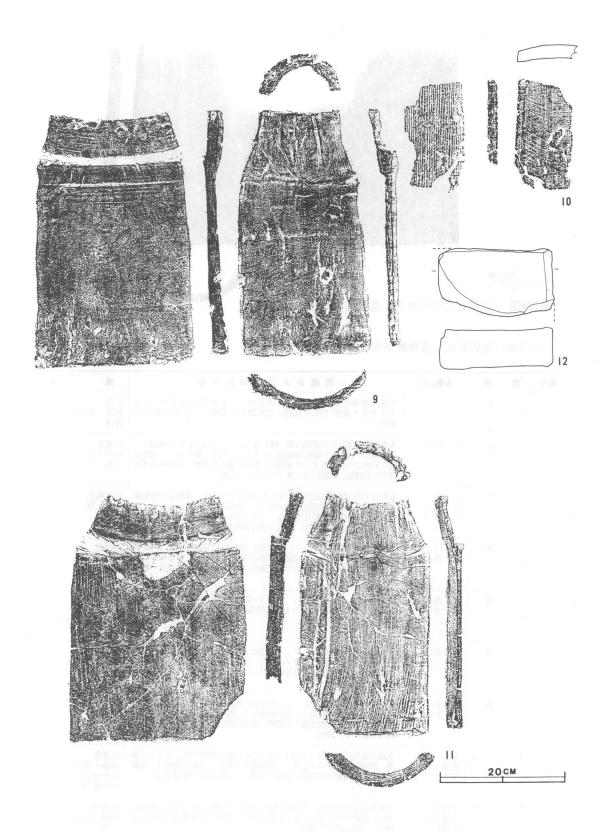
竈は、北壁やや東側寄りにあり、一部調査区域外に出るが、推定長さ1.17m・推定幅1.2m・焚口幅0.53mを測り、壁外へ1m掘り込まれている。袖部は山砂を主体とし、右袖内側に3枚の丸瓦と1枚の平瓦、左袖内側に1枚の丸瓦が玉縁を下位にして立てかけるようた状態で出土した。袖部の補強とみられる。焼成部はほとんど壁外にあり、床面より13cm低く50度の傾斜をもって煙道部へ立ち上がる。焼成部から土師器甕が二~三個体分出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・塼・鉄滓が出土しているが、竈内出土のものを除くと、大部分 北東隅の床面付近から出土している。

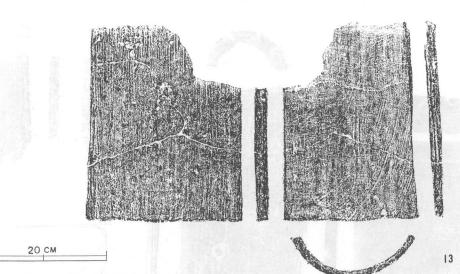


第221図 125号竪穴住居跡・竈実測図





第223図 125号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第224図 125号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

125号竪穴住居跡出土遺物観察表(第222・223・224図)

番号	큐	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	蓋	*	天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井頂部は扁平。右ロクロ水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調整。つまみは横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 普通
2	S	飯	A (22.0)	大きく開く体部から頸部内面に稜を持ち、「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部を持つ。口縁部外端面に段をなし、明瞭な稜を持つ。端部は尖り気味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面は横ナデ及びナデ調整。	灰黄色 細砂・長石・雲母 不良
3	Н	坏	A 13.5 B 4.0 C 8.1	底部は平底で体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部は内彎気味に外上方にのび口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は回転箆切り後、二方向からの静止箆削り調整。体部下端部手持ち箆削り調整。内面全体は箆磨き後黒色処理。	淡赤褐色 砂粒・礫・長石粒 普通
4	Н	甕	A (15.2) F 15.0	丸く胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁 部 外端面に浅い溝を巡らし、端部を外反気味につまみ出す。口縁部内・外 面は横ナテ調整。体部内面はナテ調整。体部外面は篦ナテ調整。全体 に薄手作り。	赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
5	Н	甕	A (21.5) F 22.6	丸く胴のはった体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、 端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体 部内・外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・ 長石粒・雲母 普通 口頸部・体部外面に 煤付着
6	Н	甕	A (20.8)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き, 口縁部をほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。 体部内面はナデ調整。体部外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・スコ リア・雲母 普通
7	Н	甕	A (19.7) F 19.6	やや胴のはった体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外反気味につまみ出す。粘土紐積み上げ成形で体部内面に痕跡を残す。口頸部内・外面は横ナテ調整。体部内面は箆ナデ及びナテ調整。体部外面はナテ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
8	丸	瓦 20年	全長 (26.8) 狭端 17.6 厚さ 2.0	王縁付丸瓦で,中位より広端にかけ欠損。凸面は箆削り後,丁寧なナデ調整、凹面は、布目の上より、一部箆削りを施す。側面と端面は、箆削り調整で、側面上下端部に面取りを施す。凸面はやや摩滅する。	灰黄色 細砂・雲母・礫 やや精良 やや軟質
9	丸	瓦	全長38.0 狭端13.0 広端19.0 厚さ 1.8	玉縁付丸瓦の完形品。凸面は箆削り調整で,凹面は布目を残し,端面付近に一部箆削りが見られる。側面は箆ナテ調整で上下端部に面取りを施す。端面は箆削り調整。	灰黄色 細砂・長石粒・雲母 ・礫 やや硬質

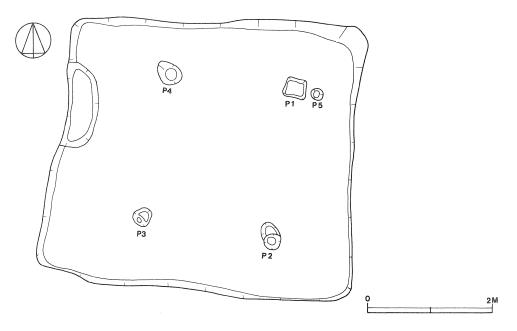
番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
10	平	瓦	全長 (15.0)	凸面は縦位の縄目叩きを施し、凹面は布目で粘土クズを残す。 側面は箆削り調調。全体に摩滅する。	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・雪 軟質	雲母
11	丸	瓦	全長 37.0 狭端 (13.2) 広端 (17.8) 厚さ 2.4	玉縁付丸瓦。凸面は箆削りで、玉縁は横位の箆削り。後にナデ調整。凹面は,布目を残す。側面は箆ナデ調整で、上下端部に面取りを施す。	にぶい黄橙色 細砂・長石粒・雪 多 やや硬質	雲母
12	t	· ·	全長(18.4) 厚さ 6.0	残存五面は箆ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒 軟質	
13	丸	瓦	全長 (31.2) 広端 17.6 厚さ 1.1	玉縁は欠損。凸面は縦位の箆削り調整。凹面は布目を残す。側面は箆削り調整で上下端部に面取りを施す。端面は箆削り調整。 凸面はやや摩滅する。全体に薄手作り。	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・雲 やや軟質	重母

127号竪穴住居跡(第225図)

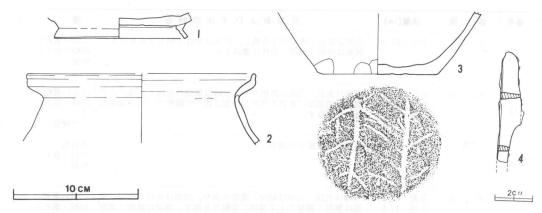
調査区B4d9区を中心に確認され、45号竪穴住居跡の東に位置している。南北4.24m・東西4.8mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す長方形を呈している。

壁はほとんど確認されず、北東部は床面も若干削平されている。ピットは北東コーナー部に 2 か 所、他の 3 コーナーに各 1 か所存在する。 $P_2 \cdot P_3$ は、 2 本の重複がみられる。深さは25cm前後を測る。竈は 確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・鉄製品が少量出土している。



第225図 127号竪穴住居跡実測図



第226図 127号竪穴住居跡出土遺物実測図

127号竪穴住居跡出土遺物観察表(第226図)

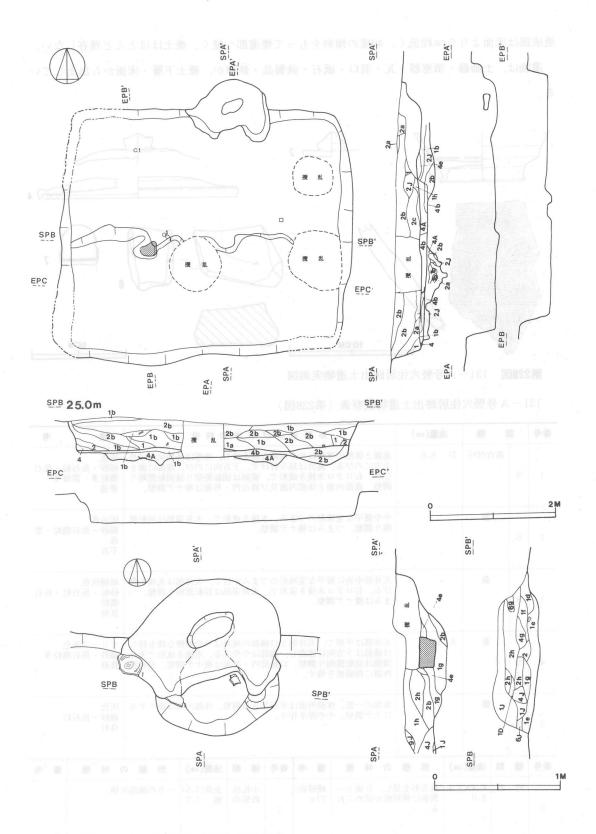
番号	Ę.	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	高台付坏	D 10.7	貼り付け高台で一旦内傾するが強く外下方にのび、外端部に稜 を持つ。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。 底部内面と高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 細砂 粒多・長石微 普通 底部内面に鉄	粒
2	Н	甕	A (18.1)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒 普通	
3	Н	甕	C 9.6	平底の底部。体部内・外面は箆ナデ及びナデ調整。底部内面は 箆削り及びナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通 底部外面に木	
4	刀	子	全長 (5.9) 刃幅 1.1 刃長 (3.9)	刃部と茎部との境に関を有する。茎部欠損。		

131-A号竪穴住居跡 (第227·229図)

調査区D2 e2区を中心に確認され、124号竪穴住居跡の東に位置している。南北4.05m・東西4.65mを測り、主軸方向N-5°ーEを指す隅丸方形を呈している。

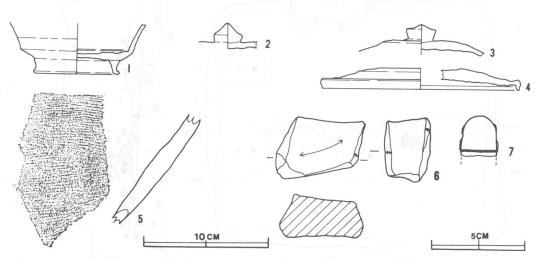
覆土は、全体的に褐色・暗褐色土の自然堆積であるが、北西部に炭化粒子・ロームブロックを含む人為的な堆積とみられる層がある。壁は南壁で高さ45cm、他は高さ30~35cmを測り、80度内外の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は中央部で段をなし、北半部が6cm程高くなるほかはほぼ平坦で、やや軟弱である。中央部やや西壁寄りに焼土があり、周辺に木炭片が認められる。ピットは $P_1 \cdot P_2 \cdot P_6 \cdot P_7$ の4か所確認され、深さは30cm前後を測る。

竈は、北壁中央部やや東側寄りにあり、長さ1.23m・幅1.2m・焚口幅0.5mを測り、壁外へ0.5m程掘り込まれている。袖部は、下層に砂質土、上層に山砂を用いて構築されているが、短いものである。



第227図 131-A号竪穴住居跡・竈実測図

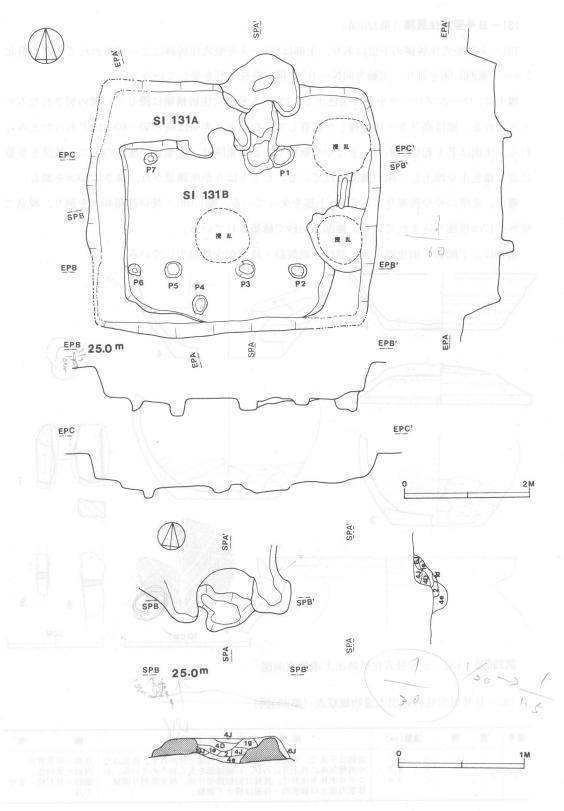
焼成部は床面より5cm程低く、40度の傾斜をもって煙道部へ続く。焼土はほとんど残存しない。 遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、覆土下層・床面から出土している。



第228図 131-A号竪穴住居跡出土遺物実測図

131-A号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第228図)

番号	1	器種	ż	法量(cm)	dt	形態	र द	び手法	の特徴		備	考
1	S	高台付加	不 D	6.8	底部と体部の 上方にのびる なす。右ロク 調整。底部内	。高台はロ水挽き	貼り付成形で	けで,下,底部は	方向にのび,回転箆切り?	端部に面を	細砂・長石	
2	S	蓋	En .a.		やや扁平な宝削り調整。つ				形で、天井」	頁部は回転箆	灰白色 細砂・長石 母 不良	で微粒・雲
3	S	蓋		* / "	天井部中央に びる。右ロク まみは横ナデ	ロ水挽き	珠形の成形で、	つまみが 天井頂	付く。天井部 部は回転箆肖	部は丸味を帯 削り調整。つ	暗緑灰色 砂粒・長石 微粒 良好	が、長石
4	S	蓋	A	15.7	天井部は平坦 口縁部は下方 頂部は回転箆 外面に指頭痕	句に屈曲削り調整。	し,端	部はやや	尖る。水挽き	成形で天井	細砂・長石	
5	S	甕		(B)	体部の一部。位がまた。			叩き目調整	整。体部内面	īは箆ナデ及	灰色 細砂・長石 良好	粒
番号	種	類 法量	(cm)	形態	の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態	の特徴	備考
6	砥	石 4.4 2.0			呈し,片面と一 用痕が認められ	硬砂岩 79 g	7	小札状鉄製品	全長(3.5)幅 1.7	一方の端部	欠損。	



第229図 131-A号竪穴住居跡、131-B号竪穴住居跡・竈実測図

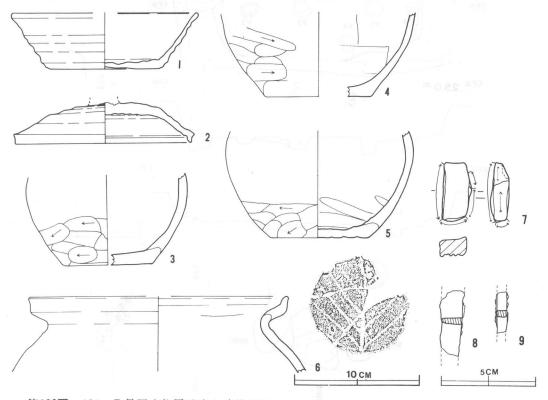
131-B号竪穴住居跡 (第229図)

131-A号竪穴住居跡の下位にあり、上部は131-A号竪穴住居跡によって失われている。南北 2.9m・東西3.56を測り、主軸方向N-0°を指す略長方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、131-A号竪穴住居構築に際して、埋め戻されたものとみられる。壁は高さ5~10cm程しか残存していないが、本来は高さ50~60cmほどあったとみられる。床面は若干起伏があり、またやや軟弱である南東隅は、土壙状の掘方の上に、鉄滓を多量に含む褐色土を埋土して床が構築されている。ピットは3か所確認され、深さは20cmを測る。

竈は、北壁のやや西寄りにあるが、上部を失っている。幅1.0m・焚口部幅40cmを測り、現状で壁外へ17cm程掘り込まれている。袖部は山砂で構築されている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が少量出土している。

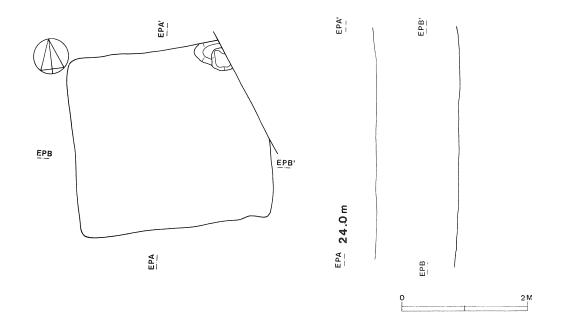


第230回 131-B号竪穴住居跡出土遺物実測図

131-B号竪穴住居跡出土遺物観察表(第230図)

番号	12	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 14.7 B 4.5 C 9.4	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部はや や内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右 ロクロ水挽き成形で、底部は回転節切り後、静止節削り調整。 体部内面と口縁部内・外面は横ナデ調整。		色

番号	Ę.	뚬	種	;	去量(cm)				形	態は	ゔよて	ド 手 法	の特徴			備	i		考	
2	S		蓋	A 1	4.0	持形	っ。ロ	1縁部は 5井頂部	下方	句に属	出曲し,	端部はや	部の境界は錫 や尖る。右ロ 中位から口縁	クロ水	挽き成	灰色 細砂粒良好	長石	ī粒·	長石	
3	Н		춏		(7.0) 12.8	形の及び	の体部 グナラ	部を形成	成す。 体部	ると	思われる	る。底部	つつ立ち上z 内面と体部F 、底部外面に	内面は1	泡ナデ	砂粒	橙色 ・長石 ・雲母		スコ	
4	Н		甕	С	(8.5)	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がる。体部内面は箆ナ デ後ナデ調整。体部外面は箆削り調整。									は箆ナ	ト にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕				
5	Н		甕		7.8 5.0	底部は平底で体部は内彎しつつ立ち上がり, 球形の体部を形成する。底部内面はナデ調整。体部内・外面は箆ナデ及びナデ調整。体部下位は箆削り調整。										砂粒 普通	い褐色 ・長石 外面に	粒・		
6	Н		甕	А	(20.6)	端音	串をタ		こつま	まみと			こ屈曲する『 ・外面は横ナ				い橙色・長石	•		
番号	種	類	法量(cm)	形態	Ø	特	徴	備	考	番号	種 類	法量(cm)	形	態の	り特	徴	備	考	
7	砥	石	3.1× 0.8	1.5	長方形を与 を除き,全 められる。 形。	面に	使用症	良が認	挺历 0.9		9	鏃	2.2×0.6 0.4	鏃の調	茎か。 郡欠損。					
8	刀∃	ごか	3.4× 0.2~		両端部欠損															



第231図 132号竪穴住居跡実測図

132号竪穴住居跡 (第231図)

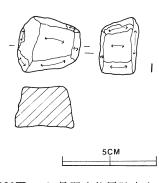
調査区 $C3f_1$ 区を中心に確認され、108号竪穴住居跡の北東方に位置するが、上部を削平され、また北東部は現道路によって失われ、全容は明らかでない。規模は、推定で東西3.12m・南北2.8mを測り、推定主軸方向N-1°-Eを指す略方形を呈するものとみられる。 覆土・壁・床面については明らかでない。

竈は、北壁やや東寄りに焼土がみられることから、その付近に 存在したものと思われる。

遺物は、土師器・砥石である。

132号竪穴住居跡出土遺物観察表(第232図)

番号	種	類	法量(cm)	形	態	Ø	特	徴	備	考
1	砥	石	3.3×2.9 2.0		5二百	百を関	良いて	自然面 て使用	鉄 着 硬 29 g	少岩



第232図 132号竪穴住居跡出土 遺物実測図

133号竪穴住居跡(第233図)

調査区 D2 e4 区を中心に確認され、131号竪穴住居跡の東に位置している。南北3.77 m・東西4.33 mを測り、主軸方向 N-0°を指す隅丸長方形を呈している。

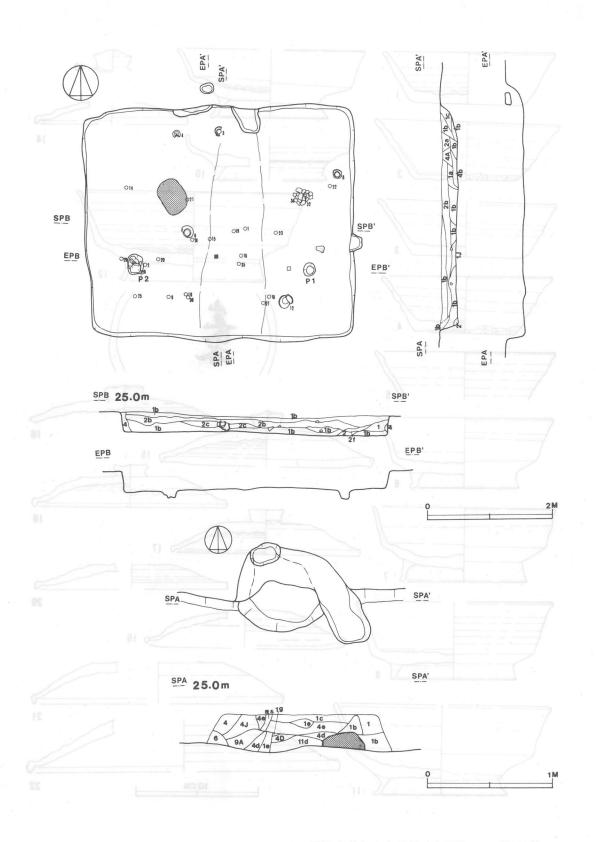
覆土は、ロームブロック・炭化粒子を少量含む褐色・暗褐色土を主体とし、おおむね自然堆積とみられるが、北側に一部人為的堆積とみられる層がある。壁は高さ16cmを測り、87度の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は若干起伏を有し、南壁下から竈前面にかけての幅1.05mが良く踏み固められている。他はやや軟弱である。中央部やや西寄りに57×45cmの砂のブロックが存在する。ピットは2か所で、深さは15cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、竈の軸線は住居跡の主軸方向と異なり、 $N-20^{\circ}-W$ を指す。西側袖部は失われているが、壁外へ41cm程掘り込まれ、長さ 1 mを測る。袖部は山砂によって構築されている。焼成部は床面とほぼ同じレベルで、ゆるやかに煙道へ続く。

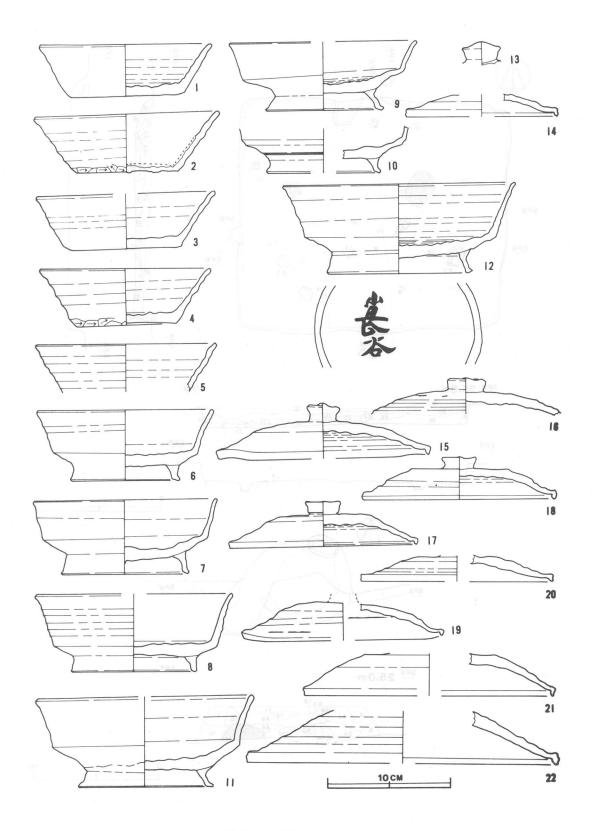
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、南半部の覆土下層から床面にかけて出土している。

133号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第234・235・236図)

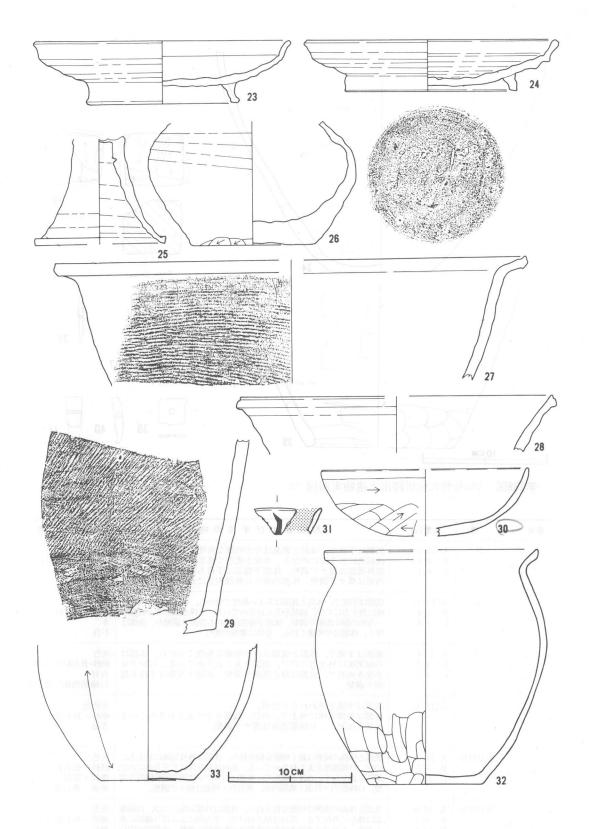
番号	뮑	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 13.6 B 4.3 C 9.2	底部はほぼ平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転篦削り調整。体部外面と口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 微粒 普通	・長石



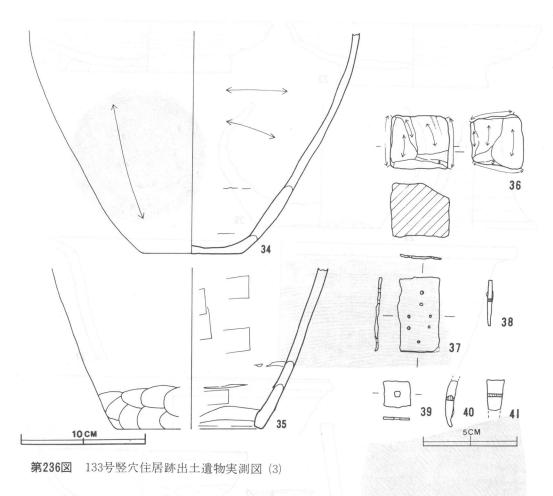
第233図 133号竪穴住居跡·竈実測図 II 图 東東東北上出層温油大學學以上 图 182章



第234図 133号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第235図 133号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



番号	- 4	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	坏	A 14.6 B 4.7 C 8.1	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は 直線的に外上方にのびる。水挽き成形で底部は回転箆切り。底 部外周部は箆ナデ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。体部 内面は横ナデ調整。体部内面から底部内面にかけ器壁が剝落。	灰白色 細砂・雲母・長石粒 不良
3	S	坏	A (14.2) B 4.4 C 8.8	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部はやや内彎気 味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は 一方向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整か。底部は 厚く、体部はやや薄く作る。全体に摩滅が進行。	灰色 細砂・長石粒・雲母 多 不良
4	S	坏	A 13.6 B 4.7 C 8.0	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ 水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆 削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 口縁部内面に漆付着
5	S	坏	A (14.3)	底部は平底と思われるが欠損。 体部は外傾気味に外上方にのび、端部をやや丸くおさめている。 水挽き成形で、口縁部内面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石微粒 普通
6	S	高台付坏	A 14.0 B 5.7 D 8.9	底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・外面と底部内面、高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 普通 重ね焼き
7	S	高台付坏	A 14.6 B 6.1 D 10.4	底部と体部の境界は明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味にのび、口縁端部は僅かに外反する。高台は貼り付けで、下方向にふんばり端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆削り調整。底部内面中位から体部内・外面、口縁部内・外面及び高台内・外面は横ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備 :	
8	S	高台付坏	A (15.7) B 6.3 D 11.1	底部と体部の境界は明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向にのびる。右ロクロ水挽き成形で底部は回転篦削り調整。底部内面中心付近を除き全体に横ナデ調整。	淡黄色 細砂・長石粒・ スコリア なま焼け	礫 •
9	S	高台付坏	A(14.9) B 5.5 D 9.6	底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は外反気味に外上方に のび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状 に外下方向にのび、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は厚 く、体部と高台は薄く作る。底部は回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・ 微粒 普通	長石
10	S	高台付坏	D (9.2)	底部と体部の境界はやや不明瞭で、体部はやや内彎気味にのびると思われる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方向にのび端部に面をなす。水挽き成形で底部は回転篦削り調整。高台内・外面は横ナテ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒 普通	
11	S	高台付坏	A(17.2) B 7.4 D 10.9	大形高台付坏である。底部と体部の境界は鋭い明瞭な稜を持ち、体部 はやや外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台 は貼り付けで「ハ」の字状に外下方向にのび端部に面なす。右ロクロ 水挽き成形で底部は回転箆削り調整。高台外面に貼り付け痕を残す。	灰色 細砂・長石粒・引 微粒・礫 普通	長石
12	S	高台付坏	A(18.8) B 7.3 D 11.3	大形高台付坏である。底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持ち、体部は 外傾気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで 「ハ」の字状に外下方向にのび、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で、底 部はやベ厚く体部から口縁部にかけて薄く作る。底部は回転箆削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・研 良好 底部外面に墨書	*
13	S	蓋		やや扁平な宝珠形のつまみ。 全体に横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石微粒 母 普通	• 雲
14	S	蓋	A(12.1)	天井部は丸味を帯びるが、中位より平坦になる。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で、 天井部中位迄は回転箆削り調整。中位から口縁部内・外面及び天井部内面は横ナテ調整。	青灰色 砂粒・長石粒・長石 普通 天井部内面に漆化	
15	S	蓋	A(18.0) B 4.5	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸くなだらかに 下降する。天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向 に屈曲し、端部は稜をなす。右ロクロ水挽き成形で、天井部中位まで 回転寛削り調整。つまみと天井頂部及び口縁部内・外面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒 普通 天井部内面に若干	~~~ 漆付着
16	S	蓋		天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部は丸い。水挽き成形で、天井頂部から天井部中位まで右ロクロ使用の回転箆削り調整。つまみは横ナデ調整。	黄灰色 細砂・長 微粒・雲母 普通 天井部外面に重ね	
17	S	蓋	A 15.1 B 3.7	天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井頂部は扁平で、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。つまみは横ナデ調整。	黄灰色 細砂・長石微粒・ 母 普通	. 雲
18	S	蓋	A 15.4 B 3.5	天井部中央に中心か高く、周囲が凹むつまみが付く。天井頂部は、平 坦で天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲 する。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部から天井部中位にかけ回転箆 削り調整。つまみと口縁部内・外面は横ナテ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長 微粒 普通	
19	S	蓋	A(16.0)	つまみは付くが欠損。天井部は丸く,天井部と口縁部の境界は やや明瞭な稜を持ち,口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形 で,天井頂部は左ロクロ使用の回転箆削り調整。	灰白色 細砂・鉄分き 普通 天井部内面に自 釉,天井部内面に重ね き痕。酸化焼成と思われ	自然 a焼
20	S	蓋	A(15.3)	つまみは付くが欠損。天井部はやや丸味を帯び、天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水挽き成形で、天井部中位は回転篦削り調整。天井頂部と口縁部内・外面から天井部内面中位にかけ、横ナず調整。	灰色 細砂・長石粒・ 石微粒 普通 口縁き 面から天井部内面に自 釉とフリモノ	8外
21	S	蓋	A(20.1)	天井部中央につまみが付くと思われるが欠損。天井頂部は回転箆削りにより平坦に仕上げられる。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部から天井部中位にかけ回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長 微粒 普通	
22	S	蓋	A(25.0)	甕の蓋と思われる。天井部はなだらかに下降し、天井部と口縁 部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽 き成形と思われ、口縁部内・外面と天井部内面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長 微粒 普通	

番号	Ę	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
23	s	台 付 盤	A 24.0 B 5.1 D 12.3	体部は内鬱気味に外上方へ大きく開く。体部と口縁部の境界は明瞭な 稜を持ち、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼 り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。右ロクロ水挽き成形で底部 は回転篦削り。口縁部内・外面と高台内・外面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
24	S	台 付 盤	A 20.2 B 4.2 D 13.8	底部と体部は境界をなさない。体部は外上方に大きく開き、体部と口 縁部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、口縁部は外傾気味に立ち上がり、 端部を丸くおさめている。高台は外下方にのび、端部に面をなす。右 ロクロ水挽き成形で口縁部内・外面と高台内・外面は横ナテ調整。	灰色 砂粒・長石粒・礫 良好 底部外面に箆記号
25	S	高 坏	E(10.3)	透しのない脚部で端部は上方にのび段をなす。粘土紐巻上げ成 形と思われる。内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂·長石粒·雲母多 普通
26	S	短 頸 壺	C 10.1	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がり、胴は強く張る。 底部は厚く体部にむかって薄く作る。底部は多方向の箆削り調 整。肩から胴にかけ回転箆削り調整。底部内面から体部内面は 横ナデ調整	明紫灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒・礫 普通
27	S	甃	A (38.0)	大形態, 胴の張らない体部から「〈」の字状に屈曲する口縁部が付き, 口縁外端面をなす。体部外面は平行叩き目調整。体部内面は箆ナデ及びナデ調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 なま焼け
28	S	獲	A (25.2)	胴の張らない体部から直接口縁部に至る。口縁外端部に面をな す。内・外面とも横ナデ調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
29	S	蓰		平底の底部で体部は直線的に外上方にのびる。体部外面は平行 叩き目調整。体部内面はナデ調整。体部下位は静止箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・礫 普通
30	Н	坏	A(16.7) B 5.4	底部と体部の境界は明瞭でなく、体部は内彎しつつ外上方にの び、口縁端部を丸くおさめている。底部内面は箆磨き調整。体 部内面と口縁部内·外面は横ナデ調整。底部外面と体部外面は箆 削り調整。	橙色 砂粒・長石粒・スコ リア 普通
31	Н	坏		口縁部から体部の一部は水挽き成形と思われる。 内面は箆磨き後黒色処理。	にぶい褐色 細砂 普通 体部外面に墨書
32	Н	甕	A(17.1) B 18.8 C 9.3	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁外端部に面をなす。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部外面は箆削り及び箆ナデ調整。底部内面と体部内面はナテ調整と思われる。底部外面は丁寧な箆ナデ調整と思われる。全体に摩滅が進行。	浅黄橙色 細砂・長石粒 普通
33	Н	甕	C 7.6 F 17.6	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がる。体部外面は縦位 の箆ナデ調整。体部内面は箆ナデ及びナデ調整。底部内・外面は ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・礫多 普通
34	Н	甕	C 7.9	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がる。体部外面は箆ナ デ調整。体部内面と底部内・外面は荒い箆ナデ調整。内面に底部 と体部の接合痕を残す。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
35	Н	歓	C(11.6)	底部は正円状に抜ける。底部から体部は外傾気味に外上方にの びる。粘土紐積み上げ成形で、体部内面に粘土紐痕を残す。体 部内・外面は箆ナデ調整。体部下位は箆削り調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
番号	種	類 法量(cm) 形態	の 特 徽 備 考 番号 種 類 法量(cm) 形 態 の)特徽 備考
36	砥	石 3.1× 2.7	2.8 方形を呈し痕が認める	, 全面に使用 流紋岩 37.8g 37 小 札 全長(4.0) 小形の小札で ねる。 2.2 を有す。	で七個の小孔

番号	種	類	法量(cm)	形	態	の	特	徴	備	考	番号	種	類	法量(cm)	形	態	の	特	徴	備	考
38	針	か	2.4×0.25 0.15	断面がる。	5形∅	の針会	定状を	と呈す			39 5 41	不鉄勢	明製品		39はロ さ1.3	中央に Sem,	こ孔 を 幅1	を有し .4cm。	, 長		

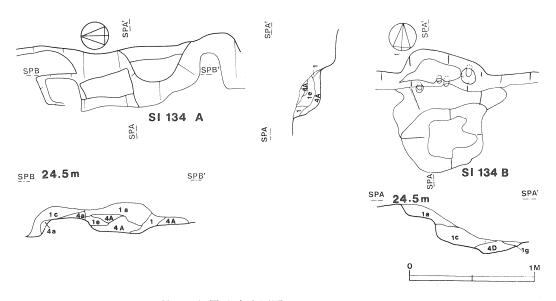
134-A号竪穴住居跡 (第237·238図)

調査区D2b8区を中心に確認され、119号竪穴住居跡の南側に位置し、134-B号竪穴住居跡と重複し、134-B号竪穴住居跡より新しい。規模は、東西4.54m・南北3.05mを測り、主軸方向N-81°-Eを指す長方形を呈している。

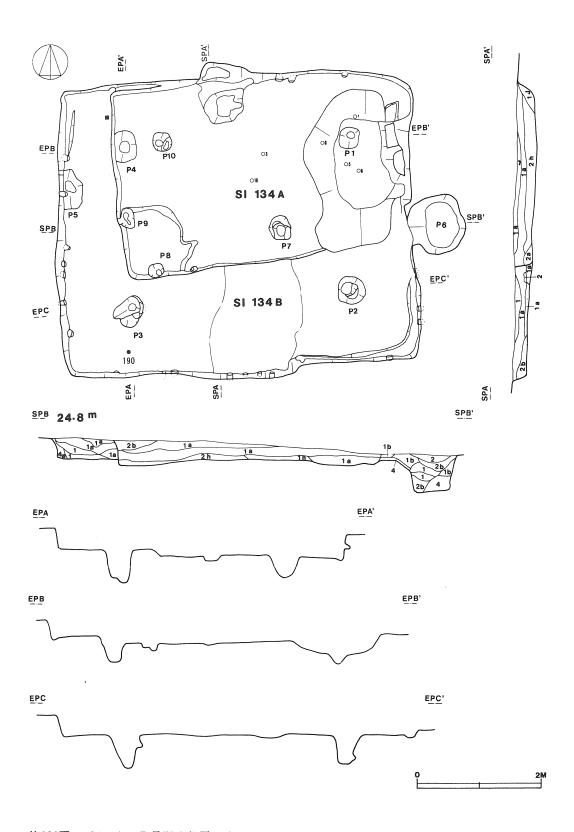
覆土は、おおむね褐色で、自然堆積とみられる。壁は西壁が高さ40cm、他は高さ30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面が北側に若干傾斜しているほかは、ほぼ平坦でやや軟弱である。ピットは、 P_7 ・ P_{10} が当跡に伴うものとみられる。深さは30cm前後を測る。 東壁寄りに 2.6×1.5 mの長楕円形の土壙、南西隅に 1×1 mの隅丸方形の土壙が存在するが、前者は当跡より新しいもので、竈を破壊している。

竈は、東壁ほぼ中央部に存在したものとみられるが、前述のように土壙によって破壊され、焼 土がわずかに認められる程度である。

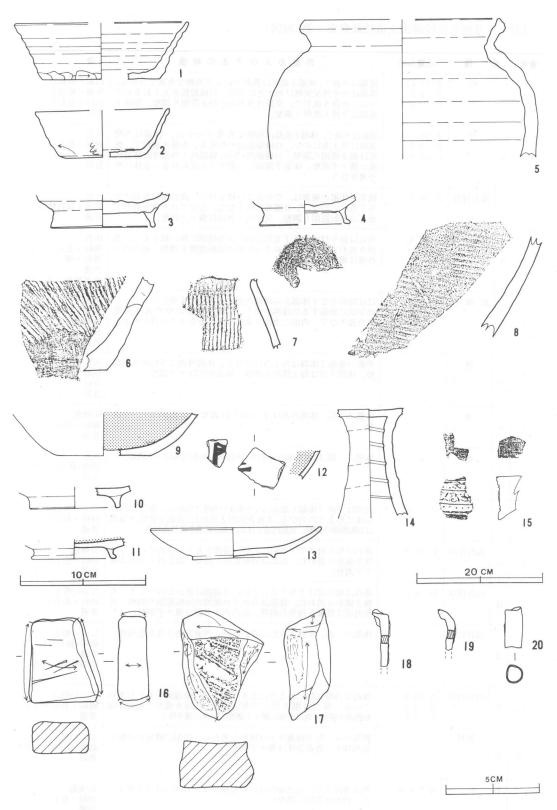
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・漆紙・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が、東半部の覆土および 床面付近から出土している。



第237図 134-A·B号竪穴住居跡 竈実測図



第238図 134-A·B号竪穴住居跡実測図



第239図 134-A号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	į.	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (13.6) B 4.5 C (9.4)	底部は平底で、体部と底部は箆削りにより明瞭な角度で分かれ、 体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめて いる。水挽き成形で、底部は多方向の静止箆削り調整。体部下 端部は手持ち箆削り調整。	内面-灰黄色 外面-暗灰色 細砂・長石粒・雲母多 不良
2	S	坏	A(10.7) B 3.7 C (6.9)	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁端部はやや尖る。水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。口縁部内・外面、体部内・外面及び底部内面は横ナデ調整。体部下端部に一部ナデが見られる。全体にやや薄手作り。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
3	S	高台付坏	D 8.3	底部と体部の境界は、ややあまい稜を持つ。高台は貼り付けで、 外下方向にのび、内・外端部に稜をなす。右ロクロ水挽き成形で、 底部は回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 普通
4	S	高台付坏	D (7.3)	高台は貼り付けで外下方向にのび、外端部に鋭い稜をもつ。水 挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。高台内・ 外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・礫 普通 底部外面に箆記号
5	S	短 頸 壺	A(15.6) F 21.6	ほぼ球形をなす体部から頸部内面にあまい稜を残しつつ、「く」 の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁外端部にやや丸味を帯 びた面をなす。内面に水挽き成形を思わせるロクロ目が残る。	灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒多 良好 外面全体に黄白色の自然
6	S	甕		平底の底部で体部は外上方にのびる。体部外面は平行叩き目調整。体部下位は静止箆削り調整。体部内面はナデ調整。	灰色 細砂・長石微粒・長 石粒 良好
7	S	甕		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。体部内面はナデ調整。	明褐色 細砂・長石粒 普通
8	S	甕		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。体部内面はナデ調整。	灰色 細砂・鉄分, やや精良 良好
9	Н	坏	C (7.2)	底部は平底で体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部は内彎 気味に外上方にのびる。水挽き成形と思われ、底部と体部下端部 は回転箆削り調整。底部内面と体部内面は箆磨き後黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通
10	Н	高台付坏	D (7.0)	高台は貼り付けで下方向にのび、端部を丸くおさめている。水 挽き成形と思われ、底部は回転箆削り調整。高台内・外面は横 ナデ調整。	灰褐色 細砂・長石粒・雲母 普通
11	Н	高台付坏	D 6.7	高台は貼り付けで外下方にのび、外端部に僅かな段をなす。水 挽き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。底 部内面は箆磨き後黒色処理。高台内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通
12	Н	高台付坏		体部の一部。水挽き成形と思われる。内面箆磨き後黒色処理。	にぶい橙色 細砂・長石微粒・雲母 普通 体部外面に墨書
13	Н	高台付皿	A(13.4) B 2.6 D 6.6	体部は内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は削り出しで短く尖る。水挽き成形で底部は回転箆削り調整。他は全体に横ナデ調整。全体に薄手作り。	にぶい橙色 細砂・長石・雲母 普通
14	Н	高坏		脚部のみ。粘土紐巻き上げ成形と思われ、内面に螺旋状の粘土 痕を残す。外面全体は横ナデ調整。	にぶい橙色 細砂・長石粒・石英粒 普通
15	軒	平 瓦	厚さ(6.8)	顎は無段式で、瓦当面内区に均整唐草文、外区に珠文を配す。 凸・凹面は篦削り調整。	紫灰色 細砂·長石粒多 竪緻

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態	の !	———— 特	備	考
16	砥 石	3.7×4·5 1.6	台形を呈し、全面に使用 痕が認められる。一部に 擦痕がみられる。		18 • 19	釘		18は頭部 る。 19は彎曲				
17	砥 石(転用砥)	5.6×4.1 2.3	瓦面を除いて全側面に使 用痕が認められる。	瓦 製	20	管 状鉄製品	全長2.1 径1.0	厚さ0.5mm に折り曲0				

134-B号竪穴住居跡 (第237·238図)

調査区D2b₈区を中心に確認され、北半部を134-A号竪穴住居跡によって破壊されている。規模は、東西5.69m・南北4.83mを測り、主軸方向N-2°-Wを指す長方形を呈している。

覆土は、大半が失われているが、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は80度前後で立ち上がり、壁高は20~40cmを測る。壁面下位および床面との境付近に、径10cm内外で、真横または30度位の角度で外下方へ向かう深さ10cm内外の小ピットが、各壁に数か所から10か所程が不規則に存在する。南東コーナー部の壁直下には、幅15 cm・深さ 5 cmの壁溝が認められる。床面は北側が失われているが、残存部は壁周辺が若干低くなり、ほぼ平担である。南壁下から北壁に向けての幅1.5mは良く踏み固められ、他はやや軟弱である。ピットは 8 か所あり、各コーナー部のP1~P4 は主柱穴とみられる。深さは35~52mを測る。P2とP3.は 2本のピットが重複し、建て替えが考えられる。P6は97×95cmの楕円形で、東壁中央部の壁外へ張り出して存在する。深さ56cmを測る。

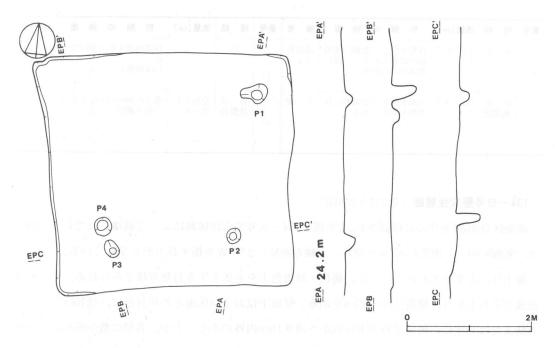
竈は、北壁中央部に位置するが、134-A号竪穴住居跡によって破壊されている。壁外へ15cm程掘り込まれていることと、焼成部が皿状に掘り下げられていることが確認された。

遺物は極少量で、土師器・砥石・鉄製品・漆紙・漆しぼり料が出土している。漆紙は南壁下や や西寄りの床面、漆しばり料は南壁下中央部の床面からそれぞれ出土している。

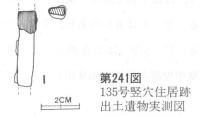
135号竪穴住居跡 (第240図)

調査区D3 b3区を中心に確認されているが、確認面がほぼ床面で、上部は削平されている。推定規模は、東西3.94 m・南北3.73 mを測り、主軸方向N -7 $^{\circ}$ - W ε 指す略方形を呈している。床面は、確認できない部分もあるが、わずかに東側へ傾斜する。ピットは4か所確認され、深さは $10\sim30$ cm ε 測る。竈は確認できなかった。

遺物は、少量の土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓が、床面から出土している。



第240図 135号竪穴住居跡実測図



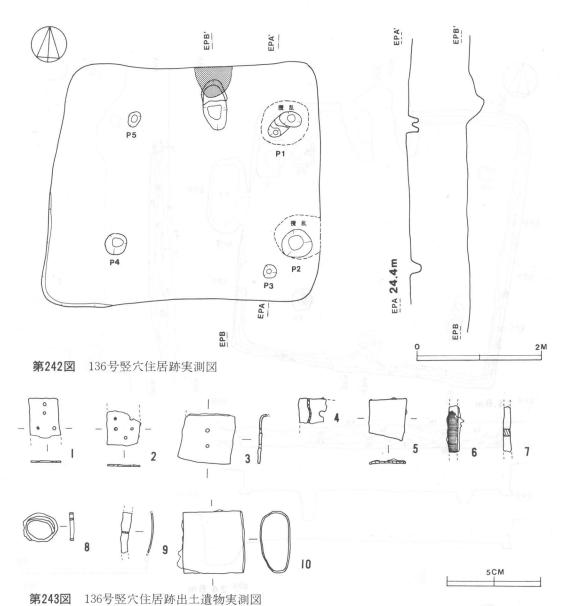
135号竪穴住居跡出土遺物観察表(第241図)

番号	種	類	法量(cm)	形	態	O	特	徴	備	考
1	刀	子		茎部 户部 欠 打		みられ	れるか	が両端	木質	質付

136号竪穴住居跡 (第242図)

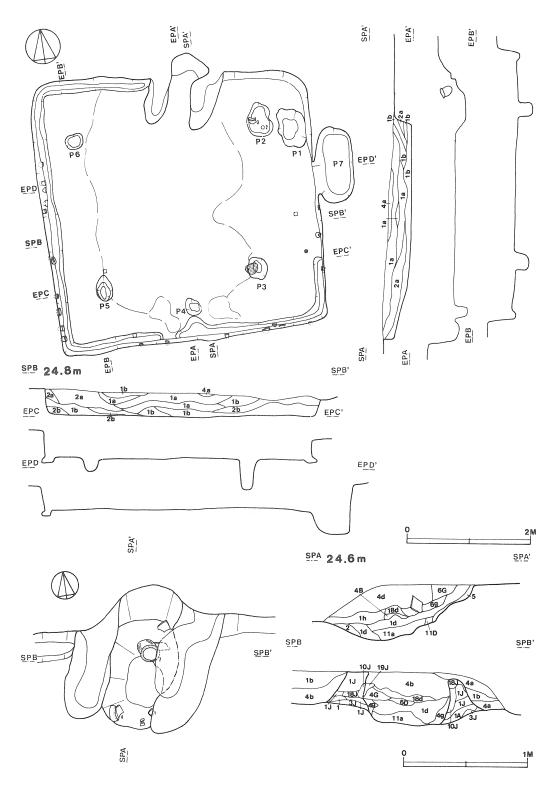
調査区D3b2区を中心に確認され,135号竪穴住居跡の西側に位置している。上部が削平され,確認面が床面または床面より下位にあり,壁が確認できたのは,南西コーナー付近だけである。規模は,東西4.3m·南北3.78mを測り,主軸方向N-2°-Wを指す隅丸長方形を呈している。ただ,東壁は70cm程東側にあったと推定される。床面は攪乱もみられるが,ほぼ平坦である。ピットは5か所確認されたが, $P_1 \sim P_4$ が主柱穴とみられ,深さは $15\sim48$ cmを測る。

竈は、焼成部の掘り込みと若干の焼土しか残存しないが、北壁中央部に存在していた。 遺物は、少量の土師器・須恵器・砥石・鉄製品・鉄滓が、南西隅の床面から出土している。



136号竪穴住居跡出土遺物観察表(第243図)

番号	種 類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1 5 4	小 札	(B)	1 は全長2.1cm, 幅1.5cm 3 は小札と思われる。		8	リング	外法 1.8×1.5 内法 1.0	幅1.5mmの紐状の鉄がリング状に巻いている。	2893
5	短冊形鉄製品	全長2.0 幅 1.9 厚さ0.1	台形状を呈する鉄片。		9	不 明 鉄製品	外法 2.1×0.4 内法 0.05	両端部欠損。	
6 . 7	釘		いずれも両端部欠損。	6は木 質付着	10	鎺	全長3.3 幅 3.3 厚さ0.1	断面が倒卵形を呈している。	0.166



第244図 137号竪穴住居跡・竈実測図

137号竪穴住居跡 (第244図)

調査区D3e3区を中心に確認され、東西4.44m・南北4.39mを測り、主軸方向N-2°-Wを指すほぼ方形を呈している。

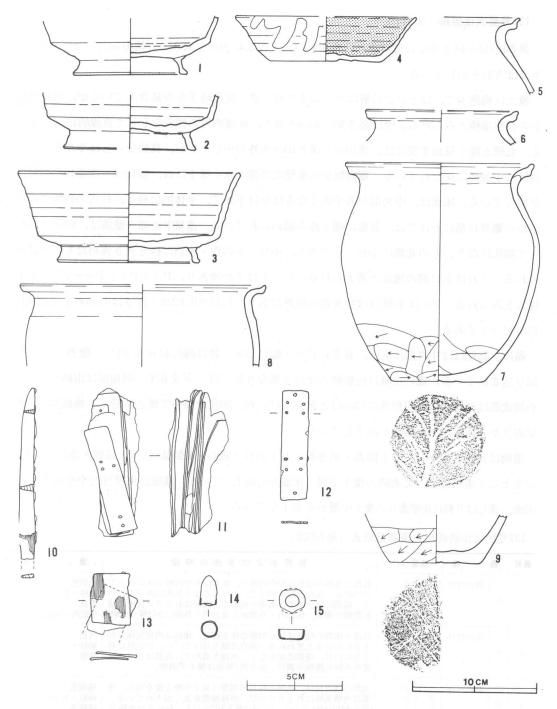
覆土は褐色土で、ほとんどの層にローム小ブロック・炭化粒子を少量含んでいるが、堆積状態から自然堆積とみられる。壁は高さ36~40cmを測り、80度内外の傾斜をもって直線的に立ち上がる。北壁を除く壁面下位には、径10cm・深さ10cm内外の小ピットが、真横ないしはやや外下方へ向けて不規則に穿たれている。竈西側から東壁北半部を除く壁下には、幅12cm・深さ10cmの壁溝が回っている。床面は、中央部が若干低くなるほかは平坦で、全体的に硬く、柱穴の内側の南壁下から竈焚口部にかけては、非常に硬く踏み固められている。南壁中央部の壁溝は、50cmにわたって幅広になり、その北側に小ピットがあり、小ピットの西・東側に砂を突き固めたものが認められる。これは入口部の施設と考えられる。ピットは7か所あり、 $P2 \cdot P3 \cdot P5 \cdot P6$ がが主柱穴とみられる。P7は東壁ほぼ中央部の壁外にあり、 $1.19 \times 0.62 m \cdot 深さは0.65 m を測る楕円形のピットである。$

竈は、北壁ほぼ中央部にあり、長さ1.17m・幅1.11m・焚口幅0.41mを測り、壁外へ27㎝程掘り込まれている。竈の主軸は住居跡のそれと異なり $N-22^\circ-E$ を指す。両袖部は山砂を突き固め焼成部は80㎝のほぼ円形状に13㎝ほど掘り下げられ、30度の傾斜で煙道へ続く。焼成部やや奥壁寄りから完形の土師器甕が出土している。

遺物は比較的少ないが、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙・漆しぼり料が主として南半部と、北東隅の覆土下層・床面から出土している。漆紙は東壁付近やや南寄りの床面、漆しばり料は南壁寄りの覆土中層から出土している。

137号竪穴住居跡出土遺物観察表(第245図)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	
1	S	高台付坏	D 8.8	底部と体部の境界はやや明瞭で、体部はやや内彎気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。体部内・外面から高台内・外面にかけ横ナデ調整。	灰白色 細砂・雲母 不良 体部内・外面に漆	衬着
2	S	高台付坏	D(10.6)	底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は内彎気味に外 上方にのびると思われる。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外 下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ 使用の回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好	
3	S	高台付坏	A (17.6) B 7.2 D 11.4	大形の高台付坏。底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。右ロクロ水挽き成形で底部は回転篦削り。高台にやや歪みがあるが端正な作り。	褐灰色 砂粒・長石粒・ 微粒多 良好	長石
4	Н	坏	A (14.4) B 3.6 C 8.9	底部は平底で、底部と体部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおきめている。水挽 き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・ 外面は横ナデ調整。体部下端部回転箆削り調整。内面黒色処理。	にぶい黄橙色 細砂・雲母 普通 体部内・外面に落	※付着
5	Н	甕		胴の張った体部から、口縁部はやや丸く屈曲し、下方向に段をなす。口縁端部は外反気味につまみ出す。口頸部内・外面は横 ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・1 普通	雲母



第245図 137号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
6	Н	粱	A (12.1)	胴の張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き、端部をやや 外反気味につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母

番号	ž	뭄	種	;	法量(cm)		Ŧ	形態お	よび	手法の	特 徴		備		ä	
7	Н		甕	B C	15.0 17.5 7.4 15.9	部が付き、	、端 底部	部を外上: 内面はナ	方につ デ調整。	まみ出す。体部内	。口頸部内	国曲する口縁 ・外面は横ナ ナデ後, ナデ	に砂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	長石	粒・乳	
8	Н		甕		(19.6) 18.8	胴の張っ! 方につま。 はナデ調!	み出~	部から,う す。口頸部	丸く屈i 部内・2	曲する口線 外面は横っ	縁部が付き, ナデ調整。(端部を外上 本部内・外面	灰赤色 砂粒·引 普通		!・雲	母
9	Н		甕	С	7.2	平底の底で内面と体	部で, 郭内i	にぶい 砂粒 普通 底部外	長石							
番号	種	類	法量(cm)	形態	の特(数	備考	番号	種類	法量(cm)	形態 6	り特	徴	備	考
10	刀	子	全長(9 刃幅0 刃長8	.7		Bの境に関 Bの基部欠打		木質付着	14	弓弭形 鉄製品	全長1.5 径 0.9	完形品。	****			
11 • 12	小	札			11は8枚が 12は完形品 幅1.4cm。	東になった。 日で全長5.8			15	不 明 鉄製品	外法1.4 内法0.7	断面がコの5 中央に径0.7 る。				
13	短冊鉄集		2.7×: 厚さ		2枚が重な	こる。		木質付着								

138号竪穴住居跡 (第246図)

調査区D3e1区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の西側に位置している。東西4.82m・南北4.03mを測り、主軸方向 N-1°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

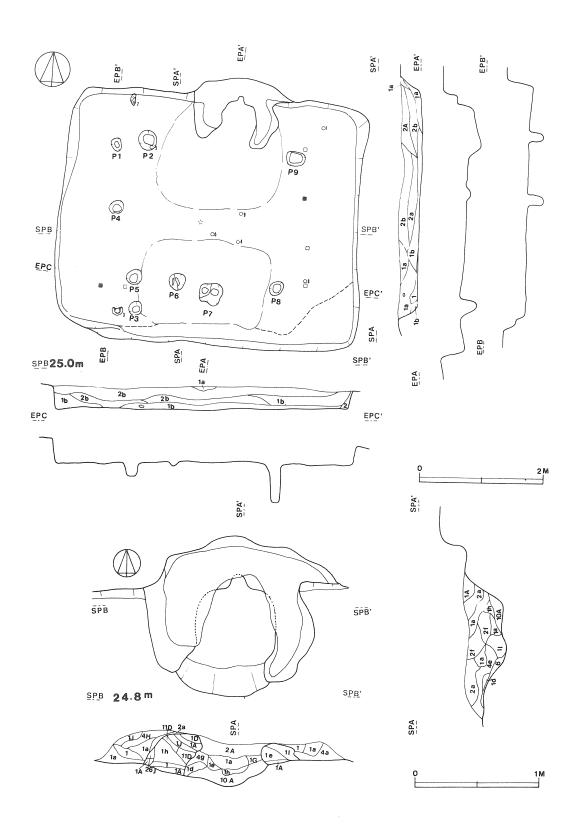
覆土は、ローム小ブロック・炭化粒子を含む層が多いが、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ26~40cmを測り、80度内外の傾斜をもってほぼ直線的に立ち上がる。床面は全体的に起伏を有し、南壁付近・焚口前面の柱穴間は特に踏み固められているが、東・西壁付近は軟弱である。ピットは9か所確認され、 $P_2 \cdot P_5 \cdot P_8 \cdot P_9$ が主柱穴と考えられる。深さは22~60cmを測る。

電は、北壁ほぼ中央部にあり、上部が破壊されているが、長さ1.0m・幅1.35m・焚口幅0.6m を測り、壁外へは掘り込まずに構築されている。袖は山砂を用い、焼成部は床面より17cm低く、 50度の傾斜で煙道へ続く。焼土は両袖部直下に多い。

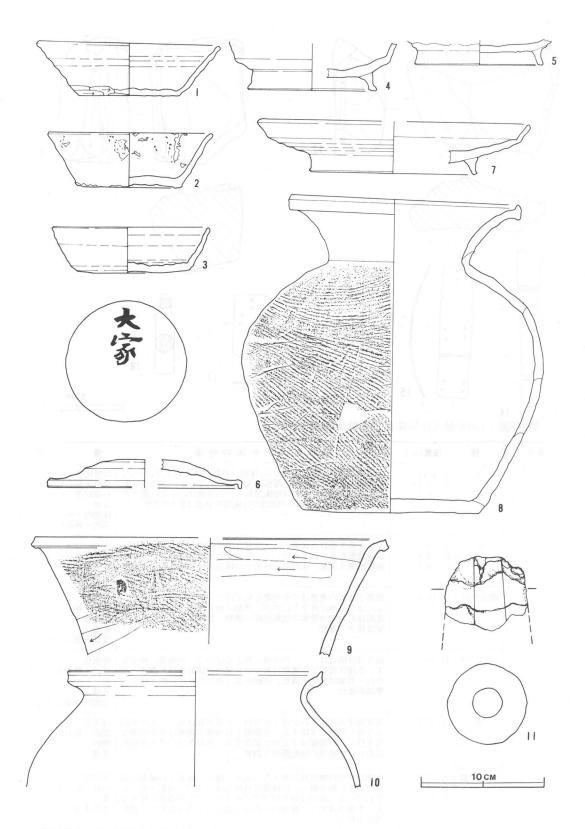
遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、覆土中・下層・床面からほぼ全域に わたって出土している。

138号竪穴住居跡出土遺物観察表(第247・248図)

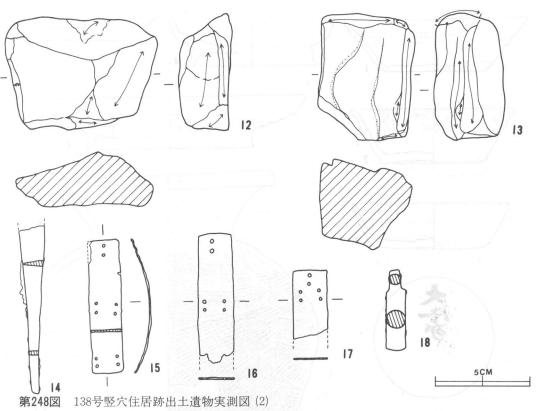
番号	2	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 14.4 B 4.4 C 8.0	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロ クロ水挽き成形で、底部は回転篦切り後、一方向の静止箆削り。 外周部は箆ナテ調整。体部下端部手持ち篦削り調整。	細砂・長石粒・	長石



第246図 138号竪穴住居跡・竈実測図

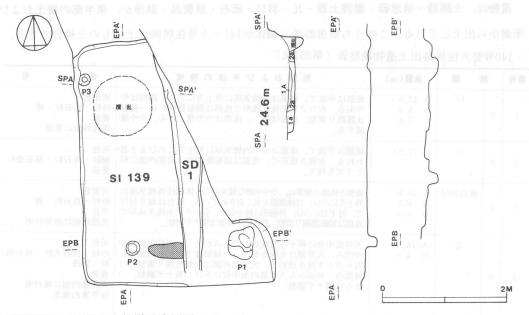


第247図 138号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



番号	4	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	ŧζ	A 13.1 B 4.4 C 8.2	盛り上がった平底の底部から、体部は外傾気味に外上方にのび、 口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水挽き成形 で、底部は右ロクロ使用の回転箆切り。外周部は、かるい箆ナデ 調整。底部内面と体部内・外面及び口縁部内・外面は横ナテ調整。	暗青灰色 砂粒・長石粒多・ 石微粒多 良好 体部内・外面と口 部内・外面に漆付
3	S	坏	A 12.7 B 3.8 C 9.1	やや丸味を帯びた底部から、体部は内彎気味に外上方にのび、 口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は 回転箆削り調整。体部内・外面と口縁部内・外面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒・礫 良好 底部外面に墨書
4	S	高台付坏	D(10.4)	底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持つ。高台は貼り付けで、 ふんばり気味に外下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、 底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。体部外面と高台内・外 面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長 微粒多 普通 底部内面に漆付着
5	S	高台付坏	D(10.3)	貼り付け高台は「ハ」の字状に外下方にのび、外端部に稜をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。底部外面に高台貼り付け痕を残す。 摩滅が進行。	青灰色 細砂・長石微粒・ 母 普通 底部内・外面に漆付え
6	S	蓋	A(15.7)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部は丸く、天井中位より反り気味に下降する。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。	緑灰色 細砂・長石粒・長 微粒 普通
7	S	台 付 盤	A (21.9) B 4.2 D (13.6)	体部はやや内彎気味に外上方へ大きく開き、体部と口縁部の境 界にあまい稜を持つ。口縁部は外傾気味にのび、端部を丸くお さめている。高台は貼り付けで、外下方にのび外端部に稜をな す。水挽き成形で口縁部内・外面と高台内・外面は横ナデ調整。 端正な作り。	灰白色 砂粒・長石微粒・雲 多 やや不良

番号	뒭	居 種	3	去量(cm)	71 0 101	形態ま	3 4 7	が 手 法	まの特徴		備	考
8	S	短 頸 壺	B C	18.4 25.3 14.3 24.3	底部は平底で、 曲し大きく外が し、上方に広っ 体部外面は平行	豆する口(がり面を	縁部がなす。	付く。! 頸部外i	コ縁外端部は作 面に一条の沈紹	堇かに段をな 線を巡らす。	灰色 細砂・長石* 微粒多 普通	並・長石
9	Н	甕	A (20.5)	胴が張らず, でが付く。口縁が端は尖る。体語外面は平行叩き	小端部は 部内面は	下方向	に段を対	なし、内傾する で一部指頭押原	る面を作り先 王調整。体部	にぶい橙色 砂粒・長石料 多 普通 体部内面に気	立・雲母
10	Н	좵	A (20.5)	丸く胴の張った 口縁部が付く。 面は横ナデ調整	口縁端	部を外	上方に	つまみ出す。「		にぶい橙色 砂粒・長石料 普通	並・雲母
番号	種类	預 法量(cm)	形態の	の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	り特徴	備考
11 0	33 EK	全長(6 外径 6 孔径 2	.2	先端部。算	箆削り痕を残す。	黒く釉薬化する	14	刀子	全長(8.8) 茎径0.5~1.3		下には、幅1 深さは20cm	金く壁である。
12	砥石	2.7		使用痕が言	呈し, 部分的に 忍められる。	砂岩 157.5 g	15 \$ 17	小札	をりにあり 巨軸方向は	で彎曲し、ル	5cm,幅1.7cm まぼ完形品。	北 (「融聖
13	砥石	6.6×4 4.2	.7	用痕が認め	うち二側面に使 かられる。中央 凹んでいる。	硬砂岩 158 g	18	不 明 鉄製品	全長4.2 幅 0.6~1.0 太さ0.5~0.9	断面は円形を	ACE TO VIELL	西袖かりてい



第249図 139号竪穴住居跡実測図

139号竪穴住居跡 (第249図)

調査区D3 f5区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の東に位置し、東半部は道路によって破壊されている。また、中央部南北方に 1 号溝が走り、当跡を破壊している。規模は南北3.91mで、東西は3.1mまで確認できた。推定主軸方向は、N-0°を指す。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的堆積とみられる。壁はほとんど確認できず、

高さ5cmを測る。床面は、若干東側へ傾斜している。ピットは3か所で、P2は柱穴とみられる。 遺物は、土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓が覆土中から少量出土している。

140号竪穴住居跡 (第250図)

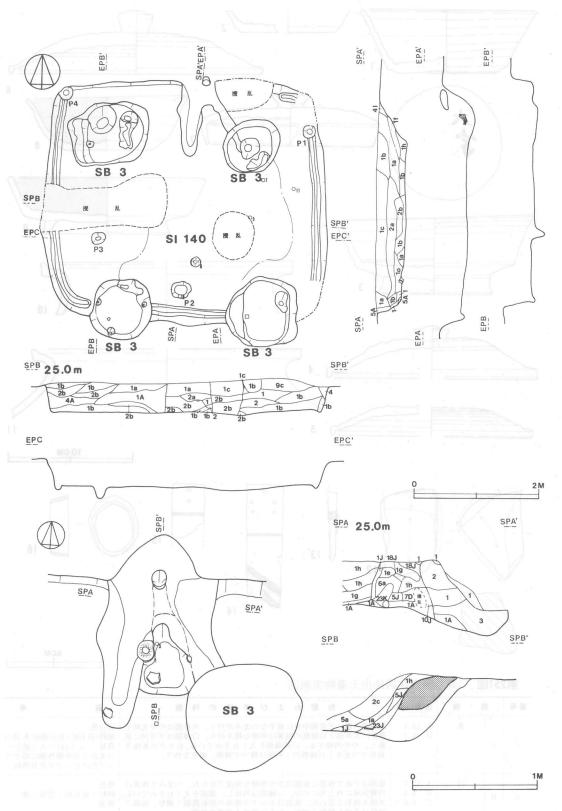
調査区D2e9区を中心に確認され、138号竪穴住居跡の西側に位置している。東西4.48m・南北3.85mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。3号掘立柱建物と重複し、当跡が古いものとみられる。

覆土は、攪乱坑があるものの、ローム小ブロック・炭化粒子を含む褐色・暗褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ30~45cmを測り、85度内外の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。北壁を除く壁下には、幅13cm・深さ5cmの壁溝が回る。ピットは4か所確認され、P3は主柱穴と考えられる。深さは20cmを測る。他の柱穴は、攪乱や3号掘立柱建物跡によって確認できなかった。

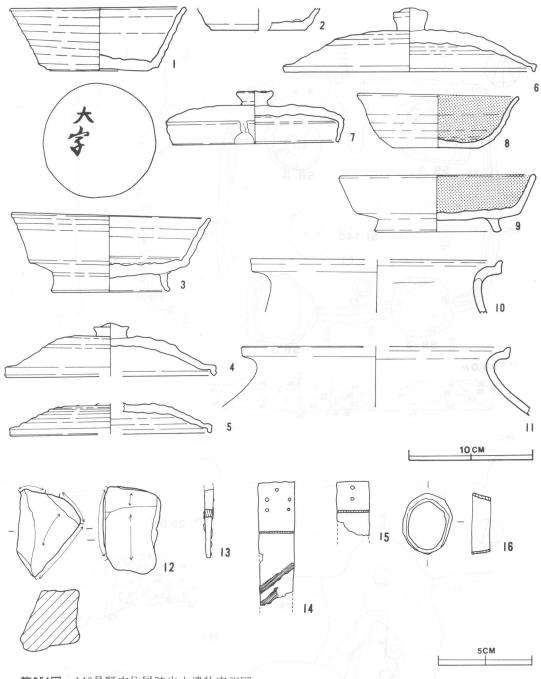
竈は、北壁中央部やや東寄りにあり、長さ1.55m・幅0.9m・焚口幅0.47mを測り、壁外へ28cm 程掘り込まれている。竈の主軸方向は、住居跡のそれと異なりN-13°-Wを指している。袖部は、 西袖が山砂を主体とし須恵器坏を2個重ねて芯とし、東袖がロームを主体として、それぞれ築かれている。焼成部は床面より10cm低く、50度の傾斜で煙道へ続く。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、東半部の覆土および 床面から出土している。このうち須恵器蓋二個体が141-A号住居跡出土のものと接合できる。 140号竪穴住居跡出土遺物観察表(第251図)

番号	Ę	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.9 B 5.2 C 7.8	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、端部はや や尖る。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切り後一部静 止箆削り調整。底部は厚く、体部はやや薄く作る。やや摩 滅する。	灰赤色 砂粒・長石粒・礫 普通 底部外面に墨書
2	S	坏	C (7.5)	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方にのびると思 われる。水挽き成形で、底部は回転箆切り。底部内面に粘 土クズを残す。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
3	S	高台付坏	A 15.8 B 6.5 D 9.3	底部と体部の境界は、やや明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に 外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付け で、外下方にのび、外端部に稜をなす。右ロクロ水挽き成形で、 底部は回転節削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰黄色 砂粒・長石粒・礫 不良 底部内面に鉄分付着
4	S	蓋	A(16.5) B 4.3	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部はやや四み、天井部は丸味を帯び、口縁部は下方向に屈曲する。右ロクロ水挽き成形で、天井部外面は回転箆削り調整。口縁部内・外面から天井部内面中位にかけ、横ナデ調整。つまみは横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石大粒・長石微 粒・雲母 普通 天井部内面に煤付着 逆さ重ね焼き
5	S	蓋	A (15.9)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや扁平で、 天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持つ。口縁部は僅 かに段をなし、下方向に屈曲する。口縁端部を丸くおさめ ている。水挽き成形で天井頂部は回転箆削り調整。口縁部 内・外面は横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 良好 逆さ重ね焼き
6	S	蓋	A 20.0 B 5.1	壺の蓋と思われる。天井部中央にボタン状のつまみが付く。 天井部はやや丸く、なだらかに下降する。天井部と口縁部 の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。 右ロクロ水挽き成形で、天井頂部から中位にかけ回転箆削 り。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 天井部内面に黄白色の自 滋さ重ね焼き S I 141-A と接合



第250図 140号竪穴住居跡・竈実測図



第251図 140号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器	種	法量(cm)	形	態	お	ょ	O.	手	法	0	特	徴		備	考
7	S	蓋	A 13.4 B 4.3	短頸壺の蓋。天 帯び、天井部と 曲し、やや内傾 成形でつまみと	口縁さ	部のは。口	境界/ 縁端	ま明制部を き	僚な利 丸く	麦を打さる	寺ち,	口糸いる。	東部は 右口	下方向に屈クロ水挽き	細砂·長石粒·長	部外面に暗オリ
8	Н	坏	A 12.7 B 4.4 C 6.8	底部は平底で体 内彎気味に外上 水挽き成形と思 端部は手持ち箆	方にの われ,	のび, 底音	口約 部はる	彖部に ちロク	は外月フロ何	えし, 吏用 <i>の</i>	端部 回車	邪を対	しくおり調	さめている	砂粒・長石粒	・雲母・礫

77.0	Ι.		725	, L E	B / \					T. 4	ab ı				- 44 491		T	
番号	7	8	種	法直	世(cm)					形見	医表	3 L U	手	法	の特徴		備	考
9	Н	高台	台付坏	В	15.5 4.5 10.2		はケロク	ト傾気 フ ロオ	₹味にタ ヾ挽き♬	ト上方 戈形で	j に 0 *,	りび, [底部は[7 縁站 可転算	器部 を削り	を丸くおさぬ) 調整と思れ	を持ち,体部 りている。右 っれる。内面 〈調整は不明。	砂粒・長石 普通	
10	Н		甕	А	(20.1)		垂直	につ		はす。	口坚	頁部内 ·				端部はほぼ 体部内・外		
11	Н		獲	A	(21.5)		端部 体部	『はほ 『内面	ほぼ垂直	配って	まみ	は出す。	口頸	頁部内	屈曲する口線 内・外面は樹 水外面はナラ		灰褐色 砂粒・長石 普通	粒
番号	種	類	法量(cm)	形	態	Ø	特	徴	備	考	番号	種	類	法量(cm)	形態(の特徴	備考
12	砥	石	4.4× 2.8	3.3	二側面面に係				か他の っれる。			14 • 15	小	札		14は全長(6 cm。 14, 15の下音	7,	14は木 質付着
13	蚃	<u></u>	全長(茎径		茎部。							16	リン	ノグ	外法 3.3×2.6 内法 2.6	完形品。		

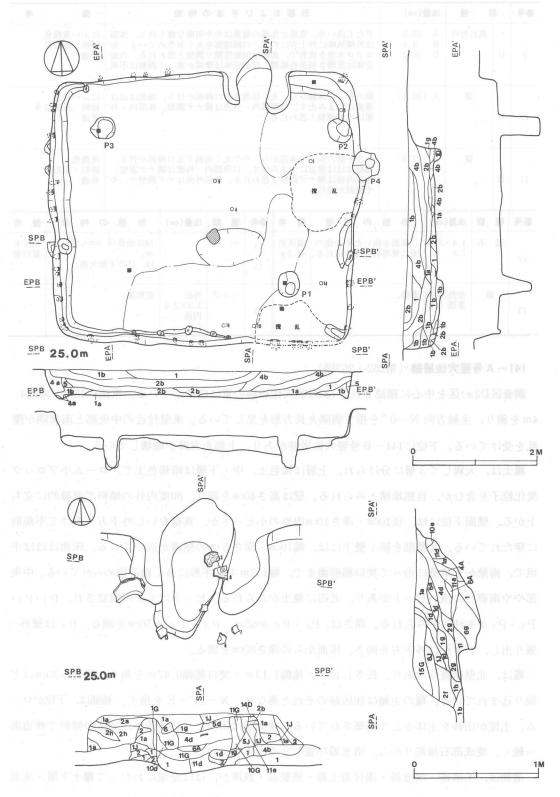
141-A号竪穴住居跡・(第252・253図)

調査区D2e7区を中心に確認され、133号竪穴住居跡の東に位置している。東西5.15m・南北4. 4mを測り、主軸方向N-0°を指す弱隅丸長方形を呈している。東壁付近の中央部と南東隅が攪乱を受けている。下位に141-B号竪穴住居跡があり、上部を当跡が破壊している。

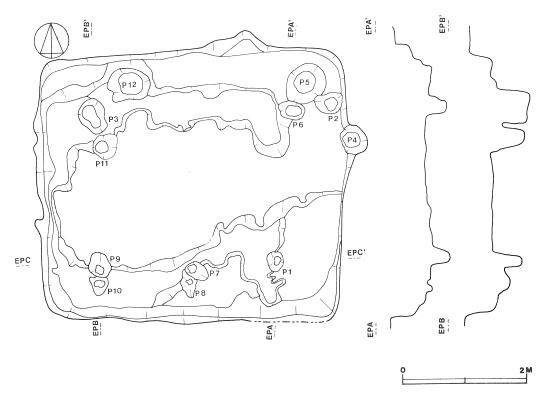
覆土は、大別して3層に分けられ、上層は褐色土、中・下層は暗褐色土で、ローム小ブロック・炭化粒子を含むが、自然堆積とみられる。壁は高さ40cmを測り、80度内外の傾斜で直線的に立ち上がる。壁面下位には、径10cm・深さ10cm内外の小ピットが、真横ないし外下方へ向けて不規則に穿たれている。北壁部を除く壁下には、幅10cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面はほぼ平坦で、南壁から東壁に沿って焚口部前面まで、幅1.2mで上字形に良く踏み固められている。中央部やや南寄りに浅いピットがあり、北辺に焼土がみられる。ピットは6か所確認され、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_6 \cdot P_9$ が主柱穴とみられる。深さは、 $P_1 \cdot P_6$ が65cm、 $P_3 \cdot P_9$ が50cmを測る。 P_4 は壁外へ張り出し、わずかに外下方を向き、床面からの深さ80cmを測る。

竈は、北壁東寄りにあり、長さ1.13m・袖幅1.13m・焚口部幅0.47mを測り、壁外へ30cmほど掘り込まれている。竈の主軸は住居跡のそれと異なり、N-14°-Eを指す。袖部は、下位がローム、上位が山砂を主体として構築されている。焼成部は床面より15cm低く、30度の傾斜で煙道部へ続く。焼成部右袖寄りから、須恵器坏蓋が2点出土している。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・鉄製品・鉄滓が、ほぼ全域にわたって覆土下層・床面から出土している。



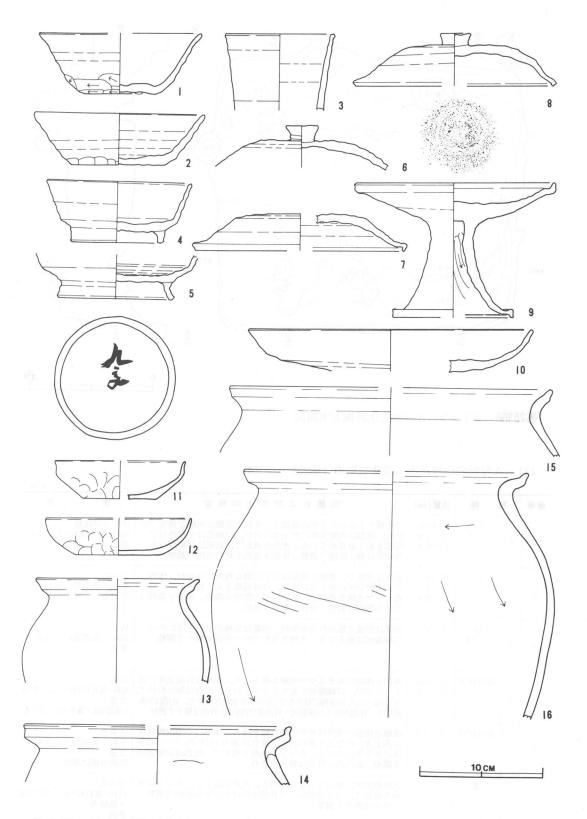
第252図 141-A号竪穴住居跡・竈実測図



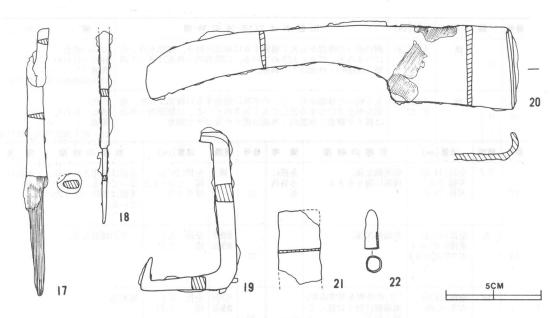
第253図 141-A・B号竪穴住居掘方実測図

141-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第254・255図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (13.0) B 4.9 C (6.8)	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転箆切り。 外周部は静止箆削り調整。体部下端部手持ち箆削り調整。	オーリブ灰色 細砂・長石大粒・長石微粒 普通
2	S	坏	A 13.7 B 4.2 C 7.6	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は やや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。体部下端部は 手持ち箆削り調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 砂粒・長石粒・長石微粒・ 雲母多 不良
3	S	坏 (コップ形)	A 8.7	底部は平底と思われるが欠損。体部は直線的に外上方にのび、 口縁端部は面をなす。水挽き成形で内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石微粒・鉄分多 普通
4	S	高台付坏	A 11.5 B 5.0 D 7.5	底部と体部の境界はやや明瞭な稜をもち、体部は外傾気味に外 上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、 下方向にのび、外端部に稜をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転 箆切り。体部内面と口縁部内・外面及び高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 普通 口縁部内面と体部外面に漆付着。
5	S	高台付坏	D 9.1	底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持ち、体部はやや内彎気味に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのびる。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	灰黄色 砂粒・長石粒・石英粒 普通 底部外面に墨書。
6	S	蓋		天井部中央に扁平なつまみが付き、天井部は丸い。左ロクロ水 挽き成形で、天井頂部から天井部中位にかけ回転箆削り調整。 つまみは横ナデ調整。	灰白色 砂粒·長石粒·長石微粒·礫 ·鉄分多 普通



第254図 141-A号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第255図 141-A号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	1	器 種	法量(cm) A 16.8	形態および手法の特徴 天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部は扁平で、やや反り気味に下降する。天井部と口縁部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、やや内傾する。水挽き成形で天井部は回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	備 考 青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 天井部内面に黄白色の自 然釉 逆さ重ね焼き
7	S	蓋			
8	S	(1) <u>蓋</u> (1)	A(15.9) B 4.2	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部は丸く、天井部と口 緑部の境界はやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、 やや内傾する。右ロクロ水挽き成形で、天井部中位は回転箆削 り調整。天井部、口縁部内・外面から天井部内面中位にかけ横 ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・ 鉄分 良好 天井部内面中央部に箆記り 天井部内面に漆付着
9	S	高 盤	A 16.0 B 10.8 E (9.6)	体部は外上方に大きく開き、体部と口縁部の境界にあまい稜を持つ。口縁部はほぼ垂直につまみ出し、端部はやや尖る。支脚部は支柱から裾に向かって大きく反り、段をなして下方向に屈曲し、端部はやや尖る。右ロクロ水挽き成形で支柱内面はナデ調整、他は横ナデ調整。	緑灰色 細砂・長石粒・長石微粒 ・雲母 普通
10	S	台 付 盤	A 22.9	体部と底部は境界をなさない。体部は内彎気味に大きく開き、 体部と口縁部の境界は丸い。口縁部は外上方にのびる。貼り付け高台は欠損。水挽き成形と思われ、底部外面は右ロクロ使用 の回転篦削り調整。他は横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
11	Н	坏	A(10.5) B 3.1 C (5.9)	平底の底部で、体部は内彎しつつ外上方にのび、口縁部はほぼ 垂直に立ち上がり、端部を薄く外反気味におさめている。体部 内面と口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外面と底部外面は箆 削り調整。	にぶい橙色 細砂・雲母 普通
12	Н	4 不	A(11.7) B 3.0 C 8.8	平底の底部で、体部は内彎しつつ外上方にのび、口縁端部を丸 くおさめている。底部内面と体部内面及び口縁部内・外面は横 ナデ調整。体部外面と底部外面は箆削り調整。	橙色 細砂・雲母 普通
13	Н	甕	A(13.2) F 15.6	丸く胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、口縁外端 部にあまい稜を持つ。内面全体はナデ調整。体部内面に一部指 頭押圧調整。口頸部外面は横ナデ。体部外面はナデ調整。やや 摩滅する。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
14	Н	甕	A (21.4)	胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出して丸くおさめている。 口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は十デ調整。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 普通

番号	器	種	法量(c	m) 形	態およ	び手	法の)特 徴		備	考	
15	Н	甕	A (25.	8) 胴の張った体部か につまみ出して丸 整。体部内・外面	くおさめ	ている	口縁部。口頸	が付き,端部を 部内・外面は横	外上方 ナデ調	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通 口頸部内面に炭		寸着
16	Н	套	A(22. F 27.		み出して:	丸くお	さめて	いる。口頸部内	き,端 ・外面	赤色 砂粒・長石粒・ 普通 ロ・頸・体部外		ま付着
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	備	考
17	刀子	全長(14 刃幅 0.3 刃長 (9	8 1	切先部欠損。 陳側に関を有する。	茎部に 木質残 存	20	鎌	全長(19.5) 幅 2.0~4.2 厚さ 0.3	なって	表側へ折り曲げ	木質	付
18	鏃	全長(10. 茎径0.2- 太さ0.25	-0.4	先端部欠損 。		21	短冊形鉄製品	全長 (3.9) 幅 2.2	一方の	端部欠損。		
19	鎹	全長(14. 太さ 0.9	5 同	コ」の字形を呈するが, 両端部に行くに従って 田くなる。		22	弓弭形 鉄製品	全長 2.1 径 0.75	完形品	•		PPONIAL

141-B号竪穴住居跡 (第253図)

141-A 号竪穴住居跡の下位にあり、建て替えであるとみられる。規模は、東西 $4.5\,\mathrm{m}$ ・南北 $4\,\mathrm{m}$ とみられるが、東壁は明瞭でない。主軸方向 $N-0^\circ$ を指す長方形を呈している。

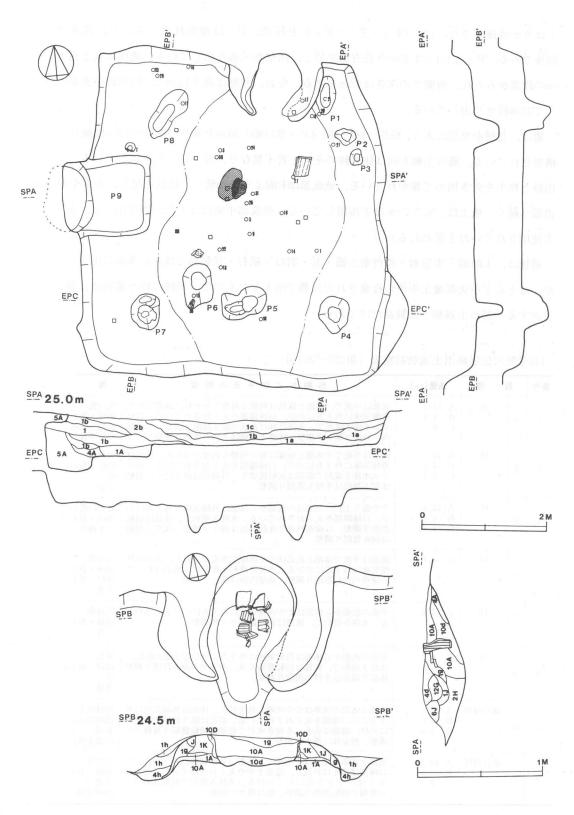
覆土は、ロームブロックを多量に含む明褐色土で、141-A号竪穴住居跡の床面を構成する土層で、人為的に埋め戻したものとみられる。壁は高さ14cmほど確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。 床面は中央部がやや低くなり、硬く締まっている。当跡の床面構築にあたっては、東壁中央部を除く壁下を幅70cm内外で溝状に深く掘り下げ、ロームを充塡して床面としている。ピットは3か所確認されている。竈は明らかにできなかった。

遺物は、土師器が若干出土しているだけである。

142号竪穴住居跡 (第256図)

調査区E3a7区を中心に確認され、107号竪穴住居跡の北側に位置し、北東隅を現在の道路によって失っている。規模は、東西4.95m・南北5.2mを測り、主軸方向N-9-Eを指す方形を呈している。

覆土は、ロームブロック・焼土・炭化粒子を若干含む層がみられるが、褐色土を主体とする自然堆積の層とみられる。壁は高さ30~50cmを測り、75度の傾斜で外上方へ立ち上がる。床面はほば平坦で、南壁下から竈焚口部前面にかけての幅2.5mの範囲が、良く踏み固められている。ピッ



第256図 142号竪穴住居跡・竈実測図

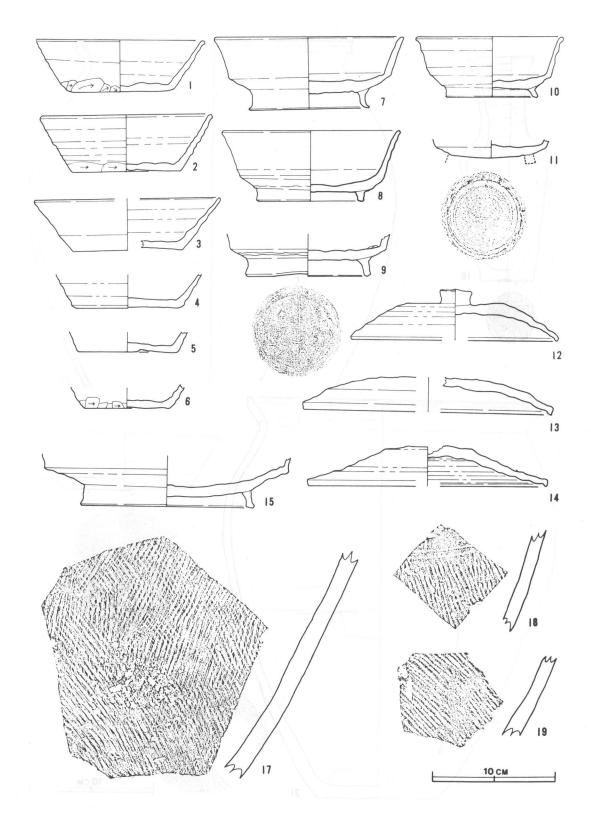
トは9か所確認され、 $P_2 \cdot P_4 \cdot P_7 \cdot P_8$ が主柱穴、 P_5 は補助柱穴とみられ、深さは $40\,\mathrm{cm}$ 前後である。 P_9 は $1.4 \times 1.2\,\mathrm{m}$ の長方形を呈し、西壁外へ張り出している。底部は東と西とで $25\,\mathrm{cm}$ の段差がみられ、西側での深さは $42\,\mathrm{cm}$ を測る。なお、西壁は高さ $12\,\mathrm{cm}$ で、住居跡中央部へ向かって $37\,\mathrm{cm}$ 程せり出している。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.3 m・幅1.4 m・焚口幅0.34 mを測り、壁外へ15 cm程掘り込んで構築されている。竈の主軸方向は住居跡のそれと若干異なり、 $N-16^{\circ}$ E を指している。袖部は、山砂と粘土を突き固めて築かれている。焼成部は床面より15 cm低く、皿状を呈し、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は、厚さ7 cm ほど堆積している。焼成部中央には平瓦が数片出土し、支脚として使用されていたと思われる。

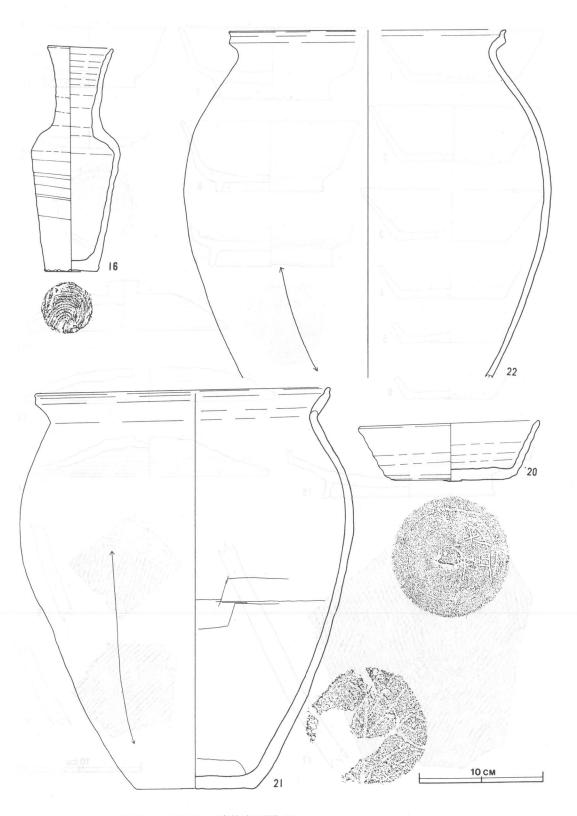
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が多量に出土しているが、ほとんど中央部覆土中から投棄された状態で出土したもので、当跡に伴う遺物は、竈周辺に存在する一部の土器類と鉄製品だけである。

142号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第257~261図)

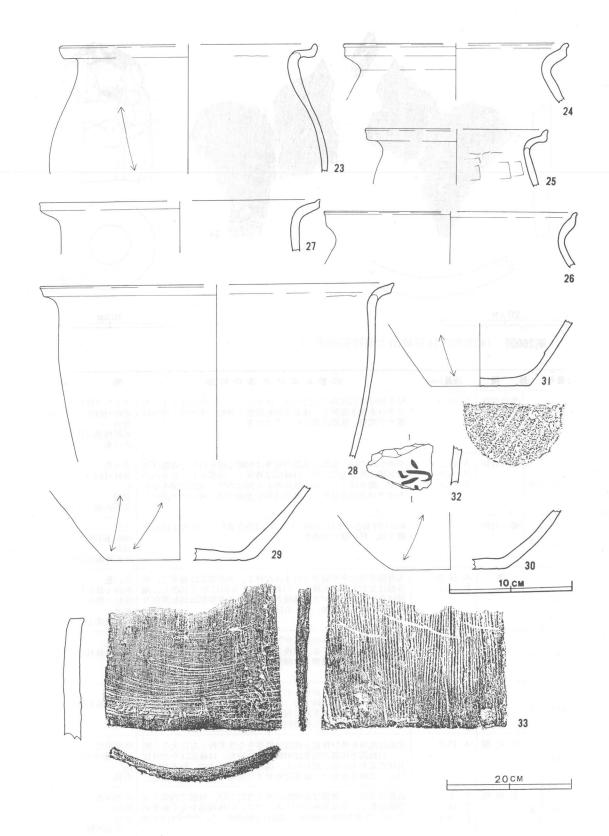
番号	1	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 13.2 B 4.3 C 8.5	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部はやや 内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロ クロ水挽き成形で、底部は井げた状の静止箆削り調整。口縁部 内・外面は横ナデ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 やや不良
2	S	坏	A 13.7 B 4.6 C 8.7	底部は平底で平体部と底部は鋭く明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロ クロ水挽き成形で底部は回転篦切り。外周部は静止箆ナデ調整。 体部下端部は手持ち篦削り調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 礫 不良
3	S	坏	A (14.8) B 4.2 C (8.7)	やや盛り上がった平底の底部から体部は外傾気味に外上方にの び、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転 箆削り調整。口縁部外面と体部外面は横ナデ調整。体部下端部 は回転篦削り調整。	にぶい橙色 細粒・長石微粒 なま焼け
4	S	坏	C 8.1	底部は平底で体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのびる。水挽き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。底部内面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 不良
5	S	坏	C 7.8	平底の底部から体部はやや内彎気味に外上方にのびると思われる。水挽き成形で、底部は回転篦切りで無調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 不良
6	S	坏	C 6.7	平底の底部から体部は内彎気味に外上方にのびると思われる。 水挽き成形で、底部は回転箆切り後、多方向の静止箆削り調整。 体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒多・雲 母 普通
7	S	高台付坏	A 15.1 B 6.0 D 9.8	底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外上方にのび端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方にのび、端部は尖る。水挽き成形で底部は回転箆切り後横ナデ調整。他全体に横ナデ調整。	明緑灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 内面全体に漆付着
8	S	高台付坏	A 14.10 B 4.8 D 8.7	底部と体部の境界は不明瞭で、体部は外傾気味に外上方にのび、 口縁部は僅かに外反し、端部をやや丸くおさめている。高台は 貼り付けで下方向に短くのびる。水挽き成形で底部は右ロク ロ使用の回転箆削り調整、他は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石微粒 普通 内面全体に漆付書



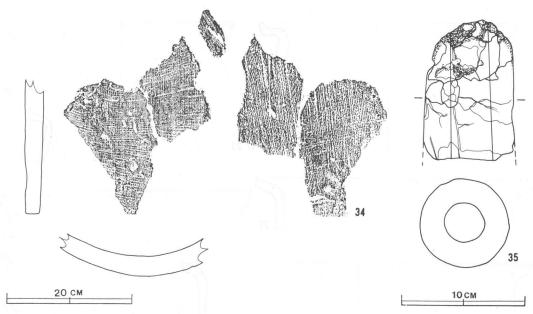
第257回 142号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) 8883 8



第258図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

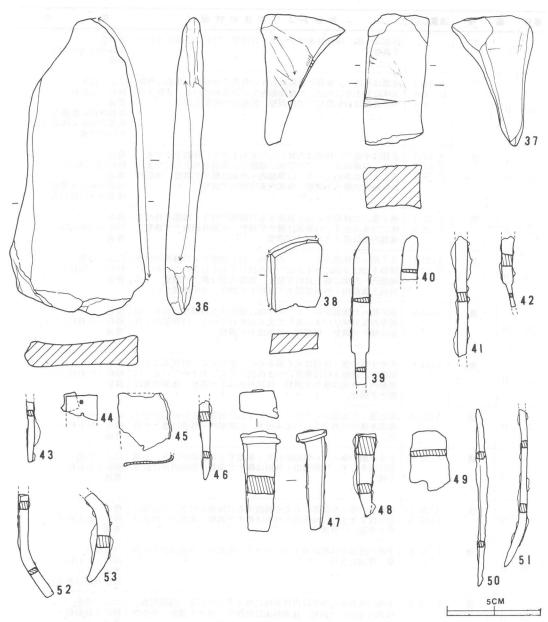


第259図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)



第260図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	1	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	S	高台付坏(転用硯)	D 10.0	貼り付け高台は外下方にのび、僅かに「ハ」の字状をなす。右 ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。高台内・外面は 横ナデ調整。底部内面に粘土クズ付着。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に箆記号と 墨付着
10	S	高台付坏	A 11.7 B 4.9 D 7.6	やや小形のJ不。底部と体部の境界は明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部は外反し、端部を丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方向にのび、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り後、軽いナテ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微 粒 普通 底部内面に漆付着
11	S	高台付坏		貼り付け高台が付くが欠損。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆 削り後、軽い横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 底部外面に箆記号
12	S	蓋	A (16.5) B 4.2	天井部中央にやや扁平なつまみが付く。天井頂部は扁平で、天井部はなだらかに下降し、口縁部は下方向に短く屈曲し、端部はやや尖る。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り後、軽い横ナデ調整。つまみは横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石 微粒・鉄分 普通 酸化焼成と思われる
13	S	蓋	A (20.0)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや扁平で、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で、天井部外面は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 多 不良
14	S	蓋	A(19.1)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部はやや扁平で、天井部は反り気味に下降する。天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水挽き成形で、天井頂部から天井部中位まで回転箆削り後、軽い横ナテ調整。	灰色 砂粒・長石微粒多 普通
15	S	台付盤	A 13.9	底部は丸味を帯び体部と底部は境界をなさず外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部はやや外反気味に立ち上がると思われる。高台は貼り付けで、外下方にのびる。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。	明褐灰色 細砂·長石粒·長石微 粒 不良
16	S	長頸瓶	A 5.2 B 18.1 C 4.1	底部は平底で、体部は直線的に外上方にのび、肩部で内傾する。 頸部は長く、外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめ ている。水挽き成形と思われ、底部は回転糸切りで、ややすわりが悪 い。	暗青灰色 細砂 良好 一部自然釉



第261図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図 (5)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
17	S	至		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。剝離面を見る。内面は箆ナデ後ナデ調整。	外面-灰色 内面-にぶい橙色 細砂・長石粒 普通
18	S	甕		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。	緑灰色 細砂・長石粒 良好

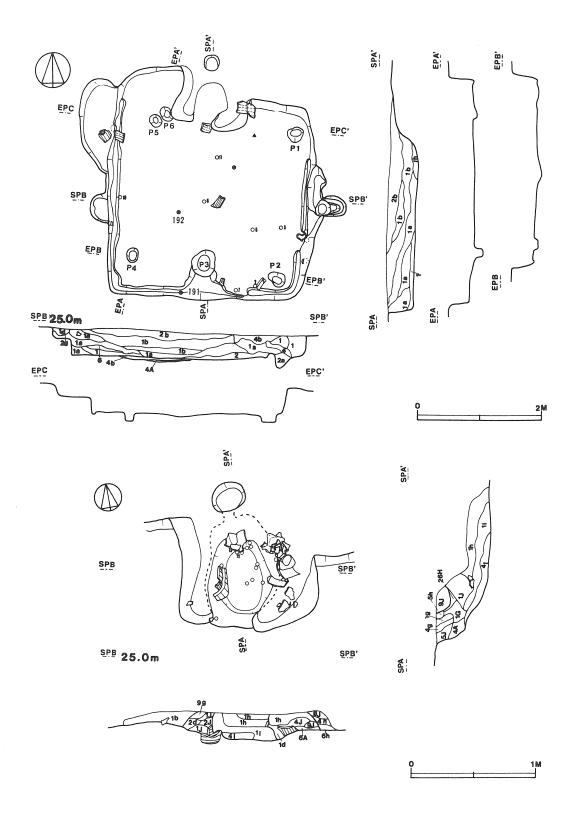
番号	. !	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
19	S	甕		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面は箆削り及びナデ調整。	灰白色 細砂·長石粒· 不良	雲母
20	Н	才	A 14.3 B 4.8 C 9.6	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部は外傾 気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成 形で底部は回転箆切りで無調整。底部はやや厚く作る。		書き
21	Н	甕	A 23.5 B 31.9 C 9.7	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がり、体部上位で丸く 張る。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を外上方につまみ 出し丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部外 面は縦位の箆ナデ調整。体部内面は箆ナテ調整。	橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木 体部外面に煤	葉痕
22	Н	甕	A 22.1 F 29.5	強く張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外反気 味につまみ出す。口頸部は横ナデ調整。体部外面箆ナデ調整。 体部内面は箆ナデ及びナデ調整。	橙色 砂粒·長石粒·雲 普通	母・スコリア
23	Н	甕	A(20.4) F 22.3	丸く張った体部から「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付き、 端部をほぼ垂直に外上方につまみ出して丸くおさめている。口 縁部内・外面に刷毛目痕を見る。頸部内面は横ナデ調整。頸部 外面と体部内・外面は箆ナデ及びナデ調整。やや摩滅する。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母
24	Н	甕	A(17.9)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端 部を外反気味につまみ出して丸くおさめている。口頸部内・外 面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母
25	Н	甕	A (14.6)	やや小形の甕。体部は丸く張るものと思われる。口頸部は丸く 屈曲し、端部をほぼ垂直につまみ出して丸くおさめている。口 頸部内・外面は横ナデ調整。体部外面はナデ調整。体部内面は 箆ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒 良好	・雲母
26	Н	甕	A(20.3)	胴の張った体部からやや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、 端部を僅かに外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調 整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母
27	Н	装	A(22.6)	あまり胴の張らない体部から丸く屈曲する口縁部が付き、外端部に面をなす。口頸部内・外面は横ナデ調整。頸部内面に箆傷 を残す。	にぶい橙色 細砂・長石粒 普通	・雲母
28	Н	築	A(28.2) F(25.3)	やや胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き,外端部に 鋭い稜をなす。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は 箆ナデ後,ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母
29	Н	甕	C(11.5)	平底の底部で体部は外上方にのびる。体部内・外面は箆ナデ調整。摩滅が進行。	浅黄橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木美	
30	Н	甕	C (9.2)	平底の底部から体部は内彎気味に外上方にのびる。底部内面と 体部内面はナデ調整。体部外面は箆削りと箆ナデ調整。やや摩 滅する。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木勇	
31	Н	甕	C 8.0	平底の底部から体部は、やや内彎気味に外上方にのびる。底部 内面は箆削り調整。体部内面は箆ナデ後ナデ調整。体部外面は 縦位の箆ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木芽	
32	Н	甕		甕の体部と思われる。体部外面はナデ調整。内面は箆ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒・ ・石英・雲母 普通 体部外面に墨書	
33	平	Ē	全長(22.9) 広端 27.4 厚さ 1.9	約½は欠損。凸面は縦位の繩目叩きがみられ、叩きしめの円弧を描く。広端付近に指頭痕を残す。凹面は布目を残し、広端付近は箆削り調整。側面と端面は箆削り調整で、側面の一部に面取りを施す。	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・ 礫 やや硬質	雲母多・

番号	器	種	法量	t(cm)			形態お	うよて	が 手 法	の特徴		備	#	
34	隅均	0 瓦	全長(広端 厚さ	(4.5)	れ,広	端側に-		を強く打	押し出す-		目叩きがみら 凹面は布目	浅黄色 砂粒・長石 軟質	泣・硝	<u></u>
番号	種類	法量(cm)	形態	の特	徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態の	り特徴	備	考
35	羽口	全長(1 外径 : 孔径 :	6.7 整	ト面は多力 を、基部の と。			先端部 は溶解 し鉄付 着。	45	短冊形鉄製品	全長(3.0)幅 (2.7)	一方が小さく ている。	(折り曲がっ		
36	砥 石	15.4× 1.1		E角形を呈 ↓に使用痕			粘板岩 209.5 g	46	釘 か	全長(4.1) 太さ 0.6	頭部欠損。			
37	砥 石	3.1×6 2.1	圧	を方形を呈 目痕が認め なか所に擦	られ,	側面の	流紋岩 87.5 g	47	塹	全長 5.2 太さ 1.5	ほぼ完形品。 刃部は断面 \ ている。	/ 字状を呈し		
38	砥 石(転用砥)	3.5×2 1.0		上側面のみ)られる。	に使用	痕が認	須恵器 甕片利 用	48	楔	全長 4.3 太さ 1.0	完形品。			
39 40	刀 子		en 40	0は全長(7n,刃長6.6 n,刃長6.6 0は刀子の る。	Scm.			49	火打鎌	全長 3.2 幅 1.9	一部欠損して	こいる。		
41 5 43	鏃			ずれも両 るが鏃の				50	棒 状 鉄製品	全長 9.4 太さ 0.6	完形品。 断面は方形で 尖る。	ご, 両端部は		
44	小 札	全長(1幅]		:部分欠損	l _o			51 \$ 53	不 明 鉄製品		51は全長(8. 0.3cm。 一方の端部ク	// /	CONTROL de cal-ser control	

143号竪穴住居跡 (第262図)

調査区D3i3・i4区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の南方に位置し、3号溝を破壊して構築されている。規模は、東西3.5m・南北3.7mを測り、主軸方向N-3-Eを指す略方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを少量含む褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ32~44cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁部には 2 か所の壁外テラスを有している。北壁部を除く壁下には、幅 5 ~ 7cm・深さ 4 cmの壁溝が回っている。南壁中央部の壁溝は、幅広く内側へ張り出している。床面は、南壁直下から竈焚口部前面にかけての幅1.1mが特に踏み固められ、竈方向へ向けて若干低くなっている。ピットは 6 か所確認され、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_5$ が主柱穴とみられるが、深さはいずれも 10cm内外である。他に東壁中央部に壁外へ張り出すピットが存在するが、当住居廃絶後のピットである。



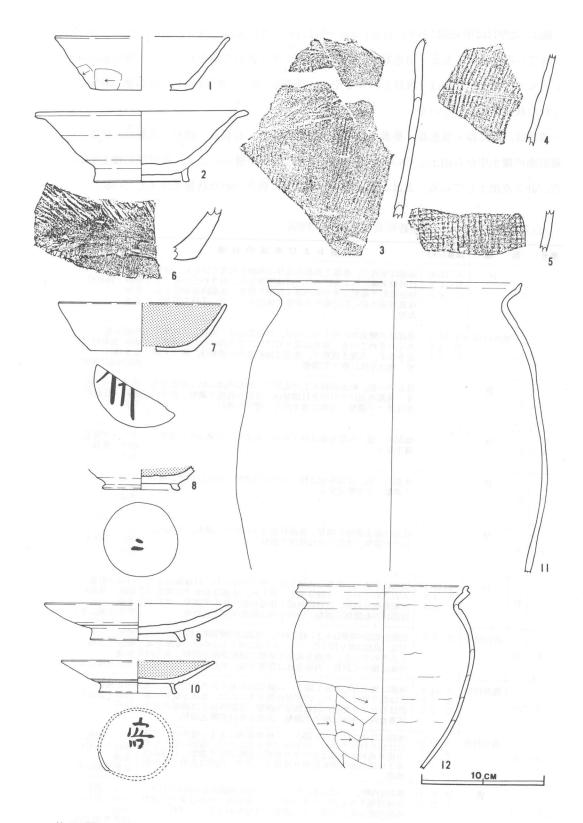
第262図 143号竪穴住居跡・竈実測図

竈は、北壁はぼ中央部にあり、長さ1.2m・幅1.1m・焚口部幅0.31mを測り、壁外へ38cm掘り込まれている。袖は、丸瓦・須恵器杯・割石を山砂で塗り固めて築かれている。焼成部は床面と同レベルで、焼土が10cmほど堆積し、ゆるやかに煙道部へ続く。奥壁寄りに土師器甕二個体分が、つぶれた状態で出土している。

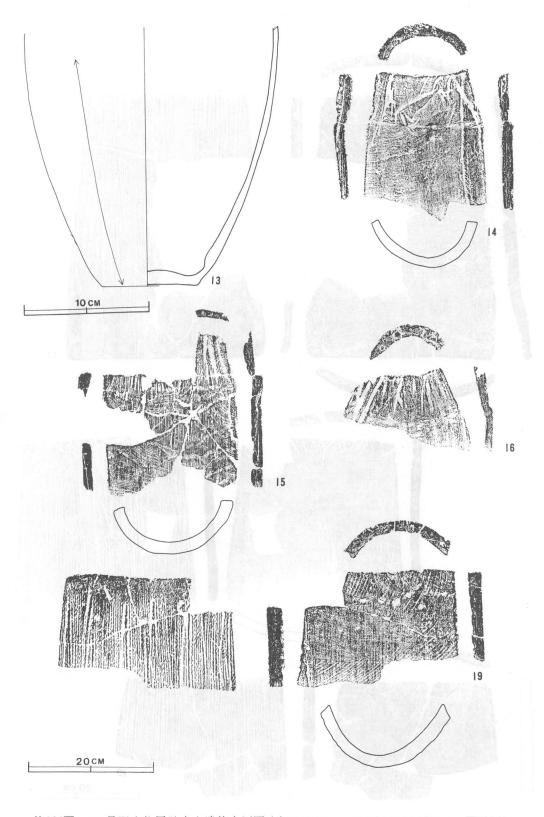
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・石製品・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が、 竈前面の覆土中から出土している。漆紙は、中央部覆土中層から2点、南壁際の覆土中層から1 点、計3点出土している。瓦は、西壁外のテラス上に敷きつめた状態で出土している。

143号竪穴住居跡出土遺物観察表(第263~266図)

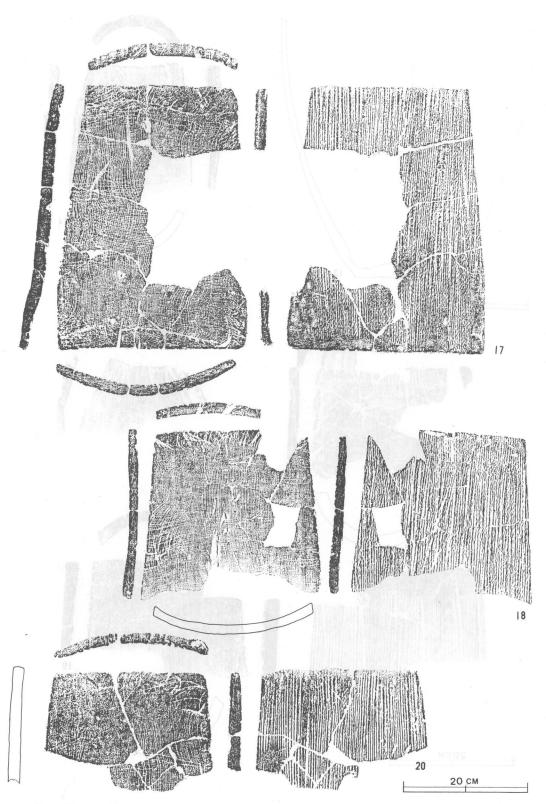
番号	<u>п</u>	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A(13.9) B 4.3 C (8.2)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭な角度で分かれ、体部 は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水 挽き成形で底部は多方向の静止箆削り調整。体部内面中位から 体部外面中位にかけ横ナデ調整。体部下位は荒い手持ち箆削り 調整。	黄灰色 細砂・長石粒 雲母 普通	・長石微粒・
2	S	高台付埦	A 17.2 B 5.7 D 7.7	体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は強く外反して端部を 丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部に 面をなす。水挽き成形で、底部は回転箆削り調整後、横ナデ調 整。他は全体に横ナデ調整。	明褐灰色。 細砂・長石粒・ なま焼け 体部外面に指頭	
3	S	甕		体部の一部。粘土紐積み上げ成形で、体部内面に粘土紐痕を残す。体部外面は平行叩き目調整後、肩部は箆削り調整。体部内面は箆ナデ調整。全体に薄手作り。摩滅が進行。	灰オリーブ色 細砂・長石粒 不良	
4	S	甕		体部の一部。体部外面は格子状叩き目調整。内面はナデ調整。 薄手作り。	オリーブ黄色 細砂・雲母 不良	
5	S	龚		体部の一部。体部外面は格子状叩き目調整。内面は箆ナデ後ナ デ調整。やや摩滅する。	灰色 細砂 普通	
6	S	装		底部は静止箆削り調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面はナデ調整。体部下位は箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 良好	<u>.</u>
7	Н	扩不	A(13.4) B 3.9 C (8.3)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸 くおさめている。水挽き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の 回転箆削り調整。口縁部外面と体部外面は横ナデ調整。体部下 端部は回転箆削り調整。内面全体は箆磨き後黒色処理。	にぶい橙色 細砂・長石粒 普通 底部外面に墨	
8	Н	高台付坏	D 5.9	底部と体部の境界はあまい稜を持ち、体部は内彎気味に外上方にの びる。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、端部を丸 くおさめている。水挽き成形で底部は回転箆削り調整。高台内・ 外面は横ナデ調整。内面全体は箆磨き後、黒色処理。	橙色 細砂・雲母 普通 底部外面に墨	書
9	Н	高台付皿	A 14.9 B 3.0 D 7.5	体部は外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転篦削り調整。体部外面と口縁部外面及び高台内・外面は横ナデ調整。内面全体は箆磨き調整。	明赤褐色 細砂・長石粒 良好	1・雲母
10	Н	高台付皿	A(12.1) B 2.7 D 6.2	体部は外上方に大きく開き、口縁外端部にあまい稜を持つ。高 台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をなす。 水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部外 面と体部外面は回転箆削り後横ナデ調整。内面は箆磨き後黒色 処理。	にぶい橙色 砂粒・長石料 普通 底部外面に墨	
11	Н	蓌	A (20.4) F 25.0	体部は内彎しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、 口縁端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。 体部内面は箆ナデ後、ナデ調整。体部外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石料 普通 体部外面全体	



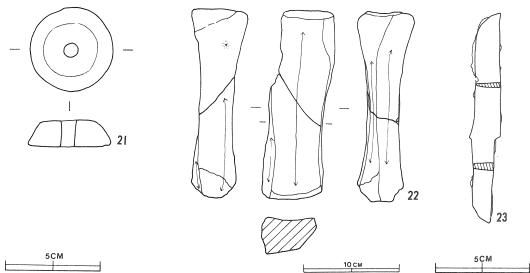
第263図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第264図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第265図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)



第266図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
12	Н	甕	A 13.3 F 14.7	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁外端部はやや凹む。体部内面と頸部内面に粘土紐痕を残す。 口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面は箆ナデ後ナデ調整。 体部外面中位までは箆ナデ調整。中位から下位は箆削り調整。	明赤褐色 砂粒・長石粒・ 良好	雲母・礫
13	Н	甕	C 7.7 F 20.2	平底の底部から体部は内彎しつつ外上方にのびる。体部内面に粘土 細痕を残す。体部外面は縦位の箆ナデ調整。底部外面と体部内面は 箆ナデ。底部内面はナデ調整。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・長石粒多 普通	·石英粒多
14	丸	瓦	全長(23.5) 狭端 13.8 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。凸面は篦削り調整。凹面は布目を残すが、一部布 の当たらない面を見る。側面は分割截面のままで無調整。端面は 篦ナデ調整。	灰白色 砂粒·長石粒多 硬質	·長石微粒多
15	丸	瓦	全長(25.0) 狭端(4.5) 厚さ 1.8	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。凹面は布目を残す。側面は箆削り調整で、上・下端部に面取りが施されている。端面は箆削り調整。	灰オリーブ色 細砂・長石粒多 粒多 やや軟質 凸面に煤付着	••長石微
16	丸	瓦	全長(14.0) 狭端(11.5) 厚さ 1.7	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。凹面は布目を残す。側面と端面は箆削り調整。	褐灰色 細砂・長石粒多 粒多 硬質 断面に鉄分付着	
17	平	瓦	全長 42.5 狭端 24.5 広端 28.5 厚さ 1.8	中央付近が欠損し、「コ」の字状に残存。凸面は縦位の縄目叩きが施され、広端付近は篦削りと指頭押圧痕が見られる。凹面は布目を残すが一部布の当たらない面を見る。側面と端面は箆削り調整。	灰色 砂粒・長石粒多 粒多・礫 やや硬質 凹面と側面に煤	•
18	平	瓦	全長(26.9) 狭端(16.5) 厚さ 1.6	凸面はほぼ縦位の繩目叩きがみられ、凹面は布目を残すが、挟端付近は布が当たらない。側面と端面は箆削り調整で、端面に凹みを持つ。	灰色 砂粒・長石粒多 粒多 堅緻	・長石微
19	平	瓦	全長(17.7) 狭端(15.0) 厚さ 2.0	全体に歪みを持つ。一枚作りかと思われ、凹面に粘土タタラ取りの痕跡を残す。凸面は縦位の縄目叩きがみられる。凹面は布目を残す。側面と端面は箆削り調整。	黄灰色 砂粒・長石粒・ 硬質 狭端に鉄分付着	礫
20	平	瓦	全長(23.6) 狭端(24.4) 厚さ 1.8	凸面は縦位の繩目叩きがみられ、凹面は布目を残すが、狭端付近は布が当たらない。側面と端面は箆削り調整。全体にやや摩滅する。	灰黄色 砂粒・長石粒多・ やや硬質	長石微粒多

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種	類	法量(cm)	形	態	の	特	徴	備	考
21	紡錘車	底径4.4 高さ1.5 孔径0.8	台形を呈す。	粘板岩 34.3 g	23	刀	子	全長10.9 刃幅1.3 刃長6.6	ほぼき棟とう			そ有す	トる。		
22	砥 石	20.0×5.5 3.4	長方形を呈す大形の砥石 で, 二側面を除いて全面 に使用痕が認められる。	流紋岩 850.5 g										4	99 to 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

144号竪穴住居跡 (第267図)

調査区 E3a1 区を中心に確認され、102号竪穴住居跡の北方に位置している。規模は、東西4.25 m・南北4.4mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸方形を呈している。

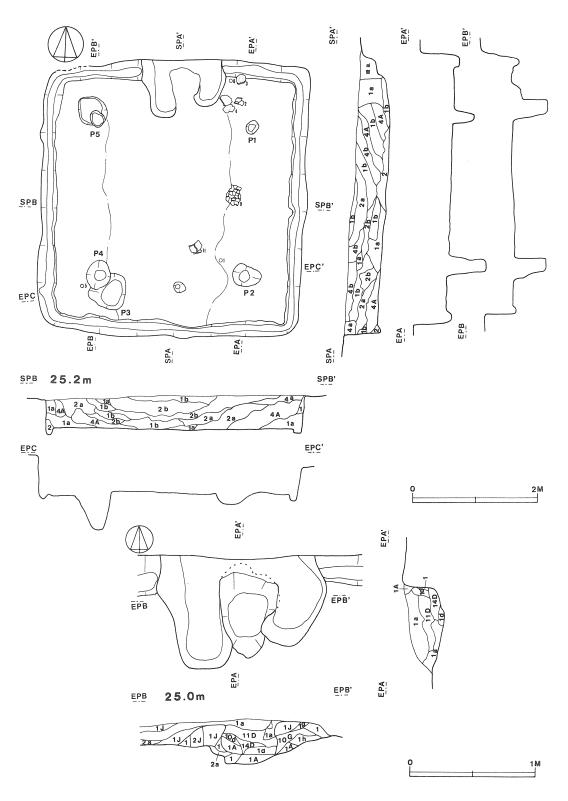
覆土は、上部に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、ローム小ブロック・炭化粒子を含み、部分的に人為的な堆積がみられる。壁は高さ50cmと深く、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が全周する。床面は、南壁部から北側に向かってゆるやかに下がっている。また、南壁直下から竈前面にかけての中央部の幅2mほどは、特に踏み固められている。ピットは5か所で、深さは、35~60cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、上部は攪乱を受けているが、長さ0.9m・幅1.3m・焚口部幅0.3mを測り、壁外へは掘り込まずに構築されている。袖は山砂を主体として築かれ、焼成部は床面より10cm低く、焼土および灰が15cm程堆積している。煙道部はほぼ垂直に立ち上がる。

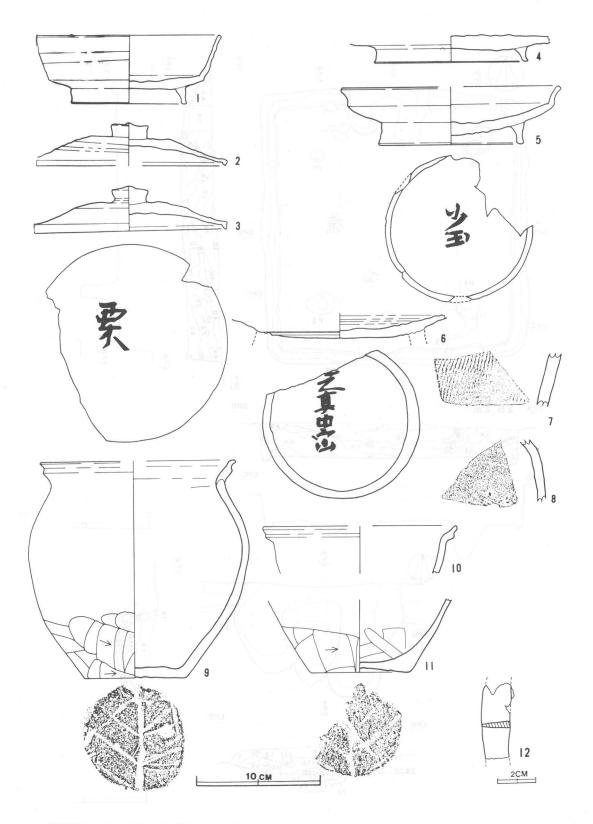
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・羽口・鉄製品が東半部の床面付近から出土しているが、点数は少ない。

144号竪穴住居跡出土遺物観察表(第268図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A 14.6 B 5.5 D 9.2	底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外 上方にのびる。口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめてい る。高台は外下方にのび、外端部に稜をなす。右ロクロ水挽き 成形で、底部は回転篦削り調整。体部内面から口縁部外面にか け横ナデ。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母 普通 底部内面に鉄分付着
2	S	蓋	A(15.3) B 3.5	天井部中央に、中心が高く周囲が凹むつまみが付く。天井頂部は扁平で、天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で。天井頂部から天井部中位にかけ石ロクロ使用の回転箆削り調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 砂粒·長石粒多·長石微 粒·雲母 普通
3	S	蓋	A 15.3 B 3.6	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部中位からや や反り気味に下降し、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形 で、天井部中位は右ロクロ使用の回転箆削り調整。つまみと天 井頂部及び天井部中位から内面全体に横ナデ調整。	にぶい橙色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母 なま焼け 天井部内面に墨書
4	s	台 付 盤	D 12.3	貼り付け高台は外下方にのび、「ハ」の字状をなし内・外端部に 鋭い稜を持つ。水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り 調整。高台内・外面は横ナデ調整。	暗灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 底部内面に黄白色の自然釉



第267図 144号竪穴住居跡・竈実測図



第268図 144号竪穴住居跡出土遺物実測図

	Т.	ID 725	3.4. mm / 3	The state of the s		
番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
5	S	台 付 盤	A(17.3) B 4.7 D 11.6	底部と体部は境界をなさない。体部は丸味を帯びた底部から内 彎気味に外上方にのび、口縁部は強く外反し、端部を丸くおさ めている。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部をやや丸く おさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。	黄灰色 細砂・長石粒・ 普通 底部外面に墨	
6	S	台 付 盤		貼り付け高台は欠損。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回 転篦削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長 不良 底部外面に墨	
7	S	甕		体部の一部。外面は平行叩き目調整後一部に箆削りがみられる。 内面は箆ナデ及びナデ調整。	灰黄色 細砂・やや精 普通	良
8	S	套		体部の肩部。外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好	
9	Н	甕	A(15.4) B 17.4 C 8.0 F 17.5	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁外端面に凹みを持たせ、端部を外反気味につまみ出す。頸部内面と体部内面に粘土紐痕を残す。体部内面と体部外面中位は箆井デ。体部外面下位は箆削り調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲 普通 底部外面に木	
10	Н	甕	A(15.3)	底部は平底と思われるが欠損。体部は内彎し、「く」の字状に屈 曲する口縁部が付く。口縁部外端面に凹みを持たせ、端部を外 上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・雲母 普通	
11	Н	甕	C 7.8	やや盛り上がった平底の底部から体部はやや内彎気味に外上方にのびる。体部外面は箆削り調整。体部内面と底部内面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲 普通 底部外面に木	
12	刀	子か	全長(3.8) 刃幅 1.5	両端部欠損。		

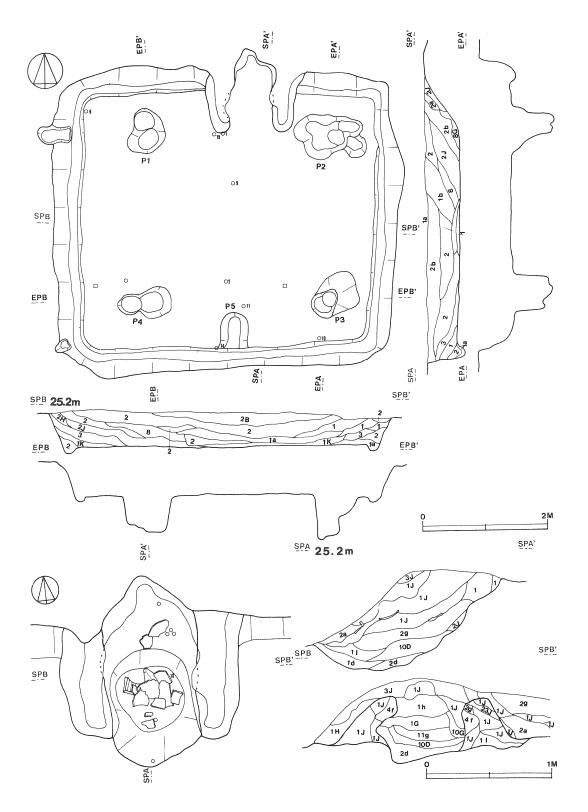
145号竪穴住居跡 (第269図)

調査区 D2j8 区を中心に確認され、144号竪穴住居跡の西に位置している。規模は、東西5.48m・南北4.85mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

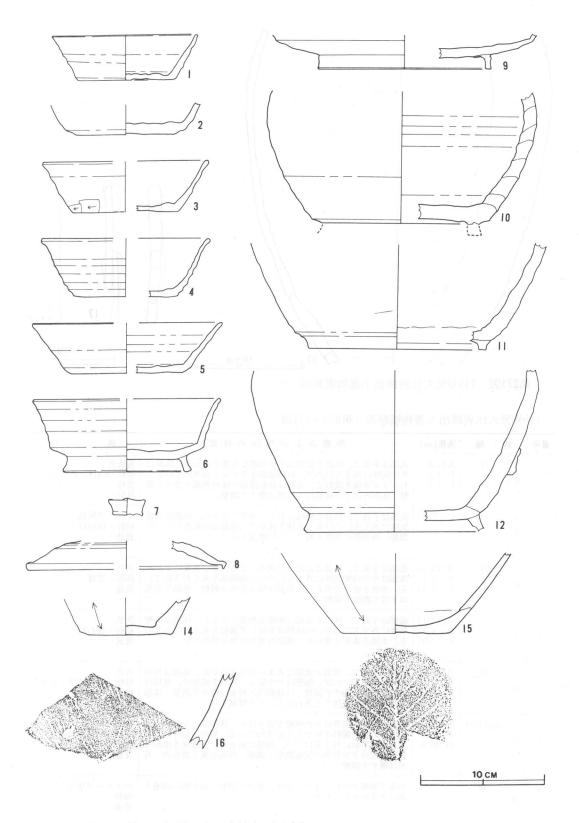
覆土は、暗褐色土を主体とし、北半部には、北方からロームブロックを含む層が人為的な堆積を示している。また、南半部は、自然堆積の状況を示している。壁は高さ50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が全周する。床面は平坦で、全体的に踏み固められている。南壁中央部の壁溝に接して浅いピットがあり、入口部の施設とみられる。ピットは4か所確認され、それぞれ2個のピットが重複している。いずれも壁寄りの外側にあるピットが新しく、拡張または建て替えが行われたものとみられる。深さは、30cm内外である。

竈は、北壁やや東寄りにあり、長さ1.53m・幅1.38m・焚口部幅63cmを測り、壁外へ32cm程掘り込んで構築されている。袖は山砂を突き固めて築かれている。焼成部は床面より18cm低く、30度の傾斜をもって煙道部へ続く。焼土は、20cm程堆積している。焼成部中央には、つぶれた土師器甕・瓦・石が出土している。

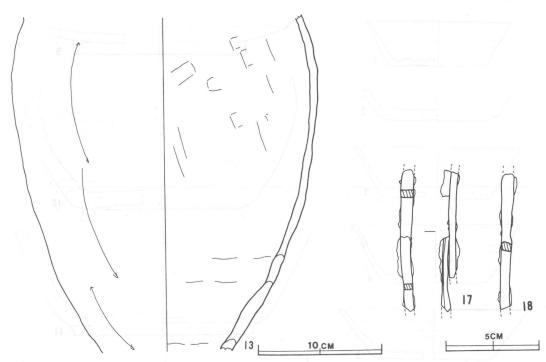
遺物は、覆土から土師器・須恵器・転用硯・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が出土している。



第269図 145号竪穴住居跡・竈実測図



第270図 145号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第271図 145号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

145号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第270・271図)

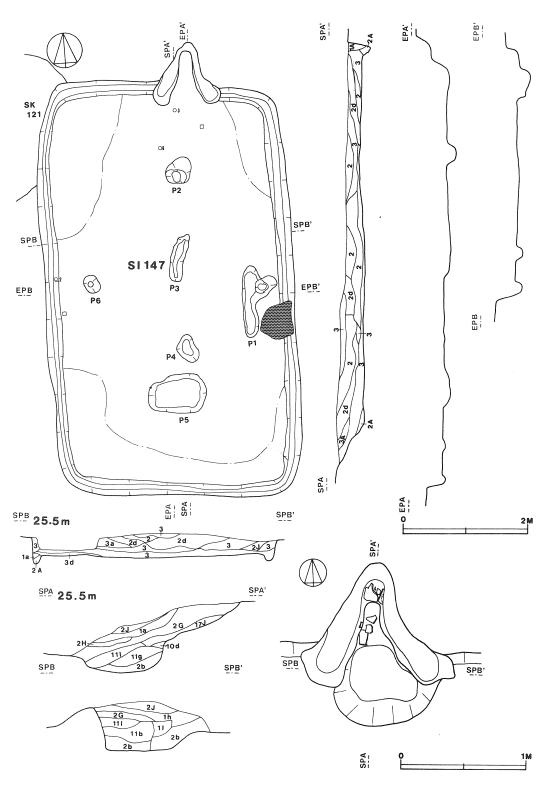
番号	ş	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	才不	A11.6 B 3.6 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部をやや丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後外周部を箆ナデ調 整。体部内面と口縁部内・外面は横ナデ調整。	青灰色 砂粒·長石粒·長石微粒· 雲母 良好
2	S	坏	C 7.5	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部は内彎 気味に外上方にのびる。水挽き成形で、底部は回転篦切りで無 調整。外周部に箆傷を残す。やや摩滅する。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・鉄分 普通
3	S	坏	A(13.1) B 4.1 C (8.3)	底部は平底で、体部と底部は箆削りによる明瞭な角度で分かれ、 体部はやや内彎気味に外上方にのび口縁端部を丸くおさめてい る。水挽き成形と思われ、底部は静止箆削り調整。体部下端部 は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・雲母 普通
4	S	- 63	A(13.1) B 4.7 C (7.9)	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内彎 気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめてい る。水挽き成形と思われ、底部外周部は静止箆削りか。	灰色 細砂・長石粒 普通
5	S	坏	A(15.0) B 4.1 C (8.7)	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれ、体部は外傾 気味に外上方にのび、端部はやや尖る。水挽き成形で、底部は 回転箆切り後箆ナデ調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部 下端部は回転篦削りと思われる。やや摩滅する。	灰色 砂粒・長石粒多・長石微 粒 普通
6	S	高台付坏	A (14.7) B 5.9 D 10.3	底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、端部をやや丸くおさめている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。内面全体と高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂·長石粒·長石微粒・ 鉄分 普通
7	S	蓋		中高で周囲が凹むつまみ。全体に横ナデ調整。接合部に渦巻き 状にきざみがみられる。	明オリーブ灰色 細砂 普通

番号	+	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8	S	蓋	A(15.7)	天井頂部は丸く, 天井部と口縁部の境界はやや明瞭な稜を持ち, 口縁部は下方向に屈曲し,端部はやや尖る。水挽き成形と思われ, 天井頂部は右ロクロ使用の回転箆削り調整 天井部中位から口縁部内・外面及び天井部内面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石微粒・鉄分 普通 天井部内面に黄白色の自然釉 遊さ重ね焼き
9	S	台 付 盤	D(13.8)	底部と体部は境界をなさない。体部は外上方に大きく開く 高台は貼り付けで、ややふんばり気味に下方向にのび、端 部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転 箆削り調整。体部外面と高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好
10	S	台 付 壺		体部は内彎しつつ外上方に立ち上がる。口縁部と高台は欠損。粘土組積み上げ成形と思われ、体部断面に不規則な気泡を見る。体部内面は横ナデ調整。体部外面は箆ナデ後、ナデ調整。体部下端部は回転箆削り調整。底部外面は箆削り後ナデ調整。全体に厚手な作り。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分多 普通 底部内面に黄白色の自然釉
11	S	台 付 壺	D(14.3)	体部は内彎気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで下方向に短くのび、端部に面をなす。体部外面と高台内・外面は 横ナデ調整。体部外面は箆ナデ後ナデ調整。体部下端部は 回転箆削り調整。体部外面と高台外面に粘土紐痕を残す。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・鉄分多 良好 底部内面に黄白色の自然釉
12	S	台 付 壺	F 23.0	体部は内彎しつつ立ち上がる。高台は「ハ」の字状に外下 方にのびるが端部は欠損。体部外面に他の須恵器片が付着。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分多 良好 外面全体と底部内面に緑黒色の ビードロ状自然釉 SD09と接合
13	Н	甕	F 24.3	体部は内彎しつつ外上方に立ち上がる。体部内面に粘土紐 痕を残す。体部内面は箆ナデ後ナデ調整。体部外面は縦位 の箆ナデ調整。	明赤褐色 砂粒·長石粒·長石微粒·雲母 普通 体部外面に煤付着
14	Н	甕	C 7.3	平底の底部。体部内・外面は箆ナデ調整。底部内面はナデ調整。底部外面は木葉痕の上から箆ナデとナデ調整。	赤橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
15	Н	甕	C 8.6	平底の底部から体部は内彎気味に外上方にのびる。体部内 ・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通 底部外面に木葉痕
16	Н	甕		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。 摩滅が進行。	にぶい黄橙色 細砂・長石粒 不良
17 18		金族		茎部。 17は2本が付着している。 18は全長(7.1cm),茎径0.55cm,両端部欠損。	

147号竪穴住居跡 (第272図)

調査区 E1fo区を中心に確認され、146号工房跡の南方に位置し、西壁寄りで12号掘立柱建物跡と、北西隅で121号土壙と重複している。新旧関係は、両跡とも当跡より新しいものとみられる。規模は、東西3.97m・南北6.59mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、最下層と上層の一部にロームブロックを多量に含み、人為的堆積とみられるが、他は自然堆積とみられる。壁は、高さ20~30cmを測り、70度内外の傾斜をもって立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ15cm内外の壁溝が全周する。床面はほぼ平坦で、北東・北西の各隅と、南東隅から南壁付近を経て、南西隅にかけてのコの字形の部分を除いては、良く踏み固められている。また、東壁中央部直下に、粘土を突き固めたステップ状のものと、小ピット

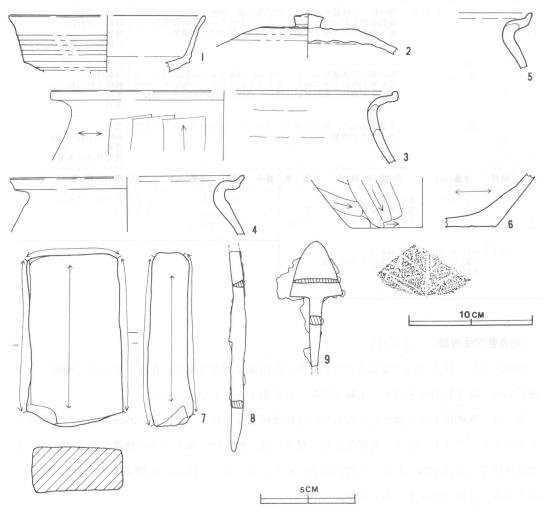


第272図 147号竪穴住居跡・竈実測図

があり床面の状態と考え合わせると, 入口部の施設とみられる。

竈は、北壁中央やや東寄りにあり、長さ1.3m・幅1.2m・焚口部幅0.6mを測り、壁外へ70cm掘り込まれている。袖部は山砂を主体として築かれているが、短いものである。焼成部は床面より12cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は、厚い部分で15cmの堆積がみられる。煙道部付近に土師器甕が、つぶれた状態で出土している。

遺物は床面付近から少量の土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が出土している。



第273図 147号竪穴住居跡出土遺物実測図

147号竪穴住居跡出土遺物観察表(第273図)

番号	岩	暑 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
- 1	S	高台付坏	A(15.5)	底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部で外反し、端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水挽き成形と思われ、内面全体と口縁部外面にかけて横ナデ調整。全体に摩滅する。	砂粒・長石	粒・長石微粒 漆付着

番号	F	器 種	法量(cm)	形	態およ	び手	- 法 σ) 特 徴		備	考
2	S	蓋 (転用硯か)		天井部中央にボタ 水挽き成形で, 天 整。天井部内面中	井頂部は	回転箆	削り調	整。つまみは横	扁平。	灰色 砂粒·長石粒·長 分多 普通	·石微粒·鉄
3	Н	甕	A (27.4)	胴の張った体部かなす。口縁部内・ は箆ナデ後ナデ調	外面と頸	部内面	は横ナ	デ調整。体部内	に面を・外面	赤色 砂粒・長石粒多 良好	・雲母
4	Н	甕	A(18.6)	胴の張った体部か 端部を外上方につ 面と頸部内面は横	まみ出し,	丸く.	おさめ	ている。口頸部	が付き, 内・外	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通 口縁部内・外面	
5	Н	猠		胴の張った体部か 部を外上方につま。 は横ナデ調整。体料	み出し、う	丸くお	さめてい	ハる。口頸部内	・外面	浅黄橙色 砂粒·長石粒· 雲母 不良	石英粒・
6	Н	獲		平底の底部で,体育内面はナデ調整。	部は外上	方にのは	びる。 作	本部外面は箆ナ	デ調整。	橙色 砂粒・長石粒・石英 普通 底部外面に木葉	
番号	種類	法量(em)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	備考
7	砥石	9.1274.9	使月	5形を呈し,全面に 月痕が認められる。 員部分あり。	シルト 岩 170g	9	鏃	全長(6.7) 刃幅 2.4 刃長 3.0	三角形下部外	ジの平根式である。 で損。	
8	刀子	全長(10. 刃幅 0. 茎長 5.	6 刃音	記部欠損。 Bと茎部との間に関 可する。							4

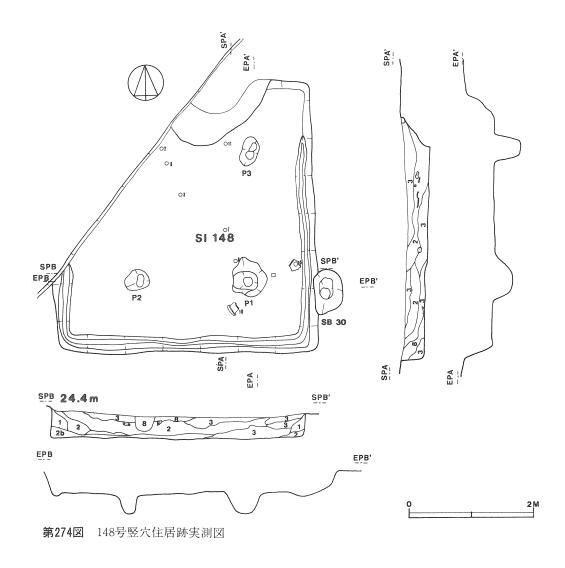
148号竪穴住居跡 (第274図)

調査区 D1 i $_7$ 区を中心に確認されているが、北西部は調査区域外に存在している。規模は、東西4.26m・南北4.34mを測り、主軸方向N-0°を指す方形を呈している。

覆土は、黒褐色土を主体とし、おおむね自然堆積とみられる。壁は高さ35cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。北壁部を除く壁下には、幅16cm・深さ3cmの壁溝が回っている。床面は平坦で、ほぼ全面にわたって踏み固められている。ピットは3か所確認され、深さは40~53cmを測る。主柱穴は4本とみられる。

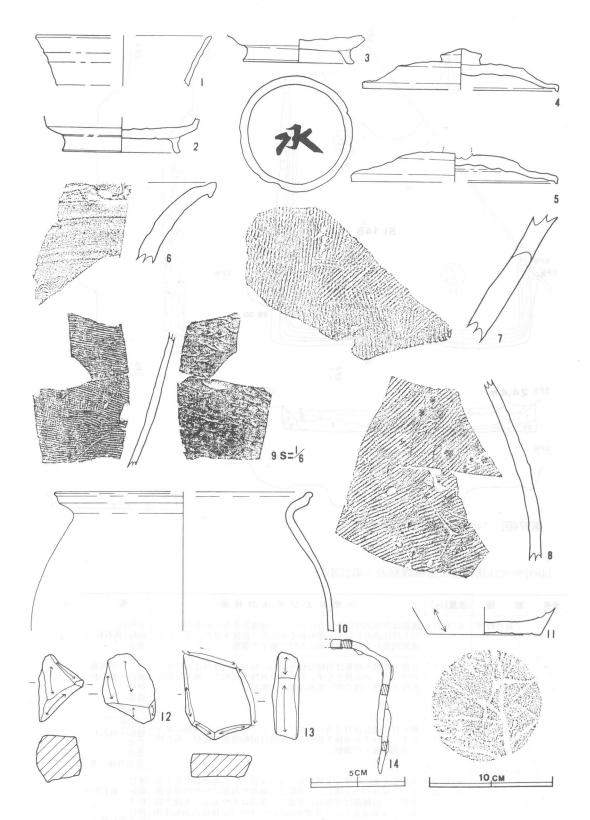
竈は、北壁やや東寄りに確認され袖部は山砂を主体として構築されている。焼成部は床面より 10cm低く、急傾斜で煙道部へ続く。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、竈前面から中央部付近の覆土中から出土している。また、ほぼ中央部覆土下層より大形の割石が数個出土している。



148号竪穴住居跡出土遺物観察表(第275図)

番号	Ę	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A(13.9)	体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 貼り付け高台が付くと思われるが欠損。水挽き成形と思われる。 体部内面から口縁部外面にかけて横ナデ調整。	青灰色 細砂·長石粒·長石微粒 普通
2	S	高台付坏	D 9.5	体部と底部の境界は明瞭な稜を持つ。貼り付け高台は外下方に のび「ハ」の字状をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転 箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石微粒 鉄分 普通 重ね焼き
3	S	高台付坏	D 9.0	貼り付け高台は外下方にのび「ハ」の字状をなし、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 雲母 普通 底部外面に墨書
4	S	蓋	A (15.6) B 3.4	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部はやや扁平で、反りつつ下降し、天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持つ。口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水挽き成形で、天井頂部から天井部中位にかけ、右ロクロ使用の回転篦削り調整。	灰色 細砂・長石粒多・長石微 粒多 良好 逸さ重ね焼き

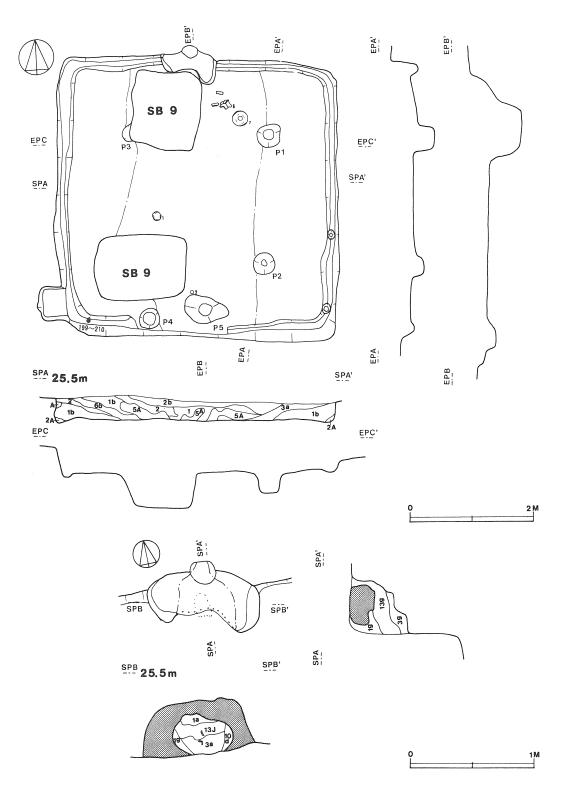


第275図 148号竪穴住居跡出土遺物実測図

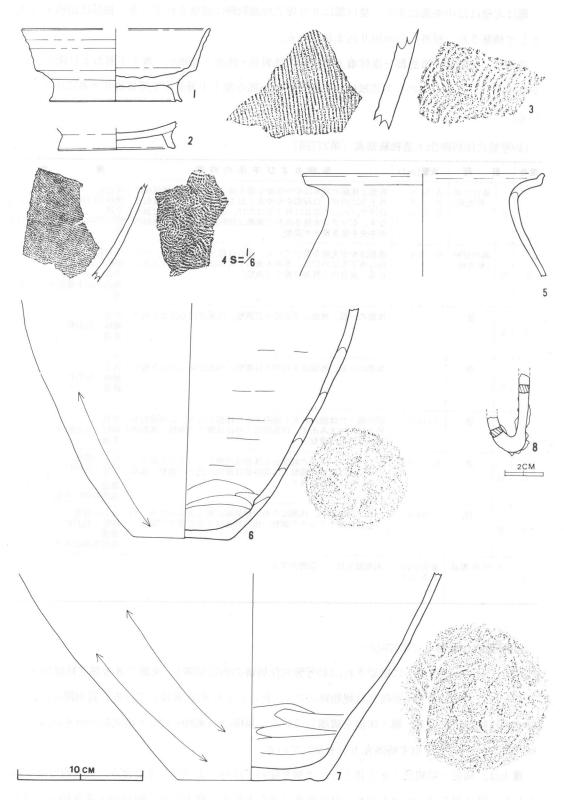
番号		器	種	法量	(cm)	形	態およ	び手	法の生	 持 徴		備	考	Management
5	S	蓋 A(16.4)			6.4)	つまみは欠損。天 部と口縁部の境界 曲する。右ロクロ 内面中位は回転箆	にややあ 水挽き成	まい稜 形で,	をもつ。 天井部は	口縁部は下 回転箆削り	方向に屈 , 天井部	細砂・長石粒・	長石微	数粒
6	S		甕			口縁部の一部。内 デと櫛状工具によ				調整。外面	は刷毛ナ	外面―暗緑灰色 内面―灰色 細砂・長石粒 良好		
7	S		甕			体部の一部。外面 痕を残す。	は平行叩	き目調	整。内面	はナデ調整	で粘土紐	緑灰色 細砂・長石粒 良好		
8	S		甕			体部の一部。外面(分的に剝離する。						暗青灰色 細砂・長石粒 良好		
9	S		甕			体部の一部。外面に	は平行叩	き目調	整。内面	は箆ナデ調	整。	にぶい橙色 細砂・長石粒 なま焼け		
10	S		甕	A (20 F 24		丸く胴の張った体系 口縁端部を外上方に ・外面は横ナデ調型 デ後、ナデ調整。か	こつまみ! 怪。体部!	出して 対面はĵ	丸くおさぬ	カている。1	コ頸部内	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 母 普通	石英・	雲
11	S		甕	C 9	.0	平底の底部。内面に		とナデ	調整。			橙色 砂粒・長石粒 普通 底部外面に木葉:	痕	
番号	種	類	法量(cm)	形	態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	備	考
12	砥	石	3.4× 2.3	月		を呈し、全面に使 認められる。欠損 り。	流紋岩 163 g	14	不 明 鉄製品	太さ0.25 0.4		寸着し一方はL字 している。		
13	砥 (転用		4.0× 1.2			除いて全側面に使 認められる。	鉄分付 着 須恵器 片利用						-	

149号竪穴住居跡 (第276図)

調査区 E 1c 8 区を中心に確認され,146 号工房跡の南西に位置し,西側で 9 号掘立柱建物跡の $P_2 \cdot P_3$ と重複している。新旧関係は,9 号掘立柱建物跡が新しく,当跡の竈,床面を破壊している。規模は,東西4.56 m・南北4.49 mを測り,主軸方向 N-3 ° -E を指す略隅丸方形を呈している。 覆土は,暗褐色土を主体とし, 3 層に大別でき,上・下層は自然推積,中層はロームブロック・炭化粒子を含み,人為的な堆積とみられる。壁は高さ15 ~45 cmを測り,80 度内外の傾斜をもって立ち上がる。壁下には,南壁中央部1.4 mの間を除き,幅8 ~15 cm・深さ5 ~15 cmの壁溝が回っている。床面はほぼ平坦で,南壁下から竈前面にかけての幅2 mの範囲は良く踏み固められている。ピットは5 か所確認され, P_1 ~ P_3 が主柱穴とみられる。深さは50 cm内外を測る。



第276図 149号竪穴住居跡・竈実測図



第277図 149号竪穴住居跡出土遺物実測図

竈は北壁ほぼ中央部にあり、焚口部は8号掘立柱建物跡に破壊されている。袖部は山砂を主体として構築され、壁外へ15cm掘り込まれている。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・鉄製品・鉄滓・漆紙が、覆土下層および床面付近から出土している。このうち漆紙は、南西コーナー部の覆土中層から土師器甕片と共に出土している。

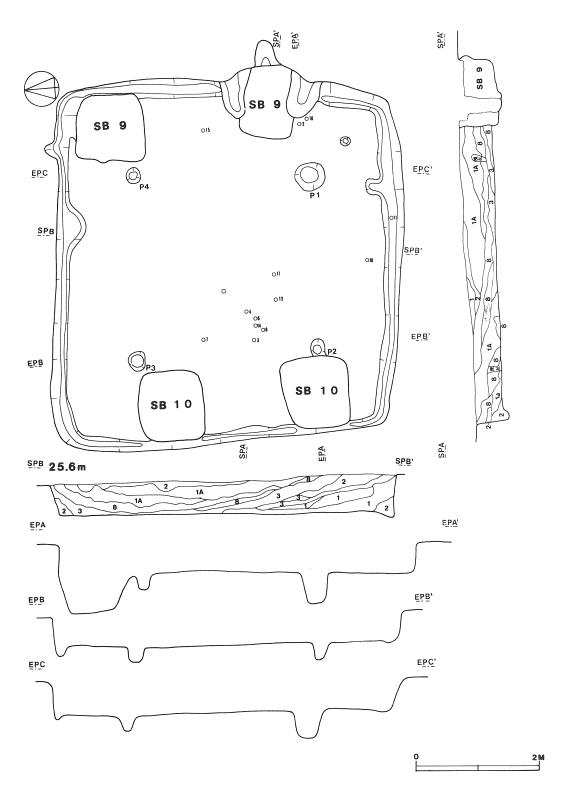
149号竪穴住居跡出土遺物観察表(第277図)

番号	1	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏(転用硯)		底部と体部の境界はやや明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に 外上方にのび、口縁部をやや丸くおさめている。高台は貼り 付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、端部にやや凹んだ面を なす。右ロクロ水挽き成形で底部は回転篦削り調整。底部内 面中央を除き横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良 高台内面と底部外面に墨付 着
2	S	高台付坏 (転用硯)	D 9.4	底部はやや丸味を帯びている。高台は貼り付けで、「ハ」の字 状に外下方にのびる。水挽き成形で底部は回転篦削りと思わ れる。高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・雲母 不良 高台内面と底部外面に墨付 着
3	S	甕		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒 普通
4	S	甕		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒 普通
5	Н	甕	A(19.3)	胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、口縁端部を 外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・ 外面は箆ナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通
6	Н	甕	C 7.6	やや小形で、平底の底部から体部は内彎しつつ立ち上がる。 内面全体は箆ナデ調整。体部外面は縦位の箆ナデ調整。体部 内面に粘土紐痕を残す。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母・スコ リア 普通 底部外面に木葉痕
7	Н	甕	C 11.8	平底の底部から, 体部はやや内彎気味に外上方にのびる。内 面全体は箆ナデとナデ調整。体部外面は丁寧な箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
8	不	明 鉄 製品	全長(7.0) 太さ 0.5	両端部欠損。一部彎曲する。	

150号竪穴住居跡 (第278図)

調査区 E1 c6 区を中心に確認され、149号竪穴住居跡の西に位置し、東側で8号掘立柱建物跡のP6・P7と、西側で10号掘立柱建物跡のP3・P4とそれぞれ重複している。新旧関係は、両掘立柱建物跡が新しく、竈・床面を破壊している。規模は、東西6.32m・南北5.58mを測り、主軸方向 N-98°-Eを指す略隅丸方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、下層を除いてはロームブロックを含み、人為的堆積とみられる。壁は高さ45~65cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝



第278回 150号竪穴住居跡実測図

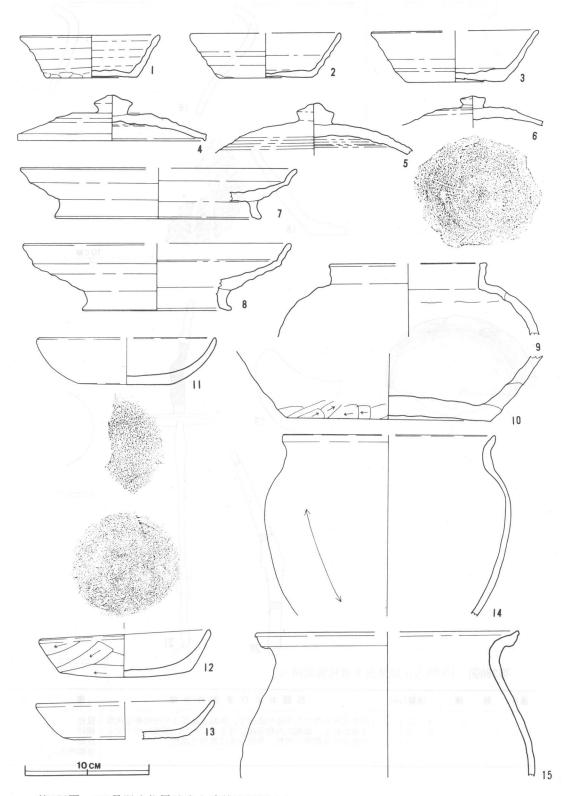
が全周する。床面は失われている部分もあるが、南壁中央から竈焚口部にかけての $3.5 \times 3.5 \,\mathrm{m}$ の範囲は良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ は径 $30 \,\mathrm{cm}$ ・深さ $30 \,\mathrm{cm}$ クケであるが、 P_1 は径 $50 \,\mathrm{cm}$ ・深さ $50 \,\mathrm{cm}$ を測る。

竈は、東壁やや南寄りにあるが、前述のように 9 号掘立柱建物跡によって大部分が失われている。袖部は山砂を主体として構築され、幅1.55mを測る。壁外へ50cmほど掘り込まれている。

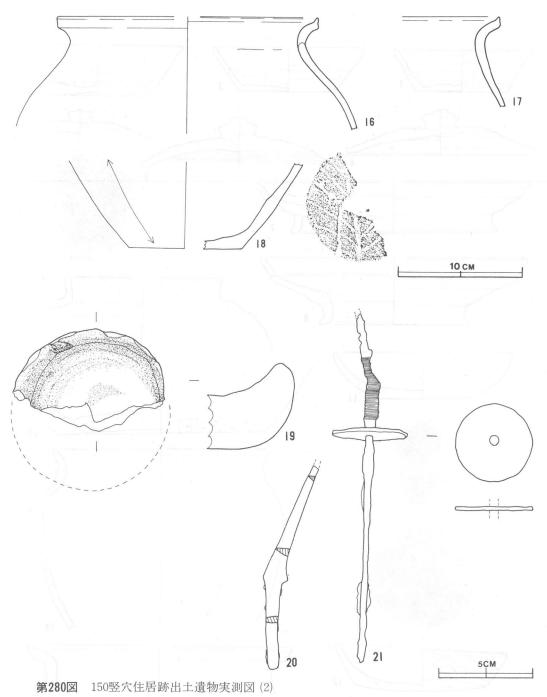
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・土製品・鉄製品・鉄滓が、踏み固められた 床面付近から出土している。

150号竪穴住居跡出土遺物観察表(第279・280図)

番号	井	暑 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A(11.1) B 3.5 C 7.3	底部は平底で、体部と底部は篦削りによって鋭く明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部はやや尖る。 右ロクロ水挽き成形で、底部は一方向の静止篦削り調整。体部下端部は手持ち篦削り調整。	灰色 細砂・長石粒 良好	・長石微粒
2	S	坏	A(12.0) B 3.6 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部はやや尖る。水挽き成形で、 底部は回転箆削り調整。底部中心を薄く作る。	灰白色 細砂・長石微 不良 全体に漆付着	
3	S	坏	A(13.4) B 4.2 C 8.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや 内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロク ロ水挽き成形で、底部は回転篦切り後、多方向の荒い静止篦削り 調整。口縁部内・外面と体部内・外面は横ナデ調整。	灰色 - 細砂・長石粒 普通	・長石微粒
4	S	蓋	A 15.0 B 3.7	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部は僅かに に凹み、天井部は直線的に下降する。天井部と口縁部の境界に明 瞭な稜を持ち、口縁部は短く下方向に屈曲する。水挽き成形で、 天井頂部から天井部中位にかけ右ロクロ使用の回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石大 粒 普通	粒・長石微
5	S	蓋		天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸い。 水挽き成形で、天井頂部から天井部中位にかけ回転箆削り後、多方 向の静止箆削り調整。つまみは横ナデ調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・ 雲母 不良	長石微粒・
6	S	蓋		天井部中央に小形で扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部は丸味を帯び、外反しながら下降する。水挽き成形で、天井頂部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。つまみと天井部内面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・ 普通 天井部内面に	
7	S	台付盤	A(22.2) B 4.1 D(16.7)	体部は内彎気味に外上方に大きく開く。体部と口縁部の境界にあまい稜を持ち、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのびる。水挽き成形で、口縁部内・外面と高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒 雲母 不良	・長石微粒・
8	S	台付盤	A(21.3) B 5.5 D(12.1)	体部は内彎気味に外上方に大きく開く。体部と口縁部の境界にや やあまい稜を持ち、口縁部は外傾気味に外上方にのびて端部を丸 くおさめている。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部に面を なす。水挽き成形で、口縁部内面と高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 雲母 不良	・長石微粒・
9	S	短頸壺	A(12.6)	丸く胴の張った体部から頸部内面に稜を持ち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は平坦におさめている。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外面は回転箆削り後、軽い横ナデ調整。体部内面はナデ調整。体部内面に粘土紐痕を残す。摩滅が進行。	灰色 細砂・長石粒 不良	・長石微粒
10	S	築	C 16.7	やや盛り上がった平底の底部から体部はやや内彎気味に外上方に のびる。底部内・外面と体部内面は、ナデ調整。体部外面は箆ナ デ調整。僅かに平行叩き目痕を見る。体部下端部は静止箆削り調 整。	灰白色 細砂・長石粒・ 雲母多 不良	長石微粒・
11	Н	坏	A(14.3) B 3.3 C (7.6)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭でない。内面全体は箆磨き調整。口縁部外面は横ナデ調整。体部外面と底部外面は箆削 り調整。	橙色 細砂・石英・ 良好	雲母



第279図 150号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



番号 器 種 法量(cm) 形態および手法の特徴 備 考 やや丸味を帯びた平底の底部で、体部と底部はやや明瞭な角度 で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび、端部はやや尖る。 内面全体は篦磨き調整。外面全体は篦削り調整。 橙色 坏 13.5 12 Н В 3.9 細砂 10.6 良好 底部内面に線刻

番号		器	種	法量(cm) 形	態お	; J	び手	法の	诗 徴		備	考	
13	Н		坏	A(14.3 B 3.0 C (9.1	かれ、体部はやや	内彎気は箆原	元味	に外上 調整。	方にのび	,端部を丸くお	さめ	橙色 細砂・スコリア 普通		
14	Н		壺	A(16.6 F 19.9	胴の張った体部かが付く。口頸部内 寛ナデ調整。体部	・外面	可は	横ナデ	調整。体	部外面は箆削り	禄部 後,	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・ コリア 普通 体部外面に煤付	•	・ス
15	Н		甕	A (21.2) F 23.8	胴の張った体部か 上方につまみ出す ナデ調整。							にぶい橙色 砂粒・長石粒多・ ・石英・雲母 普通 頸部内面から体部 漆付着		
16	Н		甕	A(20.7)	丸く張った体部か 直につまみ出す。 は箆ナデ後,ナデ 残す。	口頸部	四	· 外面(は横ナデ	調整。体部内・タ	小面	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲 リア 普通	母·	スコ
17	Н		甕		胴の張った体部か ば垂直につまみ出 外面は箆ナデ調整	す。に						にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通	・スニ	1リア
18	Н		甕	C (9.0)	平底の底部で、体活で変な縦位の箆ナ	部は内]彎分	気味に気 内面全位	外上方にで 本は,ナ	のびる。体部外面 が調整。	新は	浅黄橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉		ョリア
番号	種	類	法量	量(cm)	形態の特徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	Ħ	態 の 特 徴	備	考
19	坩	堝	径	(8.6)	一部釉薬化する。 2分の1欠損。			21	紡錘車	全長 (18.7) 紡輪径 4.1 紡輪厚さ 0.2	き-	侖の上部に糸が巻 ⊃いている。 ざ完形品。		
20	刀	子	全長(刃幅0 · 茎長5	.4~0.7	切先部欠損。 棟側と刃側の両側に 関を有する。									

151号竪穴住居跡 (第281図)

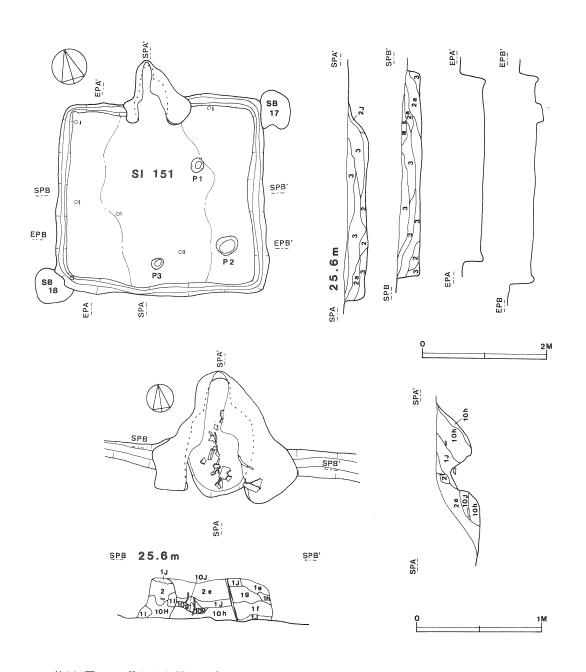
調査区 $E1g_4$ 区を中心に150号竪穴住居跡の南方に位置し,東西3.34m・南北3.2mを測り,主軸方向N-16 $^{\circ}$ E を指す方形をしている。北東隅において17号掘立柱建物跡の P_5 ,南西隅において18号掘立柱建物跡の P_6 とそれぞれ重複し,両掘立柱建物跡より当跡が新しい。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示している。壁は、高さ35cmでほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅10cm・深さ4cmの壁溝が全周する。床面はほぼ平坦で、南壁中央付近から竈焚口部前面にかけての幅約1.5mは、良く踏み固められている。ピットは3か所確認されているが、いずれも小さく、また浅いものである。

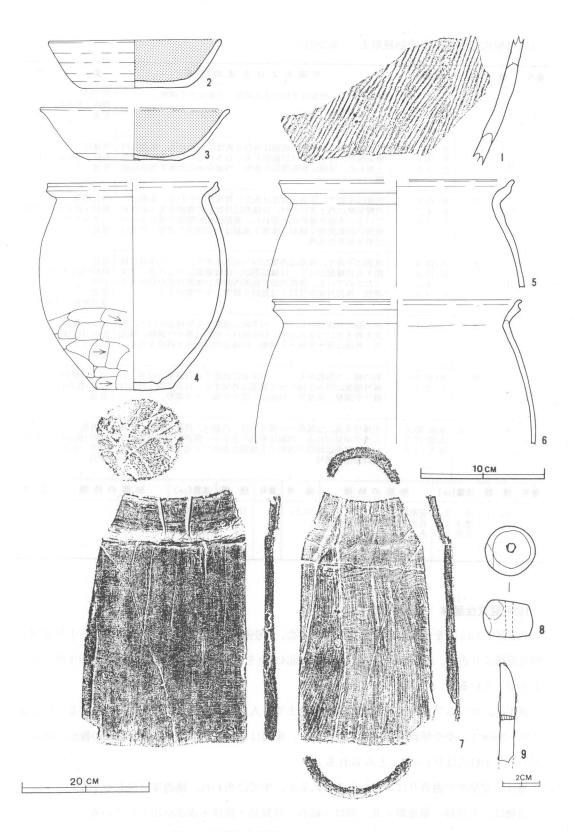
竈は、北壁中央部やや西寄りにあり、長さ1.0m・幅1.13m・焚口部幅0.46mを測り、壁外へ0.66m掘り込んで、構築されている。竈の主軸方向は、住居跡のそれと若干異なり、N-10 $^{\circ}$ Eを指している。袖部は、砂とロームを突き固めて築かれ、右側袖部のほぼ中央部に玉縁を下にして

丸瓦を立て、補強している。焼成部は床面と同じレベルで、ゆるやかに煙道部へ続く。焼成部には、土師器甕二個体分が、押しつぶされた状態で出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が西半部の覆土下層および床面から出土している。



第281図 151号竪穴住居跡・竈実測図



第282図 151号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	F	塔	種		法量(cm)					形態	およ	びョ	= 法	の特徴		備	aucondoverona sona	考
1	S		甕				体部	の一部	。外	・面は平	行叩き	日調	整。	内面はナデ	調整。	灰 色 細砂・長石 普通	7粒	
2	Н		坏	В	13.6 3.8 8.3		彎気	味に,	外上	方にの	び端部	を丸	くお	さめている。	る。体部は内 。水挽き成形 奢き後黒色処	黒褐色 細砂・長石 普通	ī粒·	雲母
3	Н		1 不	В	(15.0) 4.2 7.0		内彎い伊用	気味に る。水	外上 挽き	方にの 成形か り調整	び, 口 と思わ	縁部 れ,	は外 底部	反して端部 は回転箆切	る。体部は, を丸くおさめ り後右ロクロ 調整。内面は	浅黄橙色 細砂・長石・スコリア 普通		雲母
4	Н		甕	B C	13.5) 16.6 6.0 14.9	-	曲すくお	る口縁 さめて	部がいる	付く。 。体部	口縁端 内面と	部は 底部	, ほ	ぼ垂直につ	」の字状に屈 まみ出して丸 面中位はナデ する。	橙色 砂粒・長石 雲母 普通 底部外面に		
5	Н		甕	A (18.7)		部を	外上方	につ	まみ出	す。口	頸部	内・	外面は横ナ	部が付き,端 デ調整。体部 迅痕を残す。	にぶい褐色 砂粒·長石* スコリア 普通		∄ •
6	Н		甕		20.0) 22.4		縁外	端面に	凹み	を持た	せて端	部は	外反		部が付き,口 部内・外面は, 整。	にぶい橙色 砂粒・長石料 普通		母
7	丸		瓦	広立	受 39.0 耑(17.0) キ 1.8		にナーいる。	デが見	られ は箆	る。凹削り調	面は布	目の.	上かっ	ら一部箆削り)調整で玉縁)が施されて 1ている。端	灰黄色 砂粒・長石料 粒多・石英 硬質		石微
番号	種	類	法量(cm)	形	態	の特	徴		備考	番号	種	類	法量(cm)	形態の)特徽	備	考
8	土	玉	径 厚さ 孔径	1.9	孔が穿:	たれ	た面り	ま平坦 ⁻	で	13.5g	9	刀	子	全長(5.2) 刃幅 0.8	切先部。			

152号竪穴住居跡 (第283図)

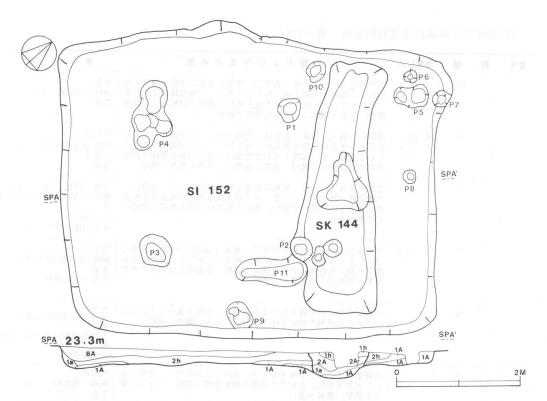
調査区 C3do区を中心に11号竪穴住居跡の北,1号連房式竪穴遺構の下位に位置し,1号連房式竪穴遺構より古い。規模は、東西5.93m・南北4.9mを測り,主軸方向N-6°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ20~30cmで、やや傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦である。ピットは10数か所確認されたが、主柱穴は $P_1 \sim P_4$ とみられる。

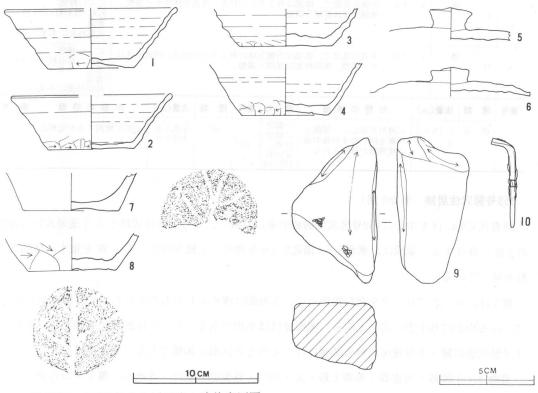
竈は、北壁やや西寄りにあったとみられるが、すでに失われ、構造等は明らかでない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が出土している。

なお、東壁寄りに、当住居跡の床面を破壊して144号土壙が存在している。



第283図 152号竪穴住居跡·144号土壙実測図



第284回 152号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	Į.	F	種	法	t(cm)	形	態およ	び手	法の物	寺 徴		備	考	
1	S		坏	В	(13.6) 4.8 6.8	やや盛り上がった ³ かれる。体部は外付 くおさめている。 ⁵ 調整。体部下端部	頃気味に気	外上方に 水挽きほ	このび, 戈形で底	口縁部端部:	をやや丸	灰色 砂粒・長石粒・ 普通	長石征	数粒
2	S		坏	В	(12.5) 4.4 6.7	底部は平底で、体語かれる。体部はやっくおさめている。7 体部外面は横ナデ	や外反気® 水挽き成乳	味に外♪ 形で底部	_方にのひ 『は一方』	で口縁端部: 句の静止箆i	を丸くお 削り調整。	灰白色 砂粒・長石粒・長 ・雲母 普通	石微料	立多
3	S		坏	С	7.3	底部は平底で、体系 内彎気味に外上方に 切り後多方向の箆 やや摩滅する。	このびる。	ロクロ	コ水挽き月	成形で底部!	は回転箆	外面―灰色 内 細砂・長石粒・長母 なま焼け 体部内面にコゲー	石微	
4	S		坏	С	6.9	やや盛り上がった ³ 分かれる。体部は ⁵ 箆切り後,外周部は 体部下端部は手持ち	やや内彎st は手持ち負	気味にタ 苞削り訓	∤上方にの	のびる。底部	邻は回転	暗灰色 細砂・長石粒・長 普通 内面全体に漆付		<u>T</u> .
5	S		蓋			天井部中央にやや『 は右ロクロ使用の』						暗灰色 細砂・長石粒・長 普通 天井部内面に黄 釉 逆さ焼き		
6	S		蓋			天井部中央に,や*形で天井頂部は, オナデ調整。摩滅がタ	コロクロ作					灰白色 細砂・長石粒・ 不良	雲母	
7	Н		甕	С	7.6	平底の底部で、体語 体部外面は箆削り記		方にのひ	ドる。内 百	面全体はナラ	デ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石 普通 底部外面に木葉织		
8	Н		甕	С	7.0	平底の底部で、体部 ナデ調整。体部外面			ト上方にの	かびる。内面	面全体は	にぶい褐色 砂粒・長石粒・ 雲母・スコリア 普通 底部外面に木葉		立·
番号	種	類	法量(cm)	升	態の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形	態の特徴	備	考
9	砥	石	7.7× 3.1	4.4	片面を	ジを呈し,一側面と ・除いたその他の面 引痕が認められる。	一部分 に鉄分 付着。 安山岩 136.0 g	10	釘	全長5.4 太さ0.3	上部が警	彎曲するが完形品。		

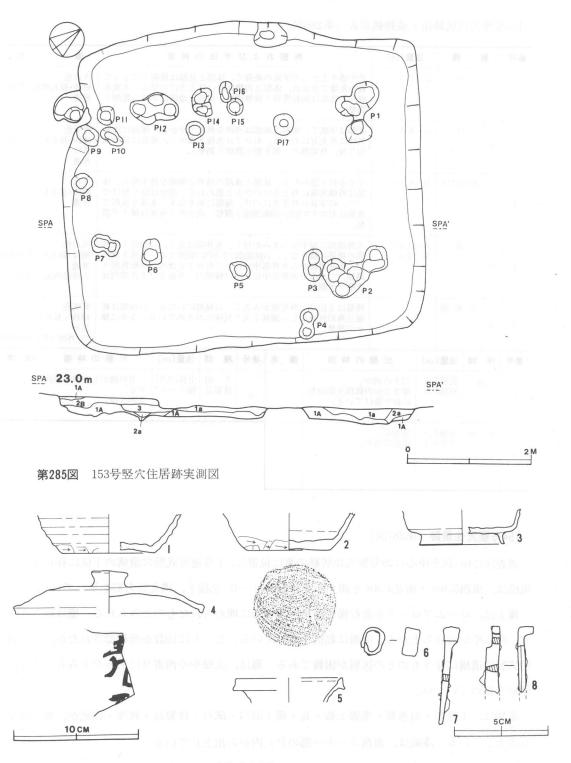
153号竪穴住居跡 (第285 図)

調査区 C4d2区を中心に152号竪穴住居跡の東に位置し、1号竪穴住居跡と1号連房式竪穴遺構の下位に存在する。規模は、東西5.7・南北5.1mを測り、主軸方向N-4°-Wを指す、略隅丸方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ20cmで、ゆるやかに外上方へ立ち上がる。床面はほぼ平坦である。ピットは20数か所確認されたが、

1号竪穴住居跡・1号連房式竪穴遺構に伴うものとの区別が困難である。竈は明らかでない。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓・漆紙が、覆土中から出土している。漆紙は、南東コーナー付近の覆土中から出土している。



第286図 153号竪穴住居跡出土遺物実測図

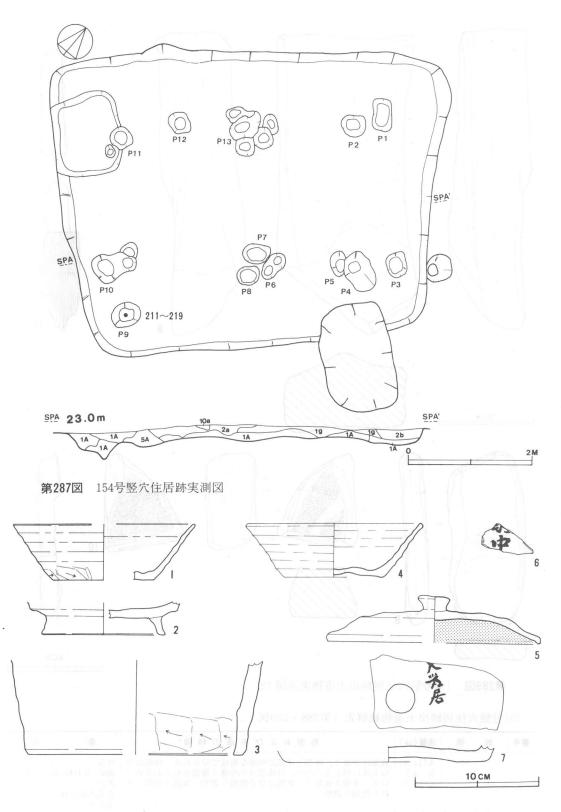
番号	1	器	種	;	法量(cm)		形	態	5 L 6	び手法	の特徴		備		考
1	S		坏	С	(7.3)	やや盛り上が 鋭い角度で分 成形で底部は[調整。	かれ、	体	部は内	彎気味に:	外上方にの	びる。水挽き	灰白色 細砂·長石衍 普通	数粒・	雲母
2	S		坏	С	6.5	底部は平底で, 気味に外上方に 切り後,外周部	このは	ゾる 。	右口	クロ水挽	き成形で, 』		青灰色 細砂·長石* 微粒 普通	立多・	長石
3	S	高市	台付坏	D	(6.9)	やや小形と思われる。底部と体部の境界に明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。高台内・外面は横ナデ調整。						細砂·長石粒·鉄分 普通			
4	S		蓋		14.8)	天井頂部に扁っ 部の境界に稜? で,天井頂部が 調整。つまみる は横ナデ調整。	をなし からえ と天寿	_ , 「 天井音	コ縁端部 部中位の	な下方向に こかけ右い	に屈曲する。 ロクロ使用の	水挽き成形 の回転箆削り	灰白色 細砂·長石料 普通 天井部内面		
5	S	長	頸 壺		,	頸部は上位ほど 面三角形状をな ナデ調整。							暗灰色 細砂・長石 良好 内・外面に黄	,	つ自然和
番号	種	類	法量(cm)	形態	の特徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	形態の)特 徴	備	考
6	\$	租	長径1 短径1	.5 刀子の鎺カ)鉄板を倒卵形			8		全長(3.5)幅 0.4~0.7	一方の端がI する。 下部欠損。	- 字状に屈曲		_
7	釘	か	全長5 太さ0		完形品。 頭部は方形	<i>5</i> .					4				O CONTRACTOR OF THE PARTY OF TH

154号竪穴住居跡(第287図)

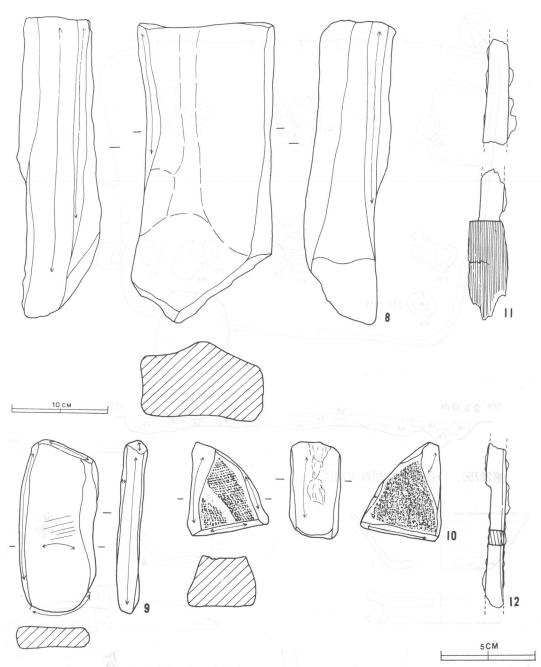
調査区C4d6区を中心に29号竪穴住居跡の東に位置し、1号連房式竪穴遺構の下位に存在する。 規模は、東西5.9m・南北4.8mを測り、主軸方向N-0°を指す、隅丸長方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ20cmで、ゆるやかに立ち上がる。床面は起伏を有している。ピットは10数か所確認されたが、1号連房式竪穴遺構に伴うものとの区別が困難である。竈は、北壁やや西寄りにあったとみられるが、原形を留めていない。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・瓦・硯・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が、覆土中から出土している。漆紙は、南西コーナー部のP9内から出土している。



第288図 154号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第289図 154号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

154号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第288・289図)

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	‡不 0 01	A(14.4) B 4.5 C (8.0)	底部は平底で、体部と底部は明確な角度で分かれる。体部は外 傾気味に外上方にのび、口縁部はやや薄く端部を丸くおさめて いる。水挽き成形で、底部は静止箆削り調整。体部下端部は手 持ち箆削り調整。	細砂·長石粒	

番号		2	種	法量	₫(cm)				形	態およ	び手	法の集	寺 徴		備		考	
2	S		計付坏 用硯)	D	(9.9)	の字	状に	外下	方に	のびて端	郭に面:	をなす。	は貼り付けで 水挽き成形で! 外面は横ナデ	底部は	灰色 細粒・長石* 普通 底部内面に 底部外面に	漆付着	盲	
3	S	-	ĬĶ.	C(27.0)	底部部内	は正面に	E円お	犬に抜い	ナる。体 削り調整	部は外(頃気味に 外面は,	外上方にのび 横ナデ調整。	る。体	灰白色 細砂·長石* 雲母 不良	立・長る	万微粒	
4	Н		坏	В	14.2 4.3 8.0	でケ	かれ	1.3.	体部は	は外傾気	味に外	上方にの	部はやや明瞭: びて端部を丸 り後、静止箆	くおさ	にぶい橙色 細砂・長石 普通 底部内面に	粒・雪		
5	Н		蓋		16.9) 3.8	と口 水拘	「縁音 色き成	Bの均 対形で	き界に でつま。	麦を持ち,	口縁音	郅は、や	はやや扁平で: や外下方に屈は 外面とも全体に	曲する。	にぶい橙色 細砂・長石 普通 天井部外面	微粒		
6	Н		蓋	天井部の一部と思われる。水挽き成形。									灰白色 細砂・長石微粒 普通 天井部外面に墨書					
7	Н		甕	С	16.0	やや	盛り) 上か	がった ³	平底の底	部。内	・外面は	,横ナデ調整。	0	にぶい黄橙 砂粒・長石料 普通 底部外面に	並・石		雲日
番号	種	類	法量((cm)	形	態	の	特	徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特征	数	備	考
8	砥	石	30.3× 1	4.7	三側面められ				度が認	点紋粘 板岩 602.0 g	11	刀子	全長(14.8) 刃幅 1.2 刃長 9.1		の刀子とみら 両端部欠損。	れる	茎部に 木質を 残存し ている	がし
9	砥	石	9.2× 1.05	4.0	長方用 用痕が に擦掘	バ認め	らお	しる。	片面	粘板岩 76.0g	12	刀子か	全長 (8.4) 刃幅 1.1 刃長 2.2	両端	部欠損。			
10			4.9× 2.6	3.7	三角門いた台	側面	 とす。 iに何	瓦頂 使用症	面を除痕が認	瓦 製		+	and the second s				di nagawan dan saharin d	-

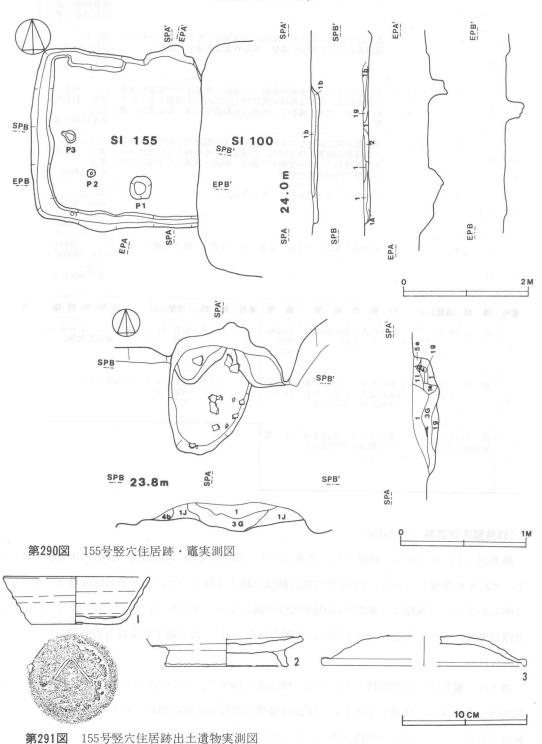
155号竪穴住居跡(第290図)

調査区 C3i7区を中心に確認され、北東コーナー部で94号竪穴住居跡、東側で100号竪穴住居跡と、それぞれ重複している。100号竪穴住居跡は当跡より新しいが、94号竪穴住居跡との新旧関係は明らかでない。規模は、東側が100号竪穴住居跡によって失われているので明らかでないが、残存部は東西2.66m・南北2.82mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す隅丸長方形を呈していたものとみられる。

覆土は、褐色土で自然堆積とみられる。壁は高さ10cmで、ゆるやかに立ち上がる。壁下には、幅20cm・深さ5cmの壁溝が全周する。床面は竈焚口部前面が踏み固められているが、他は比較的軟弱である。ピットは3か所確認され、Piは深さは26cmを測る。

竈は、北壁にあり、長さ1.2m を測る。両袖は不明瞭である。焼成部は床面より9cm低く、焼土の堆積は7cmほどみられた。

遺物は、土師器・須恵器・鉄滓が少量出土している。



-390-

番号	뒴	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A 11.5 B 3.9 C 7.0	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は やや内彎気味に外上方にのび口縁端部を丸くおさめている。右 ロクロ水挽き成形と思われ、底部は回転箆切りで無調整。口縁 部内・外面は、横ナデ調整。	灰色 細砂・長石大粒・長石微粒 良好 内面全体に漆付着 底部外面に箆記号
2	S	高台付坏	D 9.8	貼り付け高台は外下方にのび、「ハ」の字をなし、外端部の稜は 不整形。水挽き成形で底部は、右ロクロ使用の回転箆削り調整。 高台内・外面は横ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 雲母 普通 高台端部に鉄分及び漆付着
3	S	蓋	A(15.2)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸味を帯び、口縁部は僅かに段をなし、下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部と口縁部外面から天井部内面にかけ横ナデ調整。天井部外面中位は右ロクロ使用の回転箆削り調整。	灰色 細砂·長石粒多·長石微粒 普通

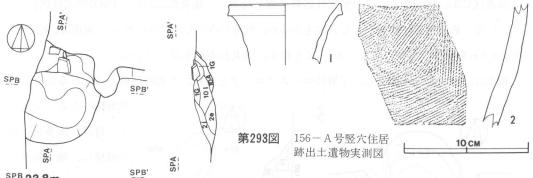
156-A号竪穴住居跡 (第173・292図)

調査区C3j8区を中心に確認され、北西部は100号竪穴住居跡によって失われている。規模は、 東西4.17m・南北4.33mを測り、主軸方向N-4°-Eを指す、略隅丸方形を呈している。

覆土は薄いが、ロームブロックを含む褐色土で、人為的堆積とみられる。壁は高さ約5 cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ロームブロックで比較的軟弱である。ピットは3 か所で、北西コーナーを除く各コーナー部にあり、深さは20cm内外である。

竈は、北壁ほぼ中央部にあり、西半部を100号竪穴住居跡によって失われ、また上部は攪乱を受け、不明瞭である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・鉄滓が少量、覆土下層から床面にかけて出土している。



156-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第293図)

SPB 23.8m		SPB'	SPA
1) 101	3 1	AGS	
0		1 M	
第292図	156-A号 竈実測図	竪穴住	舌跡

番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	長頸壺	A (8.8)	頸部は上位ほど外反度が 大きく、口縁部は下方向 に広がって面をなす。外 面は摩滅が進行。	暗灰色 細砂・長石粒 長石微粒・ 長石微粒・ 身外面に 外外面自然 色の自然 を のの自然 を を のの を のの を の の の の の の り の り の り の り
2	S	甕		体部の一部。外面は平行 叩き目調整。内面は, 箆 削りとナデ調整。	灰色 細砂・やや精良 普通

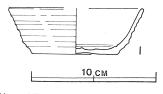
156-B号竪穴住居跡 (第175図)

調査区・平面形状は、156-A号竪穴住居跡と同じで、A号の下位に存在する。従ってA号はB号の建て替えとみられる。

壁は高さ約15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。北東コーナー付近から東壁にかけての壁下には、L 字状に幅15cm・深さ5cmの壁溝が存在している。床面はA号の床より8cm低く、南壁付近から 北壁方に向けて若干低くなるほかは、ほぼ平坦である。南壁中央部付近から竈焚口部前面にかけて

の幅1.85 m は,良く踏み固められている。ピットは5 か所確認され, $P_4 \sim P_7$ の深さは約40cmを測る。 P_8 の深さは10cmで,覆土中から長さ20cmの木炭片が出土している。竈は不明である。

遺物は、土師器・須恵器が少量出土している。



第294図 156-B 号竪穴住居跡 出土遺物実測図

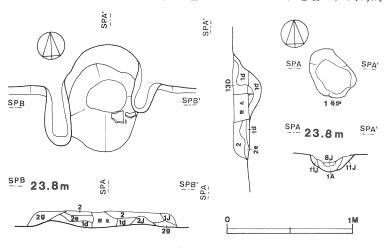
156-B号竪穴住居跡出土遺物観察表(第294図)

番号	22	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	才	A (10.6) B 3.7 C 6.8	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部は、内彎気味に外上方にのび端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は、回転篦切り後回転篦削り。底部と体部の境界内面に浅い溝を巡らす。全体に端正な作り。	細砂·長石	粒·石英

157号竪穴住居跡 (295・296図)

調査区 $C3h_9$ 区を中心に 7 号竪穴住居跡の南に位置し、南東部において158号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は判然としない点もあるが、当跡が古いものとみられる。 規模は、東西3.72m・南北3.0mを測り、主軸方向N-8°— Eを指す、隅丸長方形を呈している。

覆土は、褐色土を主体とし、下層はロームブロックを含み、人為的堆積とみられるが、他は自



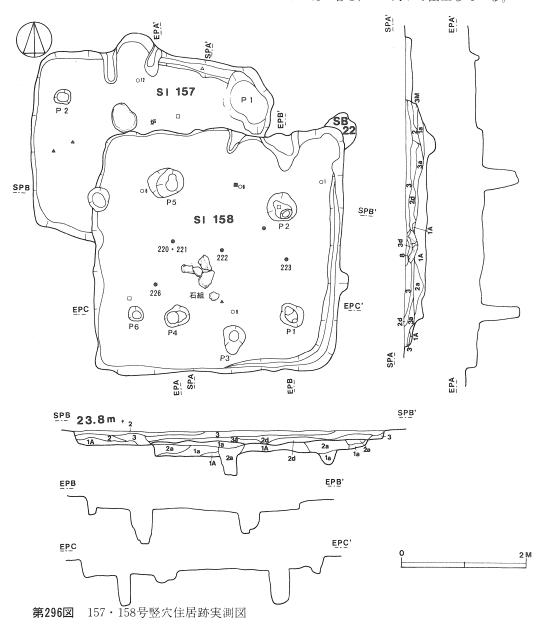
第295図 157号竪穴住居跡竈・炉跡実測図

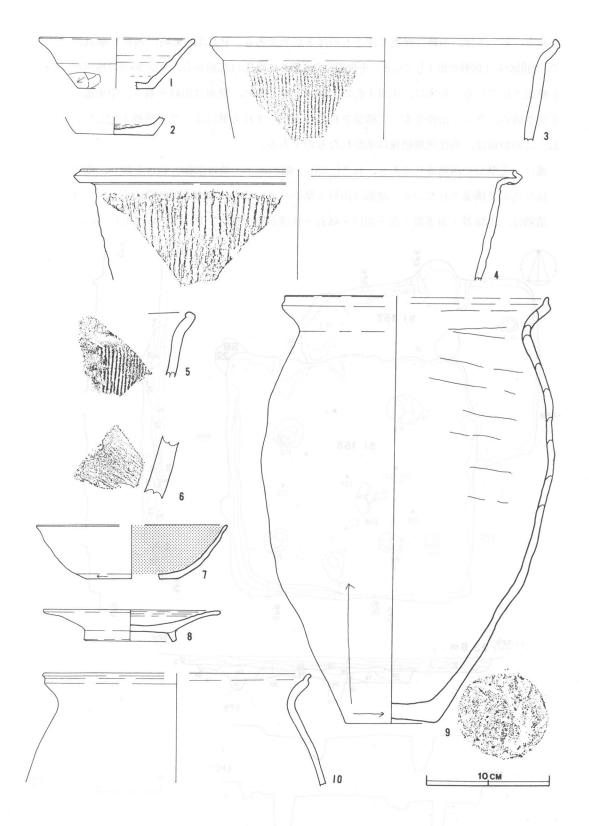
然堆積である。北東コーナー付近には多量の焼土が堆積し、焼土層内から土師器が多数検出されている。この焼土層は、断面観察の結果、投棄されたものと考えられる。壁は高さ約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、比較的軟弱

である。ピットは、当跡に確実に伴うものは3か所である。P1は北東隅にある土壙状のピットで、内部から土師器が出土している。中央部やや北寄りの竈焚口部前から、40×30cmの楕円形の炉跡が確認されている。炉床は、床面を約15cm皿状に掘り凹め、壁面に山砂を敷き、中央部にロームを突き固め、さらに山砂をもって構築されている。いずれも熱によって赤色焼土化している。なお、この炉跡は、当住居廃絶後に築かれたものである。

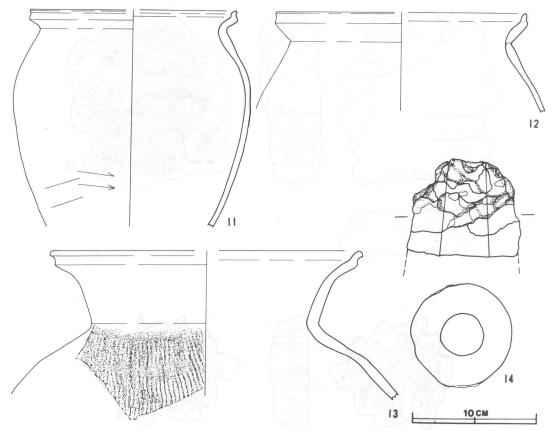
竈は、北壁やや西側寄りにあり、長さ0.85m・幅0.85m・焚口部幅0.49mを測り、壁外へ35cm掘り込んで構築されている。袖部は山砂で築かれているが、遺存状態は良くない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄滓が焼土層と、P1内から出土している。





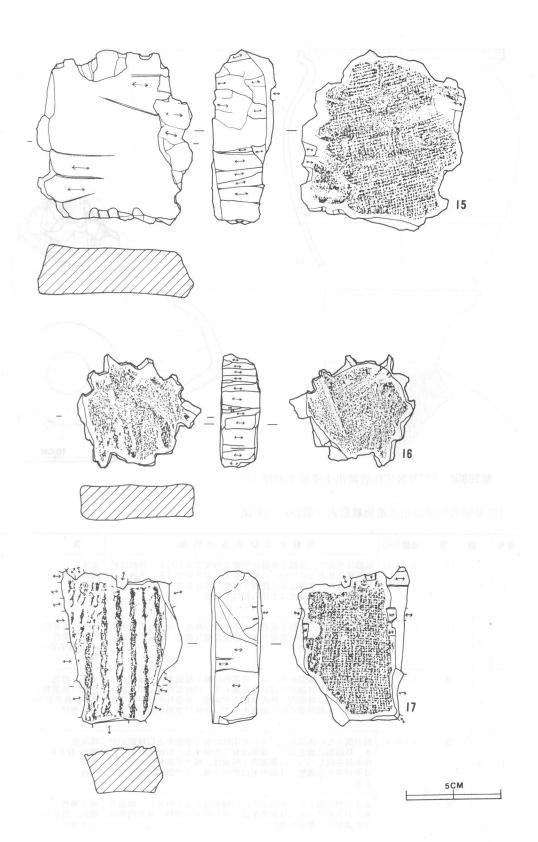
第297図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



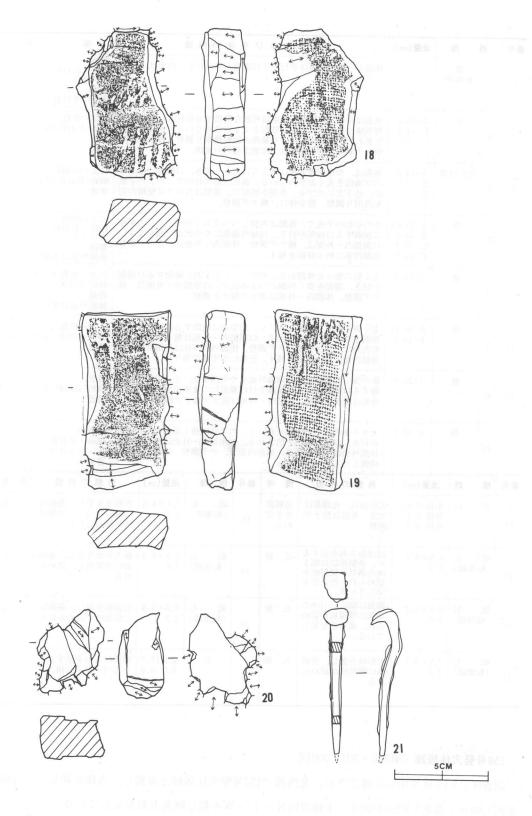
第298図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

157号竪穴住居跡出土遺物観察表(第297~300図)

番号	뒿	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	才 不	A(12.5) B 4.0 C 6.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外 傾気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。水挽き成 形と思われ、底部は静止節削り調整。口縁部内・外面は、横ナ デ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	褐灰色 細砂·長石粒·雲母 普通
2	S	坏	C 6.3	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。水挽き成形で底部は回転箆切り後、静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	外面-灰黄褐色 内面-橙色 細砂·長石粒·雲母 普通
3	S	甕	A (27.7)	胴の張らない体部から、「く」の字状に軽く屈曲する口縁部が付く。口縁内・外端部に浅い溝を廻らす。口縁部外面に叩き目を残しつつ、口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面に粘土紐痕を残す。全体に摩滅が進行。	外面-橙色 内面-灰黄褐色 砂粒・長石粒多・雲母多 なま焼け
4	S	禁 Moa-	A (34.9)	胴の張らない体部から、「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付き、外端部に面をなし、端部は鋭く内傾する。口縁部外面に、叩き目を残しつつ、口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面は箆ナデ後、ナデ調整。やや摩滅する。	暗灰色 細砂·長石粒·長石微粒 雲母 不良
5	S	甕		あまり胴の張らない体部から、口縁部はかるく外反し、端部を 丸くおさめている。体部外面は、平行叩き目調整。体部内面は、 ナデ調整か。摩滅が進行。	暗赤褐色 細砂・長石粒 なま焼け



第299回 157号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)



第300図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	4	**	種	法量(cn	n)		形	態;	ા ત	: び 手	法の特	徴	narios — Aramadores Inocas	備		考	
6	S	(転用	更 月硯)			体部の一しての使		は平	行叩	き目調	整と思われ	る。内面は	,硯と	灰色 細砂・長石 粒・鉄分 普通 内面に墨付		長石行	散
7	Н	Ė	Ķ	A(15.2 B 4.4 C 7.2	4	彎気味に と思われ	外上方に , 底部は	のび. 右ロ	,端 クロ	部を丸 使用の	くおさめて	`かれる。体 「いる。水挽 調整。外面 !!。	き成形	にぶい橙色 細砂・長石料 雲母 普通		石微料	位•
8	Н	高台	付皿	A 14.3 B 2.5 D 7.3	5	のび端部	を丸くお 方にのび	さめ;	てい 水挽	る。高 き成形	台は貼り付 で、底部は	,口縁部は けで「ハ」 右ロクロ使	の字状	にぶい赤褐 細砂・長石料 普通			
9	Н	努	THE COLUMN TO TH	A(21.3 B 34.0 C 7.4 F 23.7	1	に屈曲す	る口縁部: ・外面は,	が付 横	き, ナデ	口縁外:	端部にやや	がり,「く」 凹んだ面を 面は, 箆ナ	なす。	にぶい橙色 砂ココリス 普通 底部外面に	粒・雲		
10	Н	翌	E C	A (21.5	5)	が付き、	端部を強	く外化	則に	つまみ	く」の字状 出す。口頸 後ナデ調整	に屈曲する 部内・外面 。	口縁部は,横	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 体部外面に煤付着			
11	Н	碧	und J	A(16.4 F 18.9	1)	部内面は,	節ナディ	後, -	ナデ	調整。1	字状に屈曲 部内・外面 本部外面下 こやや薄手	する口縁部 は横ナデ調 位は箆削り 作り。	が付き, 整。体 調整。	にぶい橙色 砂粒・長石* 普通		吏・雲	母
12	Н	瑟		A(20.0		曲する口紅	縁部が付る	き,立	端部	をほぼ		,「く」の字: み出す。ロ! ナデ調整。		橙色 砂粒·長石* 普通	立・雲田	‡	
13	Н	좵		A (24.7		が付き、「	コ縁外端部 ま叩き目記	部を! 調整。	』ま- 体₹	せる。「	コ頸部内・	く屈曲する 外面は横ナ 整。須恵器の	デ調整。	褐灰色 細砂・長石 英・スコリ 普通		\$母・	石
番号	種	類	法	量(cm)		形態の	特徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	t	備	考
14	KK	П	外往	₹(7.8) ₹ 8.1 ₹ 3.0	欠	形羽口, 5 損。基部/ 整。			解部 と認	18	砥 石(転用砥)	7.7×4.3 2.3	に幅0	代を呈し,各 .7~1.5cmの 思められる。		瓦	製
15	砥 (転	石 用砥)	8.9	×8.1	が cm 認	ば長方形 , 各側面 の溝状に の め られ, [している。	こは幅 1 使用痕が 凹凸状を	瓦	製	19	砥 石(転用砥)	9.1×4.3 1.8		ジ状を呈し, 逆用痕が, 認		瓦	製
16	砥 (転)	石 用砥)	6.6	×5.2	溝ら	面に幅0.5 状に使用症 れ,歯車料 いる。	良が認め	瓦	製	20	砥 石(転用砥)	4.0×3.4 2.2		を呈し,各位 痕が認められ		瓦	製
17	砥 (転)	石 用砥)	7.77	×5.7	面	形状を呈し に使用痕が る。		瓦	製	21	釕	全長(7.7) 太さ 0.6		方形を呈す。 一部を欠損。			

158号竪穴住居跡(第296・301・302図)

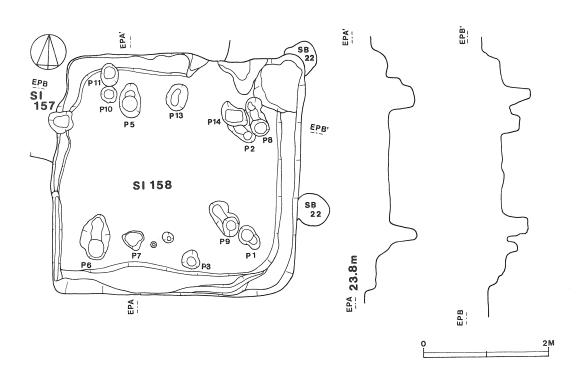
調査区C3i9区を中心に確認され、北西部で157号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は、 東西3.92m・南北3.92mを測り、主軸方向N-1°-Wを指し隅丸方形を呈している。

覆土は、褐色土を主体とするが、中・下層にはロームブロック・焼土を含み、 人為的な堆積と

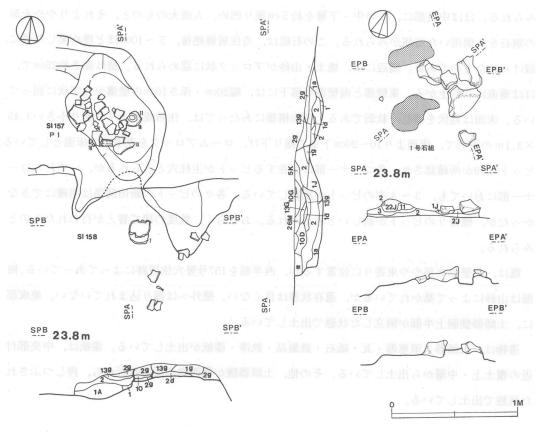
みられる。ほぼ中央部に、この中・下層を約5cm掘り凹め、人頭大のものと、それよりやや大形の割石を5個用いた石組がみられる。この石組は、当住居廃絶後、5~10cmほど埋め戻した後に、設けられたものである。周辺には、焼土・山砂がブロック状に認められる。壁は高さ約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。東壁部と南壁西半部下には、幅20cm・深さ10cmの壁溝がL字状に回っている。床面は起伏を有し、軟弱である。床面構築にあたっては、住居規模より一回り小さい3.45×3.1mの方形で、床面より10~20cm下まで掘り下げ、ロームブロックを充填して床面としている。ピットは19か所確認され、各コーナー部に存在するピットが主柱穴とみられるが、いずれのコーナー部においても、3~4本のピットが重複している。各々のピットの新旧関係は明確にできなかったが、壁寄りのピットが新しいと考えられる。おそらく、数度の建て替えが行われたものとみられる。

竈は、北壁中央部やや東寄りに位置するが、西半部を157号竪穴住居跡によって失っている。袖部は山砂によって築かれているが、遺存状態は良くない。壁外へは掘り込まれていない。焼成部に、土師器甕胴上半部が倒立した状態で出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が出土している。漆紙は、中央部付近の覆土上・中層から出土している。その他、土師器甕が竈西側の床面付近から、押しつぶされた状態で出土している。



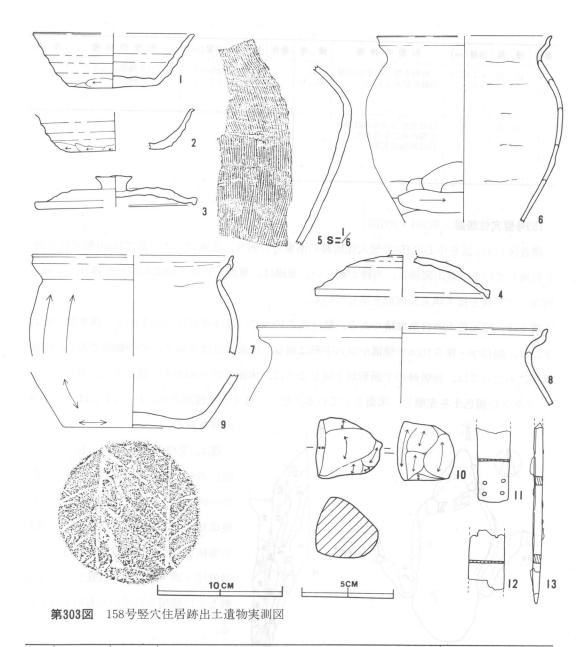
第301図 158号竪穴住居掘方実測図



第302図 158号竪穴住居跡竈・石組実測図

158号竪穴住居跡出土遺物観察表(第303図)

					COLUMN COLUMN
番号		景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A(12.7) B 4.4 C 7.1	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部 は外傾気味に外上方にのびて、口縁部をやや尖り気味におさえ ている。水挽き成形で底部は回転箆切り後、箆ナデ調整。体部 下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・石英 普通
2	S	坏	C 8.9	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は内 彎気味に外上方にのびる。水挽き成形で底部外周部は静止箆ナ デ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。体部内面は横ナデ調 整。	灰色 細砂・長石粒多・長 石微粒多 普通
3	S	蓋	A (12.4) B 2.6	天井部中央に扁平なつまみが付く。やや小形の蓋。天井頂部は 凹み、天井部中位から反り気味に下降し、天井部と口縁部の境 界に明瞭な稜をもつ。口縁部は僅かに段をなし、下方向に短く 屈曲する。水挽き成形で天井部中位は右ロクロ使用の回転篦削 り。	灰色 細砂・長石大粒・長 石微粒 普通
4	S	蓋	A(13.8)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸く, 天井部と口 縁部の境界に, やや明瞭な稜を持つ。口縁部は, やや反り気味 に外下方に屈曲する。水挽き成形と思われ天井部中位は, 右ロ クロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・鉄分 普通
5	S	甕	0.	肩が強く張る体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は横ナデとナデ調整。内面に粘土紐痕を残す。	緑灰色 細砂 良好



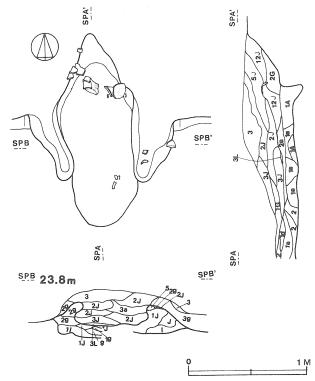
番号	F	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	Н	甕	A(14.0) F 15.6	丸く胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、 端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体 部内・外面は箆ナデ調整か。体部外面下位は箆削り調整。全体に 薄手作り	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 普通 外面全体に煤付着
7	Н	甕	A(16.1) F 16.6	丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き 端部を僅かに外上方につまみ出す。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内面はナテ調整。体部外面は総位の箆ナデ調整。口縁部 外面と、頸部内面に粘土組痕を残す。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
8	Н	獲	A(22.2)	胴の張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き、端部は外上方 につまみ出す。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内・外面は ナデ調整。摩滅が進行。	橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通
9	Н	獲	C 11.1	平底の底部で、体部は内彎気味に外上方にのびる。体部内面は箆 ナデ後ナデ調整。体部外面は箆ナデ調整。底部内面はナデ調整。	橙色 砂粒・長石粒多・雲母・礫 普通 底部外面に木葉痕

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備	考
10	砥	石	3.7×3.2 3.2	三角形を呈し、全面に使 用痕が認められる。	砂岩 38.2 g	13			全長(9.8) 太さ 0.4	一方の先端部は尖るが, 一方の先端部欠損。		
11	小	札		11は全長(3.8cm)幅1.8cm で四か所に小孔有り。 12は両端部欠損。								

159号竪穴住居跡 (第304・305図)

調査区 $C3i_0$ 区を中心に158号竪穴住居跡の南東方にあり、北東コーナー部で160号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。規模は、東西 $5.1 \text{ m} \cdot$ 南北4.27 mを測り、主軸方向 $N-3^\circ$ -Wを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ $40 \, \mathrm{cm}$ で、ほぼ垂直に立ち上がる。西半部の壁直下には、幅 $12 \, \mathrm{cm}$ ・深さ $10 \, \mathrm{cm}$ の壁溝がコの字形に回る。床面はほぼ平坦で、やや軟弱である。床面構築にあたっては、住居跡の平面形状と同じように、床面下 $25 \, \mathrm{cm}$ 30 cm まで掘り下げ、ロームブロックを含む褐色土を充填し、床面としている。ピットは $4 \, \mathrm{mm}$ が所確認され、 $\mathrm{P}_2 \, \mathrm{cm}$ 4 Cm 4 Cm 4 Cm 30 Cm 2 Cm 4 Cm 6 Cm 6 Cm 7 Cm 8 Cm 9 Cm 9

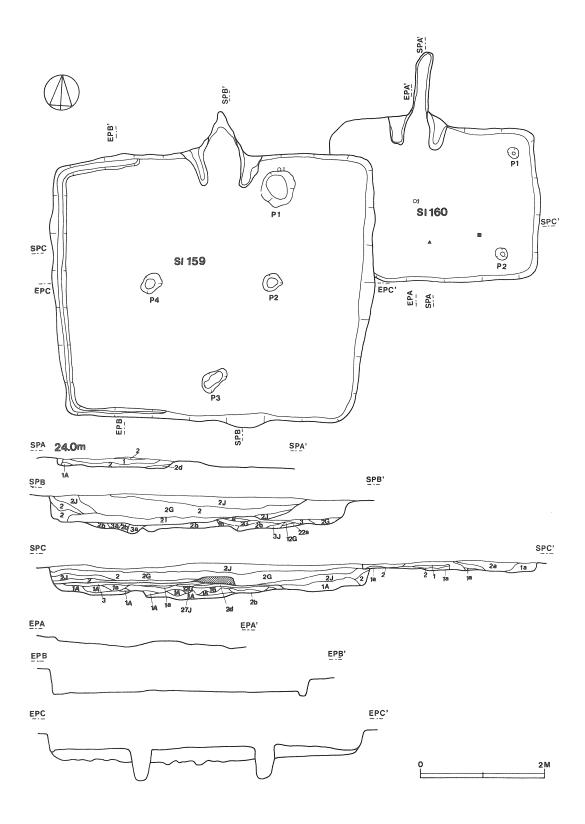


内外を測る。

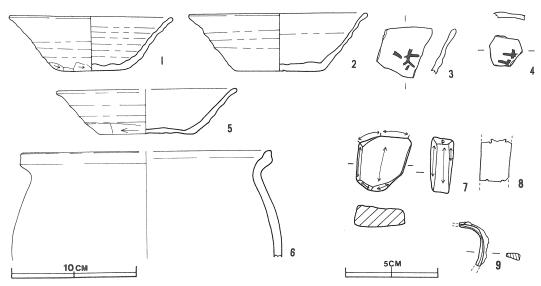
竈は、北壁中央部にあり、長さ1.2m 幅1.05m・焚口部幅0.5mを測り、壁外へ68cm掘り込んで、構築されている。 焼成部は、床面とほぼ同じレベルで焼土の堆積が少ない。焼成部奥壁寄りに土師器环・甕・礫などが散在し、本来支脚などに使用されていたものとみられる。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・ 瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、東 半部覆土および床面から出土している。

第304回 159号竪穴住居跡竈実測図



第305図 159·160号竪穴住居跡実測図



第306図 159号竪穴住居跡出土遺物実測図

159号竪穴住居跡出土遺物観察表(第306図)

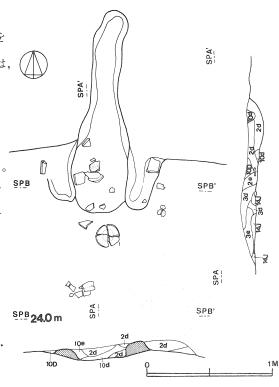
番号	Į.	in in	種	;	去量(cm)		形態	うよて	· 手 法	の特徴		備	=	考
1	S		坏	В	12.9 4.6 6.1	度で分かれる。 かに外反する。	底部はやや丸味を持った平底で、体部と底部は、ややあまい角度で分かれる。体部は、内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反する。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後多方向の静止箆削り。体部下端部は手持ち箆削り調整。							石微
2	S		は不 A 14.1 B 4.7 C 7.1			底部は平底で体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部は、やや内彎気味に外上方にのび、口縁端部は肥厚して丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切り後、軽いナデ調整。内面全体と口縁部外面及び体部下端部は、横ナデ調整。							で色 粒・長 ²	石微
3	S		坏			口縁部から、化	口縁部から、体部の一部。						褐灰色 細砂・長石微粒・雲母 なま焼け 体部外面に墨書	
4	S		蓋	-		天井部の一部を	天井部の一部か。						灰白色 細砂・長石微粒・雲母 普通 外面に墨書	
5	Н		校 A(14.3) B 3.6 C 7.5			底部は平底で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体 部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は、僅かに外反して 端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は回転箆切りで無 調整。底部内面はナテ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。						にぶい黄橙 砂粒・長石) 普通		‡
6	Н		甕		19.8) 21.5	丸く張った体系 部を外上方に 部内面は箆ナラ 痕を残す。や	つまみ出て	ト。ロヅ は部外回	頁部内・タ	下面は、横っ	トデ調整。体	橙色 砂粒・長石を 普通	並∙雲t	
番号	種	類	法量(cm)	形態	の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	り特徴	備	考
7	砥	石	2.9×2.7 全面に使用 1.1 る。			月痕が認められ	砂岩 1.3g				残存部は半円 両端部欠損。	存部は半円形を呈す。 端部欠損。		
8	小	札	全長:幅		両端部欠技					A				

160号竪穴住居跡 (第305・307図)

調査区C4ji区を中心に確認され、西壁部を 159号竪穴住居跡によって失っている。規模は、 東西3.35m・南北2.65mを測り、主軸方向N -3°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを含む層もあり、人為的堆積とみられる。壁は高さ15cmと低いが、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干起伏を有し、竈焚口部前面が比較的踏み固められている。ピットは東側の各コーナー部に1か所ずつ確認され、柱穴は本来4本であったものとみられる。深さは、P₁が30cm、P₂が12cmを測る。

竈は、北壁やや西側寄りにあり、長さ1.6m・幅0.84m・焚口部幅3.9mで、壁外へ1.11m掘り込んで、構築されている。袖部は山砂で築かれているが、現状は低いものである。焼



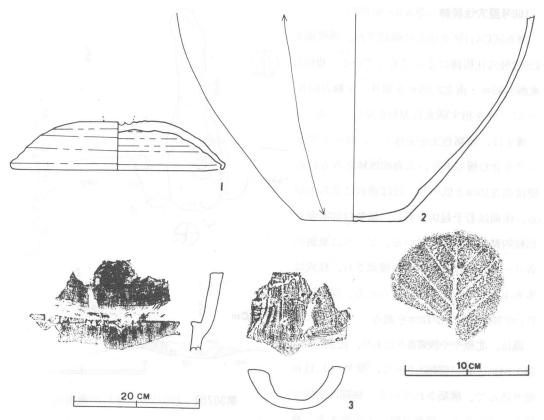
第307図 160号竪穴住居跡竈実測図

成部は床面より10cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。煙道部は幅20cmの溝状を呈し、0.9m程続いている。焼成部からは、土師器甕片および平瓦片が出土している。

遺物は、土師器・須惠器・瓦・羽口・砥石・鉄滓がほぼ全域にわたって床面付近から出土している。砥石は24点と多く、瓦砥・須恵砥もみられる。

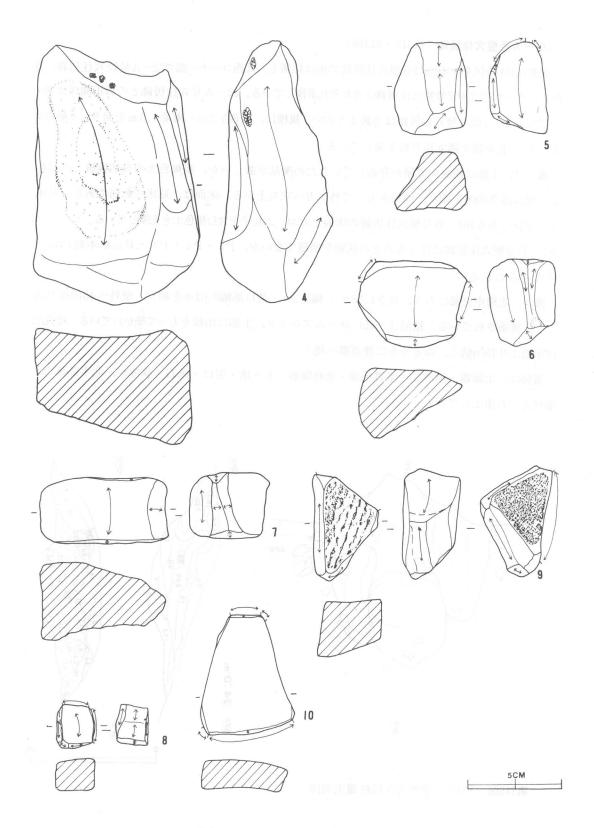
160号竪穴住居跡出土遺物観察表(第308・309図)

番号	뮒	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	蓋	A 16.7	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸く天井部と口縁 部の境界にあまい稜を持つ。口縁部は下方向に屈曲し、やや内 傾する。左ロクロ水挽き成形で、天井部は右ロクロ使用の回転 箆削り調整。	灰黄色 細砂・長石粒・ 微粒・鉄分多 良好	長石
2	Н	쭃	C 8.4	平底の底部から、体部は内彎しつつ立ち上がる。体部内面は箆 ナデ後、ナデ調整。体部外面は縦位の箆ナデ調整。底部内面に 多量の箆傷を見る。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ リア・雲母 普通 底部外面に木葉	
3	丸	瓦	全長(12.2) 狭端 (4.4) 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り後ナデ調整。凹面は布目を残す。側面は篦削りで下端部の調整は不良。端面は、箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒多 石微粒・雲母 やや軟質	· · 長



第308図 160号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	砥	石	12.6×8.6 5.0	長方形を呈し、片面と一側面に使用痕が認められる。 欠損部分あり。	鉄分付 着 硬砂岩 839 g	8	砥 石	2.3×2.1 1.7	痕が認められる。小形。	凝灰岩
5	砥	石	4.8×3.8 3.0	二側面のみに、使用痕が認められる。	砂 岩 61.3g	9	砥 石(転用砥)	5.5×3.4 2.9	瓦面を除く側面に使用痕が認められる。	瓦製
6	砥	石	5.5×4.6 3.5	二側面を除いて使用痕が認められる。	砂 岩 104.2g	10	砥 石(転用砥)	6.3×4.4 1.4	台形を呈す。二側面のみに使用痕が認められる。	須恵器片利用
7	砥	石	6.6×3.4 4.0	長方形を呈し、二側面を 除いて使用痕が認められ る。	流紋岩 170 g	n sell		2 (李琳) 中教之(前	(2.34) 現全 東	K I



第309図 160号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

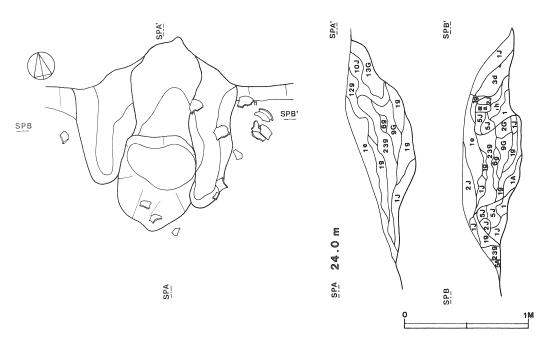
161-A号竪穴住居跡 (第310・311図)

調査区D4a2区を中心に71号竪穴住居跡の南に位置し、北西コーナー部で72-A号竪穴住居跡、南西コーナー付近で162号竪穴住居跡とそれぞれ重複している。72-A号穴住居跡との新旧関係は明らかでないが、162号竪穴住居跡は当跡より古い。規模は、東西5.2 m・南北4.5 mを測り、主軸方向 N-6°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

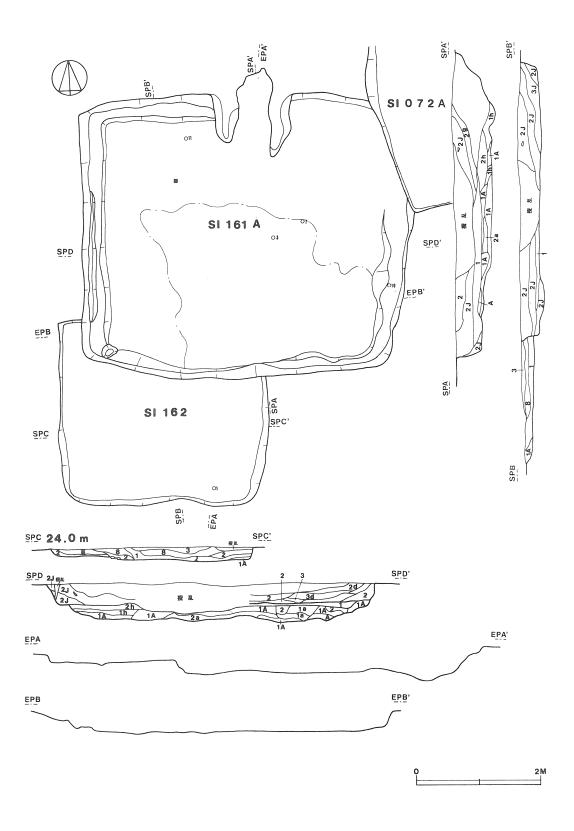
覆土は、上部に現在の家屋が存在していたため攪乱が著しいが、暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ30cmを測り、傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は、貼床で軟弱である。貼床は、下位にある161-B号竪穴住居跡の床面上にローム粒子を含む褐色土を充填している。ピットは、161-B号竪穴住居跡に伴うものとの区別が明確でないが、P₁・P₃・P₇・P₁₂が本跡に伴う柱穴とみられる。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.58m・幅1.2m・焚口部幅0.62mを測り、壁外へ46cm掘り込んで、構築されている。袖部は下部にロームブロック、上部に山砂をもって築かれている。焼成部は床面より15cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。

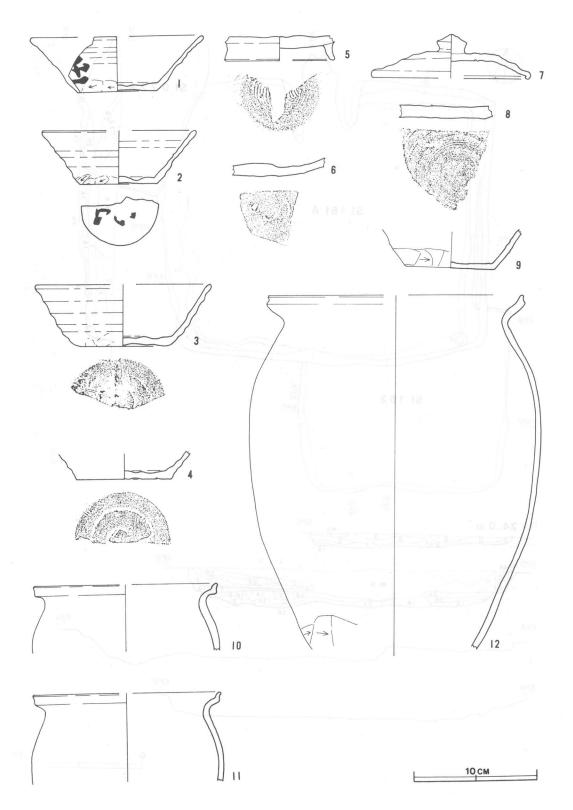
遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・灰釉陶器・瓦・塼・羽口・砥石・鉄滓が、北半部覆土下 層付近から出土している。



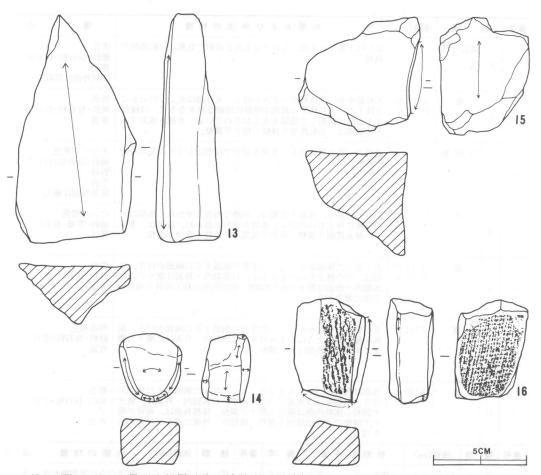
第310図 161-A 号竪穴住居跡竈実測図



第311図 161-A·162号竪穴住居跡実測図



第312図 161-A号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第313図 161-A 号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

161-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第312・313図)

番号	4	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A(13.7) B 4.5 C 6.4	底部は平底で、底部と体部は、明瞭な角度で分かれる。体部は、 やや外反気味に外上方にのびて端部を丸くおさめている。水挽 き成形で、底部はほぼ一方向の静止箆削り調整。体部内面と、 口縁部内・外面は横ナデ調整。	黄灰色 細砂・長石粒多・長石微粒 普通 体部外面に墨書
2	S	坏 星宝湖	A(12.2) B 4.4 C 6.2	底部は平底で、底部と体部は、明瞭な角度で分かれる。体部は 外傾気味に外上方にのびて端部を丸くおさめている。水挽き成 形で底部は、一方向の静止箆削り調整。口縁部内・外面は、横 ナデ調整。体部下端部は、手持ち箆削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母多 普通 底部外面に墨書
3	S	坏	A(13.9) B 5.0 C 7.6	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部はややあまい角度 で分かれる。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸く おさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切りで無 調整。体部下端部は、手持ち箆削り調整。やや摩滅する。	灰白色 細砂・長石粒・長 石微粒・礫 不良 底部外面に箆記号,一部 ナデ消す。 体部内面に漆付着。
4	S	坏 M301	C 7.5	平底の底部で、体部は外上方にのびる。右ロクロ水挽き成形で、 底部は回転箆切りで調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に箆記号 底部内面に漆付着
5	S	高台付坏	D (8.9)	貼り付け高台は外下方にのび「ハ」の字状をなす。水挽き成形で底部は回転糸切り。高台内・外面は、横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 SI168と接合

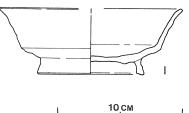
番号		器	種	法量	(cm)	形	態おる	じゅ	手法の	特徴		備	考	
6	S	高	i台付坏			貼り付け高台は欠 調整。	損。右口	クロ水	焼き成形	ぎで底部は回	転箆削り	灰色 細砂・長石粒・長 普通 底部外面に箆記		粒
7	S		蓋 A(12 B 3			下降する。天井部 は下方向に屈曲し	天井部中央に宝珠形のつまみが付く。天井部は丸くなだらかに 下降する。天井部と口縁部の境界に明瞭な稜をなさず,口縁部 は下方向に屈曲して端部を丸くおさめている。水挽き成形で, 天井頂部は,回転箆切り後軽い横ナデ調整。					た 灰色		
8	s	台	付 盤			底部の一部と思わ 転節削り調整。	れる。水	挽き成	形で底部	は右ロクロ	使用の回	オリーブ黒色 細砂・長石粒・長 雲母 不良 底部外面に線刻		<u></u>
9	Н		抔	С	7.2	平底の底部で,体 傾気味に外上方に 向の静止箆削り調	のびる。	水挽き	成形と思	われ,底部	は、多方	にぶい橙色 細砂・雲母・長石 普通	粒	
10	Н		甕 A(14.9) F 15.4			部は、やや外上方	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端 部は、やや外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。 体部内・外面は箆ナデ後ナデ調整。頸部内面に粘土紐痕を残す。 全体に薄手作り。				隆。砂粒·長石粒·雲母			
11	Н		甕.	A(11	1.3)	丸く張った体部か 部を僅かに外上方に 整。体部内・外面に	こつまみ	出す。	に屈曲す口頸部内	る口縁部が・外面は,	付き,端 横ナデ調	明赤褐色 砂粒·長石粒·雲 普通	□	
12	Н		甕	A (20 F 23		体部は内彎しつつご付き、端部をほぼまデ調整。体部内面にナデ調整で下位は貸を残す。	垂直につき は横位の〕	まみ出るナデ	す。口頸? 調整。体?	部内・外面(部外面は、	は,横ナ 縦位の節	橙色 砂粒・長石粒・雲 ア 普通	母・ス	コリ
番号	種	類	法量	(cm)	Ŧ	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	備	考
13	砥	3.0 損		損。 片面	形を呈し,一部欠 のみに使用痕が認 れる。	流紋岩 230.1 g	15	砥 石(転用砥)	5.8×5.6 4.5	一側面のめられる	みに使用痕が認	塼	製	
14	砥	石	3.6×3 2.3	3.3	全面れる	に使用痕が認めら	砂 岩 35.8g	16	砥 ·石 (転用砥)	5.3×3.6 2.2	二側面にれる。	に使用痕が認めら	瓦	製

161-B号竪穴住居跡 (第315図)

161-A 号竪穴住居跡の下位にあり、A 号より一回り小さく、 $4.2 \times 4.2 \text{m}$ の方形を呈している。

覆土は、A号の床面を形成している褐色土で、当跡から A号への建て替えとみられる。

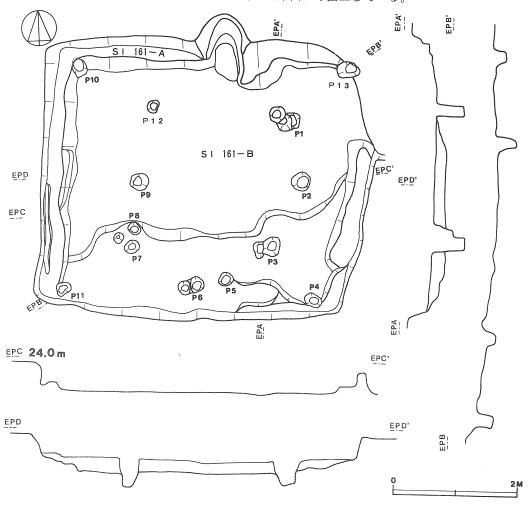
壁は、高さ10cmまで確認されたが、本来の壁高は40cmほどであったと思われる。床面は貼床で、軟弱である。床面構築にあたっては、南壁寄りに深さ40cm、その他は深さ60cmの掘方の上に、ロームブロックを多量に含む褐色土を約20cm充填し、床面としている。ピットは、A号に伴う



第314図 161-B 号竪穴住居跡 出土遺物実測図

かどうか判断できないものもあるが、中央部東西に位置する $P_9 \cdot P_2$ と各隅に位置する $P_4 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{13}$ が主柱穴とみられる。 $P_4 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{13}$ は深さ $30 \sim 40$ cmを測り、外下方へ向けて穿たれている。竈は不明である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦が少量北壁寄りの床面から出土している。



第315図 161-B号竪穴住居跡実測図

161-B号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第314図)

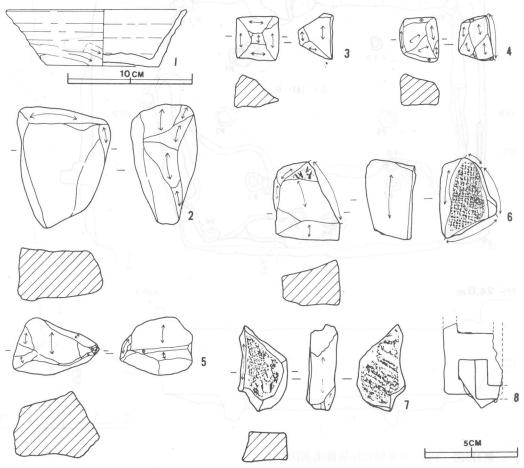
番号	20	者 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S		B 5.3 C 8.3	底部と体部の境界に明瞭な稜を持つ。体部は外反気味に外上方にのび、口縁部は強く外反し、端部はやや尖る。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。他全体に横ナデ調整。	細砂, 馬石站	・長石微粒

162号竪穴住居跡 (第311図)

調査区D4 b_1 区を中心に確認され、北壁部は161-A号竪穴住居跡によって失われている。規模は、 東西3.3m・南北2.97mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ10~20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、やや起伏を有し軟弱である。ピット・竈は確認されなかった。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、床面付近から出土している。



第316図 162号竪穴住居跡出土遺物実測図

162号竪穴住居出土遺物観察表 (第316図)

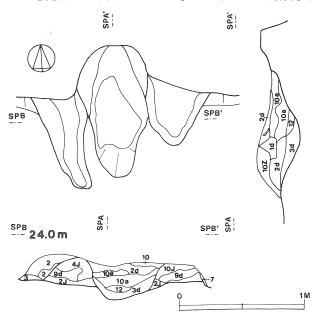
番号	器	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 14.3 B 4.6 D 9.0	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は 外傾気味に外上方にのび、口縁端部をやや丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後多方向の静止箆削 り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	明オリース 細砂・長石 石微粒・雲 不良 底部内面に	5大粒・長 雲母

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備	考
2	砥	石	6.4×4.6 2.5	三角形を呈し, 二側面に 使用痕が認められる。	砂 岩 119 g	6	砥 石(転用砥)	4.0×3.0 2.1	布目面のみを除いて使用 痕が認められる。	瓦	· 製
3	砥	石	2.2×2.2 1.7	方形を呈し、片面を除いて使用痕が認められる。 小形。	凝灰岩 10 g	7	砥 石(転用砥)	4.6×2.5 1.4	一側面のみに使用痕が認 められる。	瓦	製
4	砥	石	2.3×2.0 1.6	台形を呈し、全面に使用 痕が認められる。小形。	熔 岩 7 g	8	不 明 鉄製品	全長(3.8) 幅 (3.1)	厚さ1mmで1.5×1.0cmの 透しのある鉄板が組み合 わせてある。		POS SOCIOLOSIA
5	砥	石	4.4×3.1 2.9	一側面のみを除いて, 使 用痕が認められる。	砂 岩 51 g						

163号竪穴住居跡 (第317・318・319図)

調査区 D4b3区を中心に161-A 号竪穴住居跡の東に位置し、北東コーナー部を164号竪穴住居跡によって失われている。規模は、東西5.2m・南北4.04mを測り、主軸方向N-2°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、下層にロームブロックを含むが、自然堆積とみられる。壁は高さ23cmを測り、わずかに傾斜をもって外上方へ立ち上がる。南壁中央部を除く壁直下には、幅15 cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面は部分貼床で、ほぼ平坦である。床面構築にあたっては、東・西壁に沿った部分と、竈下および南壁寄りの4か所に土壙状の掘り込みを行い、ロームブロックを充塡して床面としている。ピットは14か所確認され、 $P_2 \cdot P_5 \cdot P_7 \cdot P_{11}$ が主柱穴とみられ

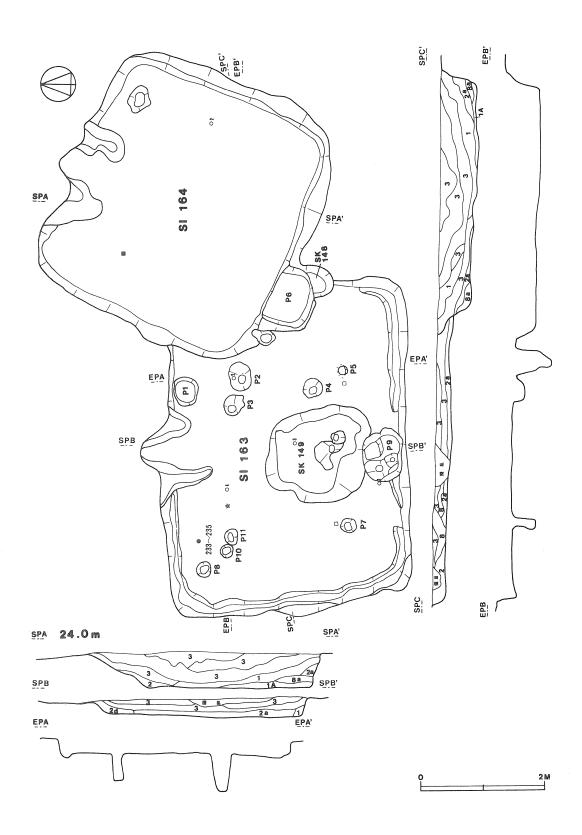


第317図 163号竪穴住居跡竈実測図

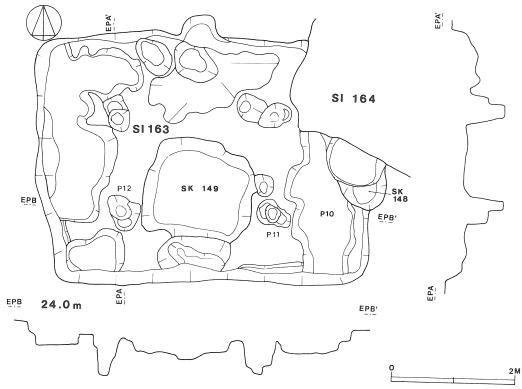
る。P₂·P₅·P₇·P₁₁は深さ40~60cm で、各々2~3本のピットが重複し、 建て替えが行われたものと考えられる。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.05 m・袖幅1.25 m・焚口部幅0.5 mを測る。壁外へ46cm掘り込んで構築されている。袖部は山砂で築かれている。焼成部は床面より13cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。

遺物は、土師器・須恵器・墨書土器・ 瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙・ 漆しぼり料が出土している。漆紙は、 竈西側の覆土下層から出土している。



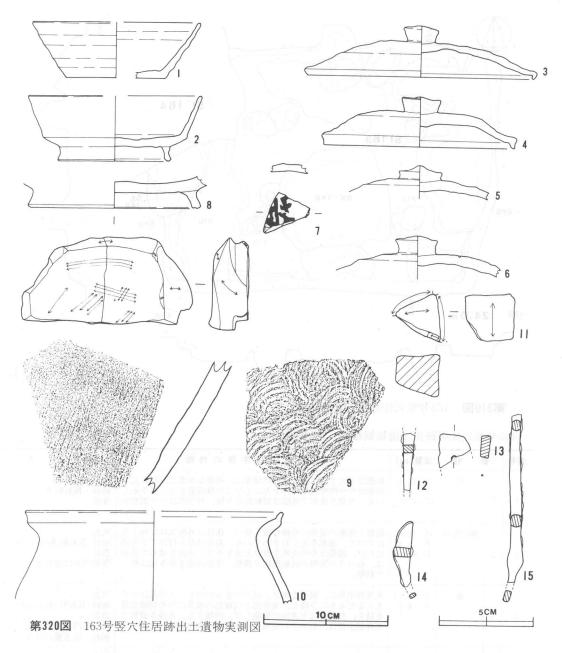
第318図 163·164号竪穴住居跡実測図



第319図 163号竪穴住居掘方実測図

163号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第320図)

番号	:	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坏	A (13.1) B 4.3 C (8.0)	底部は平底で、体部と底部の境界は、明瞭な角度で分かれる。 体部はやや内彎気味に外上方にのびて口縁端部を丸くおさめて いる。水挽き成形で底部は回転箆切り後、外周部はナデ調整か、	灰色 細砂・長石粒多 普通
2	S	高台付坏	A (13.8) B 5.3 D (8.9)	底部と体部の境界に明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に外上方 にのびて、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向 にのび、端部はやや丸味を帯びた面をなす。水挽き成形で底部 は、右ロクロ使用の回転箆削り調整。底部内面を除き他は横ナ デ調整。	灰色 細砂・長石粒多・長石微粒 良好 体部内面に漆付着
3	S	蓋	A(18.0) B 4.1	天井部中央に、扁平なボタン状のつまみが付く。天井部はやや丸くなだらかに下降し、天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲して、内傾する。水挽き成形で、天井部中位は、右ロクロ使用の回転篦削り調整後横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 天井部内部に黄白色の自 然釉。逆さ重ね焼き
4	S	蓋	A 15.1 B 4.0	天井部中央に、扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部はやや扁平で天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転箆削り調整。他は全体に横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒多 良好 逆さ重ね焼き
5	S	蓋		天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。水挽き成形で天井 頂部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。 つまみは横ナデ調整。	暗晴灰色 細砂·長石粒·長石微粒· 鉄分 良好
6	S	蓋		天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯びると思われる。水挽き成形で天井部は右ロクロ使用の回転節削り調整。つまみは横ナデ調整。	灰色 砂粒·長石粒·長石微粒·雲 母 普通

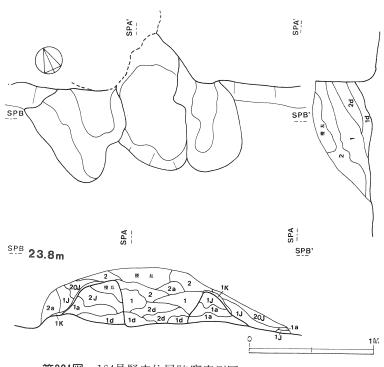


番号	1	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S	本 · 查 · 和		天井部の一部。	灰白色 細砂・長石粒 普通 天井部内面に墨書
8	S	台 付盤(転用硯・転用砥)	D 13.8	貼り付け高台は、外下方にのび「ハ」の字状をなす。水挽き成 形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。高台内・外面は 横ナデ調整。底部は側面三か所に砥石としての使用痕。	青灰色 細砂・長石粒・長石微 粒 普通 底部内外面に墨付着

番号	1	器	種	法	⊉ (cm)		形態	およて	び手法	の特徴		備	考
9	s		延			体部の一部。外面は摩滅が	外面は平 進行。	行叩き	目調整。	内面には同	心円文が残る。	灰色 細砂・長石 良好	粒
10	Н	獲 A(20.5) 胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部は外上方につまみ出す。						端部は外上方	橙色 砂粒・長石 普通				
番号	種	類	法量	(cm)	形息	まの特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	9 特 徴	備考
11	砥	石	2.6× 2.0	2.3	片面を履認められ 小形。	余いて使用痕が lる。	泥岩 14.8 g	13 (15	不 明 鉄製品		15は全長(9. cmで鏃とみり		
12	茎径(全長(茎径0 0.4		茎部か。 両端部外	て損。			enemant in the control of the contro		L		

164号竪穴住居跡 (第318・321図)

調査区D4a4区を中心に確認され、南西コーナー部で163号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。規模は、東西4.3m・南北4.0mを測り、主軸方向N-27°-Eを指す隅丸方形を呈している。



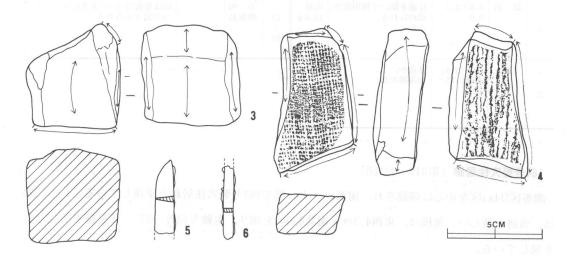
第321回 164号竪穴住居跡竈実測図

覆土は、褐色・暗褐色 土の自然堆積である。壁 は高さ55cmで、75度内外 の傾斜をもって立ち上が る。床面はほぼ平坦で、 比較的踏み固められてい る。ピットは、北東コー ナー部に1か所だけ確認 されている。

竈は、北壁やや西寄り に構築され、長さ1.1m・ 袖幅1.5m・焚口部幅0.57 mを測り、壁外へ23cmほ ど掘り込まれている。袖 部は、少量のロームブロ ックを含む山砂をもって構築されている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄滓が、覆土中から少量出土している。





第322図 164号竪穴住居跡出土遺物実測図

164号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第322図)

番号	14	器	種	7	去量 (cm)		形態	3 よて	が 手 法	の特徴		備	考
1	S	81	装			天井部中央に の接合部に浅 挽き成形と思 デ調整。	い溝を巡!	らす。	天井部は	平坦に作る。	右ロクロ水	灰白色 細砂・長石 微粒 普通	粒・長石
2	Н		甕	A (23.1)	口縁部は外反溝を巡らす。内						にぶい橙色 細砂・長石 ・スコリア 普通	粒・雲母
番号	種	類	法量(d	cm)	形態	の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態	の特徴	備考
3		石	4.8	菜!	いて使用症	、、二側面を除 寝が認められる	流紋岩 180.5g	5	刀子	全長(3.9) 刃幅 1.0	切先部。 下部欠損。	m Zuos	23.8
4		石明砥)	2.0		瓦面を除い 用痕が認め		瓦 製	6	不 明 鉄製品	全長(3.8) 太さ 0.55 0.2	両端部欠打		

165号竪穴住居跡 (第323・324図)

調査区 D3 a8 区を中心に156号竪穴住居跡の南に位置し、東西4.62m・南北3.7m を測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

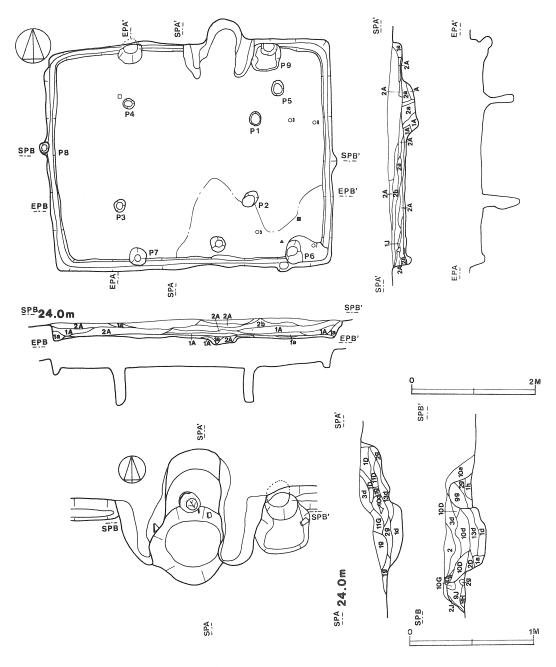
覆土は、上部で攪乱を受けているが、褐色・暗褐色土を主体とし、部分的に人為的堆積とみられる層がある。壁は高さ25cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。壁直下には、幅15cm・深さ8cmの壁溝が全周している。床面は平坦で、南東コーナー部と竈周辺が良く踏み固められている。床面の構築にあたっては、各コーナー部と、中央部やや南寄りに不整形の土壙を掘り、ロームブロックを含む褐色土を充塡して床面としている。ピットは12か所確認され、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴とみられ、深さは60cmを測る。それ以外に、南壁下と北壁直下にそれぞれ2本ずつ、75度の傾斜をもって外下方に穿たれたピットがある。深さは35~50cmを測る。

竈は、北壁やや東寄りにあり、長さ1.1m・幅1.1m・焚口部幅0.53mを測り、壁外へ39cm掘り込まれている。袖部は、下部が山砂とロームブロックで、上部が山砂で築かれている。焼成部は床面より15cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は袖部寄りに堆積し、中央部は灰が堆積している。焼成部やや奥壁寄りに、土師器小形甕が倒立して置かれ、支脚としている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が、竈周辺と東寄りの床面付近から出土している。土師器平鉢と須恵器坏蓋は、東寄りの床面から出土している。漆紙は2点で、いずれも北東コーナー部の貼床内から出土している。

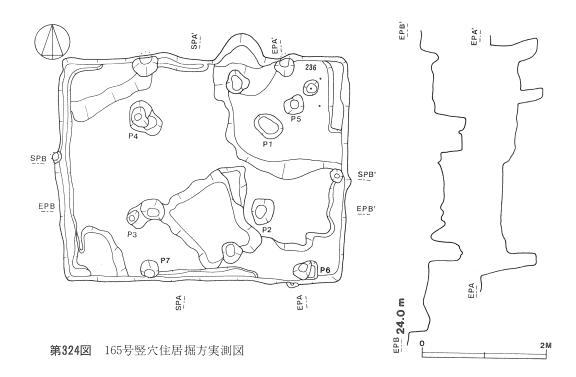
165号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第325·326図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A(14.2) B 5.4 C 9.2	底部は丸味を帯びた平底で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部はかるく外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は、右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・外面と体部内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂·長石粒 普通 体部内面全体	
2	S	高台付坏	D (6.9)	底部と体部はやや明瞭な稜線を持ち、体部は外傾気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで、ふんばり気味に下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。内面全体に横ナデ調整。	灰色 細砂・長石大統 ・鉄分多 普通 底部外面に超	
3	S	蓋	A 15.7 B 3.7	天井部中央に、中心が高く周囲が凹むつまみが付く。天井部は やや丸く、天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜線を持つ。水 挽き成形で、天井頂部から、天井部中位にかけ右ロクロ使用の 回転篦削り調整。他は横ナテ調整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒 雲母 普通 逆さ重ね焼き	・長石微粒・
4	S	短頸壺	F 26.9	肩が大きく張った体部から、外傾気味にのびる口縁部が付く。 粘土紐積上げ成形で、体部内面に粘土紐痕を残す。頸部内・外 面は横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整後横ナデ調整。体 部外面肩付近に平行叩き目を僅かに残す。	灰色 砂粒·長石粒多 多 良好	多· 長石微粒

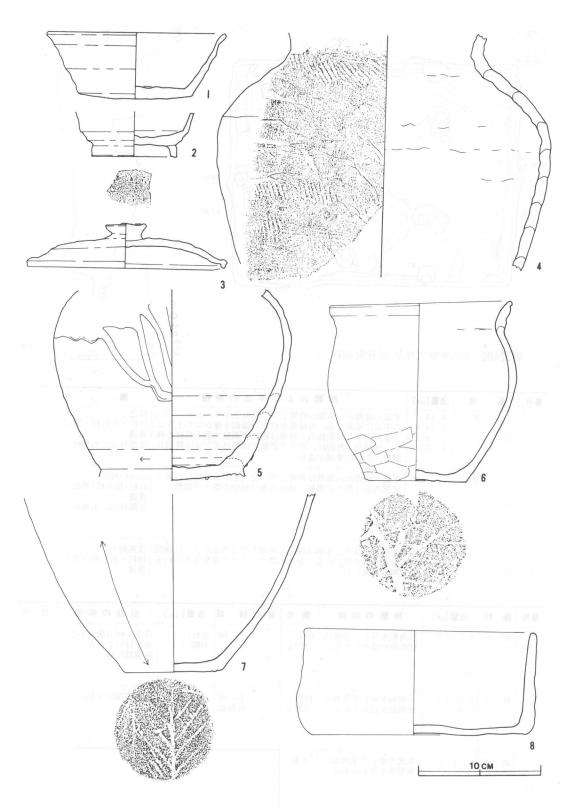


第323図 165号竪穴住居跡・竈実測図

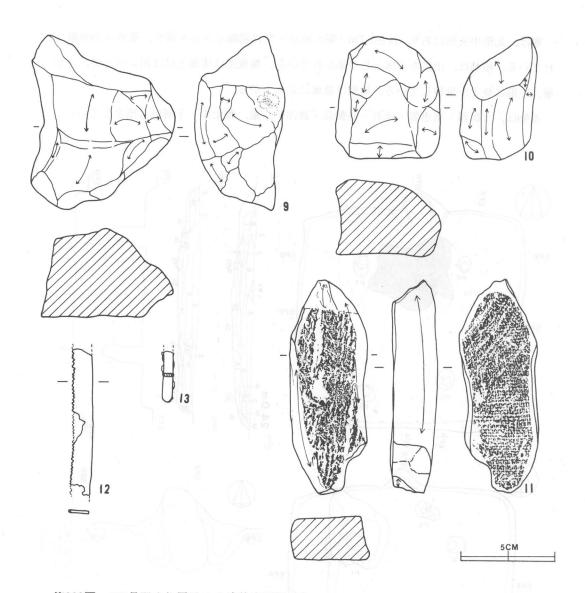
番号	2	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
5	S	台 付短 頸 壺	F 19.1	体部は内彎しつつ立ち上がる。貼り付け高台は「ハ」の字状をなすと思われるが欠損。底部内面はナデ調整。体部内・外面は横ナデ調整。体部外面下位は、回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 良好 体部外面とは 一部及び底部外面に 状自然釉 体部内面に漆付着	部内面の



番号	1	居	種	法量	(cm)	H	彡態 およ	び手	法の特	寺 徴	備考	
6	Н		甕	A 1-B 1-C F 1	4.6 8.1	平底の底部からなの字状に屈曲す。 つまみ出す。口質す。体部内・外間調整。全体に摩測	る。口縁部 領部内・外 面は, 箆ナ	が付き, 面は横 [・]	端部を作 ナデ調整	堇かに外上方↓ で刷毛目痕をタ	こ 砂粒・長石粒・雲母 浅 普通	
7	Н		甕	C	7.8	平底の底部から作底部内面は箆ナラ					と にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母・石 普通 底部外面に木葉痕。	英
8	Н	平	鉢	A:18 B 8 C 17	3.5	底部は平底で、4を丸くおさめてい 摩滅が激しい。					形 浅黄橙色 5。砂粒·長石粒·雲母 普通	
番号	種	類	法量	(cm)		形態の特徴	備考	番号	種類	法 量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥	石	8.7× 4.4	7.0		角形を呈し,片面に 月痕が認められる。	砂岩 310 g	12	金 鋸	全長(7.1) 刃幅 1.1	深さ1mm前後の小さな 刃が付いている。 両端部欠損。	
10	砥	石	6.5× 3.8	5.5		面を除いて全面に 痕が認められる。	砂岩 174 g	13	不 明 鉄製品	全長(2.7) 幅 0.5 厚さ 0.15	一方の端部欠損。	
11	砥 (転用		11.4× 2.2	(4.1		面を除いて全側面に 月痕が認められる。	瓦製					l



第325図 165号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第326図 165号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

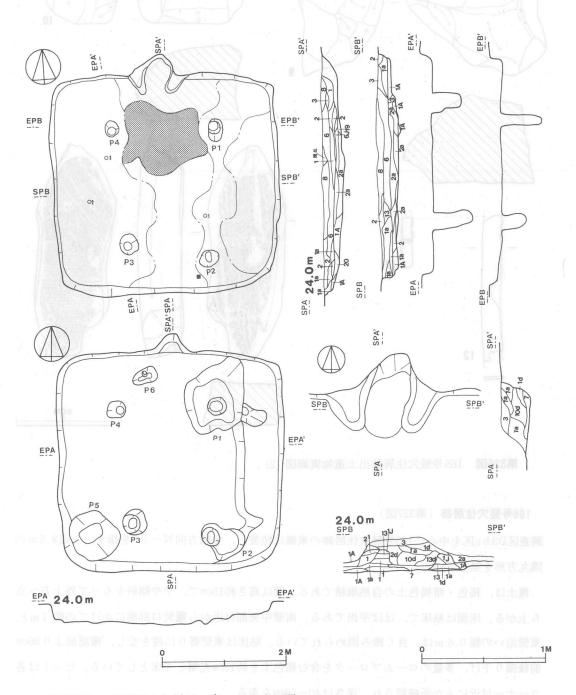
166号竪穴住居跡 (第327図)

調査区D3b₀区を中心に165号竪穴住居跡の東側に位置し、主軸方向N-0°を指す、1辺3.5mの 隅丸方形を呈している。

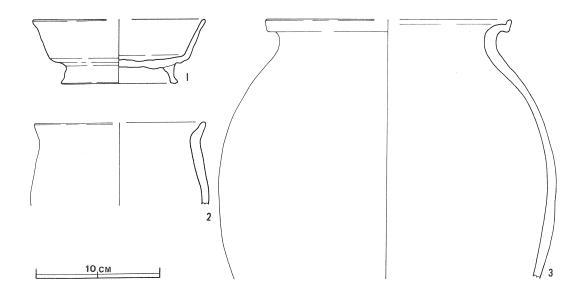
覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ約15cmで、やや傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は貼床で、ほぼ平坦である。南壁中央部付近から竈焚口部前にかけての幅1mと、東壁沿いの幅0.6 mは、良く踏み固められている。貼床は東壁寄りに段をなし、確認面より36cm前後掘り下げ、多量のロームブロックを含む褐色土を約15cm充填して床としている。ピットは各コーナー付近に4か所確認され、深さは40~68cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、長さ0.7m・幅0.85m・焚口部幅0.3 mを測り、壁外へ33cm掘り込まれている。袖部は、山砂を主体として築かれている。焼成部は床面とほぼ同レベルで、下層が灰層、上部に焼土が堆積している。奥壁は急激に立ち上がる。

遺物は、土師器・須恵器・砥石・鉄製品・鉄滓が少量、覆土中・下層から出土している。



第327図 166号竪穴住居跡・竈・掘方実測図

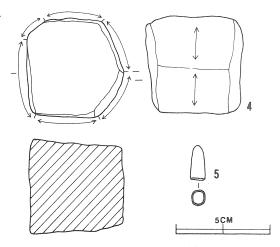


第328図 166号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

166号竪穴住居跡出土遺物観察表(第328・329図)

番号	F	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	高台付坏	A(13.7) B 5.2 D 9.1	底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持つ。体部は、外傾気味に 外上方にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下 方向にのび、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は回 転箆削り調整。底部内・外面を除き横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 体部内面に漆付着
2	Н	甕	A(13.8) F 14.4	胴の張った体部からかるく外反する口縁部が付き、口縁部内面 は僅かに凹む。口頸部内面は横ナデ調整。体部内面はナデ調整。 外面全体は摩滅が激しく調整不明。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・石英粒・ 雲母・スコリア 普通
3	Н	築	A(20.0) F 27.1	球形に張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き外端部に面 をなす。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内面は箆ナデ調 整。体部外面は箆ナデ後ナデ調整か。摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通

	番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考
	4	砥	石	5.1×5.1 4.5	方形を呈し、両面を除き 全側面に使用痕が認めら れる。	砂岩 240 g
_	5	弓引 鉄製		全長1.7 径 0.8	完形品。	



第329図 166号竪穴住居跡出土 遺物実測図 (2)

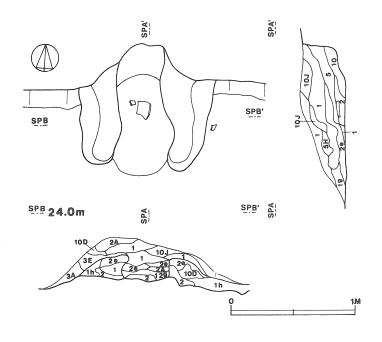
167号竪穴住居跡 (第330・331・332図)

調査区 D4c1区を中心に166号竪穴住居跡の南東に接するように位置し、168号竪穴住居跡の西半部を破壊して構築されている。規模は、東西4.1m・南北4.2mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸方形を呈している。

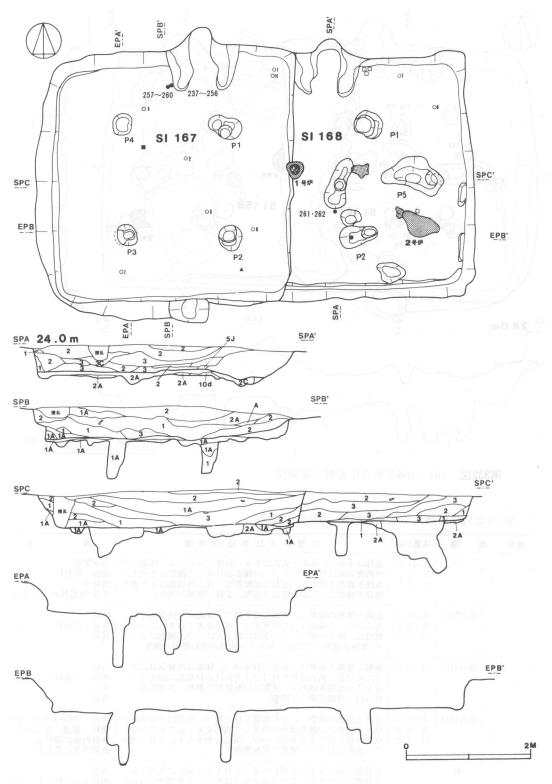
覆土は、褐色・暗褐色土で人為的堆積とみられる層もあるが、ほんんど自然堆積である。壁は高さ50cmを測り、75度の傾斜で直線的に立ち上がる。床面は南から北へ若干低くなるほかは平坦で、全体的に踏み固められている。床の構造は、168号竪穴住居跡は貼床であるが、当跡が貼床であるのかは判然としない。ピットは5か所確認され、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴とみられる。径約35cm、深さは P_4 が60cmである他は80cmを測り、各々2~3本の重複がみられ、建て替えが行われたものと堆測される。

竈は、北壁やや東側寄りにあり、長さ1.07m・幅1.03m・焚口部幅0.44mを測り、壁外へ34cm 掘り込まれている。袖部は、山砂を主体として築かれている。焼成部は床面と同レベルで、焼土 と灰が堆積している。奥壁部は急激に立ち上がる。焼成部中央から平瓦片が1点出土している。

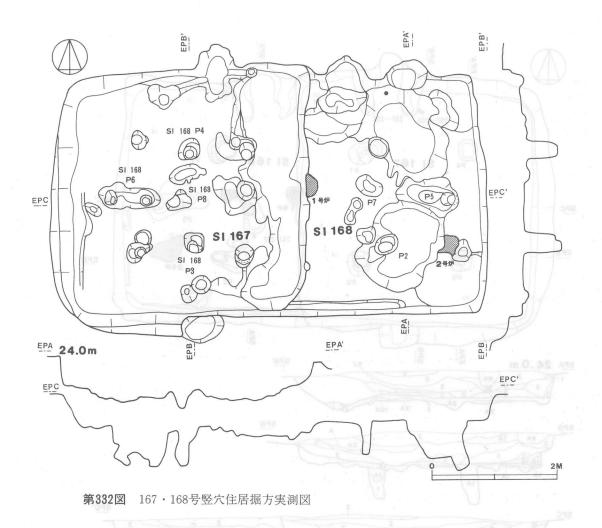
遺物は豊富で、土師器・須恵器・人面墨書土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が全面 にわたって出土している。漆紙は、竈西側の覆土中層から出土している。



第330図 167号竪穴住居跡竈実測図

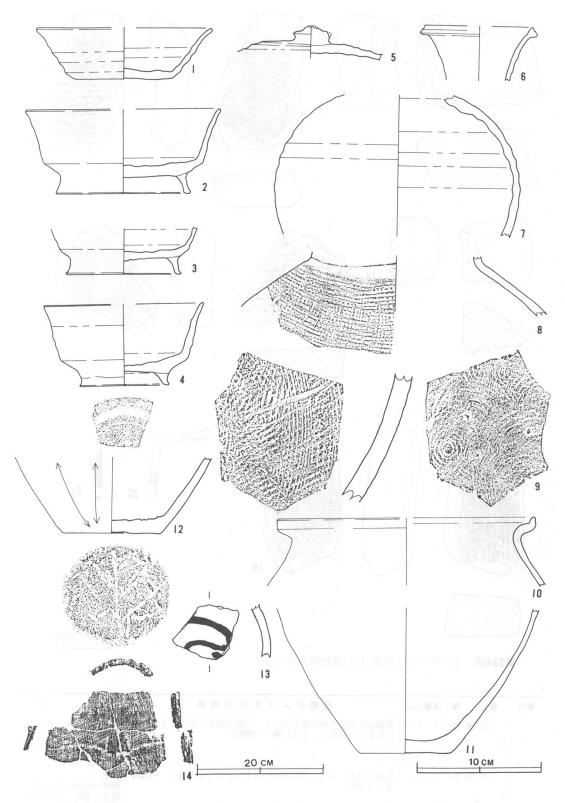


第331図 167·168号竪穴住居跡実測図

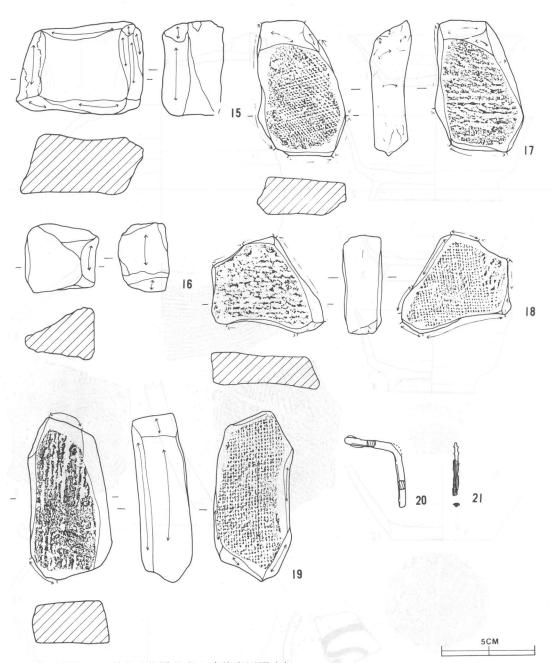


167号竪穴住居跡出土遺物観察表(第333·334図)

1 S B 4.1 C 7.7 や内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部はやや尖水挽き成形と思われ、底部は回転箆切り後、外周部はナデ調・体部下端部は一部回転箆削り調整。全体に摩滅が進行。 2 S 高台付坏 A (15.4) B 6.8 D (10.6) 底部と体部の境界に、明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に外方にのび、口縁部は、やや外反して端部を丸くおさめている。高台は、貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をす。水挽き成形で底部は、左ロクロ使用の回転箆削り調整。 3 S 高台付坏 A (12.6) B 6.6 D (7.2) 底部と体部の境界に、やや明瞭な稜を持つ。体部は内彎気味に外方にのびる。高台は貼り付けで下方向にのび端部に面をなす。右口クロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。体部外面と、高台は上りが上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右口クロ使用の回転箆削り。	番号		暑 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考		
2 S B 6.8 D(10.6) 方にのび、口縁部は、やや外反して端部を丸くおさめている。高台は、貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をす。水挽き成形で底部は、左ロクロ使用の回転箆削り調整。 3 S 高台付坏 D (9.2) 底部と体部の境界に、あまい稜を持つ。体部は内彎気味に外方にのびる。高台は貼り付けで下方向にのび端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。体部外面と、高台内・外面は横ナデ調整。 4 S 高台付坏 A (12.6) B 6.6 D (7.2) 底部と体部の境界に、やや明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味が外上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り。	1	S	坏	B 4.1	B 4.1 や内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部はやや尖る。系 C 7.7 水挽き成形と思われ、底部は回転箆切り後、外周部はナデ調整。雪				
3 S 方にのびる。高台は貼り付けで下方向にのび端部に面をなす。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転篦削り調整。体部外面と、高台内・外面は横ナデ調整。 高台付坏 A(12.6) B 6.6 D (7.2) 底部と体部の境界に、やや明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味し外上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転篦削り。	2	S	高台付坏	B 6.8	底部と体部の境界に、明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に外上 方にのび、口縁部は、やや外反して端部を丸くおさめている。 高台は、貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をな す。水挽き成形で底部は、左ロクロ使用の回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・ 普通	長石微粒		
4 S B 6.6 外上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。 高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右口クロ使用の回転箆削り。	3	S	高台付坏	D (9.2)	底部と体部の境界に、あまい稜を持つ。体部は内彎気味に外上 方にのびる。高台は貼り付けで下方向にのび端部に面をなす。 右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆削り調整。体部外面と、 高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・ 多 普通	長石微粒		
蓋 天井部中央に扁平な宝珠形つまみが付くが、僅かに欠損する。	4	S	高台付坏	B 6.6	底部と体部の境界に、やや明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に 外上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。 高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水挽き成形 で、底部は右ロクロ使用の回転箆削り。	灰色 細砂・長 微粒 普通 庭 体部内面に漆付 底部外面に箆記	部内面と 着		
	5	S	蓋		天井部中央に扁平な宝珠形つまみが付くが、僅かに欠損する。 天井部はやや平坦。右ロクロ水挽き成形で、天井部中位は回転 箆削り調整。つまみと天井頂部は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・ 普通	長石微粒		



第333図 167号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第334図 167号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	- 5	묾	種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	長頸	重	A (8.7)	頸部は上位ほど外反度が大きく、口縁外端部に面をなす。水挽き成形かと思われ、全体に横ナデ調整。	褐灰色 細砂・長石粒・ 長石微粒・鉄分 良好 口縁部内・外面に黄白色 の自然釉
7	S	短頸	重	F 19.8	体部は球形に張る。口縁部は欠損するが接合痕を残す。内面は 横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・ 鉄分 良好 体部外面に 浅黄色の自然釉

番号		器	種	法	量(cm)	形	態お。	t び =	手法の	特 徴		備	考	
8	S		甕			体部の一部。外面	は平行叩	き目調	整。内面	iはナデ調整	<u>C</u> 0	褐灰色 細砂・長石粒・雲 不良	(1)	
9	S		甕			体部の一部。外面同心円文を残す。	は平行叩	き目調	整で、箆	傷を残す。	内面には	灰色 細砂・長石粒 普通		Name of the last
10	Н		甕	A	(20.8)	胴の張った体部か 部をほぼ垂直につ 部内・外面は, 箆	まみ出す	。口頸	部内・外	 る口縁部が 面は横ナデ	付き,端 調整。体	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲 普通	:母	
11	Н		甕	С	7.2	底部は平底で体部 箆ナデ調整。体部 整。全体にやや摩	内面は箆					暗褐色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木葉		
12	Н		甕	С	7.9	底部は平底で体部調整。体部内面は	は外上方	にのび調整か	る。体部。	外面は縦位	の箆ナデ	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木葉		
13	Н		甕		The state of the s	小形甕の体部。外	面は横ナ	デ調整	。内面は	ナデ調整。		にぶい褐色 砂粒・長石粒・長石 普通 体部外面に墨書 SI168と接合	微粒·	雲母
14	7	τ.	瓦	狭端	(9.6)	玉縁付丸瓦。凸面に 凹面は布目を残す。 僅かに布目を残す。	. 側面は1	と箆ナ [・] 冤削り	デ調整で, 調整。端	玉縁はナ 面は箆削り	デ調整。 調整で,	灰黄色 細砂・長石粒・ 軟質	雲母/	
番号	種	類	法量(cm)	形	態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形	態の特徴	備	考
15	砥	石	5.6× 3.8	4.6		を呈し,両面を除 側面に使用痕が認 る。	砂岩 163.2g	18	砥 石(転用砥)	5.7×4.7 1.4		余き全側面に使用 うられる。	瓦	製
16	砥	石	4.8× 2.7	3.7	に使用	呈し,一側面のみ 痕が認められる。 分あり。	凝灰岩 40.3 g	19	砥 石(転用砥)	8.4×4.0 2.2			瓦	製
17	砥 (転用		7.6× 1.9	4.7		除き全側面に使用 められる。	瓦 製	20 • 21	不 明 鉄製品		る。	三状に屈曲してい - 2.8 cm, 幅2.2cm	21に 木質 てい	がすし

168号竪穴住居跡 (第331・332・335図)

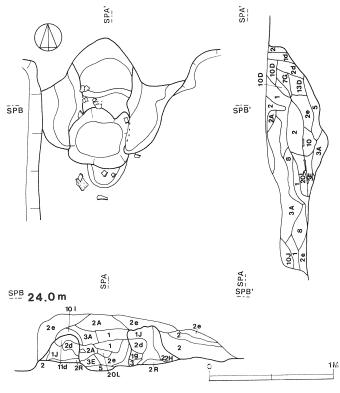
調査区 $D4c_1$ 区を中心に確認され、西半部を167号竪穴住居跡によって失っている。規模は南北 3.83 m・東西は柱穴の位置から7.02 m と推定され、主軸方向N-0 ° を指す長方形を呈していたとみられる。

覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ30~40cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。南壁下に幅15cm・深さ8cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、ほぼ平坦に比較的踏み固められている。貼床は、掘方の上に10cm前後のロームブロックを充填して床としてい

る。ピットは、167号竪穴住居跡の床下から確認されたものを含めて11か所ある。主柱穴は、 $P_1\sim P_6$ の6 か所とみられる。 $P_1\sim P_4$ は径33cm ・深さ $60\sim 80$ cmを測り、 P_1 を除いて2本が重複している。 P_5 ・ P_6 は 1×0.4 mの長楕円形を呈し、中央部側は垂直に、壁側は75度の傾きをもって外下方に向けて穿たれ、深さ70cmを測る。これは棟持ち柱になる柱穴で、傾きをもつピットは、棟持ち柱を斜めから支える柱のピットとみられる。さらに、 P_5 ・ P_6 の内側の P_5 ・ P_6 を結ぶ線上に、深さ55cmの P_7 ・ P_8 がある。なお、中央部と南東コーナー付近の2 か所に炉跡が認められている。 1 号炉跡はほぼ中央部にあり、西半部を167 号竪穴住居跡によって失われている。径30cmのほぼ円形を呈し、床面を約4 cm皿状に掘り凹めている。山砂等は認められず、厚さ3 cmの焼土がレンズ状に堆積している。2 号炉跡は南東コーナー部にあり、径30cmの不整形を呈している。約3 cm皿状に掘り凹め、約2 cmの焼土が堆積している。

竈は、北壁東部にあり、長さ1.0m・幅0.95m・焚口部幅0.4mを測り、壁外へ30cm掘り込まれている。袖部は、山砂をもって築かれている。焼成部は床面より17cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は、約5cm堆積している。なお、住居跡の形態から、竈が2基存在したことも考えられるが、確証は得られなかった。

遺物は、土師器・須恵器・人面墨書士器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙・漆が、全体的に少量出土している。漆紙は、1号炉と2号炉の間のP2・P10の上部・床面と同レベル付近から2点、北東コーナー付近の床面から1点、竈右側の貼床内から1点それぞれ出土している。



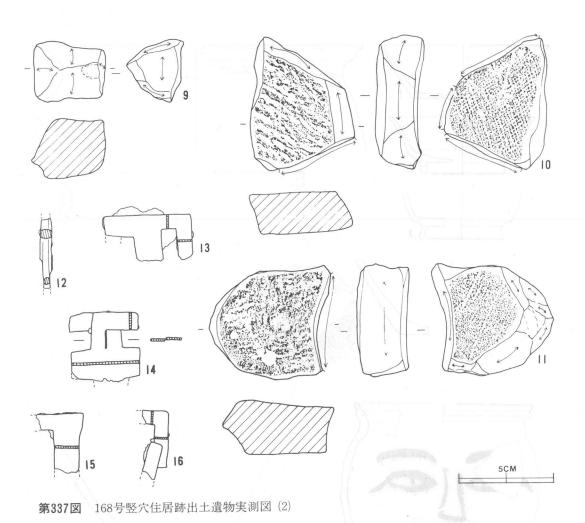
第335図 168号竪穴住居跡竈実測図



第336図 168号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)

168号竪穴住居跡出土遺物観察表(第336・337図)

番号	\$	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	74	A(13.6) B 4.3 C 8.0	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はや や内骨気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部を丸 くおさめている。水挽き成形で、底部は二方向の静止箆削り調 整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 体部内面に漆	
2	S	高台付坏	A(11.6) B 4.6 D (6.8)	底部と体部の境界に明瞭な稜を持ち、体部は外反気味に外上方 にのび、端部はやや尖る。高台は貼り付けで下方向にのび、端 部に面をなす。水挽き成形で底部は回転篦削り後、横ナデ調整。 体部外面を除いて全体に横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 鉄分 普通	・長石微粒
3	S	高台付坏	D (6.8)	小形の14。底部と体部の境界に明瞭な稜を持ち、体部はやや内 彎気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外 下方にのび、端部にやや丸みを帯びた面を有する。水挽き成形 と思われ、全体に横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒 普通	・長石微粒



番号	쿰	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	Н	袭	A(26.7)	胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、外端部 にあまい稜をなし、端部を外反してつまみ出す。口頸部内・外 面は、横ナデ調整で頸部外面は調整不良。体部内・外面は箆ナ デとナデ調整。口縁部外面に粘土紐痕を残す。	明赤褐色 砂粒·長石粒多·長石微粒 雲母多 普通
5	Н	甕	A(20.4)	胴の張った体部から、やや丸く屈曲する口縁部が付き、端部を ほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内 ・外面は箆ナデ後ナデ調整。やや摩滅が進行。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲田 普通
6	Н	3		底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのびる。体部外面は 斜位の篦ナデ調整。内面全体は篦ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒 長石粒・雲母 良好 体部内面に漆付着 底部外面に木葉痕
7	Н	甕		底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方にのびる。体部外面は縦位の箆ナデ調整。体部内面はナテ調整。	外面―灰褐色 内面―にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
8	Н	装	A(14.1) B 15.2 C 8.6	底部は平底で、体部は内彎しつつ立ち上がり、頸部内面に稜を 残して口縁部は外反し、内・外端部は凹ませている。口頸部内・ 外面は横ナデ調整。底部内面と体部内面はナデ調整。体部外面 はナデ調整で下位は箆削り調整。	褐色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に木葉痕 体部外面に墨書

	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥	石	3.8×3.2 3.0	長方形を呈し、片面を除いて全面に使用痕が認められる。	砂岩 38.8 g	12	鏃	全長(3.7 刃幅 0.6 茎径 0.3	茎部。 両端部欠損。	
10	砥 (転用		7.0×5.5 2.1	瓦面と一側面を除いて使 用痕が認められる。	瓦製	13 (16	不明鉄製品	i de tin	同一個体とみられる。 F字状・L字状・H字状 の金具である。	IN IN
11	砥 (転用		5.8×5.7 2.7	二側面のみに使用痕が認められる。	瓦製	d de Us		子供くな	朝から北にさらずでま 124~58cmを組む。 1	Lin
			3.171		88-4318	¥31.	2061	\$ 4 00.850 m.	经额限公司分割的 。	
1	0			SPA			SPA	SPB	EPA.	
\forall	7			NAME			- A	6	27 1-8	
			U	01 0,				fw.		
	#			06 01 P2	D()		#6 #E	fa	1	
	lt				The state of the s		M. Miles	and leaves	Market to a march	orbite.
								20 A		
SPB			SK.	P6	P	7	SPB'	6 2A 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	22	in the second
- (* SK 33	P6	P	7	19 M	3 2 6 gagagagagagagagagagagagagagagagagagag	28 28 28 19 1 A A A	1845 1810 1 631
- (Hen		P6	P EPB	7	78 機及	10	1 A A A A A A A A A A A A A A A A A A A	100
- (P6 P5 P5		7	78 機及	2 3 3 2 6 1 a 3 3 2 2 6 6 1 a 3 3 4 1 a 3 3 4 1 a 3 4	19 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28	100
- (P6 → P5 ⊗ P3		7	機成	3 2 6	EPA 13 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28	100
- (P6 P5 P6 P7 P6 P8 P7 P6 P8		7	24.2 m *** ***	3 3 2 6 6 1 3 3 2 2 9 6 1 4 3 5 2 9 9 1 9 1 9 1 9 1 9 1 9 1 9 1 9 1 9 1	EPA 13 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28	100
- (P6 P5 ⊗ P3 P6		7	24.2 m *** ***	2 3 3 2 6 8 2 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	EPA 18 28 28 28 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18	01
EPB				P6 P5 P5 P6 P4 P6 P4 P6 P4 P7 P6		7	24.2 m *** ***	2 3 3 2 6 8 2 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	EPA 18 28 28 28 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18	· 建筑 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
EPB				P6 P5 P5 P3 P6 P4 P5	EPB	7	24.2 m *** ***	2 3 3 2 6 8 2 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	EPA 18 28 28 28 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18	01
- (The state of the s		P4	P6 P5 P5 P6 P4 P6 P4 P6 P4 P7 P6		7	24.2 m *** ***	2 3 3 2 6 8 2 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	EPA 18 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28	100

第338図 169号竪穴住居跡・竈・炉跡実測図

169号竪穴住居跡 (第338図)

調査区D3d₉区を中心に165号竪穴住居跡の南に位置し、東西3.52m・南北3.24mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形を呈している。中央部西寄りに、当跡より新しい33号土壙が重複している。

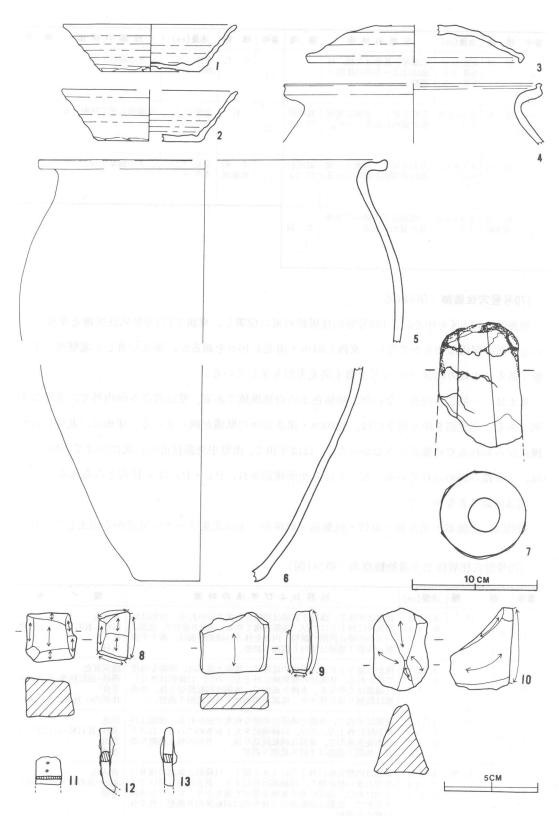
覆土は、褐色土の自然推積であるが薄い。壁は高い所で4cmあるが、南壁は確認できない。床面は、南から北にかけて若干低くなる。ピットは7か所確認され、 $P_2 \sim P_4$ は主柱穴とみられる。深さは24~58cmを測る。 P_7 は東壁外へ張り出し、 97×80 cmの楕円形を呈している。深さは55cmを測る。南壁寄りに炉跡が認められるが、北半部を33号土壙によって失われている。径40cmのほぼ円形に、約10cm皿状に掘り凹め、山砂を厚さ5cm敷きつめて炉床としている。炉床は表面が灰褐色、下部が橙色をしている。

竈は北壁ほぼ中央部にあり、長さ0.7m・幅1.0m・焚口部幅0.55mを測り、壁外へ16cm掘り込まれている。袖部は、下部がローム、上部が山砂で築かれている。焼成部は床面と同レベルで、中央部に羽口を立て支脚としている。奥壁はゆるやかに立ち上がり、瓦片が出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、東側付近の床面から出土している。

169号竪穴住居跡出土遺物観察表(第339図)

番号	岩	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 13.7 B 3.8 C 7.7	底部は、やや盛り上がった平底で、体部と底部は明瞭な角度で 分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反 して端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は 回転箆切り後、外周部だけ静止箆削り。体部下端部は手持ち箆 削り調整。	灰白色 細砂・長石粒 ・雲母 不良	・長石微粒
2	s	坏	A (13.8) B 4.1 C (8.0)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭な角度で分かれる。体 部は外傾気味に外上方にのび、口縁部はやや肥厚して端部を丸 くおさめている。水挽き成形で、底部は多方向の静止箆削り調 整。底部内面と口縁部内・外面は、横ナデ調整。体部下端部は 手持ち箆削り調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・ 良好	・長石微粒
3	S	蓋	A(17.0)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸くなだらかに下降する。天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲してやや内傾する。水挽き成形で、天井頂部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部内・外面と天井部内面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・ 普通	· 長石微粒
4	Н	蓰	A(20.7)	胴の張った体部から、「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部が付き、 端部をほぼ垂直につまみ出して丸くおさめている。口頸部内・ 外面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒多 普通	・雲母
5	Н	錾	A(27.7) F 30.5	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲した口縁部が付き、外端端部に面をなす。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面はナデ調整。体部外面は、篦ナデとナデ調整。頸部外面に粘土紐痕を残す。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通	雲母
6	Н	甕	C(10.5)	底部は平底と思われるが欠損。体部は内彎しつつ立ち上がる。 体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・ 普通	雲母



第339回 169号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態の特徴	備	考
7	KE	П	全長(10.0) 外径 6.1 孔径 2.2	先端部と基部は欠損。外面はほぼ一方向の箆削り調整。		11	小 札	全長(1.5) 幅 1.4	一方の端部欠損。		
8	砥	石	2.6×2.5 1.9	方形を呈し、全面に使用 痕が認められる。小形。	凝灰岩 33.6 g	12	釘	全長(3.7) 太さ 0.5	先端部欠損で屈曲する。		
9	砥	石	3.6×3.2 0.9	方形を呈し, 両面と一側 面に使用痕が認められる。		13	不 明 鉄製品	全長(3.1) 太さ 0.5	一方の端部欠損。		
10	砥 (転用		4.4×3.0 3.5	一側面のみを除いて使用 痕が認められる。	瓦 製						MATERIAL PROPERTY.

170号竪穴住居跡 (第340図)

調査区 $D3d_0$ 区を中心に、169号竪穴住居跡の東に位置し、東側で171号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は明らかでない。東西3.64m・南北3.16mを測るが、攪乱が著しく北壁部は不明瞭である。主軸方向N-9°-Eを指す隅丸方形を呈している。

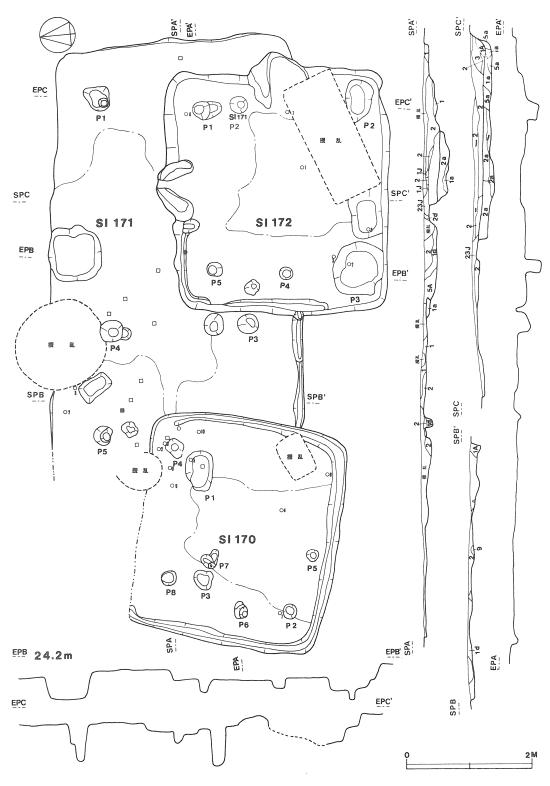
覆土は、一部しか残存しないが、暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ 5 cm内外で、北壁は不明である。北壁部を除く壁下には、幅20 cm・深さ 10 cmの壁溝が回っている。床面は、北壁付近が攪乱がみられるため確認できなかったが、ほぼ平坦で、南壁中央部付近から北にかけての幅1.6 mは、十分踏み固められている。ピットは 8 か所確認され、 P_4 ・ P_8 は主柱穴とみられる。

竈は確認できなかった。

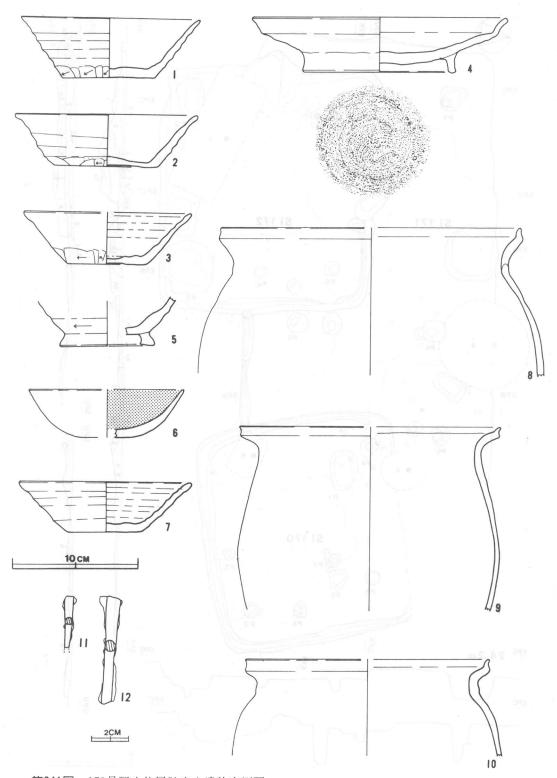
遺物は、土師器・須恵器・羽口・鉄製品・鉄滓が、主に北東コーナー付近から出土している。

170号竪穴住居跡出土遺物観察表(第341図)

番号	-	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考	
1	S	予 柱	A 14.2 B 4.9 C 7.3	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外 傾気味に外上方にのび、端部を薄く作る。水挽き成形で、底部は 一方向の静止箆削り調整。内面全体と口縁部外面は、横ナデ調 整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	青灰色 砂粒・長石粒多・長 粒 良好	 石微
2	S	λţ	A 14.4 B 4.3 C 8.3	僅かに盛り上がった平底の底部で、体部と底部は、明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部はやや尖る。水挽き成形で、底部は回転箆切り後、外周部は箆削り及び箆ナデ。体部下端部は手持ち箆削り調整。	暗灰黄色 細砂・長石粒多 長石 不良 体部内・外面に漆ん	
3	S	λţ	A(13.2) B 4.2 C 6.2	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外 傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロク ロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後、一方向の静止箆削り調 整。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微 雲母 普通	女粒・
4	S	台 付 盤	A 20.1 B 4.4 D 12.3	体部は内彎気味に外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界に ややあまい稜を持ち、口縁部は外反する。高台は貼り付けで下 方向にのび、端部にやや丸味を帯びた面をなす。右ロクロ水挽 き成形で、底部は回転糸切り後外周は回転箆削り調整。他全体 に横ナデ調整。	青灰色 細砂·長石粒多·長石 普通	で 微粒



第340図 170・171・172号竪穴住居跡実測図



第341図 170号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	1	器	種		法量(cm)		形態	およ	び手法	の特徴		備	考
5	S	台	付 壺	D	(7.6)	体部は内彎し く下方向にの 横ナデ調整。	び,端部	に面を	なす。内	面全体と高	貼り付けで太 台内・外面は,	細砂・長石 良好 底部	石微粒 邓内面に黄緑 ドロ状自然和
6	Н	The second secon	坏	В	(12.4) 3.9 4.5	端部を丸くおは、横ナデ調	部と体部は境界をなさない。体部は内彎気味に外上方にのび、 都を丸くおさめている。水挽き成形かと思われる。外面全体 横ナデ調整で体部下端部に僅かな回転箆削り痕を残す。内 全体は箆磨き後黒色処理。			にぶい橙色 長石微粒・ 普通			
7	Н		坏	В	13.6 4.1 6.0	底部は平底で, は外傾して外. 形で,底部は, ナデを見る。 転箆削りと手	上方にの , 回転箆 口縁部外	び,端切り後 面と体	部を丸く , 一方向 部外面は	おさめてい の静止箆削	る。水挽き成 り調整で一部	暗赤褐色 砂粒・長石 良好。	粒・雲母多
8	Н		甕		(24.1) 27.6	胴の張った体部 ほぼ垂直につき 横ナデ調整。 土紐痕を残す。	まみ出し 体部内・	,丸く. 外面は:	おさめて 箆ナデ調	いる。口頸	部内・外面は	淡橙色 砂粒·長石料 普通	立多·雲母
9	Н		甕		20.8) 21.0	胴の張った体語 味につまみ出 は箆ナデ調整。	す。口頸					にぶい橙色 砂粒・長石 雲母多 普通	粒・石英粒・
10	Н		甕	A (15.6)	やや歪みを持っ 強く外反して, は, 横ナデ調整 ナデ調整。	端部を	外反気	味につま。	み出す。口頭	頤部内・外面	にぶい褐色 砂粒・長石 粒・雲母 普通	
番号	種	類	法量(cm)	形態	の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の)特 徴	備考
11	釘	か	全長(2. 太さ 0.		先端部欠損	0		12	不 明 鉄製品	全長 5.8 太さ 0.6	断面は円形を	子呈している	0

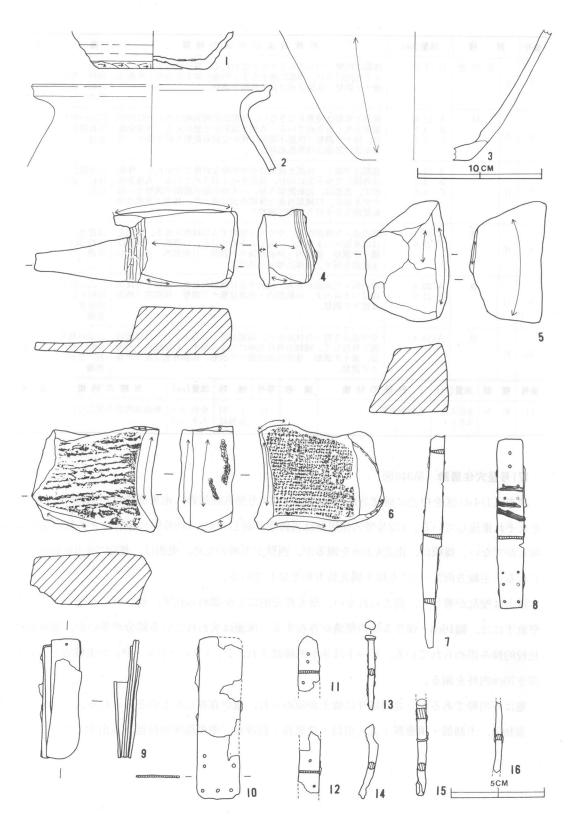
171号竪穴住居跡(第340図)

調査区 D4 d1 区を中心に確認され、西壁付近で170号竪穴住居跡、南東部で172号竪穴住居跡と、それぞれ重複している。172号竪穴住居跡は当跡より新しいが、170号竪穴住居跡との新旧関係は明らかでない。規模は、南北4.0mを測るが、西壁が不明のため、東西は、推定で6.0m前後とみられる。主軸方向 N - 0°を指す隅丸長方形を呈している。

覆土は攪乱が著しく,捉えられない。壁も部分的にしか認められず,高い所で 6 cmである。南壁直下には,幅16cm・深さ 5 cmの壁溝が存在する。床面は失われている部分が多いが,竈前面は比較的踏み固められている。ピットは 8 か所確認され, $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ が主柱穴とみられ,深さ70cm内外を測る。

竈は不明瞭であるが、北壁寄りに焼土が認められ、竈が存在したものとみられる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が、中央部床面付近から出土している。



第342図 171号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	1	居	種	法	(cm)		形態	およ	び手法	の特徴		備	考
1	S		坏	С	3.6	薄く盛り上が かれる。体部 底部は回転箆 ナデ調整。体	はやや内 切り後,	灣気味 多方向	に外上方 の静止箆	にのびる。 削り調整。	水挽き成形で	灰色 細砂·長石料 粒 普通	立・長石微
2	Н		甕	A (19	9.0)	胴の張った体部を外上方には横ナデ調整。 やや摩滅する。	つまみ出 ,体部内	して丸	くおさめ	ている。口	頸部内・外面	橙色 砂粒・長石 粒・雲母 普通	粒・石英
3	Н		獲	C (9	9.0)	底部は平底で付ける。 まず調整。体質					内面全体は箆	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通 底部外面に	
番号	種	類	法量	(cm)	形息	まの特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の	特徵	備考
4	砥	石	10.7>	<3.7		-側面を除いて が認められる。 }あり。	粘板岩 122.5 g		小 札		8 は完形品で 幅1.4cm。 9 は5枚が束 10は完形品で 幅2.3cm。	になっている。	8は木 質付着。
5	砥	石	6.4× 3.5	4.5		-部分と一側面 使用痕が認めら	泥岩 143 g	13 • 14	釘		13は全長4.0 cmで丸釘か。 14は釘か。		
6	低 転用	-	6.5×5 2.6	5.1	側面のみめられる	、に使用痕が認 。	瓦 製	15	錐か	全長(5.2) 太さ 0.55	錐の一種か。 グがはめられ 上部欠損。	中央にリン	
7	刀	子	全長() 刃幅 茎長	0.9	切先部欠	7損。		16	不 明 鉄製品	全長 (3.7) 太さ 0.3	一方の端部は ている。 両端部欠損。	は溝状を呈し	

172号竪穴住居跡 (第340・343図)

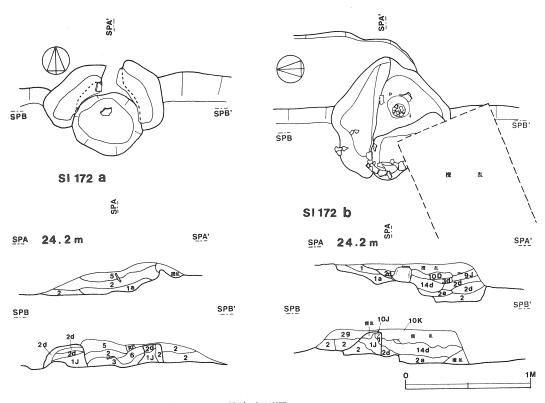
調査区 D4 b 1区を中心に確認され、北半部は171号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は 東西3.97m・南北3.57mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ25cmを測り、わずかに傾斜をもって立ち上がる。北壁竈西側と西壁下だけ、幅15cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、南から北へ向けてわずかに低くなる外は、南壁下から中央部付近までの幅1.8mが、十分踏み固められている。北西コーナー部床面には、焼土が認められる。貼床は、各コーナー部と中央部に土壙状掘り込みを設け、 $5\sim10$ cmの厚さでロームブロックを充塡している。ピットは7か所確認され、 $P_1\cdot P_3\cdot P_5$ は主柱穴とみられる。深さは $17\sim39$ cmを測る。

竈は、北壁中央部にある a号竈と、東壁中央部にある b号竈の 2基を有している。 a 号竈は、長さ0.76m・幅0.93m・焚口部幅0.52mで、壁外へ11cm掘り込まれている。袖部は、山砂に若干のロームを混ぜて築かれている。焼成部は床面と同レベルで、焼土の堆積は少ない。

b 号竈は、右袖部を失っているが、主軸方向N-99°-Eを指し、長さ0.98mを測る。袖部は、 山砂で築かれている。焼成部は床面より12cm低く、少量の焼土と多量の灰が堆積している。ほぼ 中央部に土師器甕が押しつぶされた状態で、やや奥壁寄りに、土師器小形甕を倒立させ、さらに その上に胴下半分を欠いた土師器甕が逆さに被せられた状態で出土している。

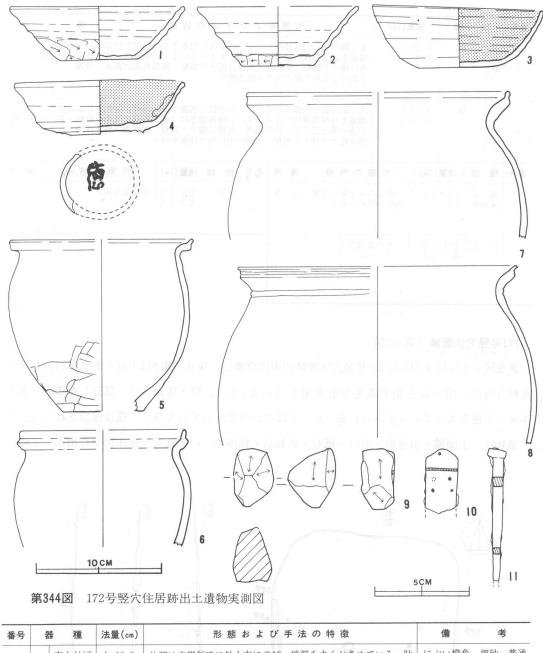
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓・漆紙が、全体的に少量出土している。なお、漆紙は、竈西側の覆土中層からの出土である。



第343図 172号竪穴住居跡 a · b 号竈実測図

172号竪穴住居出土遺物観察表(第344図)

番号	묾	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 13.8 B 4.4 C 6.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内彎 気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水挽き成形で 底部は一方向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調 整。	灰黄褐色 細砂・長石粒・J 粒・雲母 不良	長石微
2	S	坏	A(12.7) B 4.8 C 5.7	底部は平底で、体部と底部は鋭く明瞭な角度で分かれ、体部は 外傾気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水挽き成 形で、底部は一方向の静止箆削り調整。一部指頭押圧痕を見る。 内面全体と口縁部外面は横ナデ調整。体部下端部は手持ち箆削 り調整。	緑灰色 細砂, やや精」 普通 底部外面にわっ 箆記号を認め	ずかに
3	Н	境	A 13.4 B 5.2 C 5.8	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部は内	橙色 砂粒・長石粒 普通	・雲母

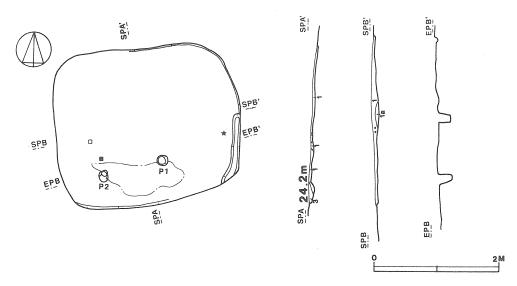


番号	2	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	Н	高台付地	不 A 13.3	体部は内彎気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水挽き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。底部内面に箆状工具使用による漆のコネ痕を見る。内面は箆磨き後黒色処理。	にぶい橙色 細砂 普通 内面全体と体部外面に漆 が厚く付着 底部外面に 墨書
5	Н	甕	A (14.5) B 14.9 C 6.5 F 14.3	小形甕。平底の底部で体部は内彎しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲 し、僅かに段をなす口縁部が付く。口縁端部は外上方につまみ出して 丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆 ナテ調整で下位は箆削り調整。口縁部内面に粘土紐痕を残す。	明赤褐色 砂粒・長石粒 良好 底部外面に木葉痕か
6	Н	甕	A(12.5) F 14.0	小形装。丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲し、外端面に明瞭な稜を作り、端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ後、ナデ調整。頸部外面に、粘土紐痕を残す。	橙色 砂粒·長石粒·雲母 普通

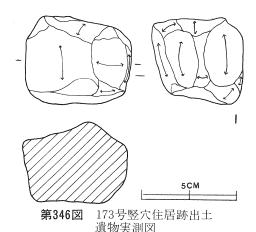
番号	<u>:</u>	器種		法量(cm)		形態および手法の特徴						備	考	
7	Н		甕 A(F).3) 3.9	丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き 端部をほぼ垂直につまみ出し、丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。頸部外面に箆状 工具による粘土紐のおさえ痕を残す。						にぶい橙色 砂粒・長石 普通	粒・雲母	
8	Н		甕 A(21.0) F 25.3		,	丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、 端部を外反気味につまみ出す。口縁外端部に一条、頸部に二条 の浅い溝を巡らす。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外 面は箆ナデ後ナデ調整。体部内面に粘土紐痕を残す。					にぶい橙色 砂粒・長石料 普通	粒・雲母		
番号	種	類	法量	(cm)	形息	点の特徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	形態 6	り特徴	備考
9		石 (1砥)	3.1× 2.8	2.1)みを除いて使. 忍められる。	瓦	製	11	釘	全長(7.0) 太さ 0.6	先端部欠損。		
10	小	札	全長(幅		一方の錯	結部は丸い。								

173号竪穴住居跡 (第345図)

調査区 D3 f8 区を中心に169号竪穴住居跡の南に位置し、現状で東西3.0 m・南北2.54 mを測り、主軸方向 $N-10^\circ$ —Wを指す隅丸方形を呈している。ただ、壁・床面共に一部分しか確認できず、本来の形態を失っているとみられる。ピットは2か所で、いずれも浅い。竈は確認されなかった。遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、いずれも少量床面から出土してる。



第345図 173号竪穴住居跡実測図



173号竪穴住居跡出土遺物観察表(第346図)

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	砥		5.6×4.6 4.2	長方形を呈し、片面と一 側面を除いて使用痕が認 められる。	砂岩 171.5g

174号竪穴住居跡 (第347·348図)

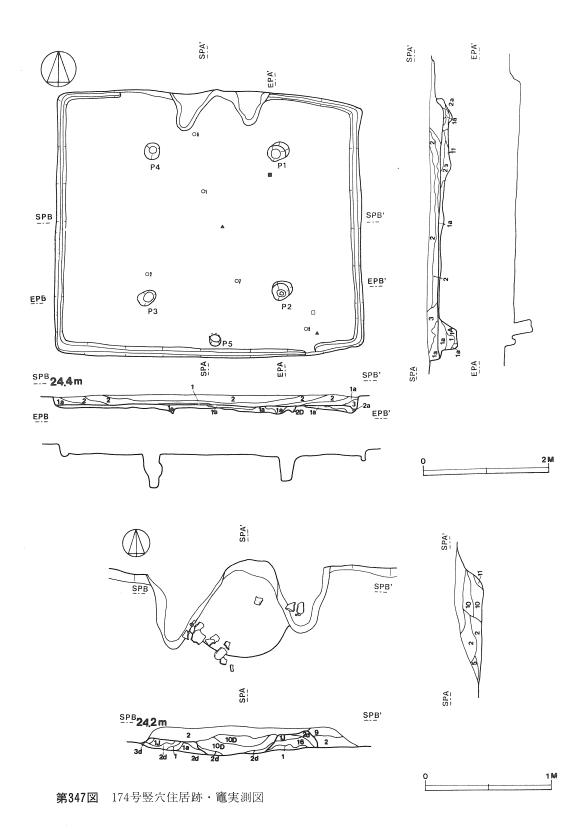
調査区 D4 f1 区を中心に173号竪穴住居跡の東に位置し,東西4.88m・南北4.23mを測り, 主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が回っている。床面は、貼床で南から北に向けて若干低くなる外は平坦で全体的に踏み固められている。貼床には、南壁と東壁に沿って幅60cmの溝状土壙を、また、北西隅の竈付近から南にかけて土壙を掘り、それぞれ5~30cmの厚さで、ロームブロックを充塡している。ピットは5か所確認され、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴とみられる。径26cm・深さ40~55cmを測る。竈は、北壁ほぼ中央にあり、長さ0.8m・幅1.35m・焚口部幅0.8mを測り、壁外へは掘り込まれていない。袖部は、山砂をもって築かれている。焼成部は床面より6cm低く、焼土と灰が10cm程堆積している。

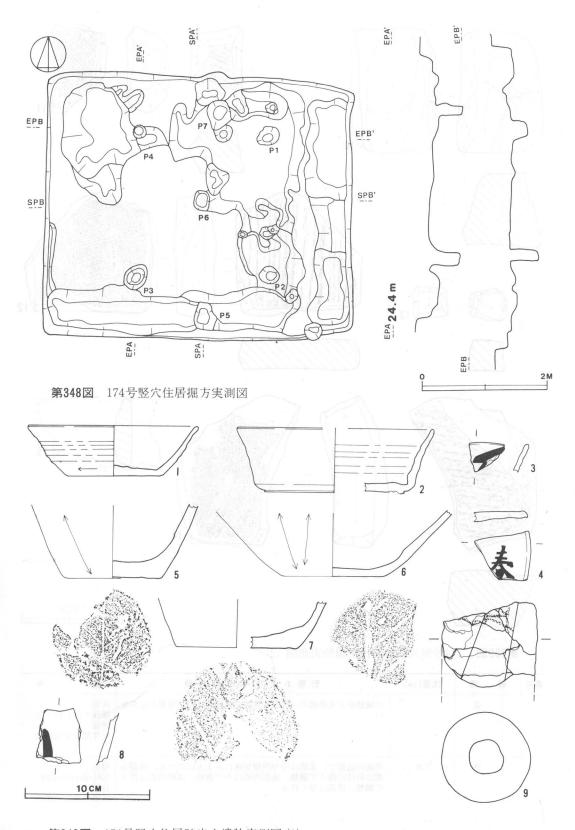
遺物は、土師器・須恵器・人面墨書土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、ほぼ全域にわたって出土している。

174号竪穴住居跡出土遺物観察表(第349·350図)

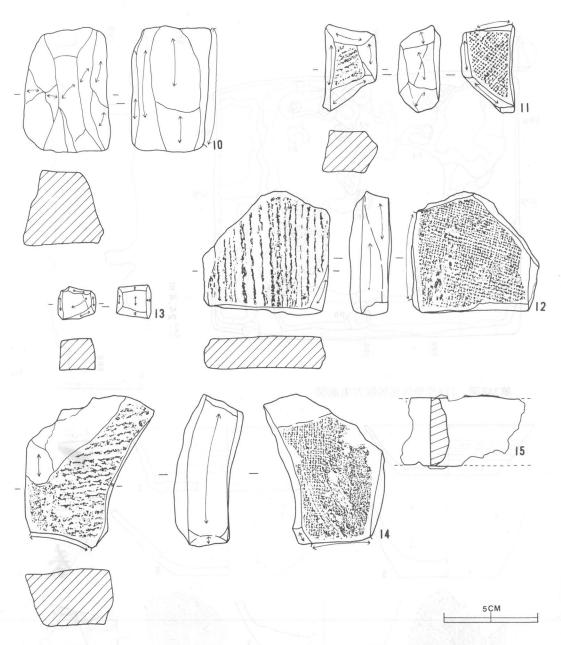
番号	ş	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	扩	A 13.5 B 4.1 C 7.8	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部 はやや内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。 右ロクロ水挽き成形で、底部は、回転箆削り調整。体部内面と 口縁部内・外面は横ナデ調整。体部下端部は回転箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 普通
2	S	高台付坏	A (15.6)	底部と体部の境界は、やや明瞭な稜を持つ。体部は外反気味に 外上方にのび、端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。 水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。底部内面 と口縁部内・外面及び体部外面は横ナデ調整。やや摩滅する。	青灰色 砂粒・長石粒・長石微* ・石英 普通
3	S	坏		口縁部の一部。水挽き成形と思われる。	灰色 細砂・長石微粒 普通 体部外面に墨書



-450-



第349図 174号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第350図 174号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	2	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
4	S	蓋		口縁部から天井部の一部。天井部と口縁部は殆ど境界をなさない。	灰色 細砂・長石 普通 天井部内面	-5
5	Н	至	C 7.8	平底の底部で、体部はやや内彎気味に外上方にのびる。体部外面は斜位の箆ナデ調整。底部内面はナデ調整。体部内面は箆ナデ調整。底部は厚く作る。	橙色 砂粒・長石粒 良好 底部外面に	

番号	1	器	種	法	1(cm)		形	態ま	ું દ	び手	法の物	持 徴	***************************************	備	考	-
6	Н		甕	С	8.2	平底の底の度でで調ける。	部で,体 整。内面	部はタ 全体に	外上 は箆	方に大 ナデ調	きく開く 整。体部	。体部外面 内面に粘土	は縦位の紐痕を残	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木葉		
7	Н		甕	С	9.6	平底の底。	部で,体 整。内面:	部は日全体に	内彎 は箆	気味にた	外上方に ナデ調整。	のびる。体 。	部外面は	外面―灰褐色 内面―にぶい黄 砂粒・長石粒・ 普通 底部外面に木葉 及び煤付着	雲母	
8	Н		甕			体部の一部	部。外面(は縦位	立のĵ	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	とナデ調	整。内面は [・]	ナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・長 雲母 普通 体部外面に墨書:		₫ •
番号	種	類	法量(cm)	Ħ	態の特	徴	備	考	番号	種類	法量(cm)	形	形態の特徴		考
9	RE	П	全長(6 外径 7 孔径 2	7.3	面に規	阝と基部はク 見則的な凹凸 ゛,小札痕が	凸が見ら	先損使黒化端状用くす	態で きれ, 釉薬	13	砥 石(転用砥)	2.0×1.6 1.7	全面に係る。小州	使用痕が認められ ジ。	瓦	製
10	砥	石	6.6× 3.8	4.4		ジを呈し, - を面に使用症 。		砂 191.:	岩 3 g	14	砥 石(転用砥)	7.8×4.7 3.0	二側面のめられる	のみに使用痕が認	瓦	製
11	砥 (転用		4.4×: 2.1	2.9		除き全側で		瓦	製	15	不 明 鉄製品	全長(5.7) 幅 3.6				
12	砥 (転用		6.6×6 1.6	5.4	一側面められ	iのみに使用 る。	月痕が認	瓦	製							O. C.

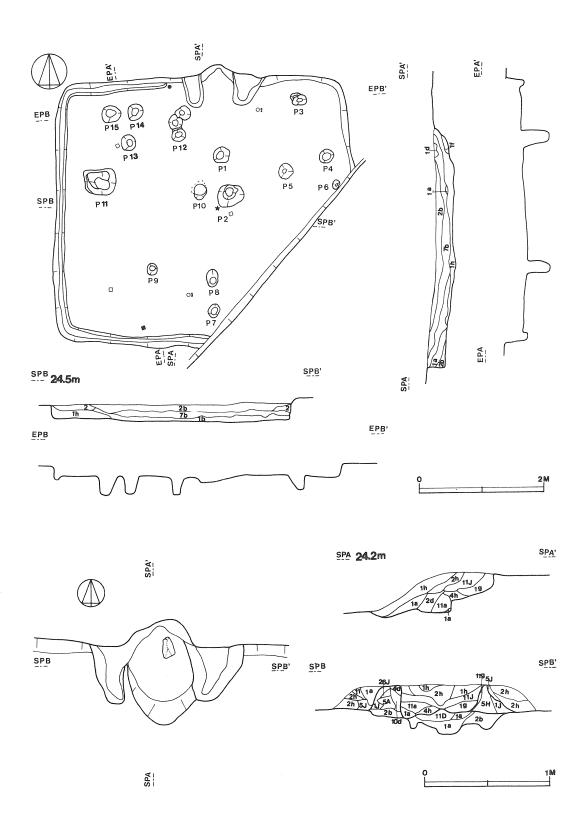
175号竪穴住居跡(第351図)

調査区 D4f3区を中心に174号竪穴住居跡の東に位置し,南東コーナー部は調査区域外に存在する。 規模は、東西4.76m・南北4.3mを測り,主軸方向N-2°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

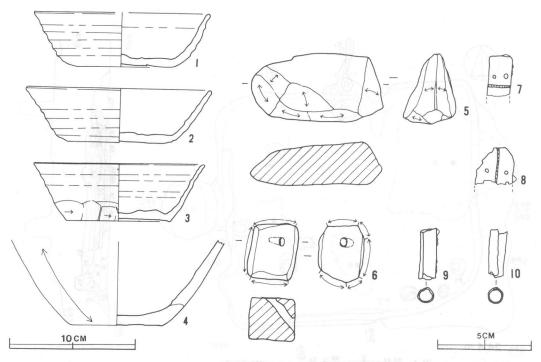
覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ25~30cmを測る。北壁 竈西側から南壁にかけて、幅14cm・深さ8cmの壁溝が巡っている。床面は、中央部やや西側で小 さな段を有し、中央部が若干凹んでいる。また、外周部は踏み固められているが、中央部は軟弱 である。ピットは17か所確認され $P_3 \cdot P_9 \cdot P_{14}$ が主柱穴とみられる。深さは50cm内外を測る。

竈は北壁やや東寄りにあり、長さ0.84m・幅1.15m・焚口部幅0.56mを測り、壁外へ21cm掘り込まれている。袖部は、山砂とロームを混ぜて築かれている。焼成部は床面と同レベルで、20cm程掘り込み、ロームを埋めて火床としている。焼土は少ない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が少量、中央部付近の覆土下層から床面にかけて出土している。漆紙は、竈西側の覆土下層上面からの出土である。



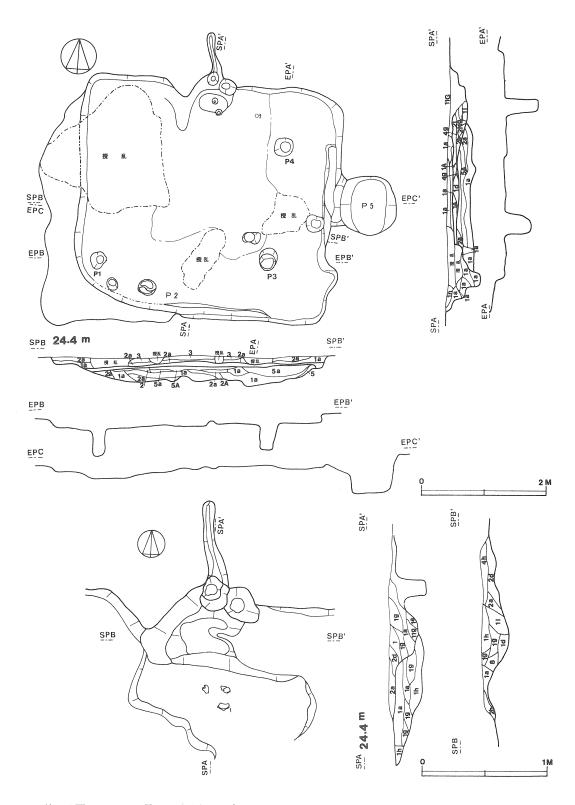
第351図 175号竪穴住居跡・竈実測図



第352図 175号竪穴住居跡出土遺物実測図

175号竪穴住居跡出土遺物観察表(第352図)

番号		器	種	法量(cm)		形態	およ	び手法	の特徴		備	考	
1	S		坏	A(13.8) B 4.4 C 8.6	彎気味に外上 おさめている 方向の静止箆	底部は平底で、底部と体部はあまい角度で分かれる。体部は内 彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して、端部を丸く おさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後一 方向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整か。全 体に摩滅が進行。							
2	S	L	坏	A(14.6) B 4.4 C 8.3	や内彎気味にロ水挽き成形	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箆切り後、軽いナデ調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。						緑灰色 細砂·長石粒·長石微 粒 不良	
3	S		坏	A 13.5 B 4.6 C 8.2	で分かれる。 くおさめてい	底部は平底で、体部と底部は箆削りによって、鋭く明瞭な角度で分かれる。体部は、やや内彎気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は多方向の静止箆削り調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。						立・長石微	
4	Н	10 / 10 10	甕	C 7.5	底部は平底で、底部内面は、資本葉痕の上か	粒ナデ調	整。体				にぶい橙色 砂粒・長石* 普通		
番号	種	類	法量(cm) 形息	の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態の	D 特 徴	備考	
5	砥	石	6.5×3 2.0		呈し,二側面の 痕が認められる。		7 . 8	小札	F	7 は残存長2 cmで一方の第 8 は残存長2	端部欠損。		
6		石 砥)	3.4×2 2.2	用痕が認	し,三側面に使 められる。斜行 孔を1孔有す。	凝灰岩 23.5 g	9 • 10	管 状 鉄製品	Parties of the state of the sta	9·10共に全長 0.9cmで完形 鉄板を折り曲	品。		



第353図 177-A号竪穴住居跡・竈実測図

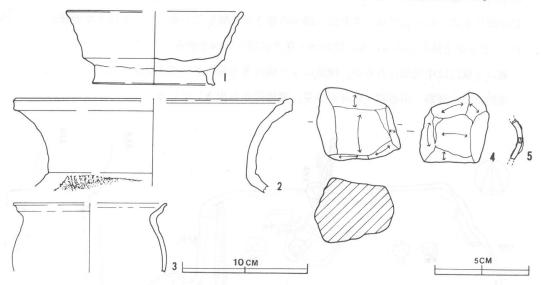
177-A号竪穴住居跡 (第353図)

調査区 $D4g_1$ 区を中心に174号竪穴住居跡の南に位置し、下位に177-B号竪穴住居跡がある。 規模は、北西部が攪乱を受けているものの、東西4.5m・南北3.73mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積である。壁はゆるやかに立ち上がり、高さ15cmである。床面は部分的に攪乱を受けているが貼床で、竈焚口部前面から中央部にかけて十分踏み固められている。貼床は、下位の177-B号竪穴住居跡の床面上に、ロームを $5\sim10$ cmの厚さで充塡している。ピットは9か所確認され、 $P_1\cdot P_3\cdot P_4\cdot P_{16}$ が主柱穴とみられる。径30cm・深さ $40\sim50$ cmを測る。 P_5 は東壁外にあり、 1.0×0.8 cmの楕円形を呈し、深さは48cmを測る。

竈は北壁中央部にあるが、上部は攪乱を受け、袖部等が確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄滓が少量、床面付近から出土している。



第354図 177-A 号竪穴住居跡出土遺物実測図

177-A号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第354図)

番号	1	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	高台付坏	A (14.1) B 5.9 D 9.9	底部と体部の境界は明瞭な稜を持つ。体部は外傾気味に外上方 にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方に のび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の 回転箆削り調整。他は全体に横ナデ調整。高台外面に接合痕を 残す。	外面—青灰色 内面—灰赤色 細砂·長石粒多 粒·雲母 普通	・長石微
2	S	甕	A(22.0)	口縁部は上位ほど外反度が強く、外端部に面をなす。頸部内面は、箆削り後横ナデ調整。体部外面に叩き目調整を見る。他全体に横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒多 粒多・雲母 普通	・長石微
3	Н	甕	A(12.1) F 12.2	小形装。丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。 口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内・外面は、箆ナデ後、ナデ調整。全体に薄手作り。	橙色 砂粒・長石粒・雪 普通	

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	砥	石	4.2×3.8 3.2	台形を呈し、片面と一側 面を除いて使用痕が認め られる。		5		全長(2.2) 厚さ 0.25	断面は円形で弓円状を呈 している。 両端部欠損。	

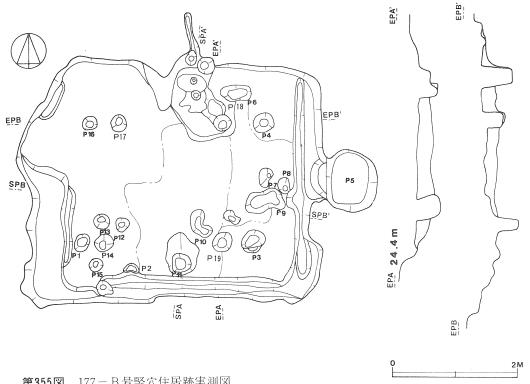
177-B号竪穴住居跡 (第355図)

177-A号竪穴住居跡の下位にあり、A号より一回り小さい。規模は、東西3.7m・南北3.57m を測る隅丸方形を呈している。

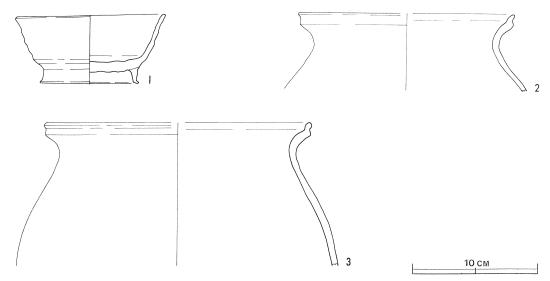
覆土は、A号の貼床を構築する層である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ20cmを測る。北壁 部を除く壁下には、幅20cm・深さ10cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、やや起伏を有している。 南壁部から竈焚口部にかけては、十分踏み固められている。貼床は平面プランと同じ形態で35~ 45cm掘り下げ、ロームブロックを20~25cmの厚さで充塡している。ピットは9か所確認され、P14・ P₁₇~P₁₉が主柱穴とみられる。径30cm・深さは35~50cmを測る。

竈は北壁ほぼ中央部にあるが、攪乱により構造等を明らかにできなかった。

遺物は、土師器・須恵器・鉄滓が少量、竈周辺から出土している。



第355図 177-B号竪穴住居跡実測図



第356図 177-B号竪穴住居跡出土遺物実測図

177-B号竪穴住居跡出土遺物観察表(第356図)

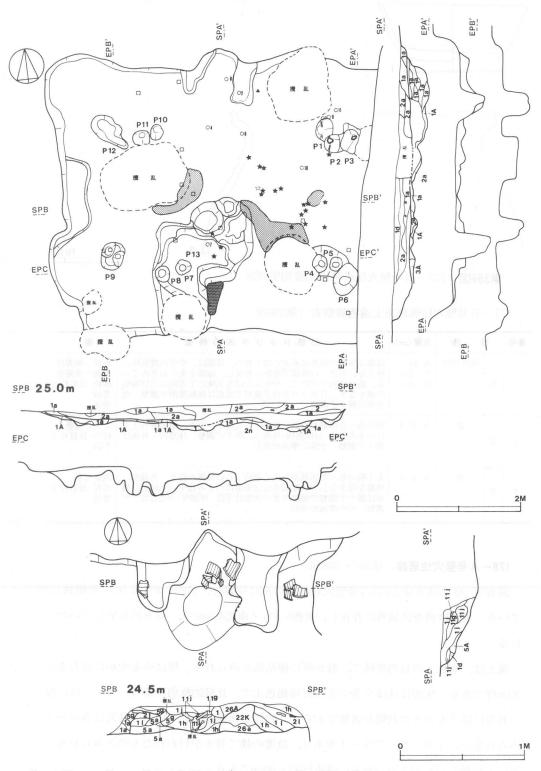
番号	ş	器 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	高台付坏	A 11.7 B 5.6 D 8.0	底部と体部の境界はあまい稜を持つ。体部は、やや内彎気味に 外上方にのび、口縁部で僅かに外反し、端部を丸くおさめてい る。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に下方向にのび端部 に面をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆削り調整。他 全体に横ナデ調整。	外面—明青灰色 内面—灰褐色 砂粒·長石粒·長 雲母 普通	
2	Н	蓌	A(17.2)	胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内・外面は 箆ナデ調整。全体に摩滅が進行。	にぶい橙色 砂粒・長石粒多 不良	
3	Н	雅	A(20.6)	丸く胴の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、外端部に 明瞭な稜をなしつつ端部をほぼ垂直につまみ出す。口頸部内・外 面は横ナデ調整で頸部外面の調整は不良。体部内・外面は箆ナデ 調整。やや摩滅が進行。	浅黄橙色 砂粒·長石粒多· 普通	石英粒

178-A号竪穴住居跡 (第357・358図)

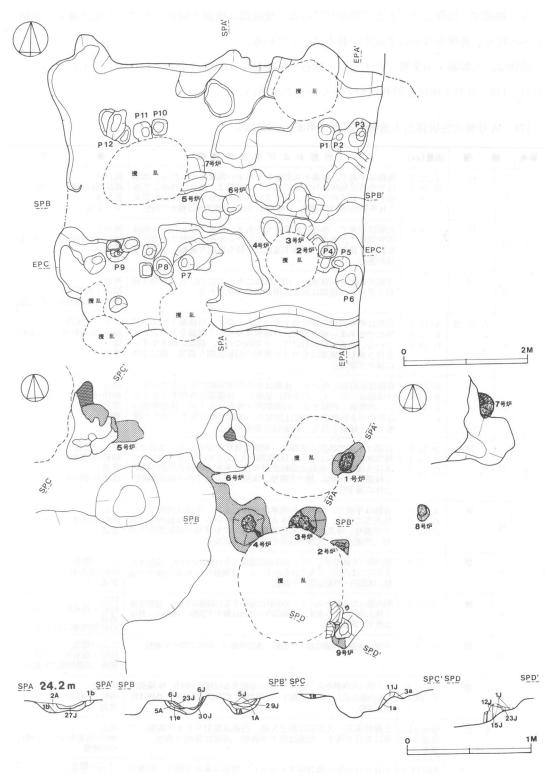
調査区 $D3j_0$ 区を中心に177号竪穴住居跡の南に位置し、178-B号工房の廃絶後に構築されている。東側は調査区域外に存在し、東西5.8m・南北4.3mで、長方形を呈していたものとみられる。

覆土は、褐色土の自然堆積で、数か所に攪乱坑がみられる。壁はゆるやかに立ち上がり、高さ30cm程である。床面は鉄滓を多く含んだ暗褐色土で、比較的軟弱である。ピットは、攪乱や178-B号に伴うものとの判別が困難であるが、約20か所確認されている。柱穴は各コーナー付近にみられるが、1コーナーで3~4本あり、数度の建て替えが行われたものとみられる。壁寄りのピットが新しいものとみられる。深さは35~60cmである。

竈は北壁中央部にあり、長さ0.98m・幅1.13m・焚口部幅0.55mで,壁外へ25cm掘り込まれて



第357回 178号-A号竪穴住居跡·竈,178-B号工房跡実測図



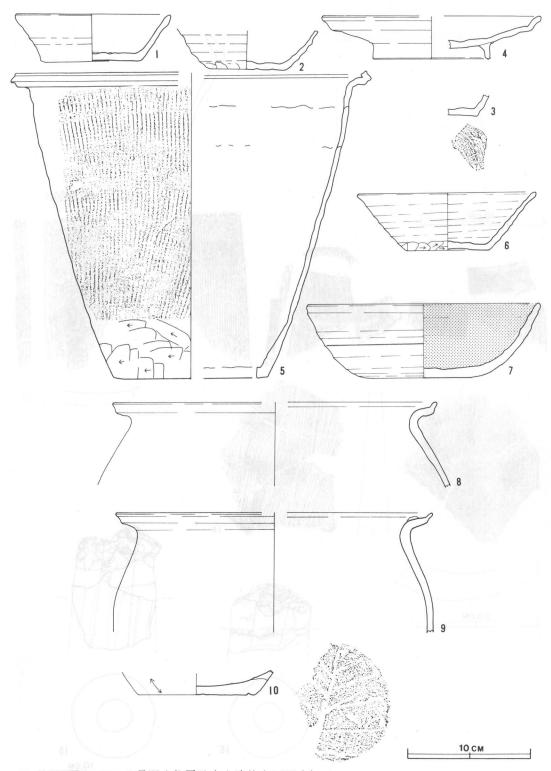
第358図 178-A号竪穴住居掘方,178-B号工房掘方・1~8号炉跡実測図

いる。袖部は、山砂とロームとで築かれている。焼成部は床面と同レベルで、上部に焼土の堆積がみられる。奥壁寄りから平瓦片が数点出土している。

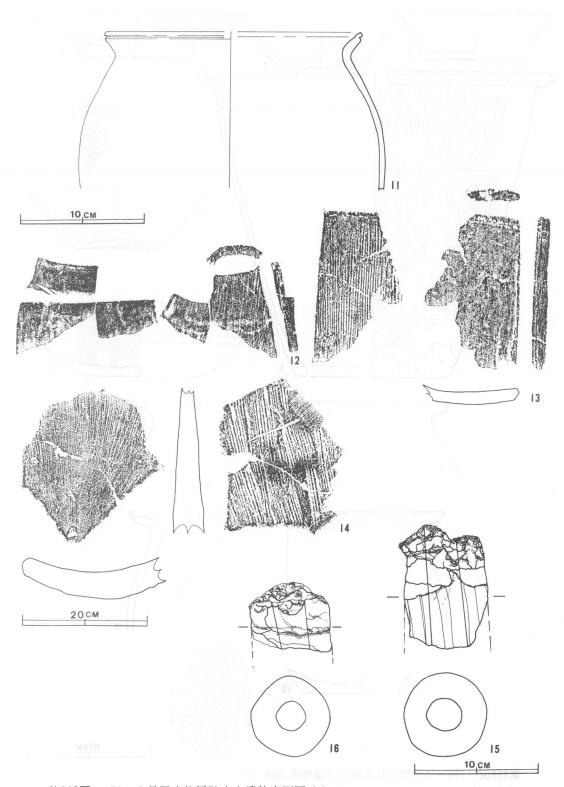
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、全域にわたって出土している。 ただ、178-B号工房跡との判別ができないものが多い。

178-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第359~361図)

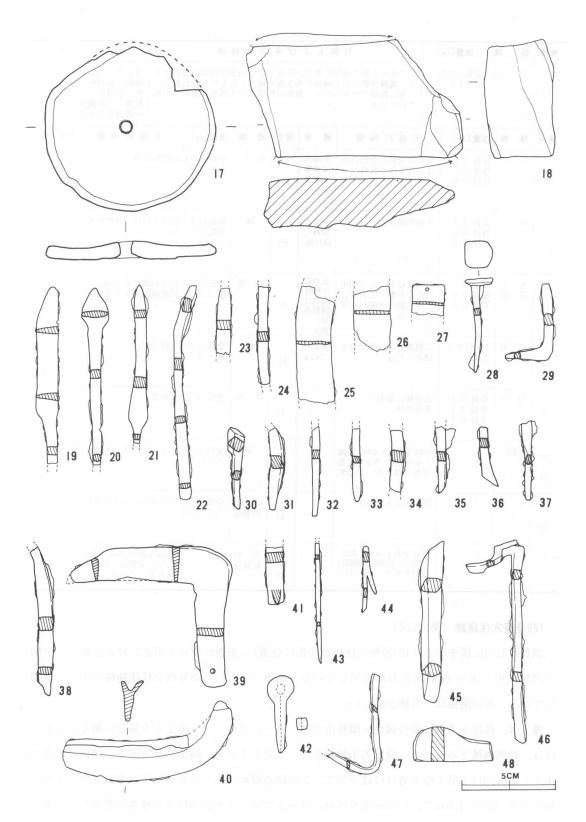
番号	-	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 12.2 B 39.5 C 8.3	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁部は、僅かに外傾して端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は回転箆切り後多方向の箆ナテ調整。口縁部内・外面と体部内面は横ナテ調整。	細砂·長石料	立・長石微粒・
2	S	坏	C 6.6	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ、体部は 内彎気味に、外上方にのびる。右ロクロ水挽き成形で底部は回 転箆切り後無調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。全体に摩 滅が進行。	細砂·長石料	立・長石微粒多・
3	S	坏		平底の底部から体部は、内彎気味に外上方にのびる。水挽き成 形と思われ、底部は回転箆削り調整と思われる。	細砂・長石	微粒 外面に箆記号
4	S	台 付 盤	A(17.3) B 3.5 D (9.6)	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界にややあまい稜を持ち、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部に面をなす。 水挽き成形で底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。他は全体に横ナデ調整。	礫	色 並多・長石微粒・
5	S	群	A(28.1) B 24.6 C(12.3)	底部は正円状に抜ける。体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は一旦「く」の字状に屈曲し、外端部に外傾する面をなし、再度鋭く内傾する。口頸部内・外面は箆ナデ、体部外面はは平行叩き目調整で下位は箆削り、体部内面は箆ナデ後ナデ調整で粘土紐痕を残す。他全体に薄手作り。	灰色 細砂·長石粒 雲母 普通	立・長石微粒・
6	Н	坏	A 14.5 B 4.7 C 6.7	底部は平底で体部と底部は、明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ、水挽き成形で、底部は回転箆切り後、多方向の静止箆削り調整。口縁部内・外面は、横ナテ調整。体部下端部は手持ち箆削り調整。全体に薄手作り。	にぶい橙色 砂粒・石英粒 普通 体部外面に	
7	Н	垝	A 19.0 B 6.0 C 8.4	底部は平底で、体部との境界は明瞭でない。体部は内彎しつつ 外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。口縁部外面は横 ナデ調整。体部外面と底部外面は右ロクロ使用の回転箆削り調 整。内面全体は箆磨き後黒色処理。端正な作り。	橙色 砂粒·長石粒 普通	··雲母·礫
8	Н	甕	A(25.9)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通	:-石英粒
9	Н	甕	A(25.5)	胴の張った体部から,「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を薄く外上方につまみ出す。口頸部内・外面は横ナテ調整,体部内・外面 は箆ナテ調整。	橙色 砂粒・長石料 普通 口縁部内面に	
10	Н	錾	C 9.3	平底の底部。内面は箆ナテ調整。体部外面は、斜位の箆ナテ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石* 普通 底部外	
11	Н	獲	A(20.6) F 24.6	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、外端部に 一条の溝を巡らす。口頸部内・外面は横ナテ調整。体部内・外面は箆 ナデ調整。	灰褐色 砂粒·長石粒 普通	·雲母
12	J	1. 瓦	全長(14.0) 狭端(8.6) 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。丸瓦部は殆ど欠損。凸面は箆削りとナデ調整。凹面は布目を残す。側面は箆ナデ調整。端面は箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒 やや硬質	少,やや精良
13	平	瓦	全長(24.5) 狭端 (8.5) 厚さ 2.0	凸面には縦位の縄目叩きがみられ、凹面は布目を残す。側面は 分割截面のままと思われ、上端部に面取りが施されている。端 面は箆ナデ調整。やや薄手作り。	にぶい橙色 砂粒・長石料 粒多・雲母が やや硬質 二次焼成を受	₽



第359図 178-A号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第360図 178-A号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第361図 178-A号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

番号	器	利	重 法量(c	m)	形	態およ	び手	法の	持 徴		備	考
14	平]	瓦 全長(23. 厚さ2.0~	-5.0 で,か 一部に	€みを持ち全 湍縁突帯のあ こ箆削りが見 ている。	る繩巻き	叩き板	を使用し	たものと思	われる。	灰白色 砂粒・長石粒・ 粒・雲母少 軟質 二次焼成 一部釉薬化する。	を受け,
番号	種	類	法量(cm)	形態	の特徴	備考	番号	種 類	法量(cm)	形	態の特徴	備考
15	KE	П	全長 7.7 外径 6.1 孔径 2.6	.1 見られるが小札痕か。 1.6		先端部 は溶解 し鉄付 着。	38	鎹か	全長(7.9) 太さ 0.8	両端部分	以損。	
16	KK		全長 3.7 外径 6.4 孔径 2.6	先端部破戶	L 1 o	全体に 溶解し, 鉄付着。	39	鎌	全長15.6 刃幅1.2 ~1.9	ほぼ完用 か。	ジ品。現代のもの	
17	有円	孔板	径 9.0 厚さ 0.8 孔径 0.6	したのか屋	ゴとして利用 香ってある。)内側から穿	須 恵利 部転 切 の 66 g	40	鋤先	全長(9.9)幅 2.2		助先の刃部。 BはV字状を呈し	
18	砥	石	10.3×5.9 2.6	二側面のお認められる	*に使用痕が	頁岩 242 g	41	鏨	全長(3.0)幅 1.0	上部欠損	0	
19	Л	子	全長(9.4) 刃幅 1.1 刃長 6.7	刃部側に関 茎部欠損。	有り。		42	壺 金	全長 4.1	完形品。		
20 5 24	ĝ	<u>ķ</u>		1.4cm茎径	9.4cm),刃幅 0.5cmで,茎 22~24は茎。	-	43	針	全長(6.4) 太さ0.25	一方の先	端部は尖る。	
25 \$ 27	小	札		25・26は未	整品か。		44	不 明 鉄製品	全長 3.5 太さ 0.3	ふたまた	に分かれている。	
28 \$ 37	釗			0.35cm, 完	.9cm, 太さ 成品で頭部は ⁻ 。30~37は		45 { 48	不 明 鉄製品		0.5cm, 完	₹10.8cm, 太さ E形品。47はL字 ている。	

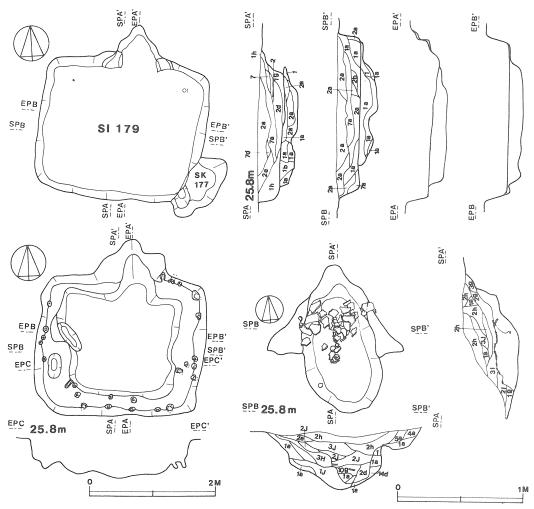
179号竪穴住居跡 (第362図)

調査区 E0ho 区を中心に 151 号竪穴住居跡の西に位置し、東西 2.67m・南北 2.35m を測り、主軸 5 向 N - 9 $^{\circ}$ - E を指す隅丸方形を呈している。南西コーナーで 28 号掘立柱建物跡の P_7 と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。

覆土は、鉄滓を多量に含む褐色・暗褐色土で、ロームブロック・焼土を少量含む層もあるが、ほぼ、自然堆積とみられる。壁は若干傾斜をもって立ち上がり、高さ35cmを測る。床面は貼床で、南から北へ向けて低くなる外はほぼ平坦で、十分踏み固められている。貼床は平面プランより一回り小さい2.0×1.6 mで、0.62 m掘り凹め、ロームブロックを20cmほどの厚さで充塡している。ピットは確認されていない。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.19m・幅1.09m・焚口部幅0.45mで、壁外へ55㎝掘り込まれている。袖はなく、三角状に壁外へ掘り込まれた両側に、山砂を貼り付けている。焼成部は床面より10㎝低く、ゆるやかに奥壁部へ立ち上がる。中央部には、土師器坏三個体・甕二個体分が、押しつぶされた状態で出土している。

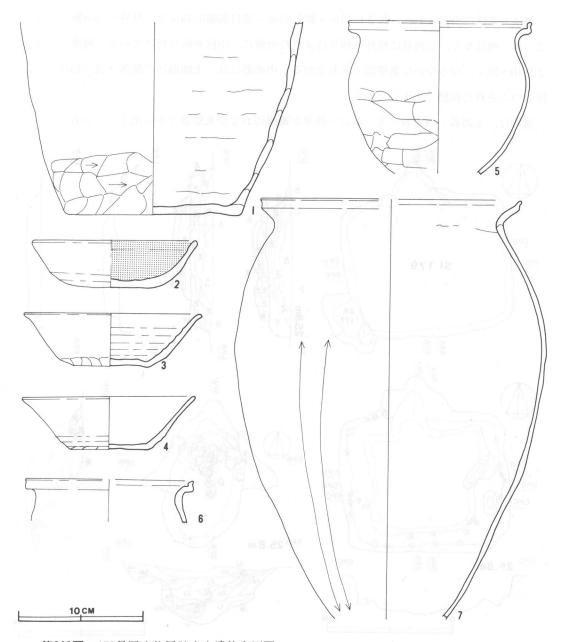
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄滓が竈周辺および東壁寄りから出土している。



第362図 179号竪穴住居跡・竈・掘方実測図

179号竪穴住居跡出土遺物観察表(第363図)

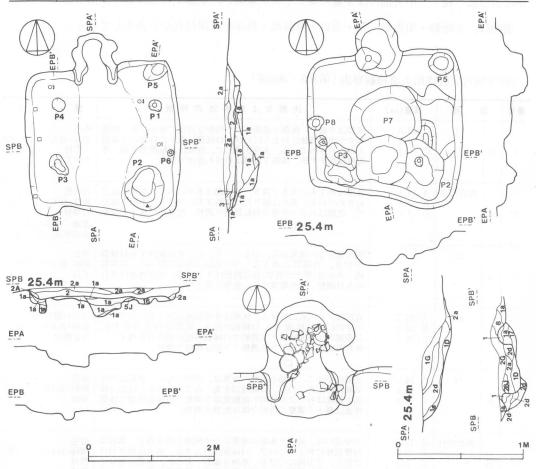
番号	岩	景 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備	考
1	S	獲	C 14.0	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。粘土紐積み上 け成形で、体部内面に7本の粘土紐を見る。底部内面はナデ調 整。体部内面はナデ及び指頭押圧調整。体部外面は、平行叩き 目調整で下位は箆削り調整。	黄褐色 砂粒・長石粒 雲母 なま焼け 底部外面に籾煮	7,7
2	Н	±₹	A 12.9 B 3.9 C 7.2	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部は内彎気味 に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。底部と体部下 端部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。体部外面は横ナデ調整。 内面全体は箆磨き後黒色処理。	にぶい橙色 細砂・長石粒・ 雲母 普通	石英粒・



第363図 179号竪穴住居跡出土遺物実測図

坏	A 14.0 B 4.2	底部は平底で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体	にぶい橙色・
	C 6.5	部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くお さめている。水挽き成形で、底部は回転箆切り後箆ナデ。体部 下端部は手持ち箆削り調整。全体にやや薄手作り。	砂粒・長石粒・雲母多・ スコリア 普通 体部外面に煤付着
坏	A 13.2 B 4.2 C 6.1	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部 はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸く おさめている。水挽き成形で、底部は回転筒切り後一方向の熱	にぶい橙色 細砂・長石・石英粒・雲母多 普通
	坏	B 4.2	坏 A 13.2 底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部 B 4.2 はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸く

番号	뮒	番 種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	Н	築	A 14.5 F 14.5	小形甕。体部は内彎しつつ立ち上がり、丸く屈曲する口縁 部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出して丸くおさめてい る。口頸部内・外面は横ナデ調整。体部内面と体部外面上 位は箆ナデ後ナデ調整。体部外面中位は箆削り調整。全体 に薄手作り。	細砂・長石粒
6	Н	甕	A(13.4)	胴の張った体部から、やや「く」の字状に屈曲し、僅かに段をなす口縁部が付き、端部は面をなす。口縁部内・外面は横ナデ調整。頸部内・外面と体部内・外面は、箆ナデ調整。	褐灰色 細砂・長石粒・雲母 普通
7	Н	装	A(20.8) F 25.0	体部は内彎しつつ立に上がり「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出し、丸くおさめている。口 頸部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面は箆ナデ調整。 頸部内面に粘土紐痕を残す。	にぶい橙色 砂粒・長石 普通



第364図 180号竪穴住居跡・竈・掘方実測図

180号竪穴住居跡 (第364図)

調査区 F2b8 区を中心に 2 号連房式竪穴遺構の南に位置し、東西2.46m・南北2.55mを測り、主軸方向 N-0°を指すほぼ隅丸方形を呈している。

覆土は、少量のロームブロックを含む暗褐色土で、自然堆積とみられる。壁は傾斜をもって立

ち上がり、高さ10cmを測る。床面は貼床で、若干起伏を有し、南壁中央部から竈焚口部にかけての幅80cmは、十分踏み固められている。貼床は、数か所の円形土壙を、最も深い部分で50cm掘り下げ、ロームブロックを $10\sim30$ cmの厚さで充塡している。ピットは6か所確認され、 $P_1\sim P_4$ が主柱穴とみられ、深さは $15\sim25$ cmを測る。

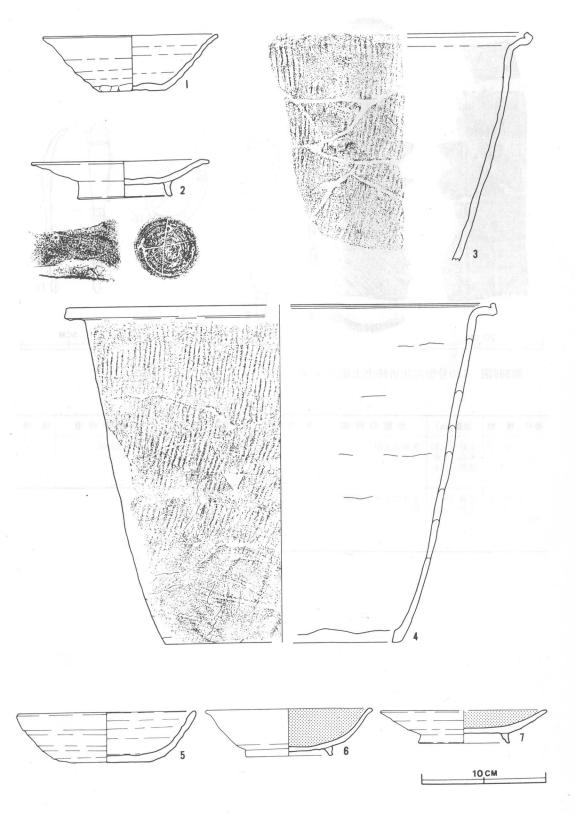
竈は、北壁中央部にあり、長さ0.95m・幅0.7m・焚口部幅0.42mで、壁外へ55cm掘り込まれている。袖部は山砂にロームを加えて築かれているが、短いものである。左袖部上部には、黒曜石・瑪瑙・石英の少片を約20個並べ、須恵器皿が置かれている。焼成部は床面より若干低く、ゆるやかに奥壁部へ続く。中央部には少量の焼土と灰が堆積し、上部から土師器坏が出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が床面付近から出土している。

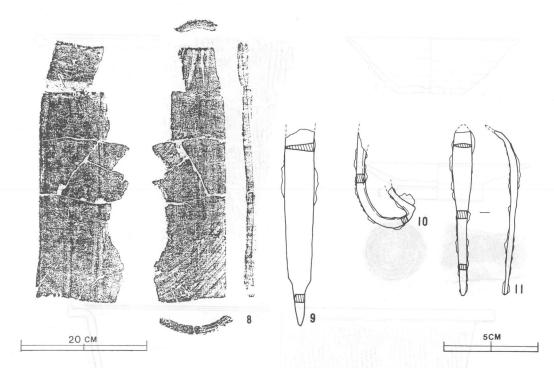
(川井正一)

180号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第365・366図)

番号	F	器 種	法量(cm)	決態および手法の特徴	備	考
1	S	坏	A 12.9 B 4.5 C (5.2)	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転箆切り後、外周部は箆ナデか。体部下端部は手持ち箆削り調整。	灰色 細砂・長石粒・ ・雲母 やや不良	長石微粒
2	S	高台付皿	A 14.1 B 3.1 D 7.6	体部は外上方に大きく開き、口縁部は水平にのびて端部を丸く おさめている。高台は貼り付けで外下方にのびる。水挽き成形 で、底部はロクロ使用の回転箆削り調整。他全体に横ナデ調整。	緑灰色 細砂・長石大粒 石微粒 普通 体部外 底部外面に箆	面と
3	S	督及		胴の張らない体部から、かるく「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、外端部に面をなしつつ端部は再度内傾する。口頸部内・外面は、横ナデ調整。体部内面はナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。やや摩滅する。全体に薄手作り。	灰色 細砂·長石粒· 不良	雲母
4	S	智瓦	A(33.7) B 26.9 C(18.7)	底部は、正円状に抜ける。体部は外傾気味に外上方にのび「く」 の字状に強く 屈曲 する 口縁部が付き、端部は再度内傾する。 口頸部内・外面は横ナデ調整で口縁部外面に叩き目を残す。 体部外面は、平行叩き目調整で下位は箆削り調整。	にぶい橙色 細砂・長石粒・ なま焼け	雲母
5	Н	坏	A 14.0 B 4.1 C 6.3	底部は平底で、体部と底部の境界は、明瞭でない。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。底部と体部下端部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。口縁部外面と体部外面は横ナデ調整。内面全体は箆磨き調整。	赤色 砂粒·長石粒· 良好	雲母
6	Н	高台付坏	A 13.0 B 3.7 D 6.9	やや浅い坏。底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持つ。体部は 内鬱気味に外上方にのび、口縁部は外反する。高台は貼り付け で短く、下方向にのびる。水挽き成形と思われ、底部は右ロク ロ使用の回転箆削り。内面全体は箆磨き後黒色処理。	橙色 細砂·長石粒· 雲母 普通	石英粒・
7	Н	高台付皿	A(13.3) B 2.1 D 7.3	体部は、やや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅か に外反して端部はやや尖る。高台は貼り付けで「ハ」の字状 に外下方にのび、内端部に浅い溝を巡らす。水挽き成形で、 底部は右ロクロ使用の回転箆削り調整。内面全体は箆磨き後、 不完全な黒色処理。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・ スコリア 普通	雲母·
8	す	L E	全長 40.5 広端(10.3) 狭端 (7.3) 厚さ 1.2	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。凹面は布目を残す。側面は分割截面のままで上端部は面取りが施されている。端部は箆削り調整。	黄灰色 砂粒·長石粒·J 粒多·礫 硬質	長石微



第365図 180号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第366図 180号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	種	類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	Л	子	全長(10.5) 刃幅 1.6 茎長 2.4	先端部欠損。		11	槍鉇か	全長(8.6) 刃幅 1.1	刃先端部欠損。	×
10	釕	か	全長 (9.1) 太さ 0.5	全体に歪み, 両端部欠 損。						

茨城県教育財団文化財調査報告第20集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5

鹿の子C遺跡 一遺構・遺物編(上)一

昭和58年3月25日印刷 昭和58年3月31日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団 水戸市南町3丁目4番57号

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社 水戸市松が丘2丁目6番24号